D04852086X
Duke University Libraries

Digitized by the Internet Archive
in 2017 with funding from
Duke University Libraries

https://archive.org/details/shodooyobishosek1921in

書畫骨董叢書

第五卷

犬養木堂
黑木欽堂 合著

書道及書蹟

凡　例

一、本書は『書畫骨董叢書』の第五卷として、犬養木堂、黑木欽堂兩先生の講述による和漢書法の一切の知識を收錄するものである。

一、本書は東洋獨得の書道書蹟に就き、專門的鑑賞的知識を涵養すべく、極めて平易明快に、併も細大漏さず講述するを目的としてある。故に苟くも本書を通讀すれば、支那文字發生以來永き傳統の下に洗練發達せる系統の全般に通曉するを得るであらう。

一、本書は必ずしく歷史的變遷、時代文化の狀勢などの關係に就いて重きを置いてゐない、これ本書の頁數に限りあると、玆に左までの必要なしと思つたからである。

一、本書は書蹟鑑賞上に必要なる、各時代の名家名流を出來得る限り列擧し、且つ書家の略傳、傾向・系統・特色・書家としての地位等にわたりて一々明確なる講述をしてある。

一、加ふるに、代表作を出來得る限り多數の寫眞版として揭載したれば、本文と相俟つて讀者を益するであらう。

凡例

一、本書には書家の肖像逸話等は一切之を省いたが、是等はいづれ後巻の『逸話珍談集』に載せるであらう。

一、書家の生歿行動、その他學者間に定說のない事項が頗る多く、甚だしきは作家を抹殺し、作品を否定するやうなことが頻々としてある。本書は是等に對して最も確實と信ずる說に從ふと共に、その取捨に迷つたものは疑を存じて置いた。

一、本書の體裁•挿繪•項目等は全然本刊行會編輯部の責を負ふ所である。

大正十年八月

編輯者識

書道及書蹟

緒言……一
第一編　總説……八
一、書道及び書蹟の解……八
二、支那文字の起源と發端……一五
四、蝌蚪文字から篆隷まで……一八
五、字體統一の時代……二二
六、書蹟遺物の三段……二五
七、墨蹟と其種類……三二
八、金石文とは何ぞ……三四
九、法帖とは何ぞ……四〇
十、法帖の鑑別法……四二

第二編　日本古代の書家……四四
日本書風の特色……四四
上代書風と書法……四七
上代の遺墨……五一
四、奈良朝時代の能書家……五六
五、上代の金石文……六〇
六、入木道と其傳流……六五
七、弘法大師と其書蹟……七〇
七、平安朝初期の能書家……七七
八、小野道風と紀貫之……八一
九、前中書王、佐理、及行成……八九
十、公任、道長、忠家、綏房、伊房……九七
第三編　中世以降の和様……一〇三

二、忠通、俊頼、俊成、定家……一〇三
三、寂蓮、良經、西行、家隆、阿佛……一一七
四、行能、後中書王、行房、尊圓法親王、素眼、兼良……一二三
五、近世和樣の趨勢……一三一
六、尊朝法親王と寛永三筆……一三五
七、烏丸亞相、角倉素庵、小堀遠州……一三九

第四編　唐樣及儒者物……一五六

石川丈山と北島雪山……一六一
三、細井廣澤と其門下……一六六
四、物徂徠、左文山、趙陶齋……一七二
五、鑑賞書蹟の筆者……一九一
惺窩と羅山……一九八
丈山、闇齋、南學派、益軒……二一四

三博士と頼家一族……二二一
程朱派諸家上……二二九
程朱派諸家下……二三七
水戸學派……二四〇
復古學派上……二四七
復古學派下……二五〇
折衷學派……二五九
陽明學派……二六七
維新の志士と功臣……二七九
三、國風家、俳諧、文人……二九〇
四、禪宗の高德……三三八
黄檗の諸僧……三六四

目次終

書道實驗談目次

上編　書道の概略……三七一

支那最初の文字……三七一
唐代の文字と雅俗……三七二
宋の書家と書風……三七五
淸の書道と篆字の研究……三七八
法帖か古碑か……三八〇
支那人の習字法……三八一
正格から破格へ……三八三
日本に碌な法帖なし……三八四
奇怪な書風……三八六
法帖に就ての注意……三八八
書學の三要訣……三八九

手でなく面で書け……三九一

下編　文房具談……三九九

筆について……四〇一
適當な用紙……四〇一
日本の筆、支那の筆……四〇二
紙のいろ〳〵……四〇五
絹、絖、古紙……四〇七
古代の用紙……四〇九
印章について……四一一
善い硯と惡い硯……四一三
端溪硯の鑑定法……四一四
硯の半可通……四一七
硯と磨り工合……四一九

硯の粉れ物……四二一
硯石の附屬物……四二五
適當な用硯……四二七
支那の墨と日本の墨……四二八
簡易鑑墨法……四三一
適當な用墨……四三三
支那から來る墨……四三五

目次終

別刷口傳目次

玻璃版

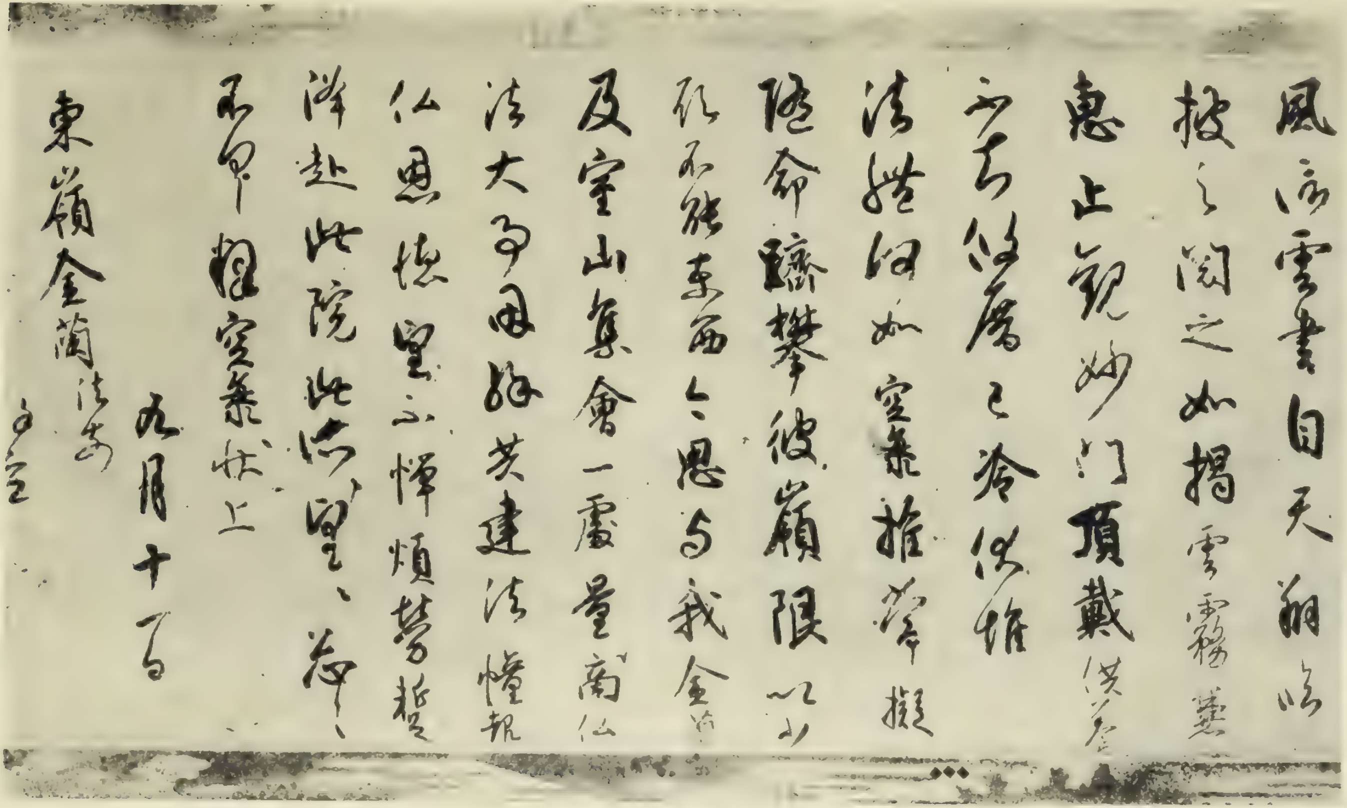
弘法大師筆　消息風信帖一部　教王護國寺藏
小野道風筆　智證大師賜號勅書
小野道風筆　秋萩帖
傳藤原行成書
傳本阿彌光悅筆　大倉男爵家藏
松花堂昭乘書
細井廣澤書
本居宣長書
賴山陽書
貫名海屋書

寫眞版

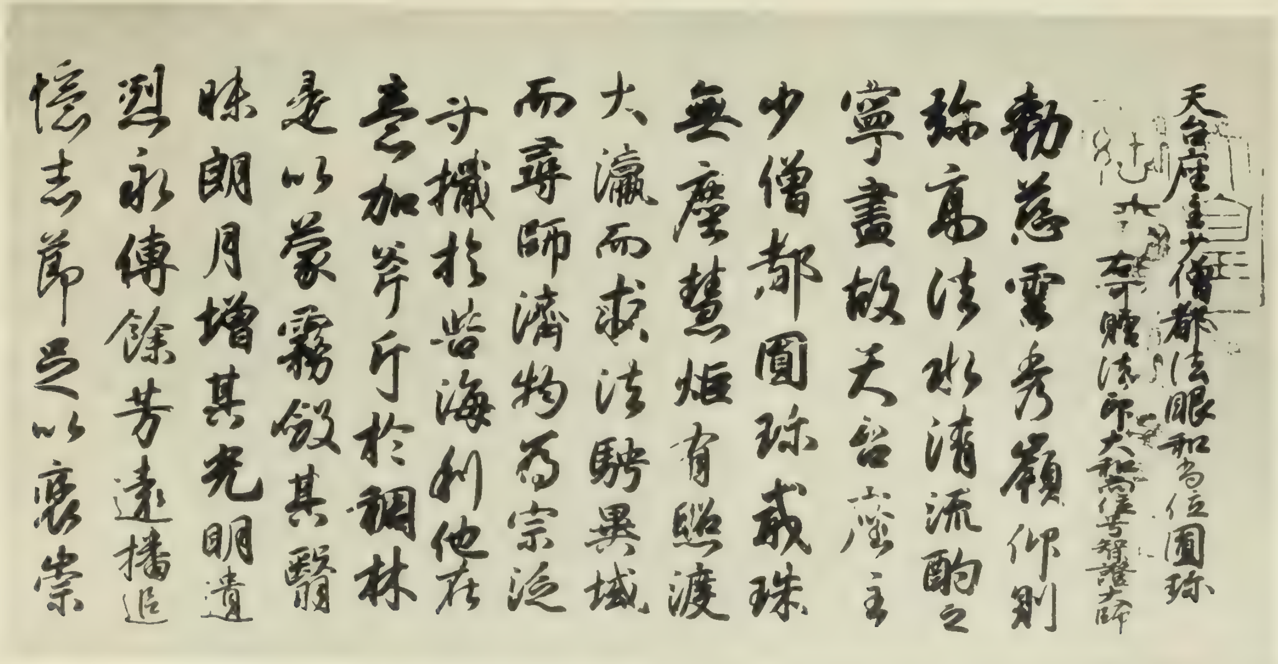
後鳥羽天皇宸翰
花園天皇御處分狀
後醍醐天皇宸翰御願文
後龜山天皇宸筆
後水尾天皇宸筆
橘逸勢筆伊都内親王願文
智證大師筆同入唐文書
世尊寺伊行筆和漢朗詠抄
藤原佐理筆詩懷紙
傳藤原公任筆北山抄
藤原行成筆蹟
細井平洲書
一休和尚筆蹟
近衞信尹書

水無瀨宮藏
伏見宮家御藏
金剛峯寺藏
觀心寺藏
帝室御物
北白川宮家御藏
福岡子爵家藏
松平賴壽伯藏
前田侯爵家藏
有栖川宮家御藏
眞珠庵藏

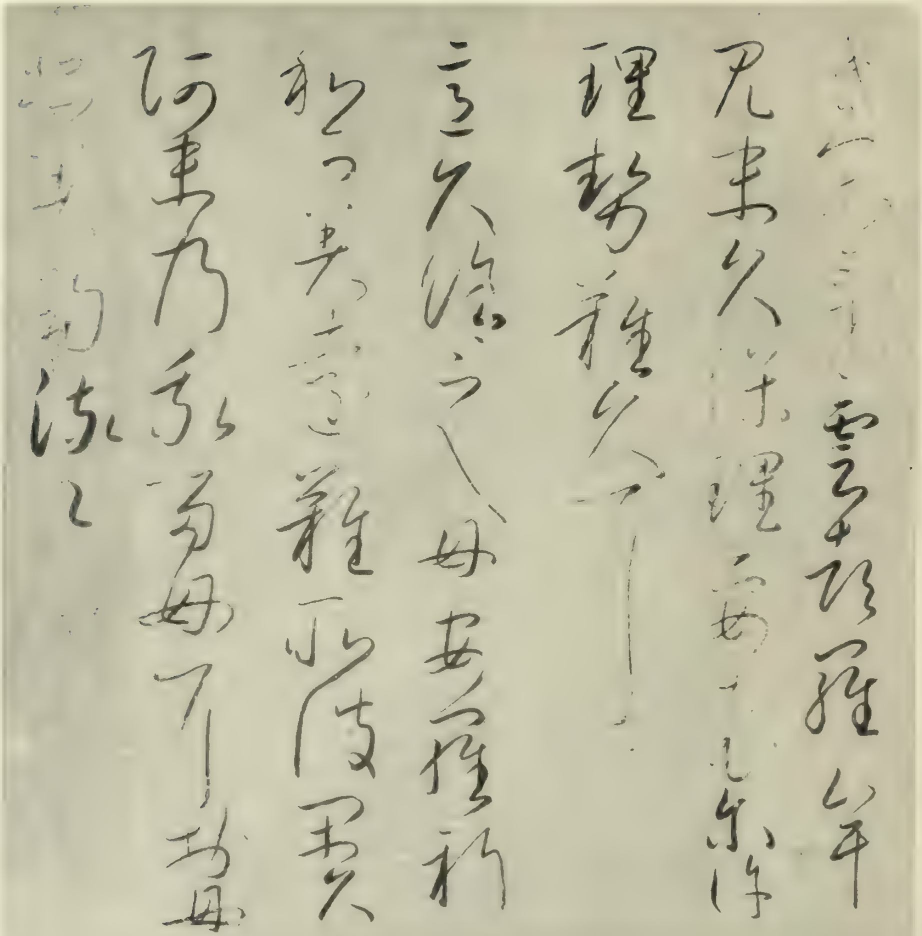
朱舜水書
山鹿素行書
荻生徂徠書
大宰春臺書
加茂眞淵書
良寛書（一）
良寛書（二）
大鹽中齋書
藤田東湖書
佐久間象山書
西郷南洲書
伊藤博文書



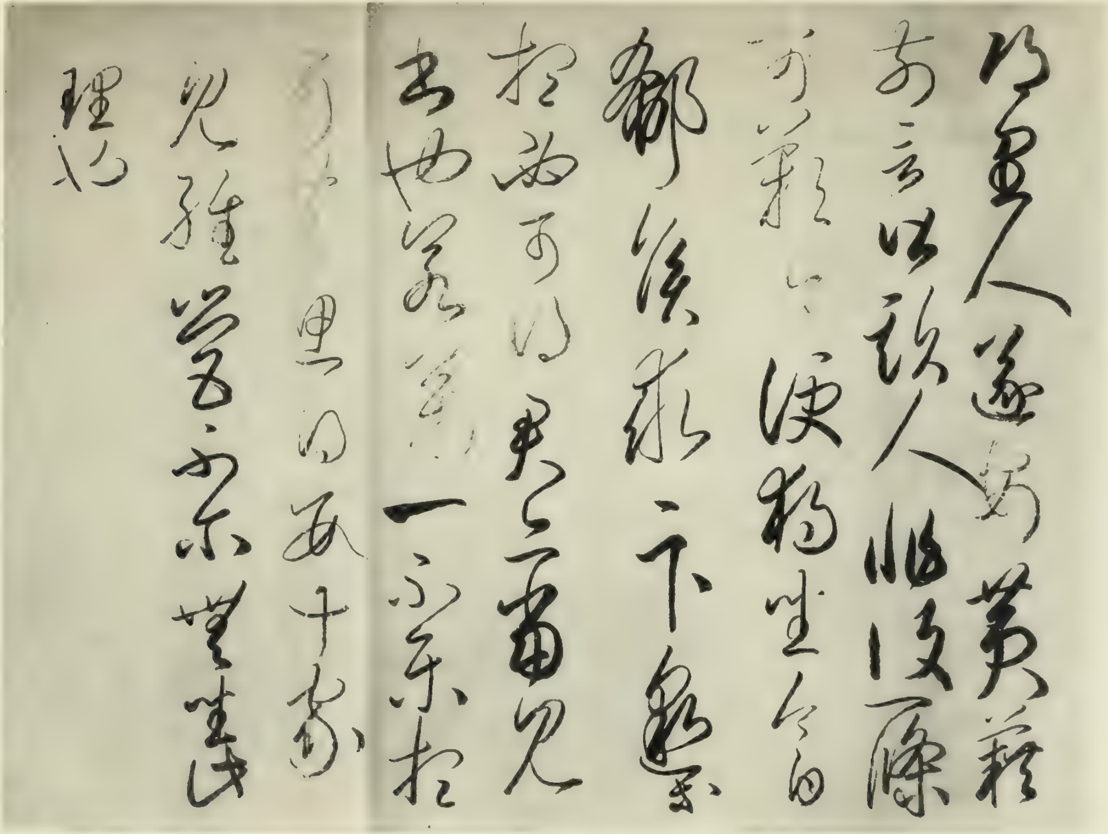
弘法大師筆　消息風信帖一部　教王護國寺藏



小野道風筆　智證大師賜號勅書

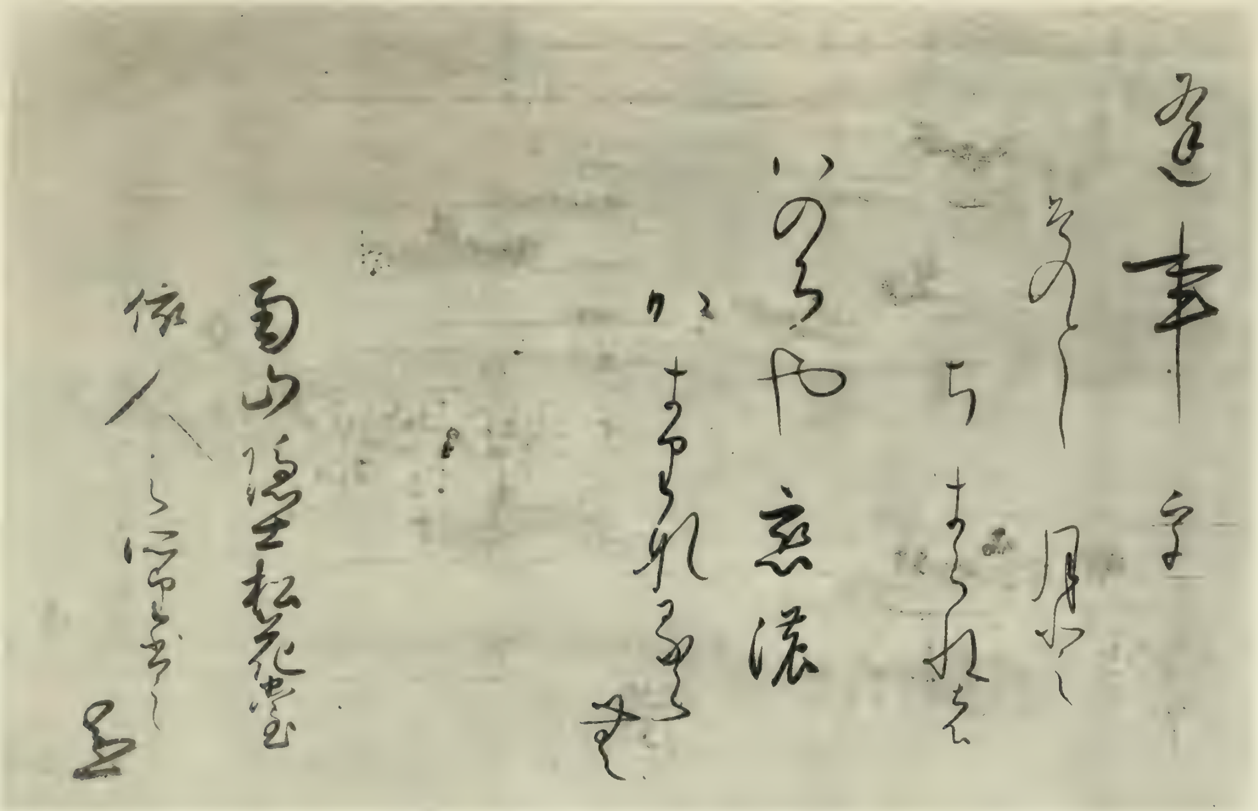


小野道風筆　秋萩帖

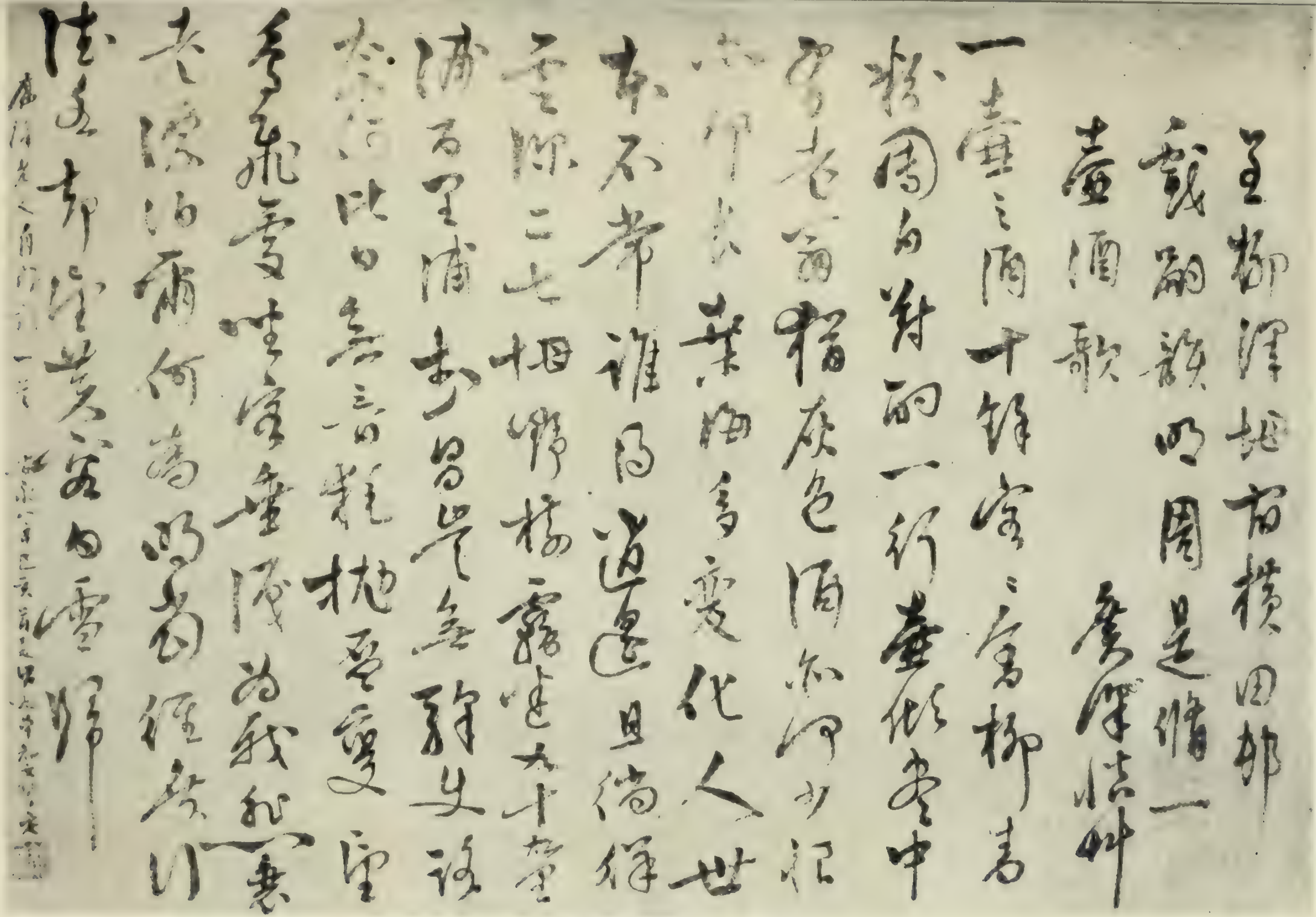


傳藤原行成書

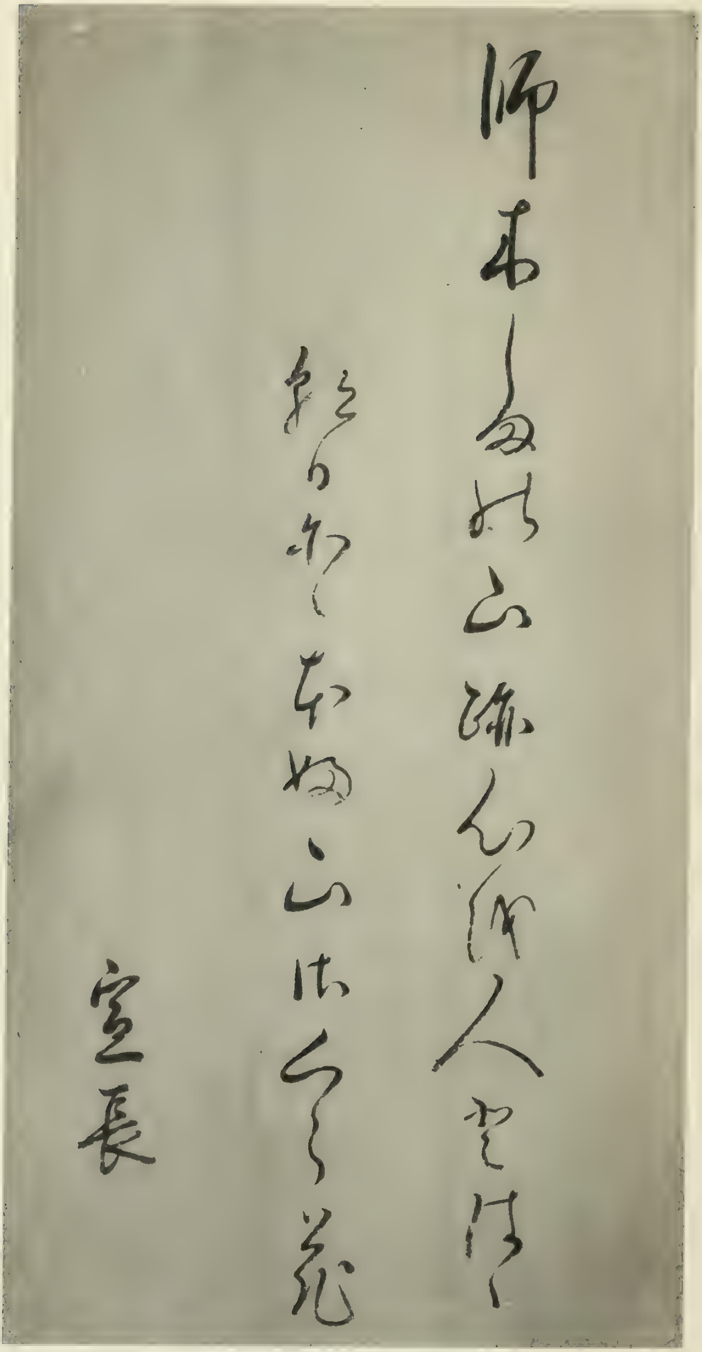
傳本阿彌光悦筆　大倉男爵家藏



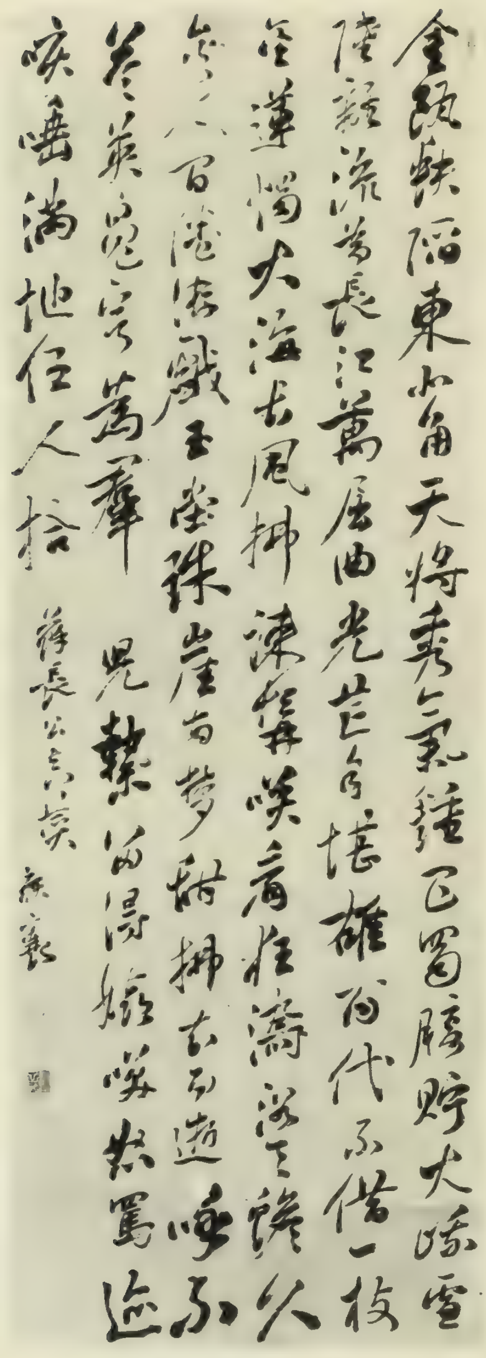
松花堂昭乗書



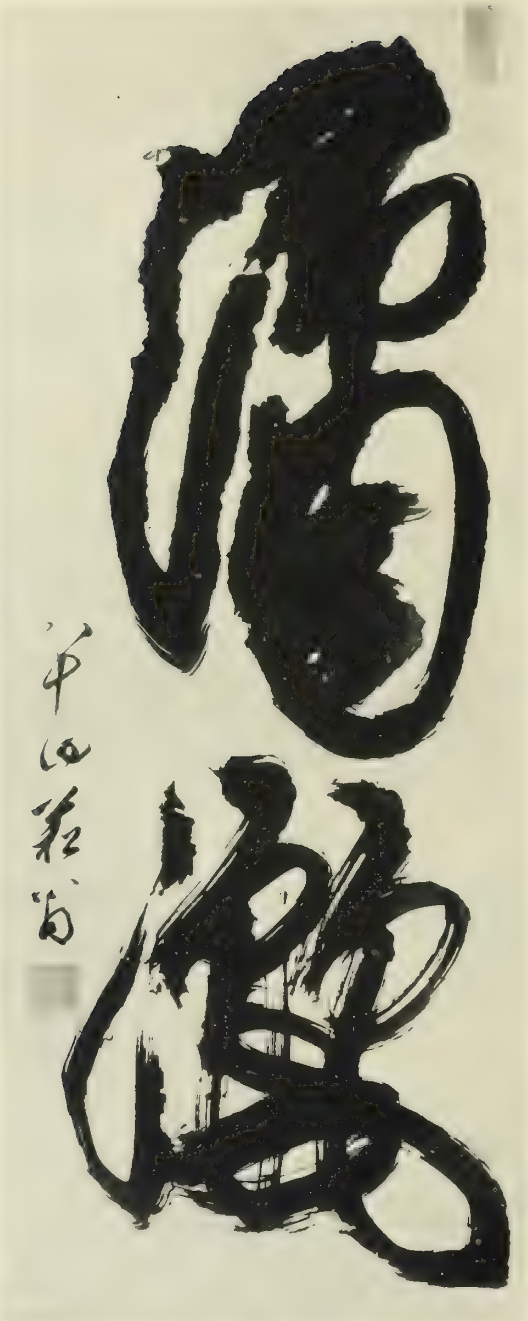
細井廣澤書



本居宣長書

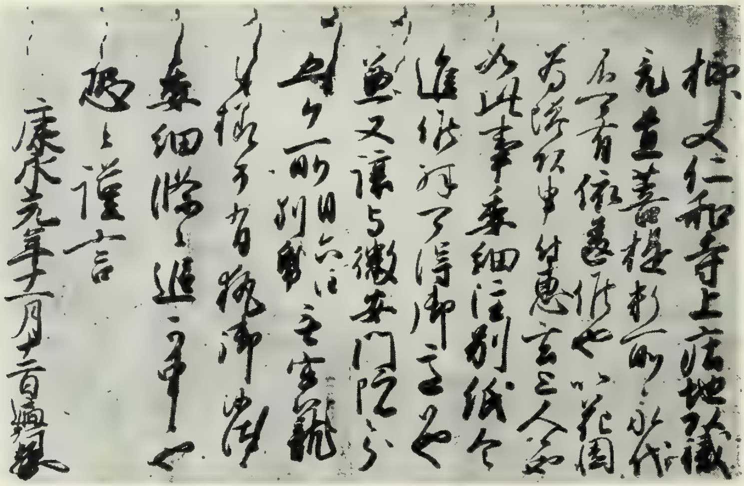


頼山陽書

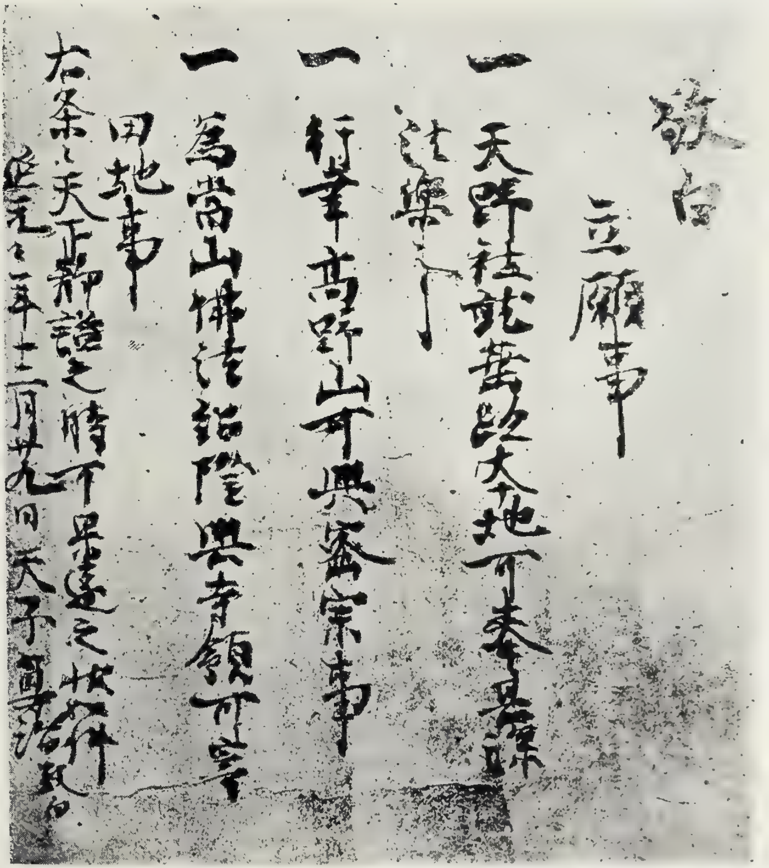


貫名海屋書

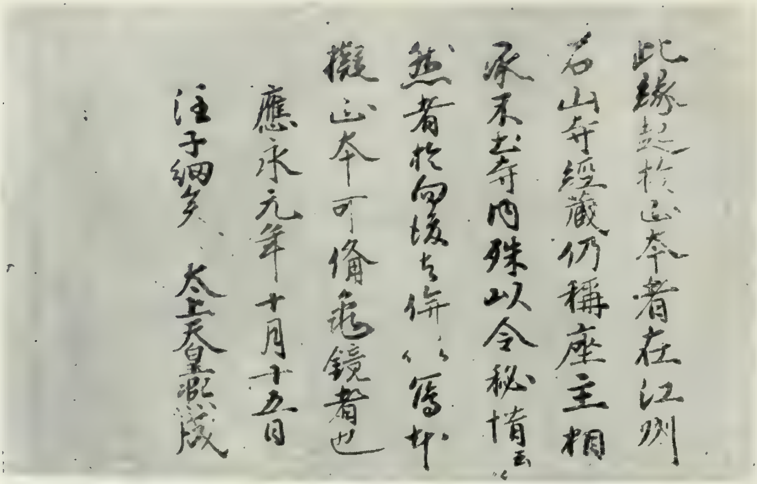
後鳥羽天皇宸翰　　水無瀬宮藏



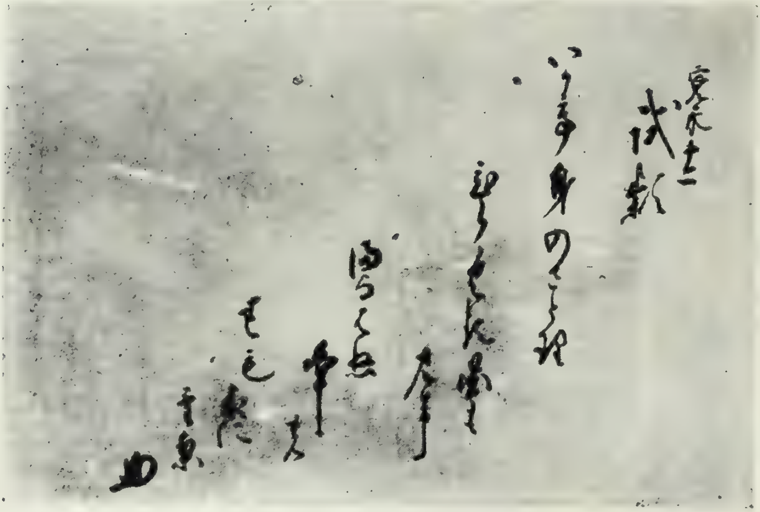
花園天皇御處分狀　　伏見宮家御藏


敬白
立願事
一 天野社就紀伊國大地可奉寄事
法樂之
一 於高野山可興密宗事
一 為當山佛法紹隆興寺領可寄田地事
右条々天下静謐之時可果遂之状如件
元弘二年十二月廿九日 天子尊治敬白

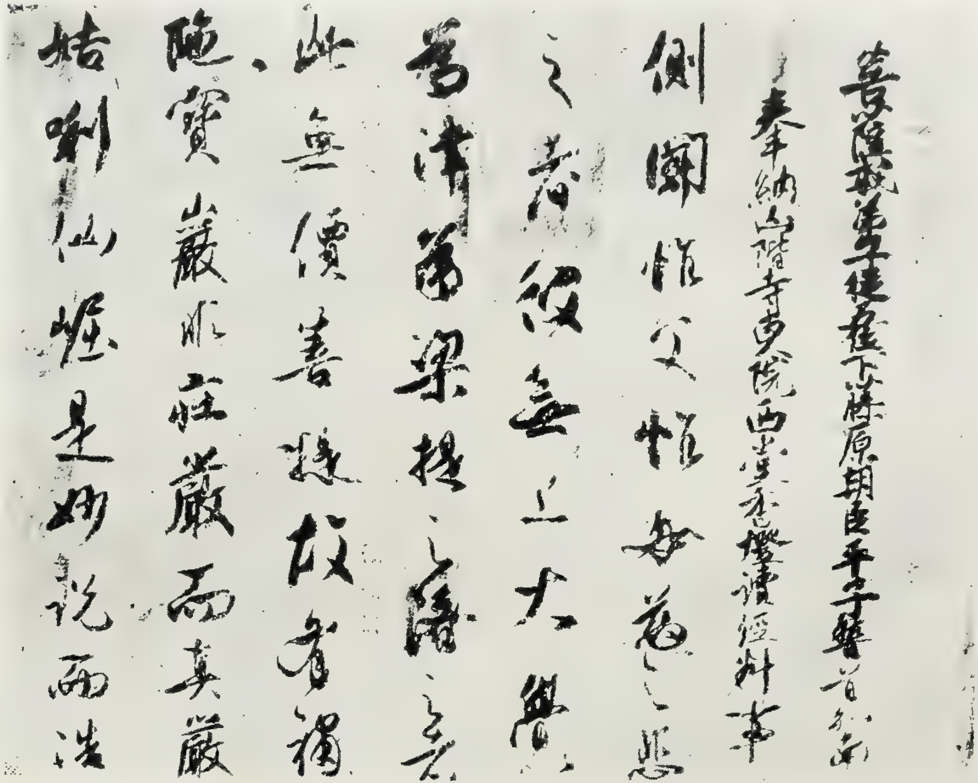
後醍醐天皇宸翰御願文　　金剛峯寺藏


此縁起於正本者在江州
石山寺經藏仍稱座主相
承不出寺内殊以令秘惜云々
然者於向後者依此寫本
擬正本可備亀鏡者也
應永元年十月十五日
注子細矣　太上天皇煕成

後龜山天皇宸筆　觀心寺藏



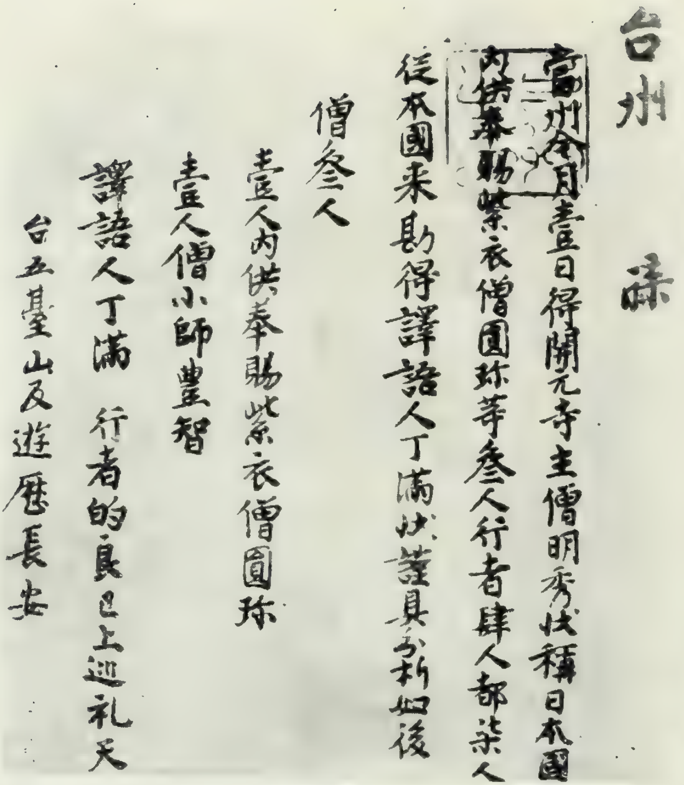
後水尾天皇宸筆



橘逸勢筆伊都內親王願文

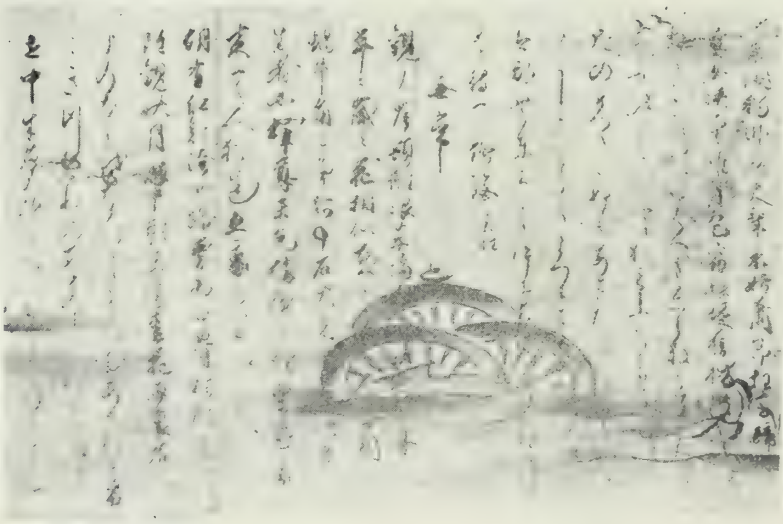
帝室御物

智證大師筆同入唐之書


台州牒

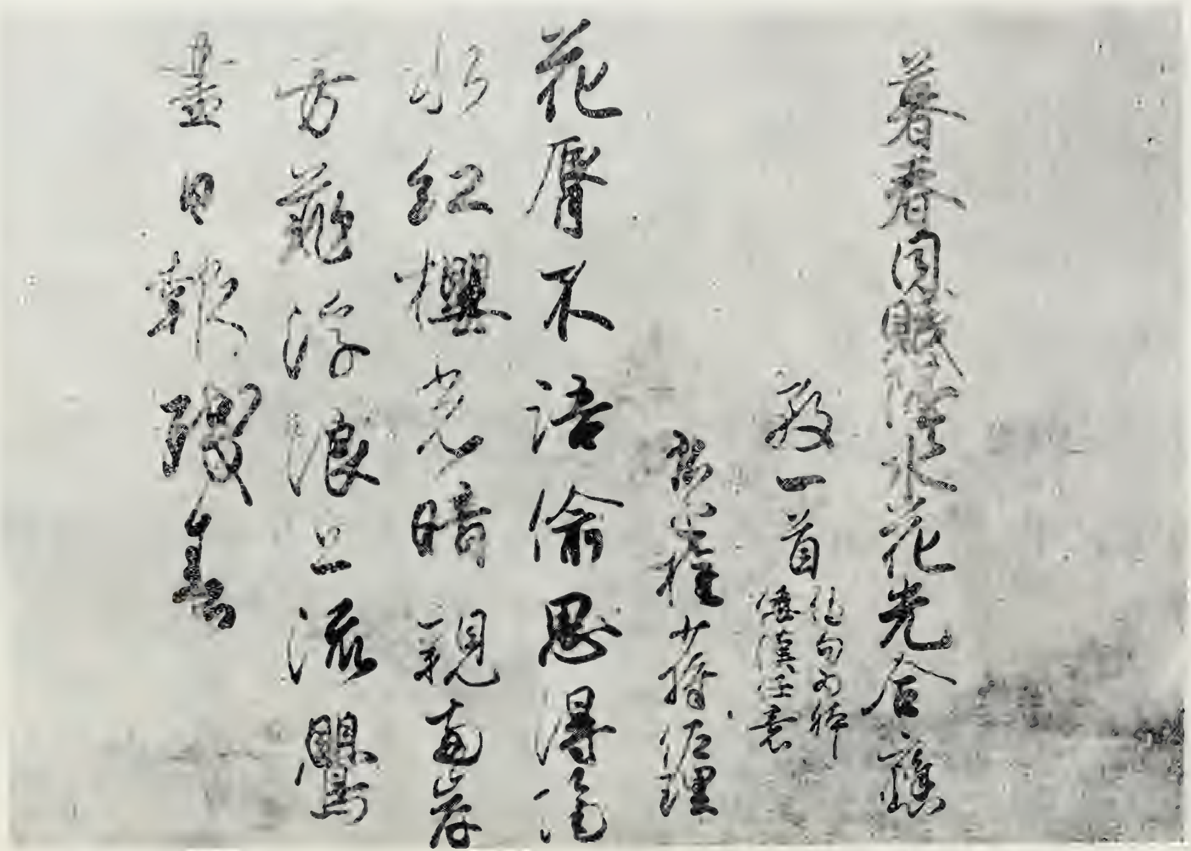
當州今月壹日得開元寺主僧明秀状稱日本國
內供奉賜紫衣僧圓珎等叁人行者肆人都柒人
從本國来勘得譯語人丁滿状謹具分析如後
僧叁人
壹人內供奉賜紫衣僧圓珎
壹人僧小師豊智
譯語人丁滿　行者的良已上巡礼天
台五臺山及遊歷長安

北白川宮家御藏



世尊寺伊行筆和漢朗詠抄

福岡子爵家藏

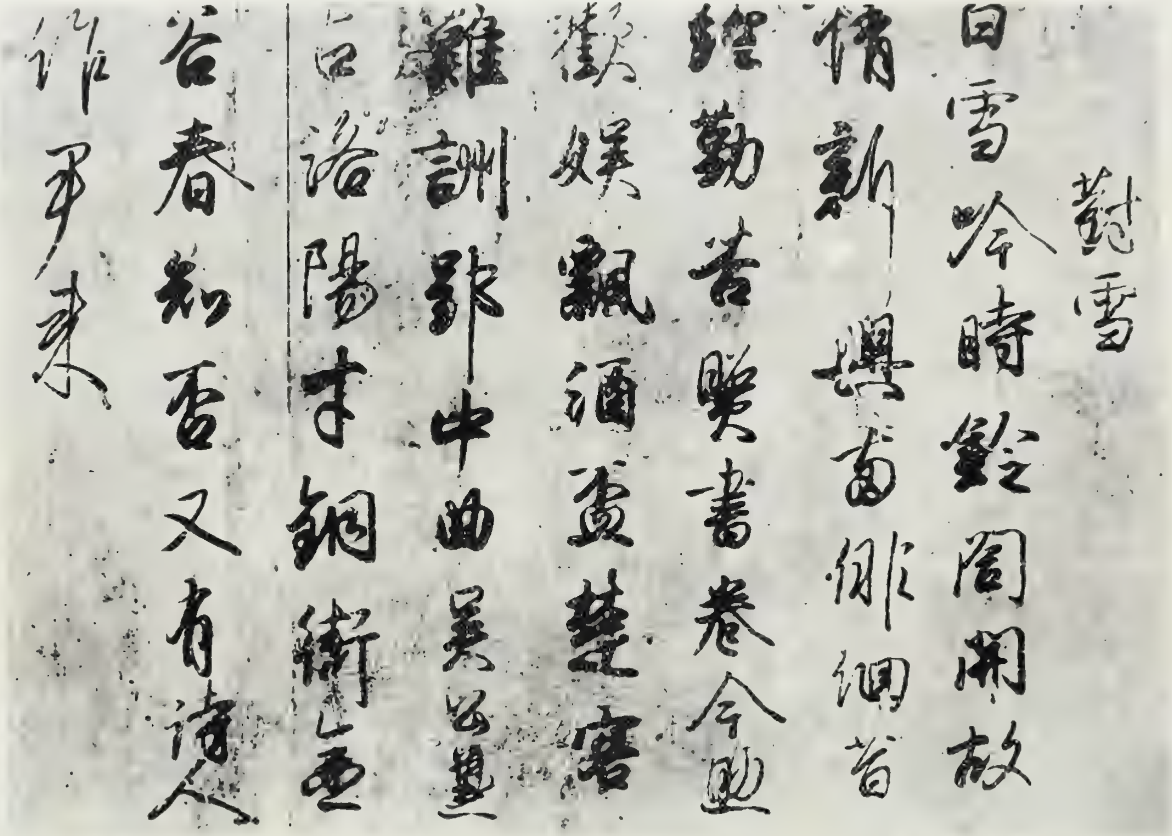


藤原佐理筆　詩懐紙

松平直亮伯藏

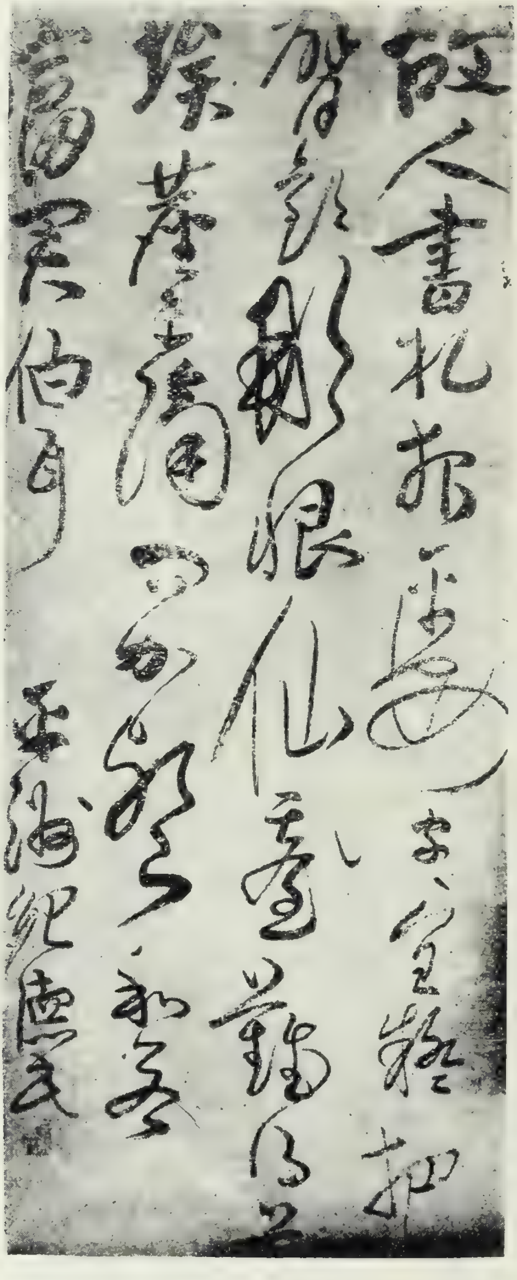
寛弘二年三月三日有曲水宴御禊訖立御
倚子東又庇上給公卿座如臨時祭儀設文
人座於御溝邊 殿上人在溝西自余在東 式部大輔直幹
及殿上文人藏人所又文章生御書所學生已上
入自仙華門着座探韻畢賜酒肴公卿以下
臣流盃溝水之文人不飲晩頭召樂所令奏
絃哥講詩了又奏管絃臣給公卿禄左少将
洛時唱是恭後日給侍臣及文人樂所人禄

傳藤原公任筆北山抄　　前田侯爵家藏



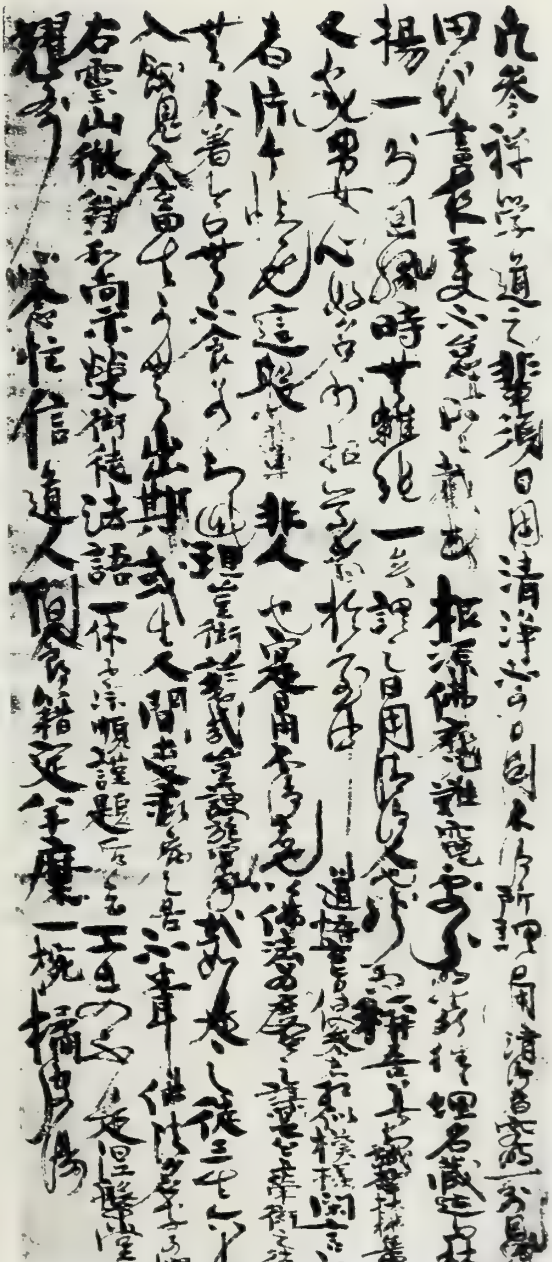
藤原行成筆蹟

有栖川宮家御藏

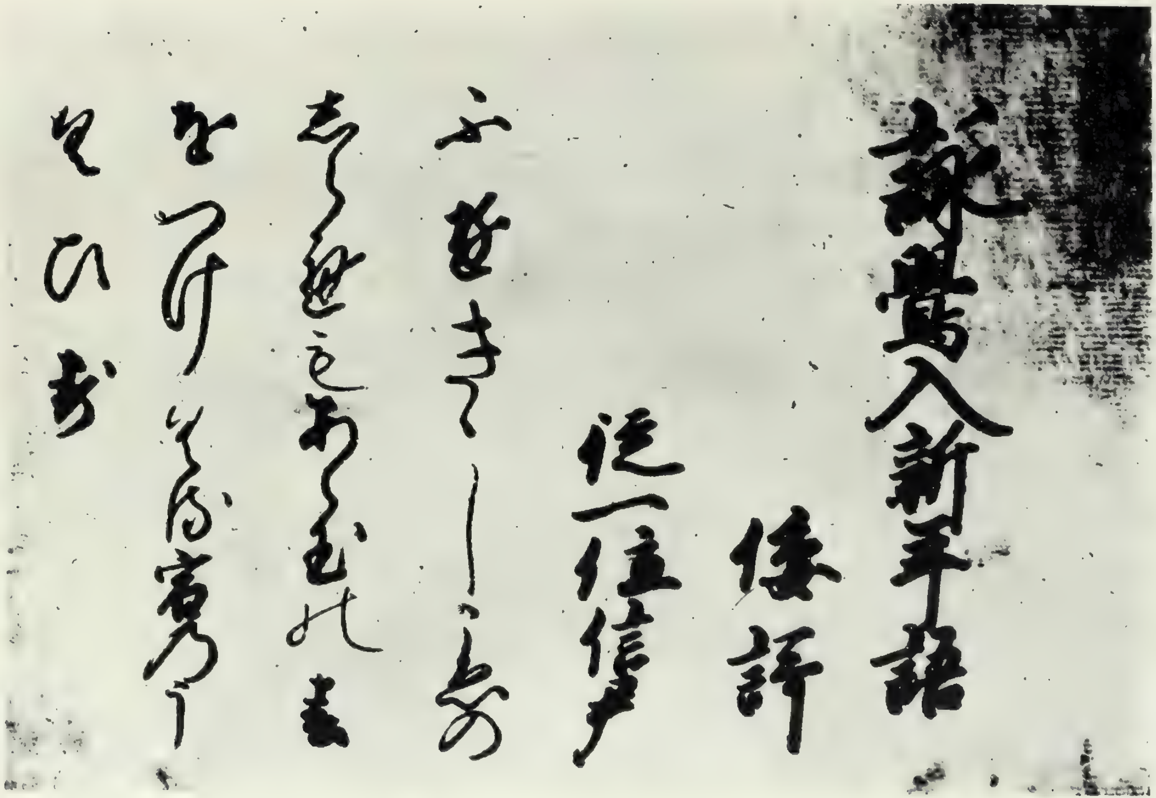


細井平洲書

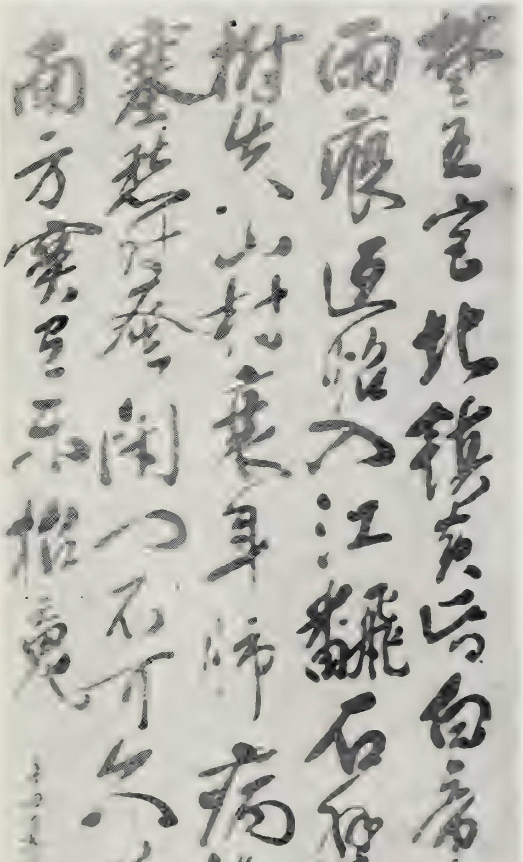
一休和尚筆蹟



眞珠庵藏

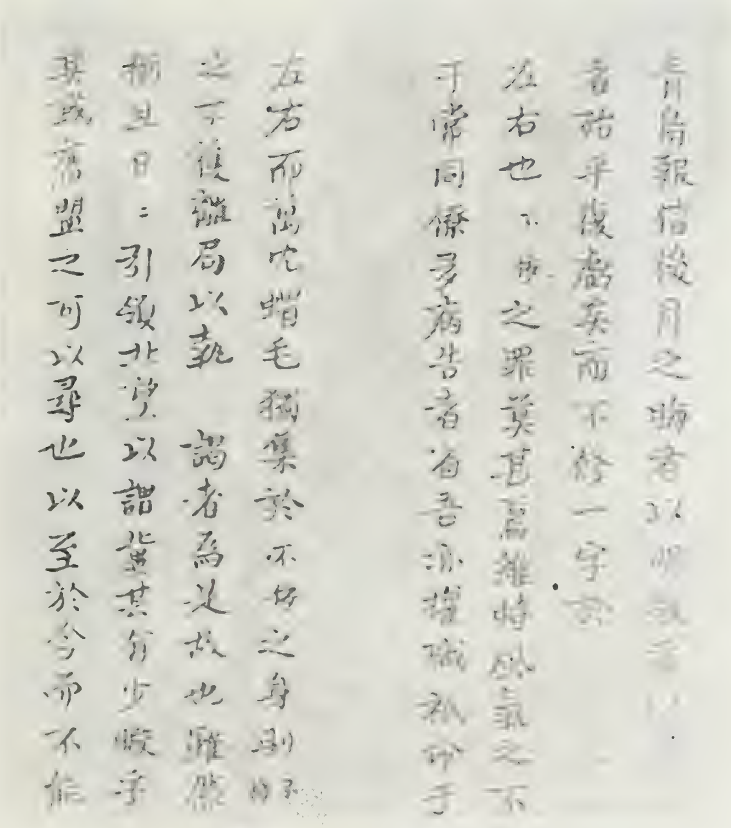


近衛信尹書

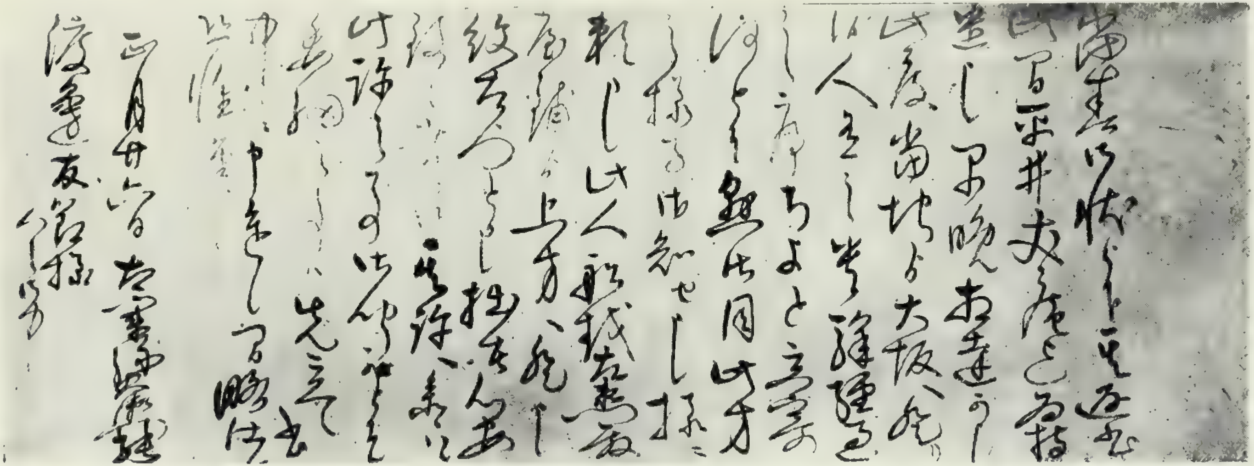


朱舜水書

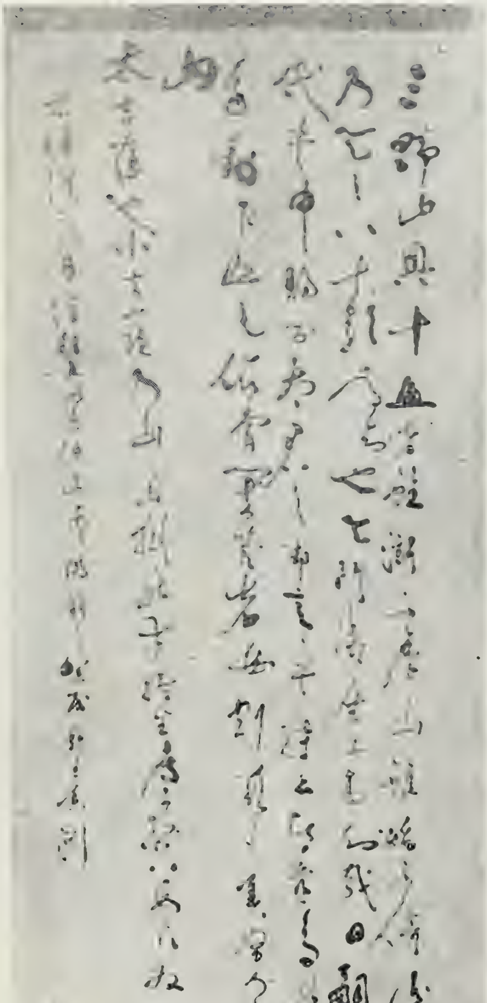
以可比天壤也今歳謹欲紀　皇統武家之
實事參差謂之煩繙閲之久冬十一月小寒
後八日先編　皇統之小册令兒童誦焉不
忘其本未知武家之實紀其成在異日
寛文第九己酉除日之前二日援筆於播陽之
謫所



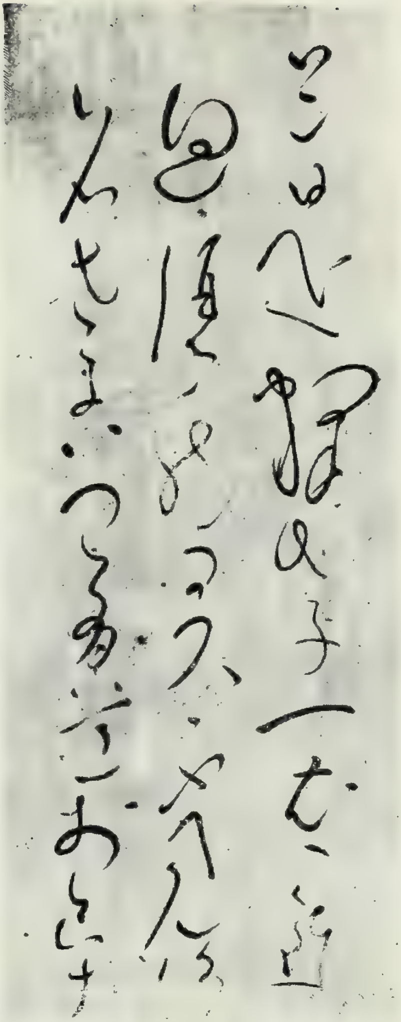
荻生徂徠書



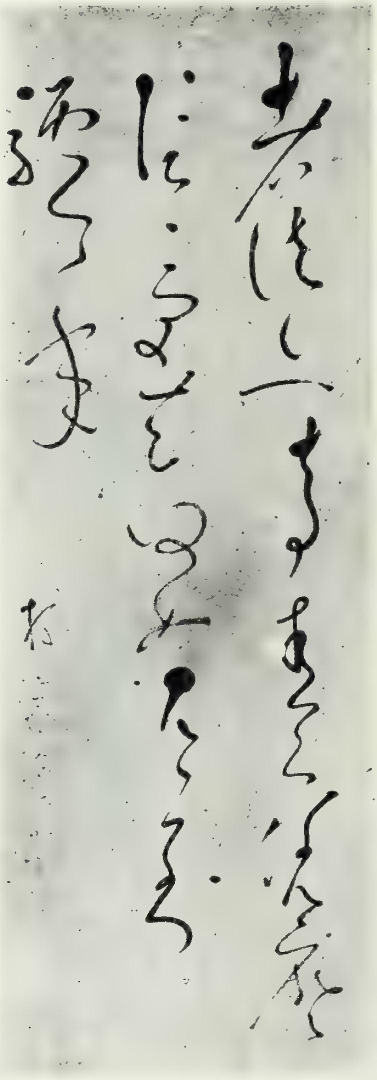
大宰春臺書



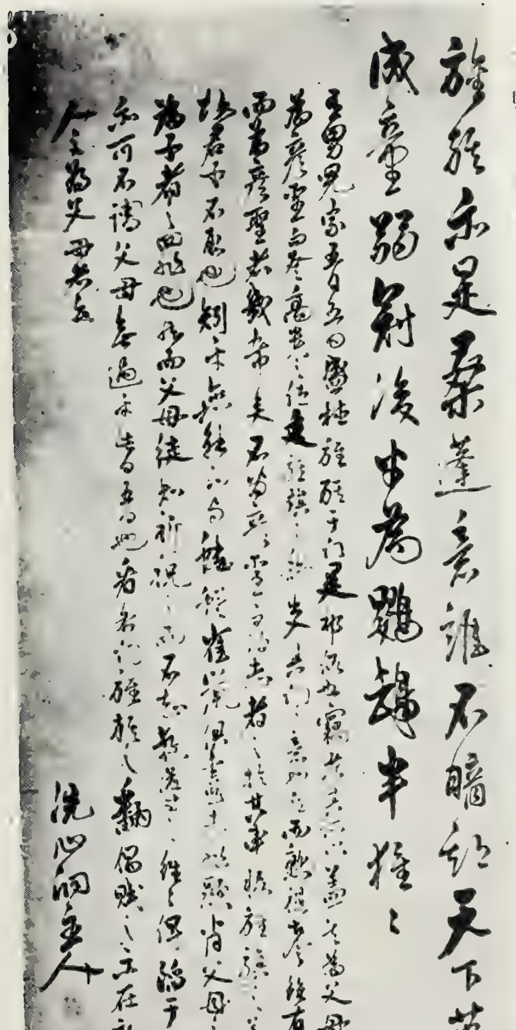
加茂眞淵書



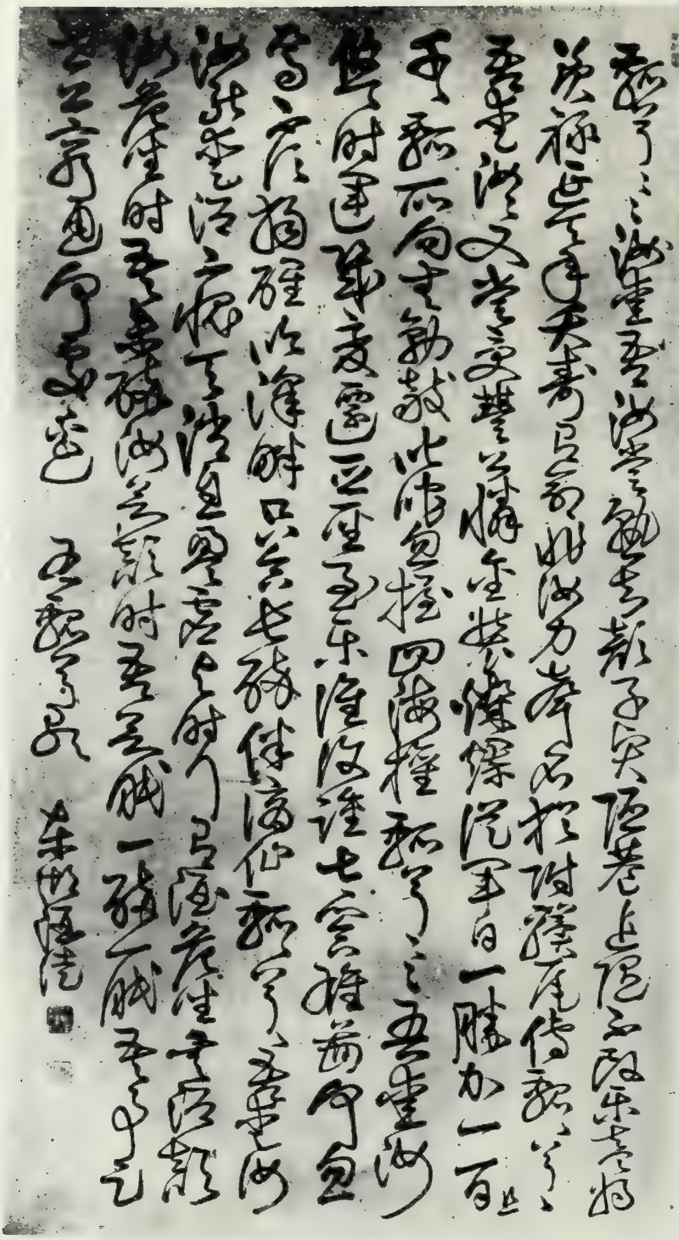
良寛書（一）



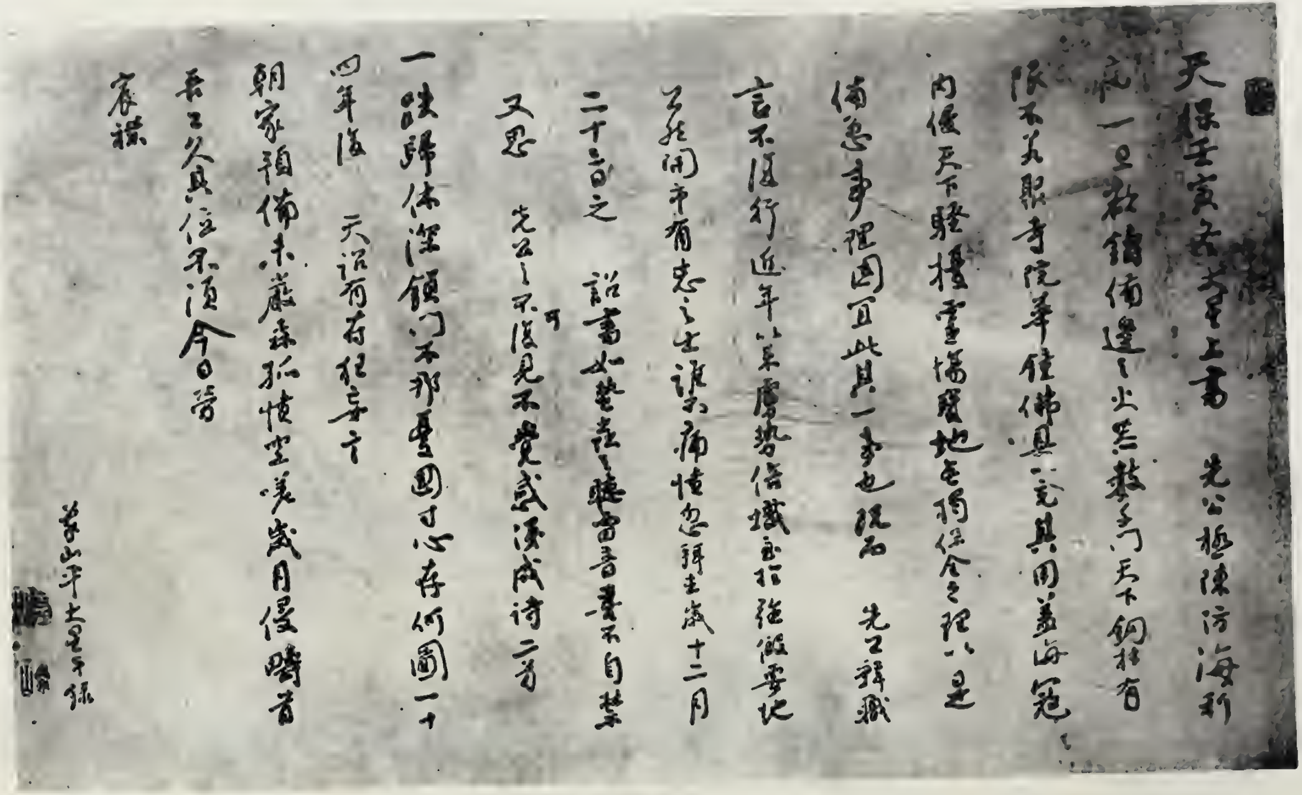
同（二）



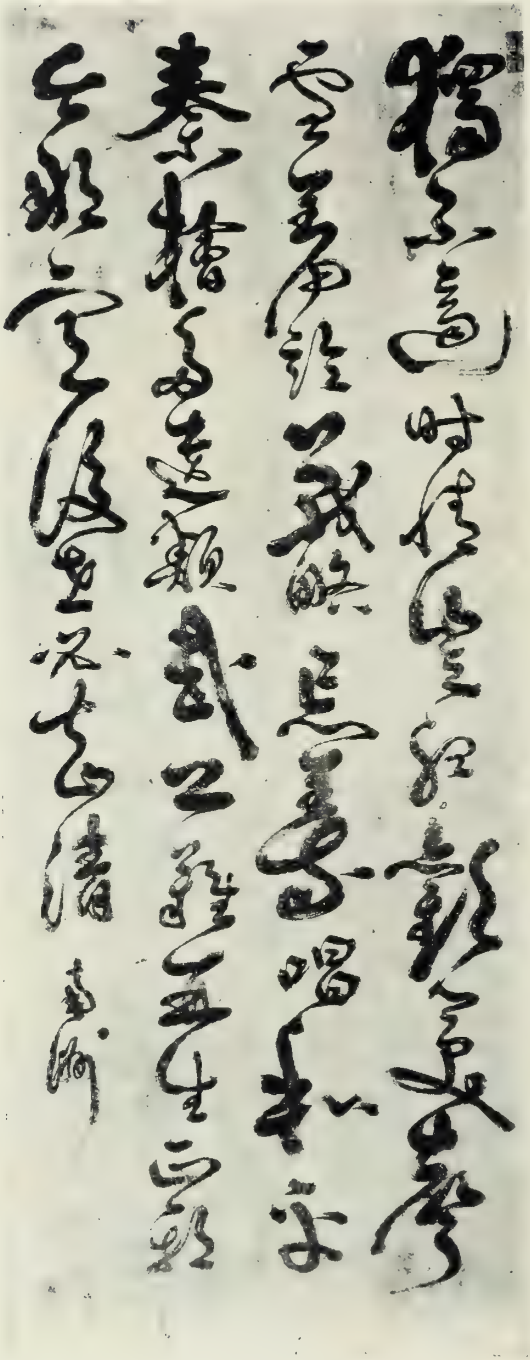
大鹽中齋書



藤田東湖書

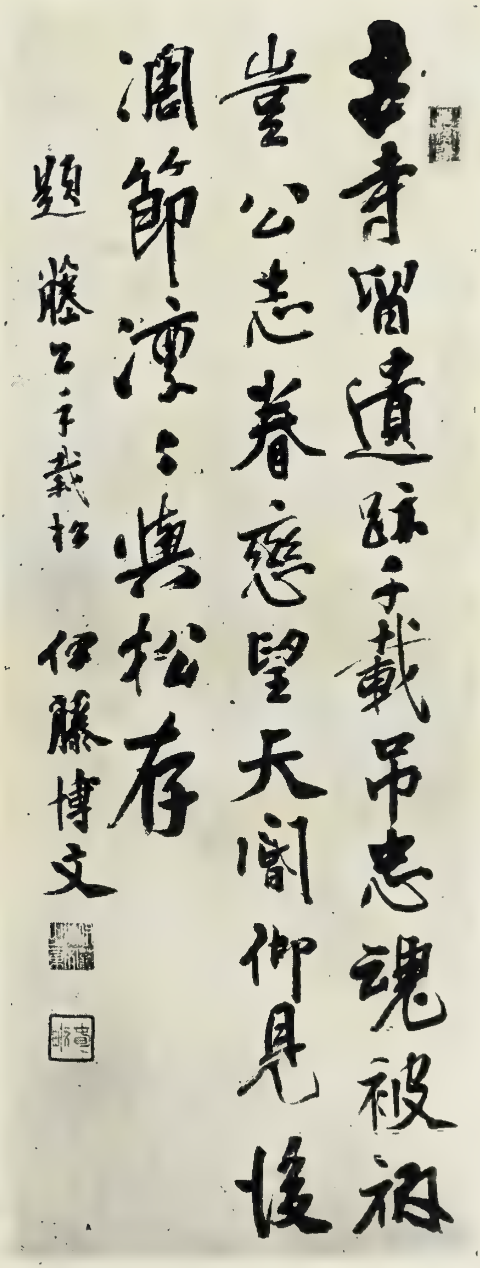


佐久間象山書



西鄉南洲書

伊藤博文書



書道及書蹟

黑木欽堂述

緒言

本書講述の態度

凡そ文字といふものは、人間の思想を發表する最も大切な且つ普遍的な機關であつて、如何なる原始の種族に於いても、人類が或る程度の文化の發達を見た時、必らず文字又はそれに類したものを所有するのである。六千年前のエジプトの象形文字、バビロニア、アッシリアの記表文字、印度上代の音符文字等の如き然りである。また現に濠洲、南洋等の未開土人の間にも一種の文字のあることは人の知る所である。斯くて今や、種類こそ異れ、文字は人類に共通して所有せられると云つてよいのであるが、たゞこれが書術に至つては、國々の文化の程度と事情との差異に依つ

て必ずしも一様でない。否、歐米の諸國に於いてすら、書術即ち文字を書く技術に關しては餘り多くの注意を拂はれてゐない。英・佛・獨・露・伊等、字形にそれ〳〵の相違あり、字體に楷・行・草の區別あるにつれて、全然書術の閑却せられたといふでなく、形式の約束、筆法の順序、若しくは書字の巧拙優劣等を無視する譯ではないが、しかし眞に書術が書術として最高度の、或は極端の發達をなしたのは東洋諸國である。卽ち支那に發して朝鮮に流れ、更に日本に傳はつて特殊の發達をなせる書術、換言すれば書道、書法、乃至書學といふものほど、世にも類なき發達をしたものはない。

書と美的價値

歐米諸國の書術は、主として實用の範圍に限られる。時に形體筆勢の美觀を顧みないでもないが、それ等は寧ろ末技視せられ、たゞ書術とし言へば文字の形體の整齊にして明瞭流暢にして巧速、書くに易く讀むに易きを第一義としてゐるに過ぎない。これに反して、書字術の極端に發達せる支那及び日本に在りては、實用を以て足れりとせず、書術は書術として獨立し、實用主義を離れて一種の技術化した。しかもそれが、單に家を支ふる柱楹を彫り、肌膚に纏ふ衣裳に彩るといふ程度ではない、一箇の美術品として、繪畵彫刻と等しなみに取り扱はれてゐる。言ひ換へれば、書術は實に數千年の久しき、東洋に於いては藝術的發表の一形式となつてゐるのである。文字を書くといふそのことに依つて、東洋人はその藝術心を發揮してゐる。最も高尙にして雅致ある彼等の思想

は、文字に托せられて表現されたのである。玆に於いてか、吾等東洋人の文字を見る、多くは實用の立場より見ずして專ぱら美術の立場からする。蓋し同じ文明人であつても、西洋にて文字を見る場合と東洋にて文字を見る場合とは、假令出發點に於いては同一であつたとせよ、現在には全く異つてゐる。彼等は實用一點張で、功利主義の上から文字を取扱ひ、我等は功利を離れて、美術の一科としてこれを書きこれを觀てゐるのである。これ根本の相違であると共に、如何に東洋では文字が重んぜられ、且つ美術としての價値高きかを知る可きである。

「書は東洋の特產物」 近來書は美術であるか否かの問題が連りに起る。然しながらこれは、如上の理由を明らめれば、語るに足らぬことではあるまいか。支那に於いても日本に於いても、既に數千年の久しきに亘りて、これを美術として書き且つながめ來つた事實ある上は、議論の餘地はない筈である。斯くの如きは明治初年以來、西歐の學問の輸入せられると共に、すべての考察の標準を西洋に置き、西人の眼鏡を以て東洋を見んとするところから來るので、西洋の美術中にないから、書は美術でないといふのに過ぎない。これは實に笑ふべき淺薄幼稚なる議論である。勿論、上の如く書字を美術の立場から取扱つたことのない西洋人には、文字を書くことが美術であるといつても解る理窟はない。如何なる美術史を繙いても、また美學者の說に求めても、文字を美術とした例は一つもあるまい。若

しあれば、花形の文字か、家の紋所に用ひた文字を工藝美術の一小部科として取扱つた位なものであらう。これでは丁度、パンを食つて生きて來た西洋人が、米を食つては生きられないと論ずると同じやうなものである。現に日本人は、米を食つて生きて來たからこそ、光榮ある三千年の歴史を作つたのではないか。西洋人はこれを何う見るか。米の飯のことが西洋の學説にない、西洋人にその例を見ないといふので、米の飯を否定することは出來ない筈である。然るに、近頃の日本人にして、書は美術でないといふのは、米の飯では生きられないと言ふのと、大した違ひはないではないか。

書は美術なりや　故に吾等の眼から見れば、書は實に立派な美術である。それは吾々の祖先が長い間、美術として文字を書き來つたといふ實例が動かす可からざる證據である。成る程、美術などいふ言葉はなかつたが、その代り「書畫」といふ言葉があつた。即ち書は畫と並んで、否、畫の上に立つて美術を代表したのである。而して畫の美術であることは、西洋人の固より認めるところ、寧ろ美術の主要部分は畫であることを認める筈である。東洋に於ける書は、少くとも畫と同じものである。殆どその間に區別はない、動機に於いて、表現の方法に於いて、思想に於いて、互に相通じてゐるのみならず、却つて繪畫は書法から出でゝゐると見てもよい。それは次の項に述べるが、要するに書術は美術として間然するところがない。古來、人の書をものし、又ながむるや、最も尚ぶところは思想

にある、人格の流露にある。或は高雅、或は優麗、或は豪快、或は清明なる心境に練られたる一劃であり一點であるが故に觀るべしとされた。即ち藝術たる所以ではないか。且つそれ等の善く書かれたる文字は、永遠の生命を有し、萬象の姿を寫してゐる、實に一字にしてよく不朽なるもの、一行にして宇宙を縮小してある、所謂象徴主義の藝術として最尤なるものと見るべきではあるまいか。

書と畫との比較

次にこれを繪畫と比較するに、書畫同義なる語は最もよく兩者の關係を示してゐる。その發達の跡を辿れば、書と畫とは同根なるもの、吉金の文字に探り、龜甲占卜の象形に求むれば、畫も書も共にこれ一種の原始的なる、描劃に萠してゐる思想を表現せんが爲めに借りたる形、それが原始人の幼稚なナイーヴな頭と手とに於いて、覺束なき一種のものに表現せられた。それは畫であると同時に書であつた。そこより發生して一は繪畫の途に上り、一は文字の道を進んだのである。斯くてのち、畫と書とはおのづから別れたといへども、それを支配する根本の規約、根本の思想に至つては常に同じかつた。即ち材料は同じ金石竹簡縑素若くは紙の上に、同じ墨を磨つて、同じ毫を用ゐて同じ姿勢で表現するのであつた。而してその最も重んずるところは氣韻の生動にあり、筆勢の運用にあり、一種の象徴主義を以て一貫するところまた同様である。されば多くの場合、書人にして畫人を兼ね、畫を畫くの心を以て書に向つた。のみならず、支那の畫法、畫論なるものも動もすれ

ば書法より出でたので、畫はむしろ書の一別科なるかの如くさへ思はれた。勿論、此の項に述べたところは、支那にも日本にも例外は多いが、根本に於いて、書は畫と同一視せられたることは否定し得ないのである。この一事を忘れては、東洋の書術についての感興もなかるべく、研究の價値もない筈である。

本書講述の範圍

そこで右の様な次第から、こゝに余が本書に述べんとする所も、主として美術としての書道及び書蹟についての、一般的の極めて初歩のお話である。卽ち、書といふものゝ美術的の價値は何處にあるか、古來からの書を以て有名な人々の略傳又はその人々が遺した書蹟などについて一とわたりのお話をしようとするのである。それも固より、或る特殊の事柄を專門的に研究したり論議したりしようとするのではなくて、所謂鑑識、鑑賞に必要なる限りを平易に講述しようとするのであるから訓詁、考證にわたるやうなことはなるべく避けて、先づ出來るだけ解り易く且つ面白く話して行かうと思ふのである。けれども何しろ、書といふものが、元來餘り平俗なものではないから文字の出來工合の話や、書道の精神や、乃至は古今の名書家の事柄になると、少々解りにくいことも混るかも知れない。その點も豫め御諒恕を願ひたい。

本書の内容に就て

次に本書の内容について一言して置きたいのは、編者の最初の計劃では、書

道の一般論から始めて、支那に於ける書道の大體に及び、つぎに日本の之れに亘る都合であつた。順序から言つてもそれが當然のことであるし、また何と申したところで、書の本家は支那であつて、日本は支店といふも少々不穏當だが、まあ最初は支店であつたものが、今では獨立して店を張つてゐると申す方が、書道に於ては適當である。それ故支那の書を知らずにいきなり日本の書のことを說き起すのは順序でないのみならずそれでは日本の書道もよく腹に入らないだらう。それだけでなく、支那人の書といふものは、今もなか〳〵やかましい。支那でばかりでなく、日本でもやかましい、古いところも、新しいところも例へば近頃の呉昌碩などのものさへ、なか〳〵もてはやされてゐる。だから何れにしても、これを省くことは出來ない次第である。そこで本書でも、支那の部を首腦とする位な計劃であつたらしいが、頁數の都合で、遺憾ながら支那の方は別編で、矢張り余の受持ちである「書道實習法」中の草書の書方の一半を割いて、それへ讓ることになつたらしい。ために本書が何となく首尾の一貫しないものになつたことも止むを得ない。此の點は大に讀者に諒して置いて戴きたい。

第一編　總説

一、書道及び書蹟の解

唐様と和様と

書が東洋の特産物であつて、且つ美術品として見るべき價値の十分あるものなることは、上來述べ來つたところであるが、これより、東洋に於ける書の發生及び經過變遷を語り且つその美的價値を闡明して行かねばならぬ。言ふまでもなく、書なるものは甚だ複雜して居るが、徳川時代の中葉以後、我が邦に於いては唐様と和様との二つが對立して居る。而して一口に言へば唐様とは支那流の書風であつて、和様とは日本で發達した書風である。即ち唐様は專ぱら漢字を書くもので、漢文、漢詩を選ぶのに對し、和様は主として漢字交りの假名を書く、所謂假名書きこれで、和文和歌を主とする。他に俳句川柳とか小説俗文等を書いたものもあれば、唐様、和様の何れへともつかない文字の場合もあれど、大體は此の二つに分けてよからう。而して、和様は女文字とも稱せられる程に多くは女性的のものである、優美を特色としてゐるが、これに對して唐様のみでない、一般に支那流の書風は男性的とも稱すべく、筆勢とか氣韻とかいふものを重んじてゐる。されば、少くとも

近世—實は近世のみでなくて、一千年來のことではあるが—の書には、唐様と和様と二つの系統、若くは分脈があることを知らねばならぬ。

書は支那に起る

然しながら、和様といふものも詮じつめれば支那風の文字の草體か、又は草體から變化したものに過ぎない。假名その物が既に、言ふまでもなく漢字をくづしたものである。隨つて和様は日本で特別な發達をしたと云ひ條、基づくところは支那字であつて、原則に於てはそれを出で丶居ないのであるが—假名書きなるものも、やはり支那書の一分脈と見てよい。故を以て、書は如何なる流派に分れて居ても、皆一つであつて、支那に於いて發達したものに基づくとせねばならぬ。文字既に支那に起る、假名の如きもそれから蛻化したに過ぎないのだから、文字のことはすべて支那をもと丶しなくてはならぬ。支那の書のことを十分に知らなくては日本の書のことは解らないのみか見方に依つては、日本の書の如きは支那の書の飛沫のやうなものである。であるから、こ丶にも支那を除いて置いて日本だけの書の話をすることは非常に困難であるが、それも止むを得ないから、大體の文字論をして置いて、直ちに日本の書道と書蹟とのお話に移らう。しかしそれに先立つて、一寸更に概論めいたものを加へて置く、緒言と重複するところもあるけれども順序上止むを得ない。

書蹟は美術なるか

そして、最初に明らめて置かねばならぬことは、書は果して美術であるかと

いふことである。これについては、讀者諸君に於いても屢々考へられたことであると思ふ。蓋し、文字を書くといふことは、專ぱら實用に屬してゐる。實用の中でも最も實用上大切なものである。書を以て己が姓名を記すれば足ると傲語した古英雄にしても姓名を記すべき文字だけは認めてゐる。即ち吾々が思想を表現し傳達する上には、必須缺く可らざるものなることは、何人も否まないである。されど更に問題を轉じて、これは美術品であるかといふことになると、そこで甲乙の説が生ずる。併しながら、斯う言つて仕舞へば極めて明瞭ではないか。卽ち文字を實用の方面から見たならば、それは美術ではないけれども、これを美術として取り扱つた場合には、立派な美術であると。これは何も書だけに限つたことではない。畢竟、書の美術非美術論の生じたのも、泰西の美術論が入り來てからのことで、偶々西洋には文字を美術品として見る例がないので、支那や日本の字も、西洋美學に宛てはめたならば、或は美術の範圍外に出でるであらう。所が、西洋人が知らなかつたからとて美術は何處までも美術ではないか。現に南洋や南米の土人の製作したものをすら、彼等は次第に美術の一種として取扱ひ來りつゝあるではないか。況んや東洋の君子國、支那や日本に於ける文字をや。そこで、實用と否との論であるが、西洋の美術の大部分を含める建築は何うであるか。我々には却つて建築が美術であるといふよりも、書が美術であると言つた方が通りよい程に、建築には實用の意味がある。しか

も彼等は美術の方面より見て、これを主なる美術と見てゐる以上、我等が特殊の文明の生んだ書なるものを美術的に見てこれを美術として取扱ふのに何の躊躇すべきことがあらう。乃で、書は、これを美術的に見る時、最も優れたる美術である、斯う斷言して差支はないと思ふ。

書畫同義といふこと

次に、書が立派な美術であることを他の二面から論じ得ると思ふ。一つは東洋に於いては古來「書畫同義」と見做された點である。「書畫同義」此の言葉は今更說明するまでもなく、何人も御承知であらう。蓋し、漢字なるものは元來象形から發達したもので、支那の上代に於ては書と畫の區別すら明瞭ではなかつたと言へる。のみならず、これを書く人の氣分、材料、方法も、書と畫と同じければ、一人にして兩者を能く兼ねた人も古來少なくない。書を書く心で畫を畫く。畫を畫く心で書を書く、これが實に大なる特色である。畢竟書畫は同義である、二にして一なるものである。これを精しく言へば、先づ何れもそこに現はされた形體よりも、氣韻とか風骨とか筆意とかいふことが重ぜられる、形似は第二にして精神が根本だといふことで同じである。西洋では文字を書く時に決して氣韻風骨の如何は考へない。次に、材料は同じものである卽ち絹か紙（書では紙を主とするが）の上に筆で書く、繪具も墨が主となる。それから書き方に至つては、畫の方が幾らか複雜だといふだけで、根本は畫も書法から出てゐる。筆の持ち方、運筆法、勢や形、墨の色、悉く同じものである。更にこれ

を書いた人物についても、支那では遠く隋•唐の諸家より、米元章、董其昌、張瑞圖、若くは吳昌碩氏に至るまで日本でも弘法大師、大雅堂、渡邊崋山、賴山陽、或は貫名海屋など、畫と書とを兼ねてよくする人は頗る多いのである。これ要するに、兩者に相通ふところがあるからで、美術たる點に於いて區別のないことを語るものである。

書は人格の發露

更に支那人なり日本人なりの、書を尙ぶ心持に立ち入つて見ると、少しも繪畫に對すると變つたことがない。否繪畫以上に、それを美術品として見る傾きさへある。何となれば若し藝術はその人の人格の發露であつて、藝術を愛づる所以の、其處に示されたる形や色や、或は寫實相似の點にあるのでなく、藝術家に依つて創造された、一種の生命を見、若くは人格を偲ぶといふことにあるとすれば、動もすると技巧の末に走る繪畫に於いてよりも、寧ろ自己の內的生活を端的に表現した書蹟を見ることに於いて、一層その當を得てゐると言はなくてはならぬのである。我等の書蹟を珍重する所以は、時にその技巧の妙を讃へ、文字を文字としてのみ愛づることもないではないがそれよりもこれによつて我が崇拜せる先人諸家の本來の面目風尙を端的に示すものとして對するためではないか。文天祥や黃道周や、或は乃木將軍や佐久間象山や、乃至高僧、大德の斷簡零墨をも貴しとする所以のもの、蓋しこれに依るのである。而して藝術本來の意義がこゝに在るとすれば、書は以

て、儼乎たる東洋固有の美術品たるに足るものと云はねばならぬ。

技巧と人格の鑑賞

所で、此の美術として見たる書蹟を、我々が鑑賞する場合となると、凡そこれを三つに別けて考へねばならぬ。一つは、書蹟の技巧を愛でるのである。二には筆者の人格を慕ふのである。而して三つには、お手本として珍重しようとすることである。勿論、この三つの態度には必ずしも確然たる區別がある譯ではない。美しい書を書く人は同時に立派な人格者でもあらう、又それ故にこれをお手本にしようと思ふ人も多いであらうが、しかし、同じ美術品であつても、繪畫や彫刻や工藝美術品やとは稍趣を異にしてゐる。それ等であつたなら、主として第一の場合、即ち出來榮のよいのを、技巧の上から賞玩しようとするのである。けれども書ではそれだけに止まらない。無論その人格は何うであらうが、趙松雪の文字は美しいから愛するといふ人もあらう、顔眞卿は人格者であるけれども或る種の文字は下手だから嫌ひだといふやうなこともないではない。が、多くはさうでない。繪畫ならば冷泉爲恭の行ひに感心しなくても、その作品は數千圓に價する。また專門畫家の作が安くて、素人の餘技になつたものが高いといふことも餘りないのに、書蹟となると、寧ろ人物本位に取り扱はれる。現に乃木將軍や大西郷や、伊藤公の書が滅法もなく高く評價されるに拘はらず、所謂書家の書は比較的安い。勿論これは書家が人格が低いからといふのではなくて、それよりも偉人、

志士、烈士、義人などが、書その物の價値以上に物質的の評價をされるからである。無論、書の出來榮えから言つては、市川米庵や、卷菱湖の物は、林子平などに比してずつと立派であらうが、人物本位の標準を取る世間はそれで承知しないのである、茲に於いて、書の觀賞の標準が斯う二つに分れてゐることを知らなくてはならぬ。

習字手本として

所が今一つある。それは書のお手本にするといふ場合である。無論、此のお手本にも程度があつて、小學校、中學校或は項羽流に實用のみを目的として字を習ふのもあれば、近頃大官名士の方々の樣に、一筆揮ふことが出來ないと身の恥、估劵に係はるとあつて、大鉢卷でお手習ひをするといふのもあるから、從つてその求める標準も高下各々異る。それ故にこれだけは一概に言はれない。三井親和や松下烏石の字が好きだと思ふ者、良寛禪師がよいと言ふ者、或は紀貫之や藤原行成に行く人、松花堂流に尊圓流に、更に飛んで楊守敬の說に聞き、趙子昂に及び、六朝の風を慕ひ、二王に出入し、唐人の墨蹟を愛するといふ風で、思ひ思ひではあるが、兎に角その覗ひ處は必ずしも床にかけ、卓に置いて觀賞するといふのではなく、つまり見るよりも食ふ方である。宴會の造り肴よりも、蒲燒天ぷらといふところ、これ亦た書蹟觀賞家と稱する者には少なくないのだから逸する譯に行かない。故に本書に於いても、是等三樣の人々の要求に應ずるやうに、一方に偏した標準を立

てないで講述しなくてはならない。

三、支那文字の起源と發端

されば茲には主として、支那及び日本に於ける、美術品としての書家並に書蹟について語るのであるが、併し、序説として、書の本體と稱してもよい漢字に關して、その古來の變遷と、諸體式の發生とを、概說して置く必要がある。抑も、世界に於ける文字の起源を繹ぬれば、茫々五七千載の太古に於て、すでにエジプト人はカイロ河畔に集住して一種の象形文字を有し、アッシリア、バビロニア地方の民族亦文字ありしこと、今日その遺物を發見して知る所である。更に東に轉じては、古代インド民族の間にも、梵字(悉曇)の源體をなすものがあつて、その發生の古きこと、敢てエジプト、アッシリアのそれに降らない。しかのみならず、この字體はアラビヤ、ヘブライの文字となり、ギリシヤ、ラテンの文字となり、而してローマ字となり、ドイツ、ロシヤの字體となつて、所謂インド。ユーロピヤン種族の文化の母となつたものである。斯く、文字は實に、中、東アジア、殊にインドに於て發祥の兆を見ること、人類文化の始めに於いて然りである。

世界に於ける文字の起源

然らば、支那の文字、即ち漢字は如何と云ふに、これについては近時

支那に於ける文字の起源

或はアッシリアの楔形以前の文字に發してゐるとの說もあれど、支那の傳來に據れば、今を去ること大略四千年の昔、黃帝軒轅氏の世に當つて蒼頡なるものこれを作るとされる。固より文字創制の如き大業は一人の手に於てよくし得る所でないから、功を蒼頡一人に歸する譯には行かないが、兎に角、民俗の慣習として、從來支那には結繩の制があり卽ち繩に結節を設けて、一種の符號となし、以て言語思想の要領を發表してゐたらしい。然るに何時の程よりか、物象を形體に表はして、以て我が所思を表現するの方法が行はれるに至つた。勿論、結繩の法と象形文字との前後は不明であるが、兎に角その一般的で解り易くして且つ便利なる所より、益々用途の普及と形體の發達とを見て、ひつに結繩に代つて專らこれが行はれるやうになつたであらう。固より、蒼頡は文字に關する知識に富み、これが完成統一、普及等の上に、有力なる業績を殘したではあらうが、その鳥獸の足跡を見て、これに倣ひて始めて文字を製したといふ如きはその儘に受け取り得ない。殊に輓近、鐘鼎彝器の欵識を判讀することに依つて、最古文字發生の跡を推察し得る樣になつたが、それに見るも、決して一人の手に成らなかつたことを知るに足るのである。

漢字の六義とは何ぞ

孰れにせよ、四千載の古に既に文字があつて、それが鳥の趾に似たと云はれる程に、畫樣に近き一種の象形であつたことは、疑ふことができない。然れども、支那の文字は勿

論、全く所謂象形文字のみではないこと、その構造に六義、即ち六書あるに見ても知られる。此の名稱は既に殷末、若しくは周初より唱へられたもので、今日に至るも、漢字を説明するには最も適切な名目である、蓋しその一は象形にして、物の形體に象どりて造られ、圖畫とその性質を同じくし、最も原始的である。日を⊙、月を☽、山を⛰、川を巛、木を米、魚を𩵋と書するが如きこれにして、簡單にして原始的なる、又は本來的な物象の殆どすべてこの象形なるを見ても、最古創始の當時の文字は多く象形であつたことを想像せられる。然るに、物象のかたどるべきもののなきを表現せんとするに當つては、これを指示として書いたのである、一劃を以て「一」の義を現はし、又は「木」の字を借りて上に一劃を加へて「末」とし、下に一劃を加へて「本」とし、或は「月」の一劃を減じて「夕」字とするが如き、抽象的、象徴的の方法を取るに至つた。しかも尚ほ意を現はし難きに及んで、火の燃ゆるものには「炎」となし、火のかゞやくものには「赫」となし、木の並立するものには「林」となして、所謂會意の方法を用ひ、また諧聲の方法に從つて、半ばはその語の示す部類を現はし、半ばはその物の音聲を示して、「江」、「河」、「猫」、「銅」となし、以て氵、犭、金に部層を標し、工、可、苗、同に音聲を表はしたのである。それが更に一轉すれば轉注となりて、具體的のものを抽象の意味とし、或は一部を擴充して全部とするなどの心理的變化を行つてゐる。「樂」はもと音樂を意味したるを、その人心を樂

しませるより轉じて「たのしむ」の意となり、「好」は女子二字の會意なりしものゝ、轉じて「このむ」「すく」の意となつた如きこれである。假借て至つては、これが一層低く應用せられて、文字の本義の意義の如何に拘はらず、その音を借りて他の意義に用ひるに至つた。俎豆の「豆」を「まめ」の意とし、皮革の「革」を「あらたむ」の動詞とし、「耳」の象形なりしを、「のみ」の助字とし、口鬚の象形であつた「而」（𠕒）を「しかうして」の接字としたる如きこれである。斯くて漢字は、象形文字より、分化轉化して、極めて複雑せる、表意式の文字となつて、字數實に四萬乃至五萬（「康熈字典」は四萬二千百七十四字を載せ宋の「丁氏集韻」「篇海」「海篇」等には五萬三千乃至五千字を載錄してある）といふ、驚くべき大多數に及んでゐる。實に之を、ローマ字の二十數字（諸符號を合算して五十字を出でない）に比すれば、日月に對する星辰ほどの差違がある。彼の土に文字の技術なくして、我が東洋に書道書法の美術の盛なる、また故ありと言はねばならぬ。況んや、各字にまた數種乃至數十種の書體の別あるに於いてをや。

四、蝌蚪文字から篆隷まで

最初に出來た蝌蚪文字　さて、斯くして、蒼頡を發足點として先づ象形より進んで種々の文字を生

じたのであるが、「木」が「林」となり「森」となりて、「樹」となる如き、各字の發達及び、新字の出現については少時く措き、書體の變遷について見るに、數千歳に亙つてその著しきものあり、中には或は全く原字の形體を失つなものすら少なからぬ。今次にその大略を述べんに、先づ、蒼頡の制作したと傳へる文字より、三代の頃に至るまでの文字は、これを古文、一に蝌蚪の文字と稱する。蓋しその形狀が、蝌蚪即ち蛙の子なる「おたまじやくし」に似てゐるからである。固よりこれ千數百年に亙つて用ひられた文字にして作者も一人でなければ、字體も亦人と時とに依つて同じくはないが、しかも形式は略〻相似てゐる。即ち上古は未だ、今日の如き筆墨紙がなかつたので、公文書、史書等、最も重要なる記錄は竹簡を革緒にて編み、これに竹の尖端を碎いて漆を着けて書いたのであるから、その字は粘稠性の漆のために、頭は太くして尾尖に至るに從つて小なるものとなり、おのづから蝌蚪の形をなしたものであるといふ。漢の孝景帝の末(約二千年前)に、その子魯の恭王が孔子の舊宅を破壞して尚書、禮記、論語及び孝經を得たところ、それ等は皆蝌蚪の文字に依つて書かれてあつたと云ふから少くとも孔子の頃までは、この原始的文字が用ひられてゐた事は知れる。今日に至つては、古銅器の銘、又は字書等に、僅かながらこれを見るのである。而してその文字は、殆ど書と畫との混淆した如きもので、頗る判讀に苦しむものである。但し此の種蝌蚪文字については、金石學の研究の發達した

今日では、昔と餘程說を異にし、蝌蚪の文字の根本的否定をなすものさへあるが、その學說はこゝに略して置く。

大篆小篆

然るに周の宣王（約二千七百年前）の時に至りて、太史籀なるものが、始めて古文を變じて大篆を作つた。蓋し、その後、秦の世に至り、小篆の出づるに及び、古なるを名づけて大篆と稱したので、籀の創制した所により、これを籀文、又は古籀とも稱する。「篆」とは筆を引きのばして書きて、燦然たる模樣のある義であるともいひ。また「篆は傳なり、その物理を傳へ、これを無窮に施すの義なり」ともあるが、要するにその字體は蝌蚪を去ること甚だ遠からずして、或は蝌蚪と同じきもあれば、同じ字にして形を異にしたものもあり、全く異なつたものもあり、殊に同一文意章中にも、同一文字の形體多數多樣にして、これを讀むといふよりも、寧ろ判ずることに於て、甚だ難んずる次第である。秦代に詩書を悉く燒いて、只だ易と大篆十五篇とを存したと傳へられるが、固より當時の遺文は書冊として存して居ない。只僅かに周の宣王の石鼓文なるを傳へてゐる。これについては後章に詳しく說明しよう。ついで秦の世に至つて、始皇の丞相に李斯（約二千百年前）といふ者があつた。彼は政治家として知られて居るが、また文字の上に小篆、或は秦篆と呼ばれる字體を作つた。これ、籀文はまだ原始を去ること遠からず、甚だ繁雜にして且つ不統一で、文字の用を務むる

ことさへも不便、不適なることが多かつた上に、周の末に至つては各種漢民族の移動、侵略、割據等の行はれた爲めに、地方的に種々の文字が生じたので、秦の始皇は六國を併呑して國家統一を行ふに及び、鐵血政治を以て國家の基礎を固めんと欲し、一方焚書の如き暴擧を敢てすると共に、李斯並に趙高等をして文字の統一整理を圖らしめたのである。乃ち彼等は籀文を基として、或はこれを省き、或はこれを改め、別に一個の、比較的明瞭にして形體の正確なる文字の樣式を立てた。これ大篆に對して小篆といふもので、これを用ひて書かれたものは、古銅器、印章、碑額等に今日も見る所で、後章に說く如きものである。

程邈の隷書

文字の發生と變遷とも、要するに社會の現狀及び文化の程度に應じて行はるべきである。秦初に於て統一せられた小篆も、古文籀文に比すれば猶便利になつたけれども、秦の世は元來社會革命の一新時期であつて、百般の事舊を棄てゝ新に趨かんとするのみならず、世情は益々急激にして事多からんとし、人智とその應用とは進んで文字に依る機會漸く繁多を加へんとしたので、先年制定の小篆すら尙ほ且つ迂遠不便の感あるを免がれなかつた。此の時、偶々試みられたのが、程邈の創制にかゝる隷書、一に古隷なる文字であつた。程邈はもと下邽の人、始め縣令となつて居たが、故ありて罪を始皇に得て、雲陽の獄中に幽囚せられた。此に在つて苦思十年、何に感じてか一心に文

字の研究をなした。そして遂に大小の篆字を損益して隷書三千字を作り、先づこれを雲陽の守獄官に試用せしめたのである。當時秦室は、刑罰を嚴にした爲めに訟獄の事頗る繁く、從つて文字を用ひることも最も多かつたのであるから、この新制の省略せられたる文字を得るに及んで甚しく事務の簡便なるを得た。斯くして獄中の徒隷、即ち小役人に依つて始めて用ひられた所よりこれを隷書と稱し、ついでこの字を始皇に奏請して、國內一般に用ひしめるに至つた。故に隷書の起源は、李斯の小篆に後るゝこと幾ばくならないのである。隷書に依る碑碣、古器も亦、今日若干散見する所である。

五、字體統一の時代

八分と章草の創作

斯くて暫くは篆隷併せ用ひられたが前漢の末期（約一千九百年前）の頃から八分と稱する一體が行はれた。これは秦代の羽人上谷王次仲なる者の作る所であるといふ。八分と云ふのは、八の字の分散するが如き筆勢あるを以てゞ、大體に於いては隷書と殆ど同じもので、その稍變化して波磔の出來たものである。字體、筆法共に篆隷の一分派と見てよい。その行はれたる程度の如きも、必ずしも篆隷に代はるが如きものではなかつた。然るに同じ前漢末に、黄門の令史游なるもの、章草の文字を造つた。「草」とは草創の義にして、早く書くことを意味し、章草は章疏に用ひる草書の體とい

ふことで、匆卒に認めて奏上する場合の文書に用ひるを主なる目的としたのであらう。或は史游の急就章の章字に取つて章草と言ふともある。しかも此の文字の出來たことに依つて、公文書は勿論、一般に記書を利すること甚しきものあり、漢字は玆に始めて眞に實用化せられたと稱してよい。しかも史游はこれを急就章篇又は急就なる一篇に纏め書して、今の小學習字本の如くにして頒布したのであるから、普及の便利習學の進歩これより大に見るべきものがあつた。爾來、能書の巨匠大家、踵を接して起るに至つたのも宜なりと言はねばならぬ。而してその字體たる、八の字の分散するが如き筆勢の、隷書に見はれたるを八分と名づけ、草書に見はれたるを章草と名づけると心得て大差はない。恐らく書道の巧拙を論ずることも、此の頃より始まつたものであらう。

行書と楷書と草書　後漢に入つては、字學書道の進歩完成及び隆盛、共に既に前日の比ではない。此の時代の初に劉德章が先づ行書を作つたと傳へられる。行書とは、正書の稍簡易にして、草形に近いもの丶意にして、當時は篆隷の體を稍變化せしめたるもので、ひとりこれのみに用ひたるに非ずして、正書（正書とはその時代時代の、最も正格とされた字樣にして、必ずしも楷書と限つてはゐない。眞書も亦同樣である、けれども唐宋以後、正書、眞書やがて楷書の意に取られてゐる）と相交へて書いてゐたのである。更に漢代の末より、楷書なるものも出來た。蓋し、今よりこれを見るに、秦漢の時

代に專ら行はれたる隷書と、後世の所謂楷書とは若干の差別こそあれ、殆ど同一のものであつたけれども時代の經過するに從ひ、自づから筆勢に變化が生じて、西漢代の隷書は一種のものとなつてゐた。それが晋に及び唐に及びて益々別樣の變遷をなし、隷書はつひに楷書以外の別體となり、漢末よりして、古隷に則つて楷書の體が出來た。故に程邈のそれを古隷といひ、楷書を稱して今隷とも謂ふに至つた。草書も亦此の時代から行はれたもので、その章草より出でたものなることは勿論である。蓋し隷書の少しく變じて楷書となつた如く、章草の少しく變じて今の草書となつたことは、皆時勢に伴ふ自然の變遷である。世に或は草書は後漢の張芝（字は伯英）が作る所とするけれども、これ彼が特に草書に最も巧みであつたから、斯く言ひ出したまでであつて、素より何人の創意に出でたといふことは出來ない。兎に角、上の如くして、後漢に及んで今日我々の常用しつゝある楷、行、草の三體は整つたと見なくてはならぬ。

唐に至つて書風の統一　以上論ずる所は、主として、舊來の傳說に基づき、一般に用ひられる說を述べたので、最近金石學の進歩するにつれて、文字の起源、發達、變遷については、新說續出、到底上の如き說を固持して滿足する譯には行かない。けれども、それを徹底的に述べることは本書の能よ所でないから、他の機會に讓つて置く。兎に角、斯くて後漢より、魏晋六朝の頃に及ぶまで四五百年

の間は、或は楷に行に草に、或は八分に章草に、或は隷に篆に籀文に、彼此併び用ひられたのみならず、一文の中時にこれ等が雜然として混用せられたこと、古碑文を見れば知れるのである。故に秦に統一せられ漢に變化せられたといふものゝ、恰かも社稷のそれと同じく、統括渾一成らんと欲して未だ整はなかつた時代にして、その眞にこれあるは、唐代に及んでからである。併しながら、その間能書の士の輩出せること頗る多く、(殊に王羲之の一家を始め)三國六朝に於てその最も頂點に達したるを見るのである。實に今日書道の標準とせらるゝものゝ多くは、當時に於てものされたる遺物であると言つてもよい。それ等については次章以下に詳しくすることゝし、文字の發生及び書體の變遷は以上を以て大略を語つたことゝする。更に一言して置かねばならぬのは、今より古人の跡を繹ぬべき書蹟の三樣、卽ち金石、法帖、並に墨蹟についての、總括的のお話である。次にそれを語ることゝしよう。

六、書蹟遺物の三段

【眞蹟玩賞が目的】支那と言はず日本と言はず、書蹟を鑑賞玩味し、若くは臨摹習熟するに當つて、最も貴しとする所は名家の名筆蹟であるのは申すまでもない。先づその筆者が優れてゐて、鑑賞

するに足り、師範となすに足るものでなくてはならぬ。而して同じく名家の筆にても、その傑出せる作品であることを一層甚しく希ふのは當然である。これ必ずしも書蹟と限らず繪畫その他凡ての藝術品に於いて然りである。殊にこれ等は、詩歌文章と異つて、同一の品を複製、再製することを得ないから、同じく名家の名筆にても、眞蹟ならずんば眞價なしとせねばならぬ。これ、書畫に於いて眞蹟が然らざるものに比して價格、その他の差の雲泥ある所以である。僞物・贋物は固より、假令摸寫・拓本にしても、その假托なる點に於いては到底實價あるものとはされない。實に、書蹟は眞蹟のみを以て鑑賞の目的であるとすべきこと、第一の原則たるや疑ないのである。

古墨蹟の稀少　然るに、若し斯く眞蹟のみを以て觀賞の目的とする時は、到底世人の要求の萬分の一にも應じ得ないのである。何となれば、書蹟は畫蹟と異つて、單に床に掛け額に掲げて愛好玩賞すべきのみならず、これを手本として、習書の稽古をせねばならぬ、固より童幼の字技に對してまでも眞蹟を要せないにしても、苟くも書道に通ぜんとするには、相當の筆蹟に倣はなくてはならぬ。併かも一方には、中世以前の墨蹟は極めて稀少なること和漢共に然りで、時代を遡れば遡るほど、幾何級數的に眞蹟の乏しきを見るのである。而して乏しきもの程、價格の益々貴きは、社會の經濟關係の示す所で、千年は愚か、五百年前の眞蹟すら、萬金を以て價するのは珍らしくない。玆に於てか

古名家の眞蹟は天下の貴寶となつて、容易に世間に得ることを得ない。然るに又一方に於いて、啻に稀少なるのみならず、古蹟の如きは古いものほど正しく美しく、珍らしく優れてゐるのを普通とし、隨つて益々これを貴重視し、愛好欲をそゝられる次第である。

模本、拓本で満足　求めんと欲して能はず、能はざるが故に欲求を制し得ざるが爲めに、止むを得ずその代用品に満足せんとするのは、亦人情の自然である。そこで一は此の欲求の爲め、一は手本としての複本を頒布する爲め、眞蹟ならざる拓本、臨摹本を生ずるに至るのである。況んや、年代既に久しきものは、原本の夙く亡失して傳はらず、原石の古く毀壞して存せざるも多く、これ等は僅に舊拓、舊摸、若くは舊拓、舊模の轉摸、轉々摸を以て漸く本來の面目を知るべく、しかも面目を髣髴するは、爲さゞるに勝るを以て、茲に種々の理由よりして臨本、拓本が殆ど眞蹟同様に取扱はれるに至つた。故に古蹟は、眞蹟（假にこれを以下墨蹟と呼んで置く。皆然り）の外に、臨摸本と拓本とあることを知るのであるが、しかも臨本は或は眞蹟に紛れ、贋作とせられ、若くは臨者の眞蹟として取扱はれるから、墨蹟の一種を以て見るべく、たゞ拓本に至つては、その數量多く、比較的容易に入手せられるものもあるので、墨蹟以上に流布し珍重せられるのである。

墨蹟、金石、拓本の三段　然るに、支那に於いては今一つ金石文なるものがある。これは或る意味に

於いては眞蹟であり、或る意味に於いては假托の筆蹟である。何となれば、これは多く眞蹟その物を金石に鐫つたものなるを以て、第一次の眞蹟でなくて第二次の物である。しかも古名人の眞蹟の絶無若くは稀少なるが爲め、又はその金石文の特に優秀であり若くは參考とするに足るが爲めに、また眞蹟と等しく取扱はれる。但し金石文の玩ばれるのは、その金石の少なきことと古墨蹟と等しきものがあるのみならず、既に原石の存せざるものも多いので、世間に珍玩する所はその拓本である。若くは拓本の轉摸である。故にこれ亦一部の拓本としてのみ見ねばならぬ。随つて、日本は暫く措き、支那の書蹟を研究し玩賞するに當つては左の三種三様あるものとする。

墨蹟 ──→（臨摹本）
金石文 ──→ 拓本

即ち第一次的眞蹟の墨蹟と、その第二次的なる金石文、更にその墨蹟金石文、の摸製なる拓本の三種、若くは三段に分つことが出來る。而してその藝術的の價値及び世間的の價値に至つては、優秀なるものの上に殆ど甲乙の差がないと言つてよい。

古代、中世、近代の三特色　これ等の三種は、更に年代的に觀察すれば、上古は固より秦漢にかけて古銅器の遺物多くして、それに刻まれたる款識文を貴しとするのである。殊に周秦の古銅器文は、こ

れを吉金文と稱して最も尊重せられ、支那に於ける古字の研究及び習學には、必ずこれに依るのである。一方、秦漢、殊に後漢以降は碣碑文なるものも漸く多きを加へ、更に六朝より隋唐に至る頃ほひまでの遺墨は、先づこれを主とする有様で、それ等の實物又は拓本を觀て以て字蹟を賞し得るのである。固より他に墨蹟、即ち肉筆の眞蹟も東晉、隋の世の物往々存せざるに非ざるも、唐代に於いてすら尙ほ多しといふことが出來ない。而して宋以後に至つては、時代の近くして碑碣文の尙ばれないのと比較的多くの肉筆物を遺すとを以て、金石文を顧みずして專ら肉筆又はその拓本、臨本を玩賞するに至り、元を經て、明清に及んでは、次第に拓本より墨蹟に移つて趣味の對像となりつゝある。故に、概言すれば、

上代 ―― 龜甲獸骨古卜文字

殷　周　戰國春秋　秦 ―― 吉金文字

前漢　後漢　六朝　隋 ―― 碑碣文字

（吉金文字・碑碣文字）―― 拓本

唐
五代
宋
元
明
清
　　}墨蹟——法帖

となるのである。

日本の書蹟

飜つて日本の書蹟について見れば、その遺蹟の實際と、邦人の趣味好尙とに依つて、その主として珍重せられる所は墨蹟に止まつてゐる。蓋し、我が朝にも、古來金石文がないではなく、且つ往々見るべきものもあるけれども、古銅器に刻銘を用ひ、又廟墓その他に碑碣を立てることは、兩つながら邦人の俗ではなかつたから、その遺物は極めて少なく、近世の墓碑銘、紀念碑文等を除いては、殆ど數ふるにも足りないのである。隨つて趣味好尙にも比較的遠くして、これを探訪し拓するが如き者も甚だ稀であつた。それと共に、我が邦は革命なく國亂なく、古遺物の保存せられるもの意外に多くして、墨蹟の如きも啻に我が朝の千年以前の物に止まらず、彼の土に於いては全く湮沒せる魏晉隋唐代の遺物をすら傳ふるを以て、唐樣にしろ、和樣にしろ、必ずしも金石文に依

るを要せざるのみならず、これを上拓して賞玩するにも及ばなかつた。殊に近世書學の風起り、拓本を要することの多きに及んでも、專ばら支那を以て本場となし、彼の土の古拓新拓を求めてゐたので我が朝の古筆蹟は、主として肉筆の儘にて尊ばれた。殊に近世趣味の中心が茶事であり、床に書幅を掛けて賞觀するに至つても、肉筆を主として、文人の好尙等、特殊の場合でなくては拓本に及ばなかつたので、ひとり墨蹟の流行と尊重とを見たのである。固より習字書として、時に邦人の遺墨を版行する場合もあつたが、盛んなりと言ふ程ではなかつた。この點、支那に於けると稍異るものとせねばならぬ。

七、墨蹟と其の種類

古代の墨蹟

右の次第にて、書蹟は先づ墨蹟を隨一としなくてはならぬ。墨蹟でなくては眞の筆致、筆法を知り難いのみならす、その筆蹟の最も大切なる精神とか靈力とかを窺ひ知ること能はないのである。しかも墨蹟は古ければ古い程すぐれ、同時に古ければ古い程稀少なのである。程邈李斯、鍾繇の如きは、墨蹟は愚か金石、法帖共にその眞を傳へるのが少ない。二王のそれに至つても僅に我が帝室及び前清朝に眞蹟と稱するものゝ外、多く傳へられないのである。唐代の書すら、彼の

士の名書家の遺墨は、殆んど見當らず、我が朝に僅に賀知章等の一二を世に知らるるに過ぎないのである。されば今や、千年以前の支那墨蹟は、珍中の珍、寶中の寶となされてゐる。日本人の古墨蹟も亦同樣で、空海、道風、逸勢さては貫之、佐理、行成等の遺墨は、極めて稀にして、往々傳へることがあつても、深く貴人名家の寶藏深く珍襲せられ、容易に世間に出でざるのみならず、假令出づることがあつても、眞僞共に疑はしきもの多く、しかも萬金尙ほ手に入り難しとされてゐる。以て古墨蹟の稀有と貴重とを想像し得るであらう。

應用美術としての掛物　しかも、玩賞の品として見る時、固より拓本、模本を以て代用すべきでなく殊に我が邦人の趣味としては、これを床に掛けて眺め、若しくは卷として飾るを以て主なる鑑觀法とするを以て、隻墨片紙と雖も、これを愛惜すること眞に虎の子の如きものがある。しかも中ごろ、豐臣秀吉、秀次等が古筆類を玩ぶや、或は帖を崩し、卷を截りて、所謂古筆手鑑なるものを製してより折角纏まつた墨蹟も、數多の斷裂となつて分散し、一方には方寸の色紙を珍藏すると共に、他方には水火の難に遭ひて行方不明となつたものも多い。これ、幸か不幸かは別として、墨蹟の玩賞せられる結果、つひに極端に走つて斯くの如きもののあるに至つた。然れどもこれ、殊に本邦に於いては、筆蹟の鑑賞は同時に墨蹟の鑑賞なることを示すものとせねばならぬ。——支那に於いても墨蹟を最も珍

重するなれど、その極めて乏しき上に、近世に於ける金石文研究の盛んなるより、寧ろそれが主體なるかの如くなれる爲めに、一見墨蹟珍重の日本ほど甚しからざるやに見える。只事實決してこれを輕ろんぜざることを知らねばならぬ。

一禪宗諸僧の墨蹟一　次に又、日本の書畫骨董趣味は茶道と離る可からざる關係があり、茶道には禪宗を根本思想として、「茶禪一味」の語さへある程なるを以て、禪宗高僧の墨蹟は、古來茶席に缺く可からざるものとされてゐた。それも本邦の高徳、──例へば大徳、黄檗、鎌倉京都五山十刹の諸僧の名墨も無論珍重されたが、寧ろ最も貴しとする所は支那宋元に於ける名僧のそれであつた。徳光、圜悟、虚堂等の墨蹟は、支那にもてはやされるよりも、我が朝に至寶とされる、五百年以上の昔の書蹟である。此の點支那と日本と餘程趣を異にするので、支那を主眼として墨蹟を語る場合と、日本を主眼とする場合と、おのづから同じくないのである。

一明清諸家の墨蹟一　然れども、支那にても、元明清以降は墨蹟の比較的現存せるもの多く、その價値に至つては、東晉魏隋は勿論、唐のそれには及ばないとしても、元代の書の如き宋に優ると許する者もある位だし、明、清には、巧拙は兎に角、好書の人頗る多く、且つ金石法帖を待つに及ばないので支那人間にも近世人の墨蹟は甚だしくもてはやされる。況んや我が徳川時代以後は、所謂文人趣味な

るものが盛であつて、文才ある士人の餘技たる繪畫と翰墨とは共に頗る迎へられたのである。茲に於いてか和漢共に元明清の墨蹟を重ずるのであるが、しかもその書風を繹ね、變遷を辿り、且師範として高風を欣するの段となると、元は暫く措く、明清は餘りに雜駁なると、特に優れたる人の乏しきと餘りに時代の近いために、本書には精しきに亘つて說かないことゝする。

日本人の墨蹟　轉じて日本人の墨蹟を見るに、前來述べ來つた如く、我が國の筆蹟の玩賞に限るのであつて、三筆三蹟以降現代に至るまで、大家名士の書と云へば、その能筆なると拙筆なると書家なると非書家なるとを問はず、恰かも、その人の肖像を見るが如くに、これを掲出し披陳して玩賞これ事とする次第である。故に本邦の書道を談ずるに當つては、墨蹟を以て主とするのである。而してその墨蹟の種類たる、文字ある限りの物、悉くこれ玩賞の價ありとされないものはない。例へば古文書の範圍に入るべき記錄、古寫經、草稿、戲墨、手簡、——而して最も珍重せられるのは、詩文和歌俳句物語隨筆、禪僧の法語等にして、或は特に書幅、額面、屏風用として描いたる細大の文字もあり、所謂書家に至つては、「墨場必携」等より名句美辭を抽き來つて揮毫するといふ有樣である。

八、金石文とは何ぞ

金石文の價値　日本は別として、文字の本場たる支那に於て、古墨蹟既に稀にして、しかも文字の正格を知り、筆致の高風を解せんには、必ずや古字につかざるべからずとすれば、それは金石文に依るより外はないのである。實に金石文を外にして支那の古字を研究し、據るべき所を知るの方法はない。茲に於いてか支那では宋代以後、金石の探訪と研究とが行はれ、今に至つて益々その盛なるを見る。金石法帖と並べ稱するもの丶、その法帖の如き大部分は金石文の拓本にして、玩賞、習學兩者ともに、支那では金石文が主なるものであるのみならず、金石學は支那學術の要部を占めてゐると稱すべく、これが研究に從事してゐる者が現に甚だ多いのである。

金石文とは何ぞ　然らば、所謂金石文とは何であるか。曰く、金とは主として支那の上代に製作せられたる古銅器の謂にして、鼎、鐘その他にして、それ等の銅器その物の骨董的研究は自から別科に屬するを以て茲には語らない。（別卷「骨董の知識及鑑定法」を參照あれ）次に石とは、碑碣を主とする、何物をか紀念するために建てられ、又は墳墓の附屬物として置かれたる石物である。而してこれ等の金器、碑碣等に彫刻せられた文字を、金石文又は金石文字といふのである。けれども、古來、金文は割合に少なくして、多くは石文であるから、金石文とは稱するもの丶、後來に於ては主として石文、即ち碑碣の刻銘を指すが如き觀のないではない。そして、此の文字ある金石なるものは、必ずしも支那に固有したも

のではなく、太古の文明民族には勿論、原始的の人種に於いてもこれを見る所で、器物あればこれに何かの記章を施さんとし、後日に思ひ出すべき事柄あれば、これを先づ紀念的に印しつけて置かんとするのは人情の常である。エジプトのオベリスク、アッシリヤの建築物の記文等即ちこれで、時にそれ等には繪畫彫刻も用ひられ、ギリシャの如きは繪畫若しくは彫刻を主として居る。支那に於ては、本來書畫同義なる故か、比較的文字を表象せるもの多く、古銅、石刻等に繪畫もないではないが、文字の古徴も亦豐富であると言ふことが出來る。我邦に於ても、支那文明の渡來に先立ちて、既に金石等の記象ありて、往々特殊の文字と思しきもの、例へば日文(ひふみ)「あないち」と稱するものを刻んだ遺物を今に見るが、所謂金石文は、漢字、佛教等の渡來してより後のことに屬してゐる。しかもそれ等は支那のに比して甚しく貧弱にして、また同日に語る可からざるものである。(「日本の書家及書蹟」の編を參看あれ)

金石學の勃興　さて、斯る金石の文字に對する一般的の興味は夙く太古に在つたが故に斯樣なものを遺したのであるが、それ等遡古的研究については單に文獻上に散見するに止まり、如何なる程度まで行はれたかは、比較的近代に至るまで窮めるを得ない。然るに宋代の學者によりて、一度び金石研究の學が稱へられてより、鬱然たる一科の專門學となり、明を經、淸に至つて益々その甚しきを加へ、その間斯學專門の名人大家頻々として輩出し、文字と言へば先づ三代秦漢、乃至六朝に遡つ

て金石を研究せざる可らざる有様となつた。蓋し金石學は、他の學問藝術と同じく、本源に遡り、基準を定めんとする支那人の特性、殊に宋以降の學者の傾向より然るものにして、固よりその目的は廣義の考古學に屬し、史學、文獻學、土俗學、美術史、殊に建築史、人類學、文明史學等と密接なる關係を有するものであるが、これより以後、書學書道も亦一新紀元を劃したのである。而して、元來の金石學に於てはその原物について一々研究するを正しとするのであるけれども、固より無數の鼎鐘、碑碣を悉く實見するのは到底不可能に屬するばかりでなく、中には既に原物の堙滅して、僅かにその搨本若しくはそれ等に關する記錄類のみを留めるものもある。從つて、今や金石の研究には、實物に依るの外、搨本類を主とし、これに關係の記錄類を參照して、各自の意見を定めることゝなつてゐる。しかもそれ等の搨本の如きは、その搨したる年代の新古に依りて、原物の眞に近きと然らざるの區別を生ずるのは勿論で、等しく「泰山の刻石」(後出)と雖も、宋代に搨したるものと、近く今日に搨したるものとは、字體、筆勢の上に著しき差あるを以て、兩者の鑑賞上の價値の異ること言ふまでもなくその古さは數千金にて索めらるれど、新しきに至つては或は顧るものなきを保せない。況んや、所謂搨拓の帖中には、贋物、僞物の混雜すること夥しきに於てをや。

金石とその款識

此の書は別に金石學について専門的の講説をなす譯ではないけれども、所謂

術語中の必要なものを、二つ三つ語つて置かう。先づ、鐘鼎その他の金器は、これに刻まれ又は鑄現はされた文字を見るのであるが、その名字のことを總稱して欵識と稱へる。蓋し、その字の陰字となつて凹み入つたのはこれを欵といひ、陽字にして凸く起つてゐるのは、これを識といふのである。然し金器の文字は陰字なるを通例とするので、一般にはこれを通じて欵識と稱し、また銘とも呼んでゐる。鼎銘、鐘銘の如きこれである。後世、紙絹に書かれた書畫を通じて、署名その他を欵識若しくは落欵といふ所以はこゝに基いてゐるのである。

碑碣の義及び區別　次に碑碣のことである。碑碣は共に石材であつて、これに文章を彫刻して後世に傳ふべき記念物である。その目的に依つて一樣でなく、或は山岳を封じてその頂上に立てることもあれば名勝を示し、名蹟を表はさんとするもあり、殊にその最も多きは廟に勒するのと、棺前に立つるのとである。而してその方形の立石を碑といひ、圓形の立石を碣といふのであるか、これも一般には併稱して碑碣又は單に碑石と呼んでゐる。尤も唐代には、身分に應じて、碣を建つるを得れども碑を立つることを得ないとの制度があつて、碣とは四尺以內、碑とは四尺以上の高さの石と解釋されてゐたから、大小の區別であらうとの說もあり、又、碣とは自然石に文字を刻したものゝことで、碑とは人工を加へたものに文字を刻したものであると說く人もある。

造象と瓦塼について　次に造象といふ言葉がある。これも碑碣の一種ではあれど、寧ろ佛教の像から出でゝ、佛道兩敎徒に主として行はれた。從つて南北朝から唐まで盛に行はれたのである。これは石に肖像を刻して、その背後、或は左右に文詞を刻したもので、本來は一種の彫刻であれど、相俟つて文字の研究を助けるものである。殊に北派の書體を捜る上に好文字が少くないのである。「始平公造象」「揚大眼造象」の如きはこれである。次に瓦塼文も亦た石文の一種として取扱はれなくてはならぬ。瓦塼とは瓦當及び塼の謂ひにして、瓦當は秦漢の物多く世に傳はり、その隸書の古拙なるところを撫玩すべく、瓦當とは圈瓦の名にして、多く屋根を葺いたものであるけれども、往々墓塚中にも埋めた如く見える。塼とは正方形又は長方形の一種の煉瓦の、時として家に葺き又は地に甃んだのもあるけれども、多くは墓壙中より出でる。たまたま前漢の物もないではないが、多くは後漢より魏晋六朝に至る間のものである。そして、墓塼は一墓に二塼あるを通例とする。これ、二塼相向つて重ね埋め、以て字を刻した瓦面に土沙の浸蝕を免れしめようとの用意であらう。尚ほ日本には、瓦經又は經瓦と稱するものがあつて、これは反を有せざる平面の物、正方形又は長方形の大きさ七八寸なるに、佛典を刻し、主として奈良時代の遺物である。それから、古陶器文及び印笵の石文中に數ふべきものがある。又古玉印も、その一種とせねばならぬし、摩崖なるものも亦、碑碣の一種として取扱はれてゐる

のである。これは山谷所在の巖石の面を摩拭して、これに字を書刻してある。

九、法帖とは何ぞ

法帖、法書の字義　法帖とは、稍語弊があれど、一口に言へば書蹟の版刷である。版畫に對する版書の帖である。併し譯もなく斯う斷定して了ふと、誤解を招くから、少しくその性質に立ち入つて語らう。即ち法帖とは法書の意義にして、法書といふ文字は、北齊の顏氏推が著はした「顏氏家訓」の書證篇中に見えてゐる。その後、唐の張彥遠の「法書要錄」なる書物に於て、始めて書物の名に用ひられた。それより降つて宋元以後に於いては、專ら名畫に對して名人の書跡のことを法書といふに至つた樣である。それ故、法書とは元來眞筆の名であつて、書蹟又は墨跡といふに等しいのであつた。然るに事實上、名人の眞筆には限りがあつて、殊にその絕好なるものに至つては、一あるべきも二あることがむつかしいのであつたから、勢ひ名蹟を所持せんと欲すれば、これを刻して搨本となしたもので我慢しなくてはならなかつた。即ち先づ此の必要より出來たものが、世に所謂法書の帖、即ち墨搨の法帖であつて、一枚の版下繪をば、摺刷して數葉の版畫とするのと、理に於いて異るところはなかつた。斯くて法書と法帖とは同一視せられ來つたのである。然るに法帖の目的は更に擴大せられて、後

來、碑碣の搨本をも併せて法帖と稱するに至つた。法書帖の意義よりすれば、これにても敢て差支のないことであれど、法帖の元來の目的は、臨模又は玩賞を目的として、特に石に上して刻んだる名人の書跡を指したものであつて、金石文の複拓を製するための搨本は、後來の目的であるとしなくてはならぬ。

法帖沿革の概說　法帖については、後章更に詳しく語る時があらうけれども、大體について說明して置かう、抑も法帖といふものは、支那南唐の李後主が、その臣徐鉉に命じて、藏する所の法書を石に勒せしめたのを以て初めとするとある。これ卽ち昇元帖、或は澄心堂(澄清堂)帖と稱するものであると傳へる。けれども、今見るところの昇元帖なるものは、確に後世の僞物にして信を措くに足らないとのことである。故に眞に刻帖の祖と稱すべきものは、宋の太宗皇帝の淳化四年(約一千年前)に、帝が侍書の王著に命じて、御府にある法書十卷を摹刻せしめたもの、卽ち所謂淳化閣帖これである。爾來名筆の刻本續出し、同一の法書にして、搨拓の前後あり、製本の精粗あり、更にこれに眞贋良否相混じ合つて、雜然、紛然、容易に判じ得ないのが、法帖の現在であると言つてもよい。

南搨と北搨と　法帖は、これを刻するには、普通は石を以てし、これに法書を貼して刻することを「石に上す」又は「石に勒す」と稱するのであるが、時に或は木を以て石に代用し、時に或は

王獻之の「洛神賦」に、玉材を用ひることもある。玉刻と稱するのは則ちこれに依つたものである。玉刻十三行本といふものゝあるは、その例である。次に古帖に用ひてある紙墨等は、これに南北の二種がある。北紙といふのはその紋が横になり、その質は鬆粗にして厚く、且つ墨を受け難いものである。また北墨は多く松煙を用ひてあるので、その色青くして淡く、且つ油蠟を和して使はないから、北搨は何となく色が淡く、紋や皺やが宛かも薄雲の青天を過ぎるが如き感があると言はれてゐる。所謂「夾紗作蟬翅搨」即ちこれである。それに對して南紙はその紋條堅に現はれ、墨は油煙に和するに蠟を以てしてあり、且つ烏金搨を造りて、これを水敲きにして碑文を刷るから、色は純黑にして、光澤が浮いて居り、頗る鮮美なる感じを與へる。「烏金搨」と稱するものはこれである。而して北碑南帖と昔から稱せられる如く、概して南方に搨拓したものを比較的優るとされる。

十、法帖の鑑別法

一新搨と古搨の別　次に少しく法帖の鑑識法を語らんに、先づ古帖と新帖との區別を見よう。主として宋代の物なるを以て古帖は今を經ること遠くして、數々裝褫を改められてあるけれども、その墨の濃いものは、堅きこと生漆の如く、手を以てこれを擦れば、少しもその墨色が手に附着して染む

やうなことはない。そしてこれを愛玩すること久しきに亘れば、見れば見るほど紙面の光彩發露して研ぐが如く磨くが如きものあり、古意の自然に内面より顯はれ來るを覺えるのである。故にその表面の有樣は古いやうに見えて、內質的には長く新彩を失はないのである。そして何となく上品な古雅な趣があつて、如何にしても模擬することの出來ない味を含んで居る。且つその質の薄い紙のものは、これを搨ぐるに堅くして裂けることがない、これ多くの糊を受けて居るからである。又その紙の厚いものは、反つて破れ裂けて擧げることが出來ない、これその年所を經ること遠くして、糊が重く、紙が脆いからである。斯く墨色、紙質共に、古搨は新搨、贋搨に比較すれば、略〻識別することを得るが巧妙なる贋搨に至つては容易に知るを得ない。

第二編　日本古代の書家

日本書風の特色

【講述の範圍】

我國の書家及書蹟に關して講述するに方り、最も困難を感ずることは、我國に未だ書に關する完全なる歷史的研究の行はれてゐないこと、（これは支那も同様ではあるが）幷に從來は單に漠然たる書道、入木道、和樣、漢樣等の名稱を以て語られて、論理的に說明することの甚だ不便なることである。殊に、これ等の範圍內で我が國の書家及び書蹟を語るには、その拘束の爲めに不都合を感ずるのである。例へば我朝で現に珍重せられつゝある書家及び書蹟は、入木道――和樣、若くは唐樣――文人に屬する專門、非專門の書家とその作品とに限られず、奈良朝前後の諸家もあれば、各時代の高僧智識もあり、更には武士名將、禪家茶人、俳人作者、或は近世の大官名士より、明治維新の功臣、現代の貴顯縉紳の書蹟といふ風に、極めて廣く觀賞の對像になされつゝあるので、流系傳統に從ひ、若しくは歷史年代に準じてこれを說明することが不可能な場合が多い。そこで甚だ不統一、不秩序の樣ではあるが、大體は歷史的記述に依りながら、必ずしもこれに拘束せられずして、時に雜然と、時

に漠然と語つて行くのは止むを得ない次第である。

それにしても、先づ我が國の書字の概觀と特色とをざつと言つて置かねばならぬ。

支那の書道の影響

我が邦の翰墨道は、他の凡てと同樣に、直接間接に支那の影響を受け來つた。大陸の一波一瀾はやがてわが書字界を動かしたのみならず、文字その物が、全く支那よりの輸入品であり、且つ書法も又數次に支那より教へられたので、支那のそれを離れて考へることを得ないのである。然しながら、歴史あり獨創あり個性ある日本人は、たゞ外國の物をその儘に受け容れて滿足したのではない。假令漢字以前に文字がなかつたとしても、漢字が渡來して間もなく、日本獨特の文字を作製した。片假名平假名これである。殊に平假名は、時に漢字を排して通用文字の大部分を占めてゐたほどに勢力を張り、恰かもこれが國字であるかの觀を呈した。文字に於いて既に然り、その文字を書く爲めに工夫され發達した假名書は、所謂和樣なるものとなつて、本來は漢字の草書より出で、且つ假名と共に漢字の草體を書くに用ひられたのであるが、しかもその筆法、書風、韻致等甚しく支那の書字法と異つた特色を發揮し、和樣の諸體となつて今日に及んでゐる。實に和樣は日本に生れて日本に發達したる獨特の書道であること、後に詳しく說く如くである。

和樣から唐樣へ

然れども、これは恰かも繪畫に於いて倭繪諸派が起つたと同じことで、或る

時期にこそ全盛の勢を示したれ、大陸より押し寄せ來る文化の波は、それの發達のみを以て國民の書の凡ての役をつとめるわけには行かなかつた。足利時代よりぼつ〳〵見られる宋元の影響は禪を中心とした新しい書風を扶植せんとしたが、未だその著しきに及ばずして、明淸の影響を蒙るや、儒者文人の迎合する所となつて、茲に新代の支那的字法が用ひられるに至つた、所謂唐様の書これである。固より和様に屬する傳統も、歌人國學者俳人茶人等の間に存續したのであるが、しかも世人好尙の大勢は唐様に歸してゐたことは爭はれない。而してそれ等の唐様は、或は文衡山以來の傳統をついで、北島雪山、細井廣澤、三井親和等の一派がありとし、或は賴家、市河氏等、一族門流の師傳相承を見るけれども、大體に於いては、和様が繪畫に於ける倭繪と同じやうに系統的であつたに對して、唐様は文人畫と同様に、非系統的な、個人的なもので、固より先人の書に則つたのではあるが、寧ろ思ひ思ひな書を作つたのである。

日本書道の特色

而して我が國書字の特色を概括するに、時代と流派と人物とに依つて各々異るものがあれど、要するに日本人の面目の發露した、何となく爽快な、輕妙な、洒脫な、そしてきびきびしたものが多い。肉を太くしてゆつたりした文字を書くよりも、細勁なる筆線を以て、輕く面白く、書いて行つたところがある。それの優美化されたものは卽ち和様にして、その士人化されたもの

が、唐様と稱したらよからう。而して文字に莊重とか幽遠とかいふ趣は動もすれば缺けてゐる。氣の利いた、輕快な特色が最も著しいと言はなくてはならぬ。支那人の如く落ち着いて、ゆつたりとした、永遠性のある、惡く言へば鈍重な感じのするやうな文字は、日本人には出來なかつた。それと共に、動もすれば、支那人の糟粕を甞めやうとする者を見るのは最も遺憾であるが、併し、日本人には日本人の、儼乎として動かす可からざる個性と創造力とは常にこれを見ることが出來る。尙ほその和様の發達、唐様の新興、並にそれ等の二つの傾向に伴ふ各種の書道と書家との變遷については、つぎに語る所で知られたい。

上代書風と書法

一　支那文字の渡來

我が邦の上代、未だ漢字の渡來せざるに先だつて、何等かの文字又は文字様の符號があつたか否については、漠として知る所がない。時に神代文字と稱するものを傳へるけれども、これ或は後人の假托であるとし、或は異人種の用ひたものであるとし、未だ信ずべき徵證に接しない。何れにせよ、神代より人皇の初期にかけての史實は未だ甚だ茫漠たるものであるから、眞に當時の遺文として徵するに足るものは、今に於いてないとすれば、有無これを論ず可き限りではない。

加ふるに、その系統を引いて發達し來つたと思はれる何等の文字樣式もなくして、邦字は專ら漢字を用ひることに依つて開けたのであるから、本書に於ては全く關與する所でない。故に、先づ漢字の渡來について研究せねばならぬが、是れ亦た正史に見える所にては、應神天皇の御代に、百濟の博士王仁が「論語」と「千字文」とを獻じたるを最も古しとする。勿論、それに先立つ數十年、神功皇后征韓の事があれば、當時に於いて既に若干の文字の用ひられたこと想像に餘りあり、更には神代の昔、夙く日鮮の交通開けて居たことを信ずれば、固より漢字渡來についても考へ得ないでもあるまい。けれども先づ史徴に依つて應神時代以降としても、さて、その博士王仁の獻じた「千字文」であるが、これは智永のそれと同じものと思つてはならぬ。當時未だ、智永の書いた、即ち今日見る如き所謂「千字文」は支那にもなかつたのであるから、思ふにこれ、一千字を以て書いた箴句の如きものではあつたらうが、その體裁、その文句、その字形等については全く分らないのである。而して固よりその頃から書字のことはあつたに相違ない。

書道注目の始め

斯くてのち、書字が一科の學問となり又藝術と認められたのは比較的後代のことで、天武天皇の二年（約一千二百五十年前、支那唐の高宗帝）三月、一切經を川原寺に寫すことがあつて『書生』の語が見えるけれども、未だその人の名をも記してない。ついで持統天皇の五年に書博士百濟末士善信に白

銀を賜ふといふことがあるから、或は太寶令發布前に於いて、書博士や書學生も置いてあつたかも知れない。斯くて文武天皇の大寶令には式部省中に大學寮を置き、書博士二人をして書のことを掌らしめ、又「書學生は書を寫して上中以上の者を以て貢を聽す」との文句も見えてゐる。實に此の頃から、書道について注目せられたものとしてよからう。

美術としての書字

我が國に於いて『書法』といふ言葉が、物の本に見えそめたのもその頃で、即ち續日本記、孝謙天皇天平勝寶八年の條に、「八月乙酉、淡海朝、書法一百卷を崇福寺に施入す」とある。但し、此の書法と云つたものは、今日全く傳はつてゐないのであるから、如何なるものであつたか知ることを得ない。けれども、同帝の同年の、東大寺に施入された獻物帳に據ると、『書法廿卷』と見える條下に、王羲之の摸本が列記してあるのから考へると、こゝに書法といふのも、同じく天智天皇の朝に、御府に藏せられた二王（王羲之とその子王獻之）等の法書、（手本）を崇福寺へ御施入あつたのかも知れない。蓋し、當時『書法』と名づけられたのは、眞行草等各種の書體を學ぶべき法書といふ意味からで、支那に於ける意味と、大差はなかつたであらう。即ち知る、大寶に先つ五十年、天智天皇の朝に於いて、所謂美術としての書字の練習をなされたことを推察し得るのである。

最初の執筆法

けれども、專門的に文字を書く人のあつたことは、漢學若くは佛敎の渡來以

後のことで、殊に推古天皇の頃には、佛敎の興隆著しきものありしだけに、寫經生の多かつたことを想像するに難くない。而して是等の、史書佛經等を謄寫して、外國の文明を移植する實用上の文字を書くに當つては、その巧拙は必ずしも問ふ所でなかつた。美くしい文字を作るといふよりも、文字の整齊して大小なく、墨色にも濃淡なく、且つ書くに速かにして讀むに易きを主眼としたのである。隨つて、寫書生は、銳利にして久しきに堪へる短鋒の筆を用ひ、專ら單鉤枕腕（以下頻出する書法の專門語は「書道實習法」を參看あれ）の法に依つて、指の運動を自在にした文學を書いたのである。そして、勿論それ等の寫書生中には、初めは支那、三韓の人にして、本邦に來つて仕へた者もある可く、又は此の法を邦人に傳へた者が多かつたであらう。

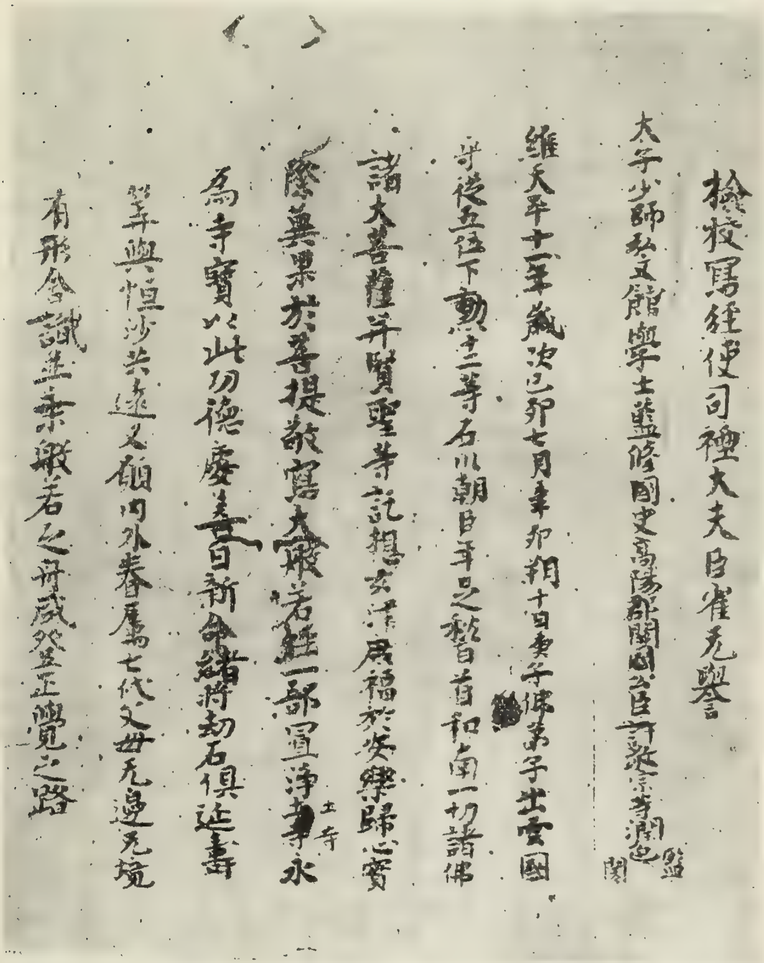
和樣書の濫觴

さて、當時の執筆法は、前述の如く寫書生を初め、主として唐以前の常法なる單鉤法に依つたので、指を以て巧に筆を運用するに精熟し、殊に日本人特有の敏捷巧緻の性質と、せつかちな氣とを以て、その頃から別體の文字を始めつゝあつた。卽ち和樣なるものはこれに基くのである。現今に至るまで、漢樣の書を以ては到底支那人に及ばない、如何に能書の人でも、その風韻十分でないといふ病弊は、正に此の漢字を書する神髓たる遲澁の妙に堪へることが出來ないのに、坐することゝ思はれる。けれどもこの短所こそ同時に我が長所であつて、和樣書を書するには、疾速の

中に少時遲駐の間があり、駐まつては又走ること、恰かも細流の懸崖より下るの趣きを要するのである。實にこの、遲駐奔放の一遲一速と、書寫の中に連續するの妙とは、又支那人の解することの出來ないもので、わが和樣書法の妙處と云はなくてはならぬ。

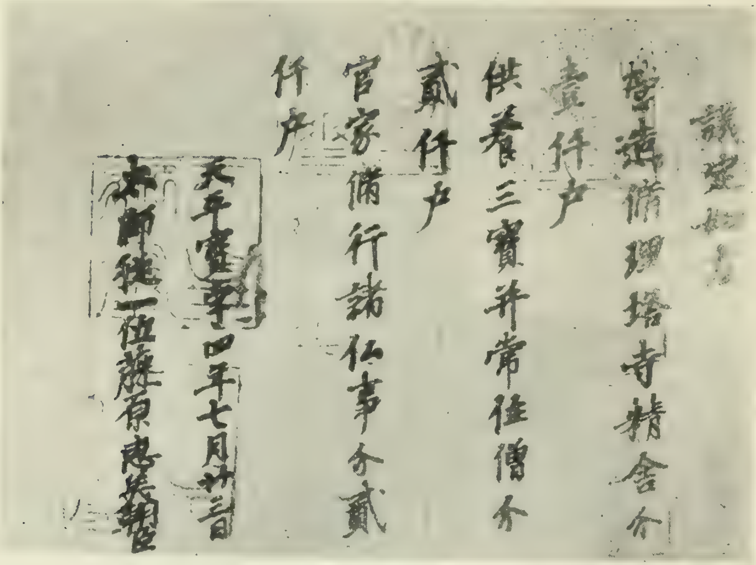
上代の遺墨

奈良當代名書蹟　けれども、奈良朝の頃には、まだ此の單鉤法の慣熟も十分でなく、殊に假名が起らなかつたから、和樣の一體が生じてゐた譯でもなく、凡そ支那相傳の寫書法を墨守するものに過ぎなかつた。然しながら、天智天皇の頃からは、既に美術的の書を作ることも知らるゝに至り、諸體も具備したのみならず、殊に深く二王の美しき書風を學んで、その感化を受けたことは著しかつた。されば、天平の頃に及んでは、聖武天皇、光明皇后、若くは良辨僧正の如き支那にも勝る名筆を見るに至り、今尙ほ我々をしてその遺墨を敬仰せしめてゐる。その他奈良朝の時代には、前述の如く寫經の事が盛に行はれたので、寫經生で能書と言はれる人が少なくはなかつた。例へば上記の良辨僧正を始め、石川年足が、一切經の奧書にその眞蹟を留め、漢土より歸化して唐招提寺を開いた鑑眞和上に、「東征傳」があり、東大寺長官であつた佐伯今毛人、征夷大將軍となつた紀古佐美、或は僧道鏡等の


檢校寫經使司禮大夫白雀充監
太子少師弘文館學士監修國史高陽郡開國公臣許敬宗等潤色　監閱
維天平十一年歲次己卯七月辛卯朔十日庚子佛弟子出雲國
守從五位下勳十二等石川朝臣年足稽首和南一切諸佛
諸大菩薩并賢聖等竊以安樂居福於安樂歸心實
際莫果於菩提敬寫大般若經一部置淨土寺永
爲寺寶以此功德庶冀含日新命緒將劫石俱延壽
筭與恒沙共遠又願內外眷屬七代父母无邊无境
有形含識並乘般若之舟咸登正覺之路

石川年足筆　　小川爲次郎氏藏

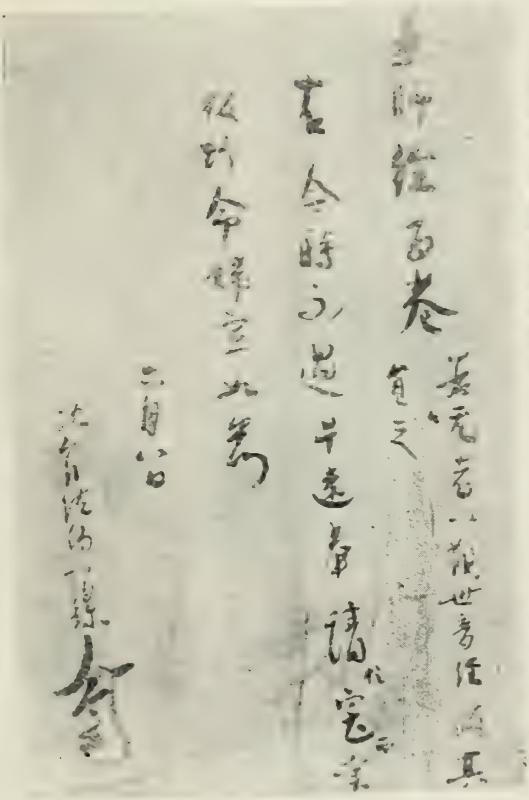
筆蹟は、正倉院御物の文書中に遺つてゐる。且つ弘法大師の入唐以前、書道の師であつたと傳へる魚養の如きも、奈良の藥師寺の一切經がその眞蹟であると否とに拘はらず、善書の一人であつたことは認めねばならぬ。



惠美押勝自署封戸議定勅書　　正倉院御物

「上代遺存の書蹟」 平安朝以後に於ける我が古書蹟は、支那の古書蹟の如く金石文若しくはその拓本に依るよりも、墨蹟その物が比較的遺つてゐる。これは誠に幸福なことゝ言はなくてはならぬ。而してそれ等の中には、正倉院御物、又は法隆寺その他の神社佛閣に見る如き古文書類もあれば、菩薩處胎經を初め、古寫經の傳はる物も頗る多く、且つそれ等の墨寶中、我が國人の手に成つたものあると同時に、支那人の筆も亦多く、時に或は王羲之の如き、絶世の大家の遺墨と稱せられるものすら見るのである。今左に、それ等の中、有名なるものを語つて行かう。殊に古寫經中、「菩薩處胎經」及び「過去現在因果經」の如き、逸す可からざるものである。

「菩薩處胎經」は實に我國最古の寫經にして、またその隨一とすべきものであらう。これは現に京都智恩院の所藏にして、陶作虎なる者の書寫にかゝる。書寫の年月は、支那西魏の大統十六年にして、我が欽明天皇の十一年（約一千三百五十年前）に當つてゐる。されば本經を崇尚する者に言はせると、欽明天皇の十三年に、百濟の聖明王が進獻したものであるとのことであるが、兎に角、現に我が國に在る古經文中の冠たるのみならず、これを支那に求めても、恐らく當時の墨蹟は他に見ることが出來なからう。そして、此の經は古來、大和國金峯山寺の所藏であつたが、文久某の年、知恩院主の佛眼徹定上人の識る所となりて、遂に同院の有に歸したものである。もとは卷物になつてゐたのを、現在は裱裝して帖にしてある。凡そ



佐伯今毛人筆薬師經奉請狀　正倉院御物

五帖、第一帖は天宮、遊步、聖諦、佛樹の四品、第二帖は識住處品で、その中の二張は役人の補寫したものである。第三帖は、隨喜導識、差別、不定、衆生、法輪の六品、第五五樂品は十三行以下、唐代の人の補寫にかゝるものである。さて、この筆者陶忤虎の傳に至つては未詳であれど、此の書の字畫端正にして、楷に隷を帶び、その結體運腕は、王右軍の「內景經」に似てゐる。此の書は日本人の作ではないけれど、吾が國に藏せられる古代遺墨の代表として揭げた次第である。

「過去現在因果經」 次に有名なる古寫經の一は、「過古現在因果經」である。これは四卷ありて、その第一卷は斷裂したけれども、その第二卷は京都市外、上品蓮臺寺に、第三卷は同じく醍醐の三寶院に、第四卷は東京美術學校に收藏せられる。第三卷の末尾に「四月二十七日寫書生從八位」の文字があることに依つて、その邦人の手に成つたものであること、及び天平時代の作であることを知られる。或は以前には「天平七年」の文字があつたとも云はれる。書體は他の天平經と同樣にして、その豐肥なる筆格の整へる點に大に見るべき所がある。經卷の體裁は實に異樣にして、上欄に繪を描き、下欄に經文を寫してある。（「日本畫の智識及鑑定法」參看）而してその經文は、支那南北朝の宋の代に、中天竺の求那跋陀羅の譯したるものにして、釋迦佛の過去世に於ける經歷、及び現在世に於ける修業成道說法の事を說いてある。この經は文字と畫樣との美事なるのみならず、年代の比較的確實なるものがあつて、他の天

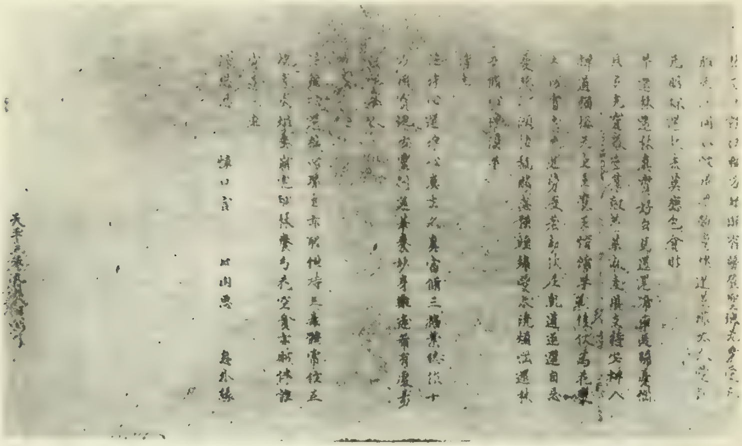
平經に對する鑑定上の標準とせられてゐる。但し、最近益田男爵家から、別な一本の出でたことに依つて、製作の年代等に關する議論を耳にするが、今は一般の說に隨つて、上の如く說いて置く。

四、奈良朝時代の能書家

奈良時代前後の能書家中、玆には聖武天皇、光明皇后を語り、僧良辨を加へて置かう。

聖武天皇の震翰

聖武天皇は御名を首を申し、文武天皇の太子となられ、ついで帝位に即かれた。御母は藤原宮子であつた。甚だ佛を好み、爲めに天平の佛敎美術を開かれたのであるが、退位後自ら太上天皇と稱し、薙髮して僧となり、沙彌勝滿と號せられた。天平勝寶八年五月二日に、御歲五十六で崩ぜられ佐保の御陵に葬り奉つた。天皇の能書については、當時第一の稱があり、既に寫經生の域を脫して、立派な御書をものせられてゐた。故に聖武天皇の震翰なるものは、古筆手鑑の第一頁發端に缺く可らざるものとして、常に貼布せられてゐるのを見る。併し、これについては種々の說があつて、或は支那人の書であらうともいふが、兎に角、震翰は、他の寫經にその類の甚だ少いお骨紙（茶毗紙又は抹香紙ともいふ）を用ゐてある。そしてその同じ書風なる寫經に三種あつて、文字の大小に依つて大聖武、中聖武、小聖武と呼んでゐる。而して大聖武中の一卷の儘になつたものには、帝室御物に一

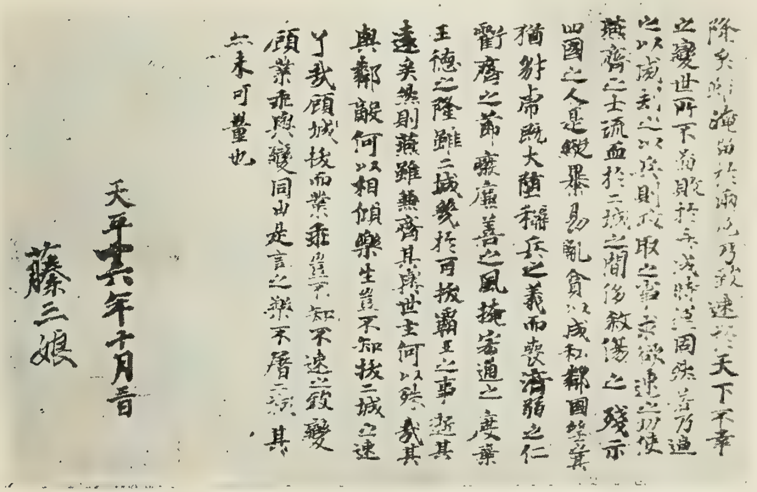


聖武天皇宸筆　　帝室御物

巻、東大寺に數巻、前田侯爵家に二巻、井上侯爵家に二巻ある。尙ほ此の他にも存するであらう。中聖武に類した寫經の中には、奥に唐の寫經生の名のあるものがあり、又その書風の、北魏始平公造像銘等に似たところもあるから、或は邦人の書ではないかも知れない。けれども、三百年の昔、前田侯の先代より、宸翰として桂宮智仁親王に献ぜられたこともある位だから、暫く古傳に從つて尊重して置かなくてはなるまい。けれども、天皇の宸翰として眞に疑ふ可からざるものは、正倉院の御物に「勅書」があつて、これのみは否むことが出來ないと共に、それに依つて他を比較すれば、おのづから眞僞の程も判ぜられるのである。寫眞に示したものこれであるから、よく見て置かれたい。

光明皇后の御筆

光明皇后は聖武天皇の后であつて、藤原不比等の二女にあたり、天皇がまだ太子で居られた

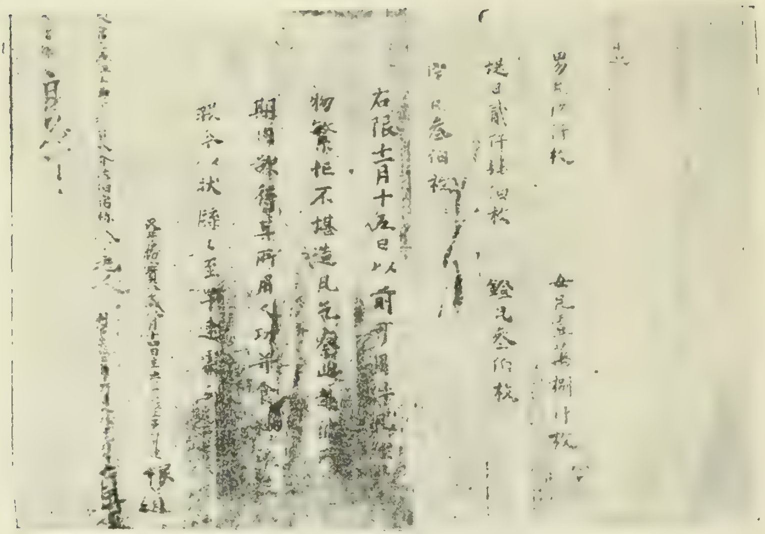

隆矣而猶淹留於兩邑乃致速於天下不幸
之變世所不圖敗於垂成時運固然若乃逼
之以威劫之以兵則攻取之事求欲速之功使
燕齊之士流血於二城之間侈殺傷之殘示
四國之人是縱暴易亂貪以成私鄰國望之其
猶犲虎既大墮稱兵之義而喪濟弱之仁
虧齊士之節廢廣善之風掩宏通之度棄
王德之隆雖二城幾於可拔霸王之事逝其
遠矣然則燕雖兼齊其與世主何以殊哉其
與鄰敵何以相傾樂生豈不知拔二城之速
了哉顧城拔而業乖豈不知不速之致變
顧業乖與變同由是言之樂生不屠二城其
亦未可量也

天平十六年十月三日

藤三娘

光明皇后御筆樂毅論　　帝室御物

時、御年十六歳にして妃となられ、天平元年を以て皇后に冊立あらせられた。天皇と同じく佛を信ぜられること厚く、各國に國分等を建られ、又慈悲の御心を以て悲田施藥の兩院を設けたりなどもされた。天平寶字二年尊號を上つて天平應眞皇太后と稱し、同四年六月、寶算六十を以て崩ぜられた。大和國、添上郡佐保山に葬り奉つた。光明皇后が能書であらせられたことも、今更申すまでもないが、現に御筆「樂毅論」は正倉院の御物となつてゐて、御書風を窺ふことが出來る。これに依れば、皇后が王羲之を習はれたことが明かに想像される。「樂毅論」はもと王羲之の細楷として代表的なもので、（支那之部、その項參照）原本は今、和漢共に傳はつてゐないけれども、轉摸した殘骸が僅に古法帖中に存するもののあるのと、此の皇后の御筆蹟とを比較して見



良辨僧正自署造東大寺司牒　　正倉院御物

ると、その一行の字數が每行皆同じきのみならず、その字劃までも全く同じいことが知れる。而してこれに依つて、皇后が如何に王羲之を學ばれたるかを知ると同時に、當時王羲之の書風の重んぜられたこと、幷に、我朝に多くの眞蹟が傳へられ、且つ御物として正倉院へ收藏せられたこと、並にその一葉が現に帝室に殘存してゐることを知り得るのである。

尙ほ皇后には「杜家立成」の御眞蹟もあつて、筆力の雄勁な、御婦人としては珍らしい御氣象が筆端に現はれてゐるのを見る。他に、經切と稱するものが數種あり、例へば紺紙金字又は香紙墨字、金罫に小鳥、小草の泥繪あるもの、香紙金砂子地、墨罫あるもの、又は淺草色紙、白色紙等の經切にして、御筆とするけれども、所謂古筆家の鑑定にして、眞僞の

程を知らない。

良辨僧正の筆蹟

良辨僧正は、奈良の時代の高僧であつた。本姓は百濟といふ所より見れば、歸化人の裔であらう。近江志賀の人（或は相州の人ともいふ）にして、華嚴宗の開祖である。傳說に依れば、二歲の時に母に携へられて桑林に入ると、忽ち大鷲が來つて良辨を捉へ去り、これを奈良春日の祠前に放つたので、義淵僧正これを拾ひ取つて養育した。長ずるに及んで法相の宗義を敎はり、のち慈訓僧正に從つて華嚴の奧義を得た。聖武天皇その德風を聞かれ、天平五年特に勅して羂索院を賜ひ、改めて金鐘寺と號した。爾來華嚴道場成り、ついで天皇が此の地に東大寺を造營し給ふや、良辨その別當に補して僧正の位を得、寶龜四年十一月十六日、八十五で死んだ。然して彼の書の今に傳はるもの、京都智恩院藏の「顯無邊佛土功德經」及び正倉院の御物にして、造東大寺司牒の署名の如きを見る。彼も未だ寫經生の書風を脫しない所もあれど、更に一段進步の跡が見え筆力堅實にして些の澁滯なく、天平時代能書の代表たるに耻ぢないのである。

五、上代の金石文

日本の金石

日本は支那に比して、金石文の遺物は非常に少く、殆ど數へるにも足りない

のみならず、それ等の遺物も必ずしも巧手の書くところにあらずして、拓して法書とするに足りないものもある。却つて、支那に傳はらずして我にのみ傳はれる、一千年以上を經過せる支那及び日本の肉筆の、以て尊重に價するものが多いのである。我邦金石文の起因は、隋唐交通の影響に基き、樹石及び造像の事は、共にその以後に起つたものであること言ふ迄もない。その最も古いものについては、「現報靈異記」に、雄略天皇の朝、小子部栖輕が、塚上に樹碑のあつたことを記してゐる。併しこれは確に證し難いのであれど、佛教あり、葬祀の儀禮ある以上、またその事ありしを想はせぬでもない。現在の遺物としては推古天皇の朝の物を最も古しとする。即ちその主なるものは、大和國法隆寺にある「藥師佛造像記」「釋迦佛造像記」「觀世音菩薩造像記」「四天王造像記」の如きこれで、碑文ではないが、以て當時の金石文を知る可きである。又同じ御宇には「伊豫國道後湯岡温泉碑」なるものが建てられたこと確實であれど、原石早く失せて、釋日本記にその文を見るに過ぎない。それから、もと元興寺にあつた「丈六光背銘」同寺の「塔露盤銘」は、共に原品を亡失して、同寺緣起に文のみを存してゐる。稍下つて「中臣鎌足朝臣墓碑」も亦、原石も文字も傳へてゐない。更に後世に至つて好事者流が、古碑の贋造をなして當時の物と傳へるけれども、信ずる譯に行かないものが多い。例へば彼の有名な多賀城碑の如きこれである。今奈良朝から平安朝の初期にかけて、世に知られたる我が邦有名

のものを表示すれば、概ね次の如くである。

著名なる金石文

笠臣布奈太利古等造象記(?)		崇峻天皇四年
王延孫造象記(?)		推古天皇二年
伊豫道後温泉碑	伊豫道後	推古天皇四年(今亡)
觀音寺造觀音象記(?)		推古天皇六年
高屋大夫造象記(?)		推古天皇十四年
藥師光背銘造象記	大和法隆寺	推古十五年
釋迦光背銘造象記	同	推古三十一年
四天王造象記	同	推古時代
宇治橋斷碑	山城	大化二年
船首王後墓版	河内	天智天皇七年
小野朝臣毛人墓版	山城	天武天皇六年(今亡)
山名村碑	上野	天武天皇十年

鰐淵寺造觀音像記	近江	持統天皇二年
采女氏塋域碑	河内	同　（今亡）
僧德聰等造象記	同	持統天皇八年
藥師寺塔擦銘	大和	天武天皇元年頃
妙心寺鐘銘	山城	文武天皇二年
那須直韋提碑	下野	文武天皇四年
鑄諸國印		慶雲元年
文忌寸禰麻呂墓版	大和	慶雲四年
威奈眞人大村墓志	同	慶雲四年
伊福吉部臣德足比賣墓志	因幡	和銅二年
辨官符上野國碑	上野	和銅四年
粟原寺塔露盤銘	大和	和銅八年
元明天皇陵碑	同	養老五年（今亡）
高田里結識碑	同	神龜三年

興福寺鐘銘	同	神龜四年
美努岡連萬墓版	同	天平二年
楊貴氏墓志	同	天年十一年(今亡)
東大寺銅燈臺經文	同	天平年中
竹野王石浮屠銘	同	天平勝寶三年
佛足跡記	同	天平勝寶五年
恭佛足跡歌碑	同	同
聖武皇帝銅版詔書	同	天平勝寶五年
正倉院賓鐸銘	同	天平勝寶九年
石川朝臣年足墓版	攝津	天平寶守六年
正倉院銀壺銘	大和	天平神護三年
劍御子神社鐘銘	越前	神護景雲四年
高屋連枚人墓志	河內	寶龜七年
涅槃經碑	同	寶龜七年

紀吉繼墓志	同	延曆三年
下野日光山碑	下野	弘仁五年
南圓堂銅燈臺銘	大和	弘仁七年
同益田池碑	同	弘仁十四年(今亡)
大雲寺鐘銘	山城	天安二年
神護寺鐘銘	同	貞觀十七年
榮山寺鐘銘	同	延喜十七年

六、入木道と其傳流

書道發達の新紀元

我が邦の書道は既に上述の如く、奈良朝に於いて發達の兆を見たのであるが、しかも奈良朝の時代は未だ準備の時期を出でずして、獨特の書風の形成などは見るに及ばなかつた。然るについで都が奈良から京都の地に移された頃より、その文化の程度の引き上がるにつれて、實用上の關係と趣味性の要求とからして、書字のことも亦頗る注目せらるるものがあり、君臣を擧げて、これが研究と習熟とに力めたので、平安朝の初期既に頗る見るべきものがあつた。殊に支那に於

いては今や盛唐の世にして、百華燦然として咲き亂れた中にも、書道は殊の外勃興且つ圓熟し、正に文字の法式の大成を見つゝあつた。されば、奈良朝の末より此の朝の初めにかけて、支那との往復の頻繁を加へるに從つて、東晋の様式とは異れる、更に特色ある書蹟と書法とが、續々として輸入せられるものがあり、玆に我が國の書道も一革新の時代に遭遇したのである。實に書道史上、第一の新時期を劃するのは、此の時であつた。

吉備眞備等の功

その革新に努力した最も著しき人は、吉備眞備と僧空海とであつた。即ち、吉備眞備は、若年にして唐に渡り、諸學を研究して歸つた學者にして政治家、且つ奈良朝の中頃から平安朝の始めにかけての長老であつたが、文字の上の功績は、片假名を以て彼の發明であるとさへ傳へるのでも知れる、而して彼もまた能書の人であつたから、他の渡唐諸博士、諸高僧等と共に、唐風の書法を傳へるに功があつた。斯くして桓武天皇の頃より、非常なる進運を見たのであるが、更に、嵯峨天皇の深く筆道を好ませられた際にあたり、傳教大師、弘法大師その他の顯密の僧侶、並に橘逸勢、小野篁の如きが、その唐に留學して熟達した筆道を以て我が邦に新風を開いたから、上下相待つて、支那に於ける東晋若くは李唐の頃に劣らざるの盛運を見たのである。中にも弘法大師は、大小變化、自由自在にして、神飛び魂動くの勢を現はし、つひに大師流の書法は我が入木道の金科玉條と

なり、今尚ほ尊重せられるのである。故に當代の中心人物として弘法大師を語らなくてはならぬが、それに先立つて入木道とは何ぞやといふことを一通り述べて置かう。

入木道とは何ぞや　抑も入木道といふ言葉は、我が朝に於いて始めて用ひられたものではなくて、その起源は晉の王羲之が、成帝の時に北郊の祀の祝版を書いたことがあつた所、後に至つてこれを削つて見るに、墨痕の深さ七分までもしみ込んでゐたので、その故事に基いて唐の孫過程や白居易（樂天）や李嶠等も亦、書のことを入木と稱へたので、それが我國にも傳はつて、書道即ち入木道と呼ばれたといふことである。然れども普通に我が邦で呼びなされる入木道とは、更にその範圍を狹めた意味となつて、所謂大師流の書法に發してその傳統を襲ふ所の書法を以て入木道と稱することゝなつた。故に唐様の近代的書法に對しては入木道の語は用ひないのである。隨つてこれを漠然として言へば、入木道の二聖と呼ばれる弘法大師と嵯峨天皇、若しくはこれに橘逸勢を加へて三筆と稱する頃より、藤原時代の諸家を經て、鎌倉時代より足利時代に至る歌人、若くは公卿、それ等に接近せる人人に傳へ、以て江戸時代の堂上方、國學者、歌人等に及び、且つそれより分派したる諸家に弘がつてゐると言はねばならぬが、さてこれに對して、古來傳説的に行はれた様な流派系統を立てることになると、頗る議すべきことが多いやうである。

入木道の傳統

然れども、茲には史論家の態度を離れて專ら古來の說に基づき、大體の經過を說明すれば、弘法大師は先づ唐朝の韓方明なる者より字法を受けて歸つたといふ。韓方明の如何なる人かは明かに傳はらないが、唐代の能書家徐浩の子徐璹について學んだ人であるとされる。それは兎に角、筆道家に依れば、空海の書法は嵯峨天皇に傳へられ、天皇より更に小野篁にお授けになつたといふ。而して紀夏井を經て紀貫之に及んでゐるとされる。然れども、弘法大師、嵯峨天皇の二聖、若くは橘逸勢を加へて入木道の三蹟と稱する、平安初期の能書家について、貫之と共に最も能書の譽れの高いのは小野道風である。實に小野道風は、延喜天曆の頃草隷を以て名があり、その雄麗なる書體を以て筆意の絕妙に入り、一代の師表たりしのみならず、彼に於いて唐風の直輸入的筆法は漸く變じて和樣の先驅をなした、故に和漢兩樣の分岐點に立つ者は彼であると稱してもよい。勿論、弘法大師の書風からして既に全然の直輸入ではなくて、和風の先蹤を開いてゐるのであるが、道風は漢文、漢詩を書くにも和樣的の書形が加はつてゐる。更に貫之に至つては、道風と時を同じうして『男もすといふ日記といふもの』を書くに、和文を和字にてし、全く草假字體に立つて能書の名を一世に高くしたものである。彼こそは、和樣の先達であり、假名書きの大成者であつて、こゝに始めて日本風の草假字一體が確立したと稱してもよい。

草假字の發達

さて、小野道風の書風は、その子の舉時がこれを傳へ、參議藤原佐理がこれを舉時から受けた。佐理卿の書風は清婉にして豊潤な趣を含み、貫之についで本朝様の書風をなしたものである。その遺跡を佐跡といひ、道風の野跡、行成の權跡と共に、入木道の三跡と稱せられるものである。權大納言藤原行成も亦野跡を移してこれに我が様を加へ、こゝに世尊寺の一流を始めた人であつて、我邦書道の特色たる和様の傳統はこゝに起るのである。故に又本朝入木道の大祖となしてこれを家様とも稱するが、家様とは本家の流の義であるとのことである。勿論それ等の外に、弘法大師と共に道風の推稱したる藤原敏行の如き、又道風の書法を受けられたと傳へる前中書王兼明親王の如きがあり、源重之、村上天皇の如きも手をよく書かれたとのことである。殊に菅原道眞は、道風と殆ど同じ頃世に在つて、今に書の神を以て目せられる。しかし道眞の書風は今に傳はらないが、和様よりも寧ろ支那風に近かつたものと察せられる。兎に角斯ういふ次第で、平安朝の初期は文字の勃興と、假字の發達に伴つて、和風の字様が頗る隆盛を極めたのである。降つて藤原行成と同時代には、藤原公任が彼にをさ〳〵劣らざる筆技を以て世評に上り、御堂關白道長も亦、同じ貴族的の妙技を以てその名を支那にまで響かした。道長の孫の御子左忠家、堀川左大臣俊房、行成の孫にして世尊寺の家流をつぐ藤原伊房もまた、それより若干の後に名を知られた能書家であるが、此等は皆一概に三跡

を學んで優麗婉雅なる書風をことゝし、他の女流、例へば紫式部、大貳三位、赤染衛門等と共に假名書きを以て時代を飾つたものである。此の風、關白藤原忠通に至つて更に圓熟し、世尊寺流の外に法性寺流なる一體を立てるに至つた。これ藤原時代も末期の、將に源平の事の起らんとする頃のことでこれより更に時代の一變遷を見、入木道の相承にも別趣を出したから、章を改めて語ることゝし、上記の諸家の中、特に名ある人々を一わたり見て置かう。

七、弘法大師と其の書蹟

弘法大師と其學書

弘法大師、俗姓は佐伯直、讃岐國多度郡の人にして、佐伯直田公の子である。幼名を眞名または貴物といひ、法名は、はじめ敎海、また如空、また無空、のち空海と改め、海字を楽に書く。みづから遍照金剛と號せられた。延暦十二年、廿歳にして出家し、同じき二十三年入唐して眞言の奥旨を窮め、大同元年に歸朝して密宗を弘められたことは、世人の普ねく知る所である。その書法は彼土に於いて、韓方明より受けられた。大師の能書の譽れとして語られる話がある。その滯留中のことであつた。王宮に壁字の、王羲之の手にかゝるものが、一間破損したけれども、その人のないために晋代より唐朝まで闕けた儘で居た。然るに唐の天子、空海の能書なる由を聞かれて、命

じてこれを補はしめられたと云ふのである。また彼土にて、左右の手足、ならびに口に筆を挾みて五行の字を一度に書いて、五筆和尚の名を得られたとも傳へるが、是等は固より俗傳にして、信ずる譯には行かないのである。大師の筆道の師と稱する韓方明すら、如何なる人であるか彼の土の史書に見えない位で、在唐の傳説も依然として傳説である。屋代弘賢に依れば、五筆云々は、韓方明が「授筆要説」に、五種の把筆といふことがあるので、その法を得られたとの意ではないかとある。

大師の能書逸話

しかし何れにせよ、大師は不世出の能筆家であつたことは、歸朝後、その方面で大に尊重されたのでも解る。本朝に於ては、大内南面三門の額をはじめ、諸社寺の額を書かれたもの數あるに遑なしとし、殊に應天門の額を門上に掲げて後、「應」字の上の圓點を下より投げ加へられたとも傳へ、或はまた嵯峨天皇、つねに大師と御手跡を爭はせられたが、或る時御手本を數多く取り出して、大師に見せられた中に、特に勝れた一巻があつたのを、『これは唐人の手跡である。其の名を知らないが、如何にも斯う上手なのは珍らしい重寶である』と、頻りに御自慢になつた。大師はこれを承はつてつく／＼拜見してゐたが、やがて笑ひながら『それは空海が彼の土で書いたものでムります』と奏した。けれども天皇は更に御信用にならなかつたから、大師は仍で軸を離して合せ目を御覽に入れると、『某年某月於二青龍寺一書 之沙門空海』とあつたので、天皇もはじめて御驚きになり、『ま

ことに、朕には勝つた人である』と感嘆せられ、その後は御手跡の爭ひを遊ばされなかつたとも云ふ。斯んなことも然し、餘りに奇蹟的な話であるから、傳說として置けばよい。又所謂飛白書なるものも我が邦にては大師が創められたものであるとされる。兎に角、その書道に貢献せられたことの著しかつたことは今に忘るべからずである。承和二年三月廿一日、紀州金剛峰寺に於いて、年六十二にて入寂せられた。延喜二十一年十月廿七日、弘法大師の諡號を賜はつたのである。その他、大師が、大宗教家として、又大學者としての如何なる人物であつたかは、今更に語るを要せないことである。

大師の眞蹟―座右銘―

さて、今に遺つてゐる、所謂大師の眞蹟であるが、古書に見える所では非常に夥しいもので、殆ど數へ切れない程である。けれども、今日の鑑者が以て眞蹟とする物は、恐らく十點を出でないであらう。しかもそれすら、時に甲是乙非ありて、一定せないのであるが、今普通に信ぜられるものゝみについて述べて見ると、先づ高野山寶龜院「座右銘」といふのがある。これは草書にして、後漢の崔子玉の「座右銘」一百字を、横長く、二字或は三字、數十行に書きつらねたものである。その字形四五寸ばかりである所より、古筆家はこれを大字切と稱してゐる。もと、寶龜院の重寶として有名なものであつたが、しかしこれは全部傳はつてゐるわけではない。今は『無ㇾ道㆓人之短㆒、無ㇾ說㆓己之長㆒』の十字のみを殘し、その他は何時しか脫け出でゝ高野山にはない。一二字宛の切

ものとなつて世間に散逸してゐるものが幾つかある。しかもその中の十六字は、狩野家に代々傳へて秘藏としてゐたので、却つて寶龜院よりも字數を多く傳へる。蓋し、昔狩野探幽が、高野山に登つて金堂の壁畫を描いた時の事、寶龜院の春深法師について大師樣の筆道を學び、併せて悉曇字法をも受けたのであるが、やがて壁畫も全く見事に出來たので、一山の僧徒の喜び一方ならず、潤筆の料として黃金貮千兩を贈つた所、探幽はこれを固く辭して、その代りとして彼の「座右銘」十六字を乞ひ得て歸り、自ら野山の春秋の景色を描いて兩端に附け、且つ春深法師の跋文をも加へて一卷となし、代々秘藏することゝなつたのである。然るにその後、故ありて江戶の商估倉田屋の手に落ち、轉じて今やこれは益田孝男の秘襲する所となつてゐる。されば、大師隨一の書蹟はこれを以てせねばならぬ。

大師の眞蹟―風信帳

「風信帖」は弘法大師の草書筆蹟の尤なるものとし、古來最も喧しい。そして、これは近代以來拓本として世に傳はつてゐる。その原本は京都東寺（教王護國寺）の什物にして、もと五葉あつたが、今はその三葉を殘してゐる。字形一寸四方位の行草にして、古來弘法大師の筆蹟を學ばんとする者の、必ず愛玩した名帖の一である。隨つて刻帖として世に行はれるものも多いけれども、それ等は摸も刻も刷も三者ともに拙劣にして、眞を傳ふるに足りないのである。その他東寺には、「請來目錄」とて、大師が支那から請來された品物の目錄を自書されたものが一卷、同じく遺告文が一卷

ありて、皆國寶となされてゐる。その價値も亦「風信帖」に劣らざるものである。次に、「灌頂人名錄」も大師の草書にして、古來有名なものである。これは單に灌頂に關する人名の記錄に過ぎずして、當時に在つては不用意の間に成つたものであれど、大師の眞跡の確實なるものとして、今最も珍重せられてゐる。殊にその筆力、結構共に優秀にして、他の特に意を用ひた如く見えるものに比して格段の出來である。この原本は、京都高雄山神護寺の什物にして、その首めに後宇多法皇の宸翰を附してある。これまた法帖として用ひられるが、今は「風信帖」と同じく、原形の儘なる寫眞版が出來てゐる。神護寺も東寺と同じく大師に緣故の深かつた寺であるから、此の外にも繪畫、彫刻等に大師の所作と傳へるものがあり、書蹟には、「二荒山碑文」一卷が大師の書かれたといふことである。

大師の眞蹟（其三）　尙ほ仁和寺にある「冊子帖三十」なるものも大師の有名なる古書蹟にして、平安朝初期の筆跡を辿るに最も重要とされてゐる。蓋しこれは弘法大師が唐より將來された眞言法文の原書である。此の書はもと東寺に在つたものであるが、今は仁和寺に傳へられてゐる。初め空海の入唐されるや、彼の地にて眞言の儀禮及び法文等を自から書寫され、又橘逸勢等にも寫さしめて持ち歸られ、これを東寺の經藏に納め、爾來弟子實惠、眞濟等相ついで受傳したものである。のち僧眞然これを携へて高野山に入り、更に延喜十六年、僧無空これを持して山を去り伊賀に隱れ、その十八年

に圓提寺に寂した。そこで宇多法皇に奏して再び東寺に入つたのである。それより寺の長者をして永代守護せしめ、且つこれを納むべき蒔繪の經箱一合を天皇より賜はつた。然るにその後、文治二年に仁和寺に借覽したのを、その儘同寺に傳へたのである。實に弘法大師の教旨の眞蹟として傳はれるものこれを最とするのみならず、中には逸勢その他の筆跡も見えて、最も貴ぶべきものである。近來、その一部を印刷して世に公にされてゐるけれども、未だついて十分に研究するには便でない。何しろ三十冊の多くであるから、完き複本を造ることは至難であらう。

高野と醍醐の遺物

何と云つても、弘法大師に最も關係の深い寺は、高野の諸寺と山城東寺とであるから、こゝに大師の眞蹟の最も多いのは否まれない。即ち高野の金剛峰寺には「即身義」と「聾瞽指歸」とが各一卷あり、龍光院には「法華經」が七卷（一卷を缺ぐ）あり、「最勝王經」が二卷あり、又東寺には前揭の外、例の七祖の讃といふ名蹟がある。又大師の消息文といふものも有名なのである。それについては醍醐寺で、大日經開題一卷の外、傳空海書といふものが幾つかある。その他益田男をはじめ、諸家に傳はる書蹟も少なからず、例へば神光院の「金剛般若經開題」、山高五郎氏藏の「新撰類林抄」、嘗て赤星氏の入札に出された經疎の如き、皆纏まつたもので、且つその書風も優秀である。しかしながら、これ等の物を比較考査して見ると、筆跡が必ずしも一樣ではない。固より大師

の如き名筆家が、多種多様なる書體に達せられたのは否まれないが、それにしても、千有餘年前の名蹟が斯んなに多く傳存するか何うか、大に識者の研究を待たなくてはなるまいが、これは敢て大師の筆蹟のみに止まることではないから、こゝにはそれに關してあげつろはない。

大師の諸切類

その他、往々にして古筆手鑑等に散見する大師の眞蹟といふものも少なくはない。例へば、次の如きがこれであつて、

東寺切（又ころころ切）	巻物、草書、（香紙墨卦）その他紙は不定とされる）、
高野切	杉原紙
心經（鼠心經）	香紙、草書にして、空海の名がある。又は香紙、行書にして、大字。名がない。
南院切	草書。中字。詩を書いてある。
卷物切	中字、行書。詩、一行九字ばかりで、朱を以て別字の譯字を添へる。
經切	香紙、墨卦、華嚴經等色々ある。

而してこれ等は、昔關白秀次、石田三成等が勢にまかせて、名刹に秘襲する大師の書を强請して、一行二行宛切り取つて、手鑑に帖附したりなどして、世に散つたといふから、中には眞蹟がないとは限らないが、由來手鑑等は信を措きがたく、その眞蹟なりやは保し難い。何れにせよ、弘法大師は我が

書道の親とも云ふべく、根幹とも稱すべきものであるから、書道及び書蹟に特別の興味を有するものは必ずや、遡つて大師に至らなくてはならぬ。

七、平安朝初期の能書家

「橘逸勢と其書蹟」　書家として、平安朝の初期を飾るものは橘逸勢である。右中辨從四位下入居の子にして、天性放誕、細節にかゝはらぬ人であつたと云はれるが、延暦の末、遣唐使に從つて空海と共に支那に留學した。渡唐後はやくも文學、書道に名譽を得て、唐人より橘秀才と呼ばれたとのことである。書は彼土に於いて柳宗元より筆法を受け、殊に隷法に妙であつたから、唐の宮門の額をも書いたといふ。歸朝の後は病の故を以て閑地に靜居し、仕へなかつたが、のち但馬權守となり、承和九年、東宮帶刀伴健岑の事に坐して伊豆に流され、九月十二日遠江國板築の驛で歿した。のち嘉祥三年、その罪を赦され、正五位下を贈られたのである。橘逸勢の書は、その最も確實なものとして奈良興福寺の南圓堂の銅燈籠の銘があるけれど、それは銅鑄であつて、今は明かにその筆法を伺ふことが出來ない。その他には經文又は文選の零本等もあれど、容易にこれを信じ難いのである。只、帝室御物の「伊都内親王願文」に至りては、古來疑を容れざる眞蹟である。その本文は逸勢の筆にて、奧

の起請文二十九字と、御諱「伊都」の二字、合せて三十一字は、内親王の御自筆らしい。蓋しこれは内親王が、其の御生母從五位下藤原平子の御遺言によりて、天長十年に山階寺の東院西堂に香燈讀經料を御寄進あつた時の願文である。もと奈良水谷川男爵の家に藏せられたのを、維新後帝室に献納せられて、御物となつたのである。因に此の願文中に、朱をもつて捺された内親王の御手形が四ヶ所ある。千有餘年前の内親王の御手形を目のあたり見るのは尊ぶべきことであると共に、その御手形が、直徑五寸にも滿たないので、如何に内親王が、小柄で在したかを知るのである。(時に三四十の間の御年齡であつた。)而して此の願文を見ると、逸勢が如何に達筆であつて、殊に草書に練熟してゐたかを知ることが出來る。圓滿流暢無礙にして、且つ奇巧なるあたり、書道の妙趣を悟つたものと言はなくてはならぬ。

嵯峨天皇と其震翰

嵯峨天皇は諱を神野と申し奉り、桓武天皇の第二皇子にして、延暦五年の御隆誕であり、大同四年の御卽位で、弘仁十四年位を淳和天皇に讓られた。幼より讀書を好まれ、長ぜられるに及んで博く經史に通ぜられ、殊に書に巧みにあらせられた。草隷に至つては最も妙にして空海と併稱して二聖と稱するも宜なりと言はねばならぬ。承和九年七月十五日、寶壽五十七で崩御せられた。嘗て御父桓武天皇の爲めに、金字法華經を寫されたが、一點一劃もその體を失はれず、勢云は

ん方なく、見る人これを賞美して鍾繇、逸少も及び難いと云つた。それはもと青蓮院宮の御所藏であつたが、今は御物とせられるといふ。又傳教大師の寂せられるや、御製の宸翰を賜はつてこれを哭せられたと傳へ、それは今も青蓮院に藏せられる。草書にして、極めて輕妙、且つ氣品に富んだ名蹟である。その寫しであると稱して、世間に草書の斷片を傳へる。その外、天皇の宸翰と傳へられるものには、帝室御物に「李嶠詩集」がある。これは豫樂院近衞家凞公が、自ら選擇せられた手鑑の中に、本集の一片七行を裁つて編入されたのに見て、もと同家に在つてのち帝室に納められたものであることが知られる。御筆力の非凡なのは勿論で、他に類のないものである。用紙は唐代の白麻紙で、御物藤三娘（光明皇后）「樂毅論」、同王羲之「尺牘」、弘法大師「座右銘」等の用紙と同一である。

藤原敏之と其書蹟

藤原敏行は、按察使藤原富士麻呂の子にして、貞觀十八年大極殿の燒けたのち、その額を書いたことがある。また元慶の頃、渤海へ遣はされる勅書を書いたが、彼國の人、羲之の筆にまさると云つて褒めたとのことである。又延喜大甞會の御屛風の歌も、彼が書いたと云ひ傳へる。此の人、和歌の道にも秀でたので、昌泰元年十一月、はじめて賀茂の臨時の祭をなされる時に、『千早振る加茂の社の姫小松、よろづ代經とも色はかはらじ』と詠んだもの、「古今集」にある。延喜七年に、村上天皇が道風に向つて、『我朝の上手は誰人であるか』と尋ねられた折、道風は『それは空

海と敏行でございませう』とお答へしたとのことである。けれども彼の眞跡はまた極めて少なく、高尾神護寺の鐘の銘の外は傳はつてゐないと云つてよろしい。此の銘の字は徐浩の風があるとの評である。因に此の鐘は、菅原是善が銘を作り、橘廣相が序を成し、而して敏行が筆になるので、世にこれを三絶の鐘と稱してゐるのである。敏行は從四位上左近衞中將となり、延喜七年に死んでゐる。

菅原道眞と書道　菅原道眞は、參議從三位是善の三男にして世に菅家と稱し、また尊稱して聖廟、天滿宮、大富天神など、言ひ來つたこと、人の知る通りである。この人、累代の鴻儒であつたから、嘗て勅を奉じて「三代實錄」「類聚國史」などを撰んだが、殊に詩文の才は拔群にして、また政治的の才能にも長じてゐられたので、文章生より身を起して右大臣從二位にまで昇進した。斯くて寛平昌泰の頃には、天下の政柄を掌握してゐたのに、左大臣藤原時平の讒に依りて、昌泰四年正月、太宰權帥に貶せられて筑前に流された。門を閉ぢて出でず、文墨に託して自ら懷ひをやりつゝ、居ること二年に足らず、延喜三年の二月廿五日、年五十九で薨じられた。筑前安樂寺に葬むられ、のち九十年を經て一條天皇の正曆四年、太政大臣を贈られたが、やがて北野に莊嚴なる御社を造りて神と祭られたのである。道眞の書に巧みであつたことは申す迄もなく、その嘗て龍門寺方丈の室に仙房といふ所のあつたのへ、その兩扉に都良香と共に揮毫した文字をば、時の人呼んで『如二白玉之盈一レ匣、二似紅

錦之在レ機』と稱したのでも、その生前から名高かつたのが知られる。尊圓流を開いて有名な、大乘院宮尊圓法親王も、『聖武天皇、良辨僧正、光明皇后、中將姫、弘法大師、嵯峨天皇、橘逸勢、敏行等まで大旨一體なり、されども筆勢は次第にたふれたるやうなり。その後、聖廟拔群なり』と、言つてゐる。然しながら、こゝにいぶかしきは、道眞の遺墨といふものが世に甚だ少なく、或は殆ど一品もないかとも思はれることである。世に、

式　切　白紙墨罫、朱星があつて、不動講式の行書である。

紫　切　紫紙、金字最勝王經、法華經等がある。（河内切、北野切、筑紫切ともいふ）

讃岐切　白紙、墨字、墨罫、細字である。

經　切　白茶地、金字、金罫。

等を傳へ、「大和國大安寺緣起」「同長谷寺緣起」もその筆蹟と傳へるけれども、今は全くこれを信ずることが出來ない。されば、書道の神とされる道眞には、その遺品を求めてこれを得ずである。

八、小野道風と紀貫之

小野道風の書風

小野道風は、太宰大貳葛絃の子にして、官は内藏頭（くらのかみ）まで上り、正四位下に叙

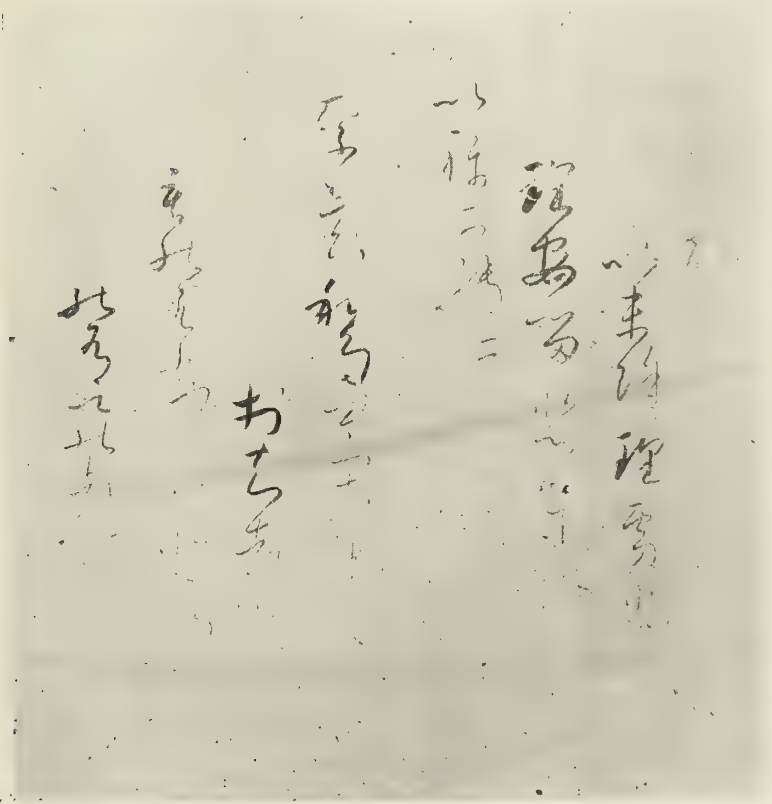
せられた。その能書なることは、三蹟の一人にして、野跡、賢跡として昔より珍重されるのでも知られる。彼は醍醐、朱雀、村上の三朝に歴仕し、書を以て面目を施したこと頗る多い。彼が天徳二年正月、山城守に遷り、近江權介を兼任せんことを奏請した文中に、『春秋一十二歳、初奉二龍顏之聖主一、勞績五十四年之日、己爲二鶴髮之衰翁一、少藝小能非レ神非レ妙。然而紫宸殿之皇居、七間書二賢聖之障子一、大嘗會之寶祚兩度、驤二晝圖之屛風一。臨時奉勅不レ可二勝計一。方今微功之下、日月彌深、薄效之中、恩慈未レ至、歡二三朝之德化一、身猶雖レ沈二本朝一、隔二萬里之波濤一、名是得レ播二唐國一』と言つてある。自畫自讃の嫌ひあれど、これは菅原時文の代作であるから、必ずしもさうではない。以て如何に彼が多く內裏の御用をつとめたかを想はれる。而して當時の人の賞讃したことは、同三年八月十六日の「鬪詩行事略記」に『木工頭小野道風者、能書之絕妙也。羲之再生、仲將獨步、施二此屛風一、書二彼門額一、處々莫レ不レ靈、家々莫レ不レ珍者也。仍爲二一朝之面目一、爲二萬古之遺華一。』とある。自分でも亦、餘程、書については自慢であつたと見え、弘法大師の書いた額を見て、『朱雀門は米雀門、美福門は田が廣い』と批難した。また、天曆の時、大江朝綱と手書の爭論をなし、主上の御判じに依つて優劣を決しようと、その趣を上奏した。時に、主上は『朝綱の書は道風に劣ること、譬へば道風の才は朝綱に劣るが如し』と御判を致されたので、以て一同これに敬服したといふ。道風の氣質を知る可きである。康保元年十一

月十二日、七十一歳で歿せられた。道風の肖像に就いては、永承三年十一月十二日、その孫大内記小野資時が描いたのに、天台座主明尊が讃を加へたものがあつて、今は某家の所藏になつてゐるといふ。それから今御物になつてゐる賴壽法橋の筆した肖像、及び舊法隆寺の什物と記した摸本の肖像にして、帝室博物館にあるもの等がある。何れも右の手に筆を持つて、硯箱を左に置いてある。蓋し書道大家の象徴(シムボル)であらう。

—小野道風の眞蹟— さて、道風の眞蹟については、これも非常に少い。古來の說によると、

本阿彌切	小四半。古今歌二行書、唐紙地、淺黃白
小島切	四半。歌仙家集の歌二行書、雲母砂子紙
愛知切	丁子吹更紗地。金砂子交り經一行十七字
奈良切	香紙銀罫。眞字墨字經
百八字形	卷物文字凡そ一寸大
卷物切	草書詩文章。絹綾地。
經切	白紙、墨字。白紙、金界、砂子香紙。薄香紙。紺紙金字等色々

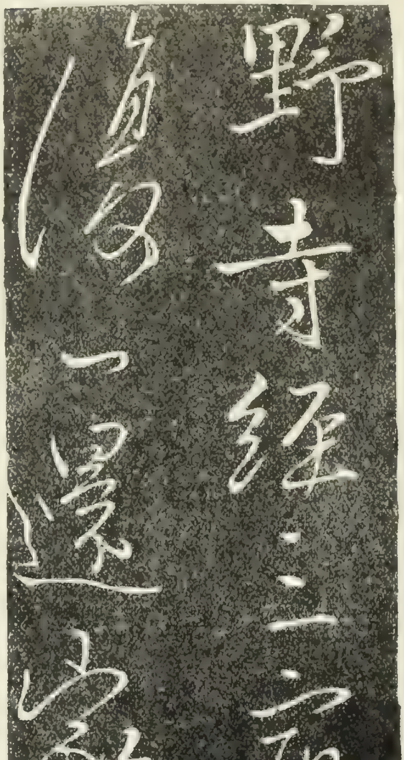
等を傳へてゐるけれども、その眞僞は殆ど悉く確かでない。たゞ、屏風土代(御屏風詩稿)といつて、



傳小野道風筆　秋萩帖　　　有栖川宮家御藏

井上侯爵家に藏するものは、眞蹟疑ひなきものとされる。これは延喜六年、彼が三十五歳の時に、勅命を奉じて宮中の御屏風に書いた折の下書である。蓋し土代とは草稿の意味である。故に卷中諸處に、細字を右傍に書き加へられてある。その他帝室御物の「詩卷」、有栖川宮家の「秋萩帖」、前田侯爵家にある「常樂閑居詩」、北白川宮家藏の「智證大師大師宣下の勅書」等が

あり、道風の書いたものと傳へられてゐる。また山城國深草道澄寺にあつた鐘銘（現在は大和國吉野榮山寺にある）或はもと鴻池男爵家に在つて、森川竹窓が浪華帖中にをさめた「消息」類等も彼の眞蹟とされてゐる。右の中で「秋萩帖」は、古來拓本として行はれ、我邦假名手本の曩祖と稱せられ、最も有名なものである。卷首に「安幾破起（あきはぎ）」云々とあるから名づけるので、原本は有栖川宮の御藏である。然るに別に一本、五色絹本に書いたものもあつて、もと大阪法光院の所藏であつたが、現に某家の手に歸してゐるといふ。その字體は稍王羲之の風を帶びるものがあつて、一時儒家者流の稱讃を受けた爲め、その名が殊に高くなつたのである。その外には、古來の摸刻本が極めて多く、五十餘種に及んでゐる。こゝに示した「玉泉帖」の如きその一であ



小野道風筆　玉泉帖

る。而して是等は皆巧妙とは言ひ得ず、最近寫眞版に複寫されたのは、見るに足るのである。又帝室博物館にある野蹟草書三十一行原本は、近時「靈岸帖」と題し寫眞版に附して行はれるが、これは昔、大阪の豪商淀屋辰五郎の珍藏であつたのを、故ありて土岐山城守に歸し、更に轉じて博物館に入つたものである。坊間には、これが天明六年の上石本もあれど、佐々木文山その他二人の轉摸を經たものであるとのこと故、字體等も賴るに足りない、たゞ最初の寫眞版は、大に見るべき出來である。

紀貫の書風

紀貫之は、道風と相並んで最も推賞される一人であるのみならず、平安朝初期の最も有名な文學者で且つ歌人である。彼は望行の子であると傳へれど、その家系や祖先は詳かでない。御書所預から、越前權少掾、大內記、加賀、美濃介、土佐守、玄番頭等を歷て木工權頭までのぼり、從五位上に叙せられた。而して彼が文學者としての大才はこゝに語るを要せず、實に「萬葉集」の風を一變して「古今集」を撰んだのみならず、その假名文の一體を書き出して「土佐日記」を著はし、後世和文の祖と仰がれる人である。若しそれ書技に至つては、「源氏物語」の「繪合の卷」に『繪は巨勢の相覽、手は紀貫之』とあるにても知られるではないか。又「拾遺集」にも『つかさ賜はらでなげき侍りける頃、人の草子書かせ侍りける奧に、書きつけ侍りける』と前書きして、

いたづらに世にふる物と高砂の

松も我をや友と見るらん

とある。これ蓋し、彼の字が當時から賞翫されて、上流間に求める者のあつた證據である。彼は天慶九年五月十八日、年六十三で歿してゐる。さて、彼の眞蹟として世に存するものは、舊桂宮御所藏の萬葉集、即ち「桂萬葉集」が隨一とせられ、その第四卷は現に御物となり、他の諸卷もそれ〴〵に珍重せられて、斷片ながらに保存されるものが多くある。

その他本多子爵家に「古今集秋部」一卷、毛利公爵家に「古今集離別部」一卷、山内侯爵家に「古今集大歌所御歌」一卷等があつて、最も有名である。中にて毛利家の「離別部」は、天明年間幕府の右筆森尹祥が跋文を添へて、墨帖となし、本多家の「秋部」も、寛政年間加藤千蔭の奥書を加へて、墨帖となつてゐる。故に此の二帖は廣く人の賞翫する所である。その他斷片としては

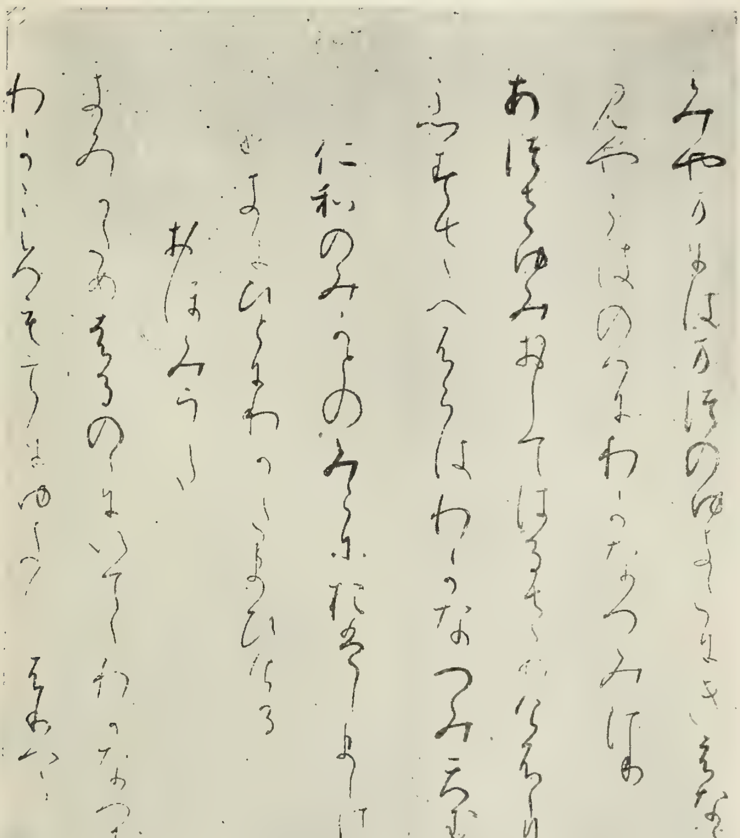
高野切　卷物、四半形、古今集の和歌二行を書き、雲母の砂子がある。自詠にして名のあるものは最も賞せられる。

興風集切　卷物、紙は薄萌黄、淺黄香色、白飛雲等がある。

亭子院歌合切　卷物、歌二行。紙は青紫交りの飛雲がある。

砂子地切　雲紙に歌を四行書きにしてある。

寸松庵色紙　から紙地である。



傳紀貫之筆高野切　原富太郎氏藏

斯くその片紙隻字をさへ秘襲して珍重すれども、その眞蹟については古來疑あつて信じ難いことが多い。

紀貫之の書蹟　それ等の諸作品中で、古來最も有名な切類としては「高野切」がある。但しこれは貫之の眞蹟か何うかは頗る疑問であれど筆蹟の見事なことでは平安初期の作中最尤と稱してよい。こ

れはもと紀州高野山にあつて、古今集廿巻の全部が完かつたのを、何時の頃か散佚して、今は高野山には一片もなく、悉く諸家の所藏品となつてゐるけれども、その出處に因んで今も斯く呼ばれてゐる。即ち、全巻としては、第五巻が原富太郎氏、第八巻が毛利公爵家、第廿巻が山内侯爵家、それから一、二、三、九、十八、十九の六巻は、夙く切斷せられて、その殘片の或は手鑑に押され、或は掛物になされ、或は巻物に製されたりして、珍重せられてゐる。その他の各巻は何うなつたのか不明である。この切の料紙は、いづれも皆雲母を蒔き散らした同一の紙であれど、考證的に調べると筆者は三人である。即ち巻一、九、廿は一人、又巻二、三、五、八は他の一人、巻十九、二十は更に別な一人であるる。故に果して何れが貫之の眞蹟であるかは甚だ要領を得ないが、兎に角、傳說に依つて斯く定められてある。何れにせよ姿が美しくて、筆の力もすぐれ、且つ品のあるところ、平安朝假名文字の代表作とするには足るのである。

九、前中書王、佐理、及び行成

兼明親王と其書蹟

前中書王兼明親王は、醍醐天皇十六の皇子で、皇太子傅、藏人所別當、左大臣などいふ要職をつとめられたが、天資豪邁の御氣質にて、關白兼通と御仲がよからず、常に兼通

の專恣を惡ませられたから、當時の權勢家であつた兼通は兼明親王を病があると僞り奏し、やがて右大臣賴忠をして親王に代らしめ、親王には別に二品中務卿を授け賜はるやうに取計らつた。言はゞ一種の貶謫である。故にこれより親王は欝々として樂しまれず、世を避けて餘生をなぐさむべく、嵯峨龜山の下に雄藏殿といふ別墅をいとなまれた。然るにこれまた兼通の爲めに妨げられて意の如くならなかつたから、有名なる「菟裘の賦」を述作して、わづかにその不平をお洩らしになつたのである。世に此の親王を小倉親王、また前中書王などゝ申した。前中書王とは、村上天皇の皇子具平親王が、當時尙ほ二品中務御でおはしたから、それに對して斯く稱したのである。永延元年九月、御年七十四で薨ぜられた。親王は博學多才にましまして、文をよくし、又書をよくせられたが、書法は道風から受けられたとて、殊に能書であつた。明の董其昌の爲つた「戯鴻堂法帖」にも此の親王の御書であるとて、「暮春遊二施无畏寺一」といふ絕句の詩、及び「三月盡日卽事」といふ絕句の詩の二首を出してゐる。その帖はもと米芾の「書畫船」の中に在つたもので、のちこの法帖に入つたものであるといふ。その他此の親王の眞蹟と稱するものに、支那の諸家が跋を加へ、『子孫永保』などゝいふ印さへ押したものがあるから、彼土に於いて如何に珍重したかを思はせられる。

藤原佐理の書風

藤原佐理は、小野宮太政大臣實賴の孫にして、少將敦敏の子である。官は參

議にまで陞り、正三位に叙せられた。その書は三蹟の一人にして佐跡と稱し、その書風の健實なるをほめて、『佐理一墨之様』など丶言つた。此の人、圓融寺供養の願文を清書し、また河原院が後に佛閣となつた時にも、願文を清書せられた。この他、内裏の額、伊豫三島明神の額、岩清水八幡宮の額、大雲寺の額等を數多く書いた。正暦年中出で、大宰大貳となり、正三位に進んだが、任にあること數年、宇佐の神人と爭つたので、祠官はこれを朝に訴へた。因つて大貳を罷め、京都に歸らんとして、伊豫の海岸に泊し、風濤嶮惡にして數日纜を解くことを得なかつた。一夜

海陽泉帖の内　　藤原佐理筆

夢に三島明神來りて、額を書かんことを請はれたので、謹んで諾し、覺むるに及んで風濤穩かになつたのを見、直に岸に登つて額を書き去つたといふ。是より書名益々世に現はれたのである。その筑紫に住まれた頃、源重之、佐理の許に手本を書いてつかはすとて、

都へといきの松原いきかへり

君が千年にゐはんとすらん

といふ歌を書いてつかはされたとあるから、多分重之について書字を習つたこともあるだらう。けれども彼の書は道風の子擧時から秘法を授かつたと普通に信じられてゐる。又一條天皇の永延二年、嵯峨の僧奝然が、その弟子嘉因を宋に遣はし、その國の天子に贈進の事のあつた中に、佐理の手書二巻とあるを見れば、當時既にその絶美を賞したことであらう。眞徳三年七月晦日、年五十四で薨じた。その女また書をよくし頗る父の風があり、藤原懷平に嫁したといふ。

藤原佐理の筆蹟　此の人の筆蹟は、森川世黄の「難波帖」、北條鉉の「集古帖」などに臨寫して傳へられるが、尚ほ切れ〳〵のものにては、

- 通切　巻物、四半形。古今の歌二行書。繼合紙香薄色。淺黃等があつて、通し目の形がある。金銀砂子少しあり。
- 筋切　巻物、四半形。古今の歌二行書。飛雲砂子紙立に銀にて筋がある。
- 四半切　古今、歌仙、歌集、詩行書等さま〴〵あつて、散らし書きもある。
- 巻物切　墨字草書五色紙、燒から紙絹地等樣々

此の通し切と筋切とは、もと同品であつて、たゞ紙の模樣に依つて名を異にするだけである。故に、通し目、と筋目と、繼ぎ合せになつたのもある。固より是等の眞僞は不定であるが、次に述べるもの

は確實の眞蹟とされてゐる。

即ち松平賴壽伯の家藏に、佐理卿眞蹟「詩懷紙」といふのがある。これは『暮春同じく水を隔てゝ花光合すといふことを賦して、敎に應ずる一首絶句を體と爲す、倭漢意に任ず。左近權少將佐理。花脣語らざれども偸に思ひ得たり、水を隔つる紅櫻光暗に親しめり、西岸の芳菲浪上に浮び、流鶯盡日殘春を報ず』と書いてある。此の「詩懷紙」の貴い所以は、今期三蹟の中、道風にも行成にも、署名のある墨蹟は、僅に消息の外にないのに對し、佐理には此の「詩懷紙」があつて、以てその眞蹟の據る所となることである。(行成の「重陽後朝眺望七言二首の詩懷紙」の署名は、後人の書き加へたものである。)のみならず、これこそ歌懷紙書式の根源であつて、歌道の上からも極めて貴重なる史料である。何となれば、歌懷紙の三行三字の書式は、全くこれから出でゝゐる。而して此の懷紙は、卿が二十三乃至二十五歳の頃の作にかゝるもので、弱冠にしてすでに斯く老熟渾成してゐることも知れるのである。人或はこれを以て臨摸のものと稱するけれど、決してさうでない。殊に「櫻」「親」「菲」「盡」等の文字に至つては、筆々躍動して凡手の及ばざることを示すものである。

その他上にも述べた如く、佐理卿の筆跡、即ち佐蹟と稱する假名物には、通切、筋切、撚紙切等があるけれど、通切、筋切は、「元永古今」の筆者と同一であるから、俊賴の書となすべく、撚紙切は、佐

理の歿年眞德四年より二十一年後なる、寛仁三年に物故した源道濟朝臣の家集であるから、眞蹟とするわけに行かない。故に、佐理の眞蹟疑ふ可らずとするものも、上の「詩懷紙」の外にあるを知らない。因にこの詩懷紙を摸勒して、白字の拓本としたものもあれど、現存するものは甚だ少いといふ。

藤原行成の書風

藤原行成は、一條攝政伊尹の孫にして、少將義孝の子である。その宮太宰權帥大納言までのぼり、正二位に叙せられた。一條天皇の御宇、齊信、公任、優賢と共に四納言と言はれた人で、本朝入木道相承の大祖と仰ぎ、その筆蹟は權蹟と稱せられてゐる。また彼の道風、佐理と合せて三賢、或は三蹟とも稱するのである。萬壽四年十二月四日、年五十六で死なれた。此の人、天性温順の氣質であつたことは、美福門の額字を修覆すべき由の宣旨のあつた時、弘法大師の像に香花を供へ、大江以言の代作にかゝる祭文をさゝげて筆を執つたと傳へるのでも知られる。書道については、大乘院宮尊圓法親王が、『道風以後また各々野跡が風なり、行成卿は道風が跡を寫すといへども、聊かまた我樣をかき出せり。その後は一條院より以來、白河、鳥羽の時代まで、能書も非能書も、皆行成が風體なり』と言つたが如く、行成以後天下靡然としてその風に化したこと前にも言つた如くである。また行成が能書によりて面目を得たことは極めて多いが、中にも、殿上にて扇合といふことがあつたのに、人々珠玉をかざり、金銀をみがきて、我劣らじと營み合つた中に、この卿だけは、黒く

塗つた細骨のたけたかきに、黄色の紙を貼つて樂府の要文を、眞草うち交ぜて所々書き出したのを、主上御覽になつて『これこそ何れにも勝れたれ』とて、御手許に留め置かれたといふ。彼の家を世尊寺家と稱し、代々入木道をうけつぎてゐるが、その世尊寺とは、長保の頃、彼の外祖中納言源保光の舊宅をすてゝ世尊寺を創め、茲に居たからである。

藤原行成の筆蹟

●● 行成の遺墨といふものは、古筆家に依れば

端白切	四半、歌仙家集。實家卿の加筆がある。淺黄胡粉地紙、四方すれて白くなつてゐるから斯くいふ。但しこれは行成でなくて大貳三位であるとの說もある。
室町切	四半、飛雲紙、金銀砂子銀泥の下畫薄唐草楓萩藤小鳥がある。歌仙家集の歌二行書。
針切	四半、假名文字が細いから斯くいふ。
萬葉切	眞名、一行、假名二行書。柿色紙金砂子。
法輪寺切	卷物、朗詠集。淺黄紙に雲母砂子、飛雲あり。
安宅切	朗詠集卷物。金銀下畫、歌二行書。
淺黄切	四半歌仙家集。歌二行書。金銀砂子あり。
桝色紙切	白鳥の子。歌ちらし書。定家卿の加筆物もある。
四半切	和泉式部家集、古今集等がある。

巻物切　詩、文章、行草、四半形。古今朗詠、墨蹟等がある。

經切　白紙香、色雲紙、淺黄金砂子等がある。墨字

等があれど、最も貴しとする眞蹟は、有栖川宮家御所藏の「王羲之尺牘の臨本」德川侯爵家（尾張）所藏の「重之集」で此の二つは世になき神品と言はれる。又奈良の筆墨商古梅園の所藏なる大字書の一紙は、四言八句にて行草交りである。この書はもと河内國交野郡神尾寺西谷の望月坊の什寶であつたといふ。寛政の頃、早くも白川樂翁侯が、白字刷にして世に弘めたものがある。明治に入つて堀皆春が模刻したものも世に行はれてゐる。

また行成の眞蹟「朗詠切」には、前記の「法輪寺切」「安宅切」をはじめ、數種の別本を見るのであるが、その全部現存して、殊に優れてゐるのは、帝室御物に粘葉二帖一部、卷物二巻一部あり、赤星氏の舊藏に、卷物二巻一部あり、また零本となつて最も名高いのは前記の法輪寺切がある。而して御物の粘葉帖と法輪寺切とは同種に屬し、御物の卷物と赤星氏舊藏の卷物とも亦同種に屬してゐる。外に近衛公爵家に雜部のみを二部に分つたのがある。これは法輪寺切の方に似てゐる。又原富太郎氏の有に、殘缺の全く別種に屬する大字がある。その他舊水戸德川侯藏の四枚、中山侯爵家所藏の二枚を始め、所在に散見するのである。

而して帝室御物のそれは、明治四十一年内親王御手習の手本として、某書肆に寫眞複製を命ぜられた際ゝ特に許可を得てゝ或る部數を限り印刷に附したものがあり。それは製版精巧にして、然も朗詠集全部を包容してゐるので有名である。その外には現に京都の本能寺に藏する國寶「古詩殘缺」、同じく曼珠院に藏する國寶「古今和歌集斷簡」等も亦、看過すべからざる名品にして、殊に本能寺のそれは、極めて見事なものである。又右の草案には「寬和二年四月十四日」の日附を入れてある。

九、公任、道長、忠家、俊房、伊房、

〔藤原公任と其書蹟〕藏原公任は、關白賴忠の長子にして、世に四條大納言と申した。此の人、和歌を善くし、又詩作に秀でゝ、齊信とは常に詩敵であつたといふ。關白道長の大井川三舟の遊びには、此の人和歌の舟に入つて居たが、のち詩の舟に入つたなら、和歌はおのづから顯はれたであらうにと申されたといふ。書に於ても亦一代の名人にして、行成にも劣らないほどの能筆である。大乘院宮尊圓法親王が、『公任卿は殊勝なれども、行成卿拔群、同時代なるゆゑ、人も用ひず、みづからも卑下して書役を務められず』と言つた如く、行成拔群の爲め、公任の書名は顯はれること比較的少なかつたけれども、その能筆であつたことは疑はれない。今も

尾形切　四半切。歌仙歌集。胡粉地、雀鳥虫草木藻等の下畫がある。

萬葉切　卷物。砂子淺黃紙、墨罫があり、一行の罫に歌二行書。

朗詠集切　淺黃から紙地、その外色々ある。一行十六字、雲紙上の雲ばかり一行十四字。

岡寺切・　集は未詳、歌はちらし書。淺黃紙金銀砂子少し、銀泥小鳥松唐草藤すゝき等の草花あり、この切に似て行成もあると。

小草切　歌合卷物、歌二行書。左右作者名があり、切箔砂子小草下畫。

などいふものがあつて珍重されるが、殊に「朗詠切」は美はしい出來であつて、その殘缺を諸家に傳へて珍重する。此の人、萬壽元年に愛女を失ひて、いたく世の無常を感ぜられ、やがて薙髪して北山に入り僧となり、長久二年正月一日、七十六歲で薨じた。その子權中納言定頼も亦、その手跡父に似て頗る美事であつたと。定頼は寛德二年正月十八日、年五十一にて薨じてゐる。尙ほ玆に最近世に知られたる公任眞蹟の「朗詠集雜の部」一卷がある。（「茶道茶器」參照）卽ち、もと股野前帝室博物館長の藏にして、今は益田男爵家に在るものがそれで、眞名假名の美事なる上に、斯く纏つた公任の眞跡は他にないから、先づはこれを以て彼の代表作と致さねばならぬであらう。

御堂關白道長の書風

御堂關白藤原道長は、その官攝政大政大臣にまでのぼり、從一位に叙せられて、位人臣を極め、『此の世をば我が世とぞ思ふもち月のかけたることのなしと思へば』と詠んだ人で

ある。寛仁三年三月二十一日出家して法名を行歓と號し、のち行覺と改め萬壽四年十二月四日、年六十二にて薨せられた。世に法成寺殿、又は御堂殿ともいひ、此の人の手蹟の見事であつたことは、唐土の商船が、偶々此の人の書跡を彼地に齎し歸つたところ、非常の賞讃を博し、元の陶九成をして『二王之迹而中土能書者亦鮮ニ能及ニ紙墨光精』と激賞せしめたのである。その別行卷物切（杉原紙中字行草）なりと稱するもの、古筆家に玩賞せられてゐる。しかし彼は一世の大家にして、清盛以前に最も權勢を揮つた人で、且つ同代に多くの文人才媛を輩出し、それ等の中心人物となつてゐたので、その評判も一層高いけれども、作品多く傳はらず、眞價は行成、公任などに比すべくもない。

御子左忠家と俊忠

御子左忠家は、御堂關白道長の六男に當るところの民部卿長家の二男である。その官は大納言にまでのぼり、正二位に叙せられた人である。寛治四年六月二十日出家し、同じ五年十一月、五十九歳で死んだ。此の人の能書も古來有名で、今も古筆の內に

柏木切　歌合卷物、仙花紙、墨罫がある。一歌二行書、作者の名、假名書などもある。
仁和寺切　萬葉、仙花紙、眞名一行、假名一行半書き。
四半切　古今歌二行書。

などいふものがあつて、皆世にもてはやされる。その子權中納言俊忠も亦、能書を以て聞えた人で、

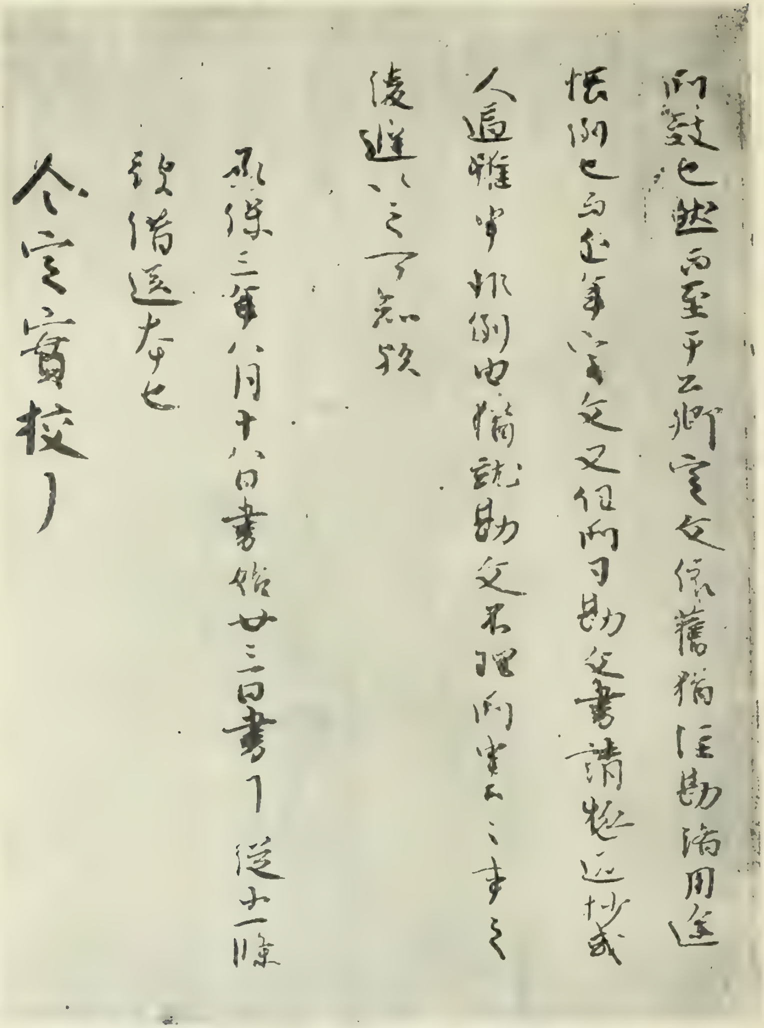
彼は本名を親家といひ、保安四年七月九日、年五十三で死んだ人である。而して、忠家と俊忠とはその書風が甚だ相通ひ、且つこれ等と西行の筆蹟とは、往々にして相混じ合つてゐるので、何人の作に屬するか判じ難い場合があるといふ。

堀川左大臣の書風

源俊房は、宇治大納言賴通の子にして、世に堀川左大臣と呼ぶ人である。文學をよくし、また臨池の妙を得られた。內裏の額をはじめ、白河法勝寺、並に宇治平等院の額扉などは、皆此の人の筆であつたと傳へる。しかしその眞蹟は極めて稀であつて、黑谷切と言つて、經文を書いた小切があるけれども、容易に得られないといふことで、その片紙隻字をも珍重するのである。只、彼の宇治平等院の鳳凰堂の扉の上に安樂九品文を書かれたものは、眞蹟中にも殊に絕妙とされ、識者は野跡、權跡にもつぐ筆致であると傳へるが、惜しい哉、此の九品文も年久しく荒れたので、享保年中に修補を加へ、稍原跡の氣品を損ねたとのことである。寛政十年三月、梅の宮の祠官橋本經亮といふが、その遺墨の堙滅せんことを恐れ、摸刻して同志に頒つたけれど、今はそれさへ滅多に得ることが難かしいといふ。此の俊房は出家して寂俊といひ、保安三年十一月に、年八十七で死んでゐる。

帥中納言の書風

藤原伊房は、行成の孫にして、兵部卿行經の子である。その官は大宰帥中納言であつたから、世にこれを帥中納言と言つた。その父行經も亦、行成をついで書をよくし、從二位



世尊寺伊房筆北山抄

前田侯爵家藏

參議兼兵部卿になつた人で、永承五年十月十三日、三十九で早世した。伊房も父祖の衣鉢を受けて、當時の善書者と稱せられた殊に春日明神の示現により

て、只何となく「御經藏」といふ額を書いて置いた所、のち果して一切經藏が春日明神で造られ、この額を用ひたと傳へる。彼の有名な隆能の源氏物語繪卷の詞書を書いたとの傳說があるのでも、その能書であつたことは知られる。それから前田侯爵家に傳はる「北山抄」も、彼の有名な筆蹟で、卷尾に『承保三年八月』云々と記され、時代を知ることが出來る。永長元年九月に出家し、嘉保二年九月十九日に死んでゐる。

弘法大師以後、藤原時代を經て源平時代に至る間、能書を以て世に聞え、今にその遺墨を珍賞される人々は非常に多いのであるが、今は代表的の、上記の人々を擧げるに止め、ついで鎌倉時代以後の和樣に及ぶことゝする。

第三編　中世以降の和様

一、鎌倉室町時代の入木道

中世期の書道

源平相爭ふこと數十年、つひに平家は西海に沒落して、賴朝が鎌倉に覇府を建てるや、長く藤原氏の一族を中心として行はれた公卿の文治的時代は轉じて、武人の政權を弄する所謂封建の世となり、六百年に亘りて武士階級の歷史時代が開けたけれども、封建制度の初期に於いては、彼等武人は專ぱら政治的實權の掌握と覇業の樹立とに忙しかつた爲めに、精神文化の方面、殊に藝術上には、左したる勢力を揮ふことなく、書道の如きも倭繪など〻同じく藤原時代の貴族の手に育つた傳統が、その儘京都の公卿の間に存續して、鎌倉武士すらこれを眞似る有樣であつた。故に世尊寺流を主とする入木道は依然として我が翰墨界を獨占してゐた。けれども、武人の世は已に公卿のそれではない。徒らに櫻かざして遊戯を事とし、閑雅に日を暮す時代ではない、武人の風尙は次第に平安朝趣味に遠ざかつて、一方に禪宗を迎へること〻なり、その端的な宗教思想が彼等に適合する所より、書にも亦禪風と武士氣質との化合せる如きものを迎へるに至つた。加ふるに世尊寺流は次第に

衰へて、法性寺流の如きも起つたけれども、公卿の影の日に薄れ行くと共に、書樣もまた頗る振はず南北朝の事のあつてよりは、一旦入木道の統は斷絶して、更に持明院の一派が餘脈を保つたけれど、全盛を極めし禪宗は、新たに生れし國民的趣味なる茶道と相待つて、新らしき書風に向はんとする氣勢を示した。然れども、茶人は決して和樣を排斥せず、寧ろその優雅なる古今の墨跡を尊重愛惜したので、衰滅せんとするものも漸やく縷々として繼續し、以て近世に及んだのである。

鎌倉初期の能筆　兎に角、武人一流の書は、强ち教養を經たる美術として見るべきでなく、且つ禪僧の書樣は全く別趣のものであるから、源平以後、鎌倉、室町の時代にかけても、强弩の餘勢、漸く微々たりと雖も、尚ほ入木道の時代と見なくてはならなかつた。況んや鎌倉時代の初期には藤原俊成、藤原定家、西行法師等の能書家が少なからず輩出したのである。——さて、藤原道長、公任等の時代についで、保元平治の亂に及ぶ頃ほひ、法性寺關白藤原忠通があつて、行成の風を慕つて更に一格を立て、世尊寺流の外に法性寺流なるものを出したが、因よりその頃も世尊寺家は行成の子孫連綿して代々書道の家となつてゐたのである。しかし家風を守り樣に依つて葫蘆を描く中に、年と共に筆力漸く衰へ、八代行能に至つて稍家道を恢復したに過ぎない。故に後白河帝の頃より鎌倉の始め、後嵯峨天皇の頃までは、專ぱら忠通の影響を受けて法性寺樣を書き、藤原俊成、その子定家の如きも

それを學んで更に一格を出したのである。定家の如きは、當代隨一の歌人にして、學藝界の權威であつた者、彼にして尙ほ然り、況んや他は皆滔々としてこれに傚つたこと知る可きである。

世尊寺流の衰勢

然しながら、定家は決して法性寺流をその儘に盲從踏襲したのではなかつた。彼の書風は所謂定家派なるものにして、何人の見ても直に氣附く一種の特色を出し、雄健にして達筆なる、膚肉の一部に豐かな且つ流麗なるものであつた。その子爲家以下、家をつぐ人々は、必ずしも彼の健達と技巧とを有しなかつたが又一脈相通ふものがあり、宗尊親王の如きも定家風の影響を受けられたのである。けれども鎌倉の後期に入つては傳流極めて漠として、さしもの世尊寺家すら、十一代行房が延元元年に、南朝方の皇太子恒良親王の北國行啓に扈從し、翌年金ケ崎城に死するや、茲に家名の斷絶を見んとするに至つた。幸にしてその弟行尹が北朝の天子に仕へて、殆ど實なき名のみを傳へてゐたので、伏見天皇の第六皇子尊圓法親王は、初め書法を行房に學び、頗る堪能にあらせられた所より、行房の死後は行尹に承けられて、所謂出藍のお出來榮えであつた。而して世尊寺家の筆力の次第に衰へて、古法を失はんことを恐れらるゝや、上代に參酌して新に豐肥流麗なる一家の書風を開き、所謂尊圓流、又は靑蓮院流、俗に御家流といふのを立てられたのである。

尊圓法親王の一派

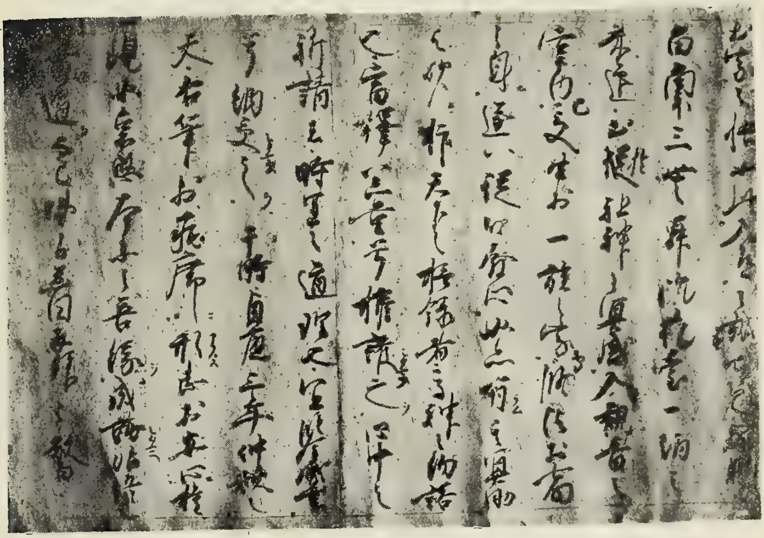
南北朝の頃に於いて尊圓法親王が一派を立てられたことは、入木道の書法に

一屈折を與へるものであつた。尊圓法親王は、啻に定家以後の能書であらせられたのみならず、次第に墮落し行きたる當時の書風を古樣に復活して、生氣あり、靈動ある美術的書風を出されたのである。隨つて此の親王以後、多くはこの流に從つて風雅なる書道に志すを常とし、時に小堀遠州などの例外もあつたけれども、素眼、光悦を始め、一流一派を開く人は、大抵尊圓法親王を慕つてそこから出發したのである。されば近世の書道の直接の母は、此の人であるとすべく、御家流は朝廷、幕府共に官公文書にこれを限つて用ひられ、又他に文字なきの觀を呈したのである。しかのみならず、青蓮院宮家には能書の親王が續かれたので、御家流の名もそれから出でたほどに、益々此の派の弘通を促がした次第であつた。――斯くて世尊寺家は年を追ひて益々衰運に向ひ、徒らに家名を相承するの外、あれどもなきが如き有樣となつたが、享祿五年（約四百年前）に十七代行季が死してその家が斷絶して了つた。後奈良天皇は深くこれを惜ませ給ひ、持明院基春が十六代行高に入木道の相承を繼たのを以て、特に基春に勅して世尊寺家に代つて書道の家を起すことを勅命せられた。これより持明院家なるもの、子孫世々その傳統を繼承して德川時代に及んだが、しかも取り立てゝ名筆といふ程の人は出でず、入木道の傳統は事實に於いて四分五裂したのである。

二、忠通、俊頼、俊成、定家、

法性寺關白の書風

鎌倉時代以後の書風は上の如き變遷を經たのであるが、さてその先頭に來る者は藤原忠通であるとせねばならぬ。彼は實は藤原時代と鎌倉時代との繼ぎ目にある人だが、その書風もまた過渡期に屬し、漸やく一轉期を造らんとしてゐた。藤原忠通は、知足院關白忠實の子にして、宮、攝政太政大臣にまでのぼり、從一位に叙せられた。殊に關白の職に在つて四朝に仕へた如きは、珍らしいことであつた。世に此の人を法性寺殿と稱するのは、法性寺を營造した故である。書は權跡を慕つて、知名の能書であつたといふ。若い頃、最勝寺の額を書いたことがあつたが、後年その寺門を過ぎる毎に赤面して、その拙きを恥ぢたといひ、此の人の書は晩年に至るほど、益々上達したとのことである。その能書であつたことは、大乘院宮尊圓法親王が、『此の公出現の後、天下ひたすらに此の様に成り變り、又後白河院以來の時分、斯くの如し、剰へ後京極攝政相續の間、いよ／＼此の風盛なり、後嵯峨天皇頃まで、此の體なり』と言つた如く、天下をして此の人の筆風に靡かしめたのでも知られる。久安の頃か、父の知足院入道忠實と仲が善くなかつた時、入道は四枚屛風を一帖取り寄せて、これに字を書いて呉れと仰せられると、一番小さい筆を取つて、「紫蓋之峰嵐疎」といふ句を、大



慈鎮和尚筆蹟　曼殊院藏

文字にて四枚に書かれたので入道も流石に感心して家の書とせよと仰せられたといふ。長寛二年二月、年六十八にて死んだ。その子は有名なる山門の座主慈鎮和尚である。慈鎮は初めの名を道快といひ、後ち慈圓に改めた。これ亦父の風の書をよくし、西行法師の「御裳濯川歌合」を清書したりなどして有名である。和尚はまた歌人としても知られてゐる。

源俊頼

源俊頼は、權大納言經信の第二子であつて、堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕へ、右近衛少將兼木工權頭に上り、從四位上に叙せられた人である。此の人、才藝に秀でたが、和歌は殊に堪能にして、當代の宗匠と仰がれ、天治のはじめ勅を奉じて「金葉集」をも撰ばれた。尤も堪能にして、その美はしいものは貫之の書と誤まられて

世に傳へられるといふ。今も古筆に

東大寺切　四半緣起假名交り、白唐紙、地墨罫。

民部切　四半古今歌二行書淺黃白唐紙地。

卷物切　拾遺歌二行書同香色唐紙地。

經切　白から紙、墨罫。

四半切　歌仙家集、歌二行書、唐紙地、歌合歌二行書、左右作者の名がある。白唐紙地、きら地、萬葉は眞名一行、假名二行。

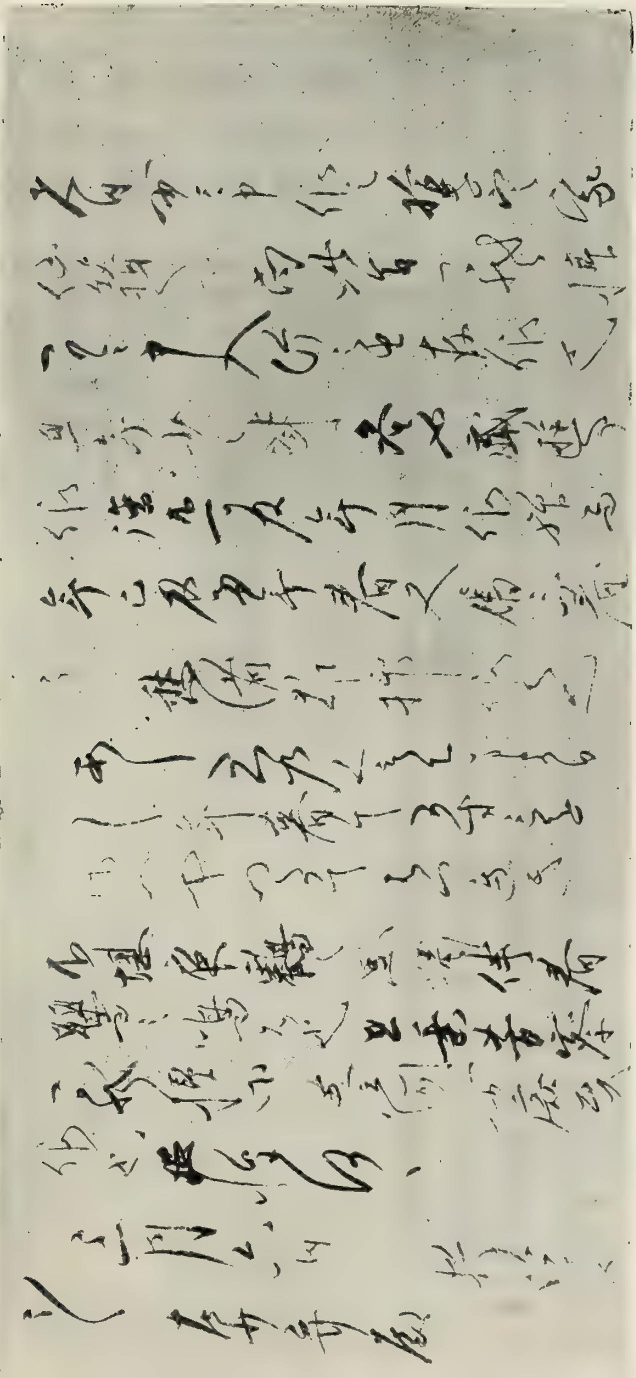
大色紙　唐紙地、散らし書き。

中色紙　唐紙砂子、散らし書き。

の如きもあるけれど、水戸德川侯爵家にある「十五番歌合」は小野道風の「秋萩帖」に並んで神品とされてゐる。これは文化八年に、水戸の人長久保靜齋が摹刻して世に行はれる。又大阪の平瀨家に藏する「古今和歌集」は、極めて美麗なる樣々の彩色模樣を下地に用ひた卷子にして、此の種歌卷中最も傑出したものと稱され、彼の平家納經卷や、各處に遺る同じ時代の扇面寫經など丶共に、當時を偲ぶべきものである。

藤原俊成の書風

俊成卿は、權中納言俊忠の四男にして、はじめ顯廣と稱した。世に五條の三



藤原俊成筆書狀

酒井伯爵家藏

位、または御子左と稱する。その官、皇太后宮太夫となり、正三位に叙せられた。此の人、和歌は「古今集」を藤原基俊に學んで、特に堪能にして、「千載集」を撰び、また「六百番歌合」「千五百番歌合」などを判じたことは、人の知る所である。建仁三年十一月二十三日、和歌所にて九十の賀に際して御製の和歌さへ賜はつて面目を施した。これより先き出家して法名を釋阿と號したが、元久元年十一月卅日、年九十一で死した。此の人の書風は法性寺樣に倣ひ、今も尙ほ

住吉切　自詠卷物、鳥の子紙、歌二行書き。
久安切　百首卷物、杉原紙、歌二行書き。
補仁切　四半眞名定家卿と兩筆の所があるといふ。
御家切　四半、古今歌二行書、上に定家卿の筆の所があるといふ。
日野切　四半、自撰「千載」歌二行書き。
了佐切　四半古今。立長のもの。歌二行書き。
顯廣切　四半、古今の歌二行書、顯廣と名が入つてゐるものもある。
鳥羽切　墨字經、村雲金泥書がある。

などを世に知られる。而して此の人は書畫共によくしたから、文治四年「千載集」の奏覽の時、自筆

に清書して、その宮にみづから和歌を「あし手繪」に描いて、蒔繪にされたといふことである。又歌仙の自畫讃も、往々世に傳へる。此の人の子は即ち有名なる藤原定家にして、他に女の越前局、坊門局等も能書の人であつた。こゝに圖示した、酒井伯爵家にある消息文の如きは、俊成が日常の書風をうかゞふべき、まことに面白いもので、珍品と云はなくてはならぬ。

藤原定家と其書蹟

藤原定家は、上に述べた京極黄門俊成の二男で、その母は若狹守親忠の女にして美福門院の女房であつた加賀といひ、彼の名は初め光季また季光などゝ云つたが、後定家に改めた。花光寺、京極、一條、二條、冷泉、高倉等の雅號がある。その官は權中納言に至り、正二位に叙せられた。この人、年若くして西行の「宮川歌合」を判じ、大にその天才を顯はし、のちますく歌道に上達して、當代の選仙と仰がれ、後鳥羽天皇の時には「新古今集」を撰し、後堀川天皇の時には「新勅選集」を撰した。貞永元年十月出家して、法名を明靜、道號を以清とつけられ、仁治二年八月廿日、年八十にて死した。歌人としての定家については逸事等の載す可きこと頗る多いけれどもそれ等は他書に讓つて、玆には專ら書道に關して述べて置く。

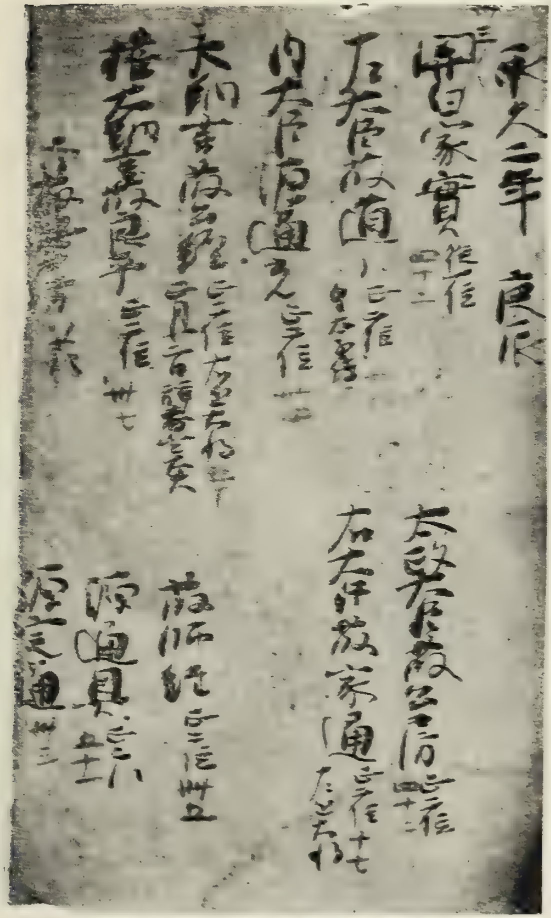
此の人の書風は、父黄門の如く法性寺流より入つて、一種の別風、即ち定家様を書き出したものである。書體豐盈にして科斗の如く、しかも力があつて遒勁なるを特色とし、後世冷泉家の人の相襲い

で學ぶ所である。今その遺墨中最も知られたものを擧ぐれば、次の如くである。

明月記切　紙竪一尺許り、杉原〃鳥の子等、不定である。俗に大記錄ともいふ。
本能寺切　千五百番歌合 卷物歌二行書、左右番附判詞がある。
後撰切　後鳥羽院、定家卿、爲家卿、慈鎭。和尙、寂蓮法師等の筆が交つてゐる。又爲家卿一筆のもある。四半、歌は二行書、朱の書入れがある。
紹巴切　四半、後撰の歌一行書き。
八條殿切　四半、新勅撰の歌を二行書き。
畫記錄　明月記切の內、のある所をいふ。
補任切　四半、眞名。俊成卿と兩筆の所がある。(その項參照)
長恨歌切　四半、竪短し。
僻安抄切　四半、雲紙。
藤谷切　大四半、新古今歌二行書き、出來替り。
咏草切　自詠歌二行。題朱點がある。
卷物切　萬葉上下に畧罫がある。

是等は皆珍重されるのであるが、大日本能書傳に引ける所に依ると「海人藻界」には、「定家卿といふ

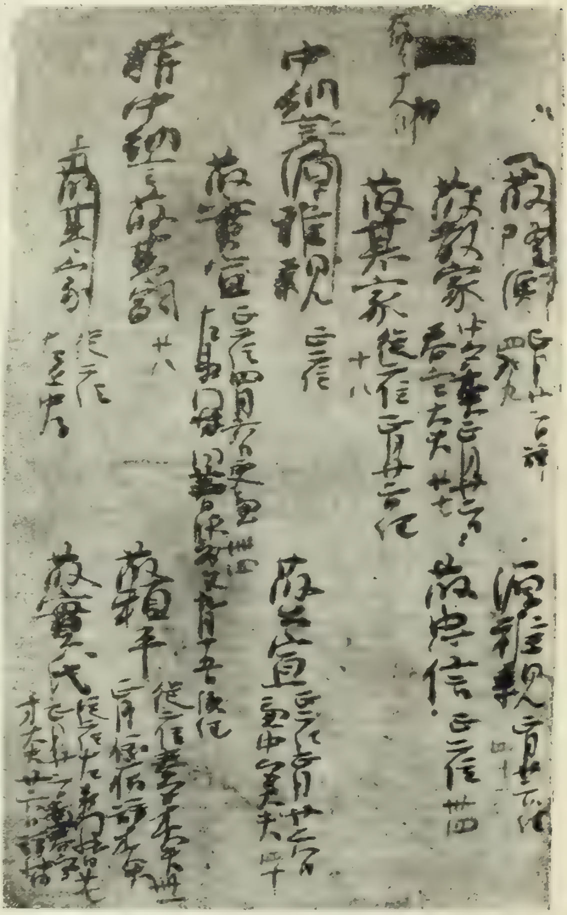
名人の手跡、意外の惡筆なり、然れども「明月記」といふ名譽の記錄六卷、皆自筆なり、相構へてりぬべき人は、僧俗ともに如何に惡筆なりとも、自筆に書いて、文章を惡からぬ樣に書きつらぬべきなり、他筆を用ふるは太無念なることなるべし』とあるが、定家を惡筆とするのは餘程考へなくてはならぬ。



藤原定家筆　公卿補任

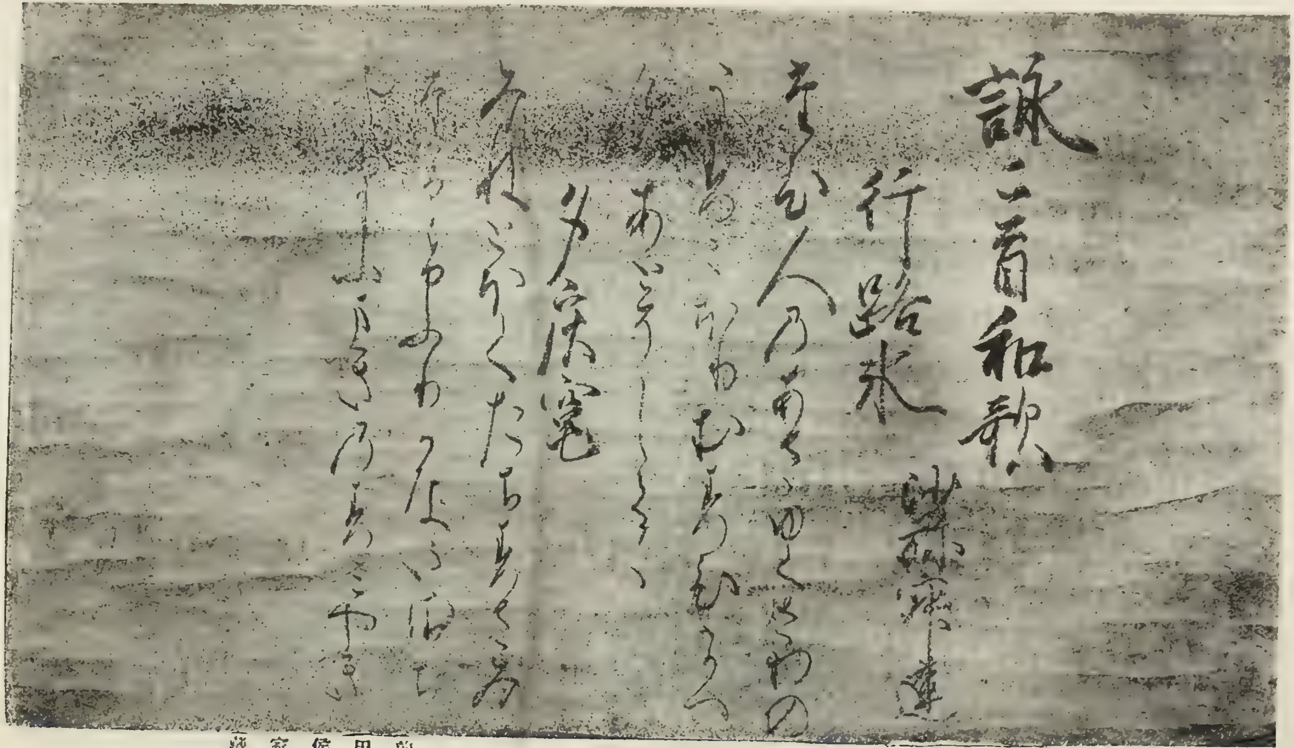
小倉色紙に就て

さて、彼の遺墨中最も有名なる「小倉色紙」に關して一言して置かねばならぬ、これは現に大正二年の大阪本願寺財政整理の際、競賣に附せられたもの丶如



冷泉伯爵家藏

き、一葉の價格實に一萬數千圓に上つたのであるが、抑も此の「小倉色紙」とは、文暦二年五月の末、嵯峨の中院の障子に色紙形に記しつけたもので、天智天皇より以來、家隆、雅經卿に至るまでの和歌を百人について各一葉宛書きつけたものであるとされる。即ち世に云ふ「百人一首」の初稿がこれである。けれどもこの色紙については二樣の說が行はれる。一は東野州常緣の許に在つたのを、宗祇法師が歌道を學びてはる〳〵東國まで下つた志にめでゝ、宗祇に五十枚を與へた、のち殘りの五十枚は常緣の許で燒け失せて、今世に在るのは宗祇法師の手から世に散つたのであ



寂蓮筆紙

前田侯家蔵

るとする說、又一說には、伊勢國司北畠家に屛風一雙にしてあつたのを、宗祇法師の弟子の宗長に半双を與へられ、北畠家に殘つた半双は燒失したから、宗長の五十枚が世に殘つてゐるとするのであるそしてその內の二十七枚の所有主は德川中期に出來た「玩貨名物記」に出でゝゐるが、今その幾ばくを傳へるかを知らない。その版本中には、集古十種の一部に收められたものもある。近刷は稍やその眞意を失つてゐるけれども、舊刷は頗る見るべき面目を遺してゐる。尙ほ定家には、その子の爲家、女の民部卿局、秋篠局等があつて、皆父に似て書をよくした。

三、寂蓮、良經、西行、家隆、阿佛

寂蓮法師の書蹟

寂蓮法師は本名を定長、一に俊長といひ、實は藤原俊成の第六子阿闍梨俊海の子であるけれども、伯父の俊成に養はれてその子となつた。卽ち定家とは兄弟分である。中務少輔をつとめ、從五位上に叙せられたが、早く世を避けて、釋門に入り寂蓮と號し、書と畫とを共に善くした。建仁二年七月二十日に死んだ。殊に書道には妙を得、今も古筆の中に

右衛門切　中四半。四方に墨罫がある。古今の歌二行書き。

大阪切　朗詠卷物、天地墨罫。歌は二行書。

田歌切　四半。國々のを田歌集めたものである。朱星がある。

四半切　後拾遺の歌二行書き。

大六半切　後撰。から紙砂子下畫

などいふものがあつて、皆うるはしく出來てゐる。こゝに出した懐紙は前田侯爵家に傳はるものにして、沙彌寂蓮と自署してあるのが殊にめづらしく、以て彼の遺蹟の眞僞を判ずべき最も確實なる證左となすべきである。筆致も亦すこぶる面白く、穩雅にしてしかも閑寂、且つ健實なるところが、寂蓮の人格を偲ばしめるに充分である。彼が歌人としても有名なことは、こゝに申すまでもない。

後京極攝政の書蹟

藤原良經は、月輪關白兼實の二男にして、官攝政大政大臣までのぼり、從一位に叙せられた。九條殿、または後京極殿と稱した。歌道、文學の外、書畫にも妙を得、書は法性寺風をよくし、當時勘能の聞えのあつたことは、建仁三年十月、三位入道俊成が九十の賀を和歌所にて賜ふや、四季の屏風の色紙に此の人が書かれたのでも知られる。建永元年三月七日、年三十八にて死なれた。今も古筆家が

興福寺切　砂子紙、切箔がある。興福寺緣起の假名交り文。

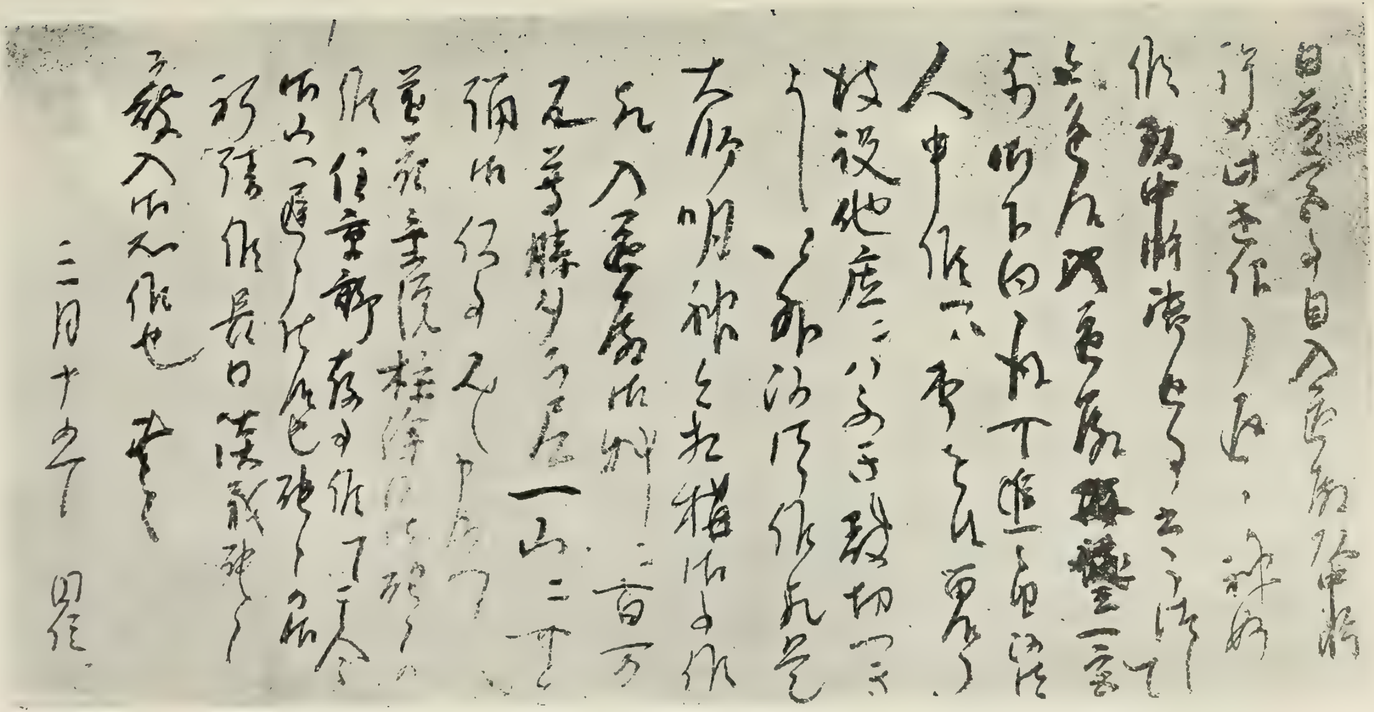
折經切　金罫四行。假名交り文。

常知切	朗詠歌。二行書き。
內侍切	朗詠、雲紙金銀砂子、切箔がある。
假名法華切	雲紙、金罫。
歌仙切	卷物書贊
卷物切	雲開消息、紙五色金銀下畫がある。

など〻稱して、この人の遺墨の珍襲されるものが多い。その畫については、『後京極殿の馬の繪』、普賢寺（禪定基通）殿の牛の繪』と稱して、併稱されたのである。此の人の子には大納言敎家があつて、同じく能書であつたが、法性寺風とは少し體が變つて、弘誓院樣と稱して、同じくもてはやされる。

西行法師の筆蹟

西行法師は、左衞門太夫康淸の子にして、元左兵衞尉佐藤義淸といひ、後鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、武勇を以て知られたが、その和歌をよくし、才略にも豐かなる所より、上皇の爲め寵遇せられた。けれども豫ねて榮利を喜ばずして、遁世の志があつたから、その檢非違使に補せられんとするや、職掌を忌んで固辭した。偶々族人憲淸の頓死に接し、大に悟る處があつて嵯峨に遁れ、僧となり、名を圓位と改め、後また西行に改めた。時に年廿三であつた。それより天下の景勝を探りて雲遊を事とし、專ら和歌に情懷をやつた。その集を「山家集」と稱した。



西行筆書状

金剛峯寺蔵

皇の如きは、いたく彼の歌才(かさい)を愛して、西行の才は天性であると宣つた。西行法師一世の美談は極めて多いけれども。茲には省いて置く。嘗て歌を作つて「願くは、花のもとにて吾死なん、そのきさらぎの望月の頃」と詠じたが、果して建久九年の二月十五日、京都に於いて死した。年七十三。嘗て彼が自分の「歌合御裳濯川」の清書を山門の慈鎭和尚に屬したことがあるが、自分もなか〳〵の逹筆(たつぴつ)にて、豪邁不羇の氣象おのづから墨蹟の上にあらはれて、後世より追慕されてゐる。その古筆切として傳へるものには、

落葉切　自詠落葉の歌詠草である。
月輪切　自詠御裳濯川歌合左右番附判詞がある。杉原紙。
白川切　六半。後撰歌二行書き。戸戸切ともいふ。杉原紙。
出雲切　四半。歌五首、杉原紙。
卷物切　朱雀院歌合の歌二行書。

などがあるけれども、殊に白河切を以て優れりとされる。こゝに出した金剛峯寺藏の消息は、彼の歌切に見る如き圓熟せる技巧はない代りに、如何にも武人らしい端的にして健勁な趣ありて、同時に彼れの特色を最もよく示してゐるものである。

藤原家隆の書蹟

壬生二位家隆は、中納言光隆の二男にして、和歌を五條三位俊成に學び當時定家卿と並び稱せられた。勅を奉じて定家と共に「新古今集」を撰び、又「新勅撰集」にもたづさはつた人である。後鳥羽天皇が、和歌の師をお求めになつた時、後京極良經公が、家隆を薦め、且つ『此の人は當世の人麿でございます』とお賞めした。宮内卿從二位にまで上つたので、世に壬生二位と稱するのである。嘉禎二年十二月、病を以て薙髮し、法名を佛性と改めたが、その翌年の四月九日、年八十にて死んだ。此の人は法性寺の書をよくされたが、殊に假名は極めて美はしいものであつた。今もてはやす古筆の切には

升底切　六半、金葉の歌。三行書き。五合升の大きさなので斯く云ふ。

中院切　四半、千載の歌、二行書き。竪長である。

祐海切　卷物。杉原紙。新古今の歌二行書き。

本能寺切　定家卿の章に詳しい。

等がある。

阿佛尼の書蹟

阿佛尼は前但馬守平度繁の女にして、大納言藤原爲家の後室である。はじめ安嘉門院に仕へて、四條と呼ばれたが、のちまた左衛門佐といつた。若い頃から和歌をよくし、また

文章をも書いた。「十六夜日記」、「夜鶴」の如きはその名著である。のち剃髪して法名を阿佛と稱しまた北林禪尼と稱した。爲家の死んでから後、爲相に讓渡された播摩國細川庄を、前室の子爲氏が奪ひ取つて返さなかつたから、鎌倉へ下向して訴へた。その時の日記が「十六夜日記」である。そして、遂に弘安六年四月八日に、鎌倉に於いて死んだ。極樂寺の月影谷は、その栖居のあとであるといふ。此の尼また手をよくし、今なほ

鯉　切　四半。古今注歌、二行書き。白又は薄茶地魚又は家形等のきら畫がある。
角倉切　四半。後撰歌、二行書き。雲紙又は白紙。
六半切　砂子紙、源氏物語等。その外種類が多い。

などゝいふものが、世に殘つて、女流の名書蹟を以て賞翫される。

四、行能、後中書王、行房、尊圓法親王、素眼、兼良基春、實隆

【世尊寺行能】　世尊寺行能は、皇太后宮亮伊經の子で、實に行成の八代の裔孫に當つてゐる。此の人は世尊寺家の筆力の衰へかゝる際に出でゝこれを中興した人で、その筆蹟は見事である。

天福二年に、新勅撰を清書して奉つたこともあり、又鎌倉荏柄天神縁起三巻の詞書、同所來迎寺勸進狀一巻をも書いたといふ。此の他古筆家の所謂

藤井切　卷物。朗詠。墨卦。
縁起切　眞名。卷物。
卷物切　朗詠、下畫、砂子がある。
經切　鳥の子。墨字。

等があつて、皆珍襲せられてゐる。この人、延應二年出家して寂然と號し、建長七年に死んだ。時人の綾小路三位を呼んだのは此の行能のことである。

一宗尊親王の書風一　宗尊親王は、後嵯峨天皇の第二の皇子にして、一品中務卿に叙せられ、鎌倉の將軍をつとめられたので、鎌倉中書王とも呼んでゐる。文永二年、僧良基等が事に座して京都に返られ、その後は鬱々として樂まれず、右近の馬場の雪を御覽じて、

「なほたのむ北野の雪のあさぼらけ
　あとなきごとにうづもるゝ身は」

と詠ぜられたといふ。文永九年二月出家して、行證と申したが、その十一年の九月、御年三十三で薨

ぜられた。親王は和歌を藤原爲家に學ばれて、よくその奥に入られたが、筆道もまた御堪能にして、古代の名家もをさ〳〵及ばぬほどであつた。今も世に

有栖川切　四半。萬葉。飛雲紙、四方に墨罫があり、假名の歌、二行書き。

催馬樂切　四半。飛雲紙、白罫に朱の書入がある。

巻物切　萬葉。金銀泥畫。かな歌二行書き。同仙花紙、墨罫、片假名、朱黒がある。拾遺歌二行書き。貫之に似る。歌合歌二行書き。作者名、勝負等もあり。又仙花紙、詩、墨卦、片假名、朱黒なる物もある。

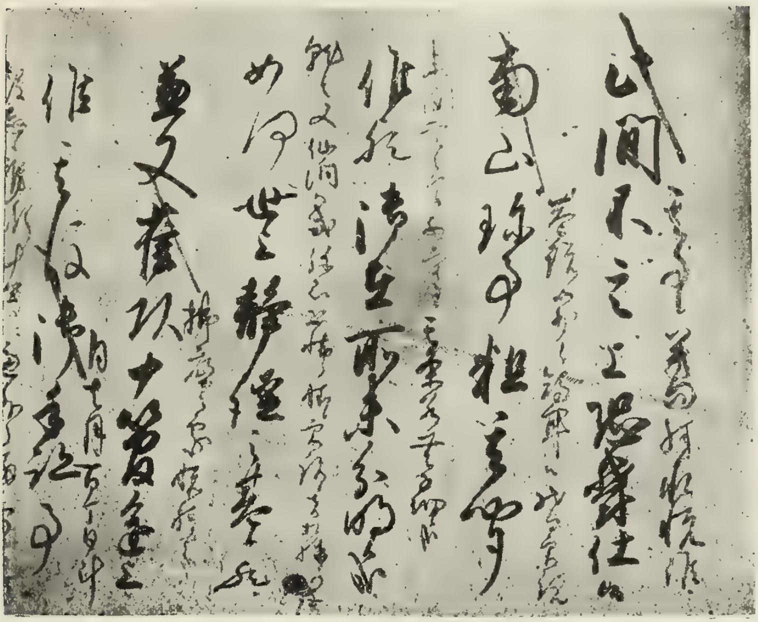
などゝ稱して、上下に珍襲せられてゐる。

世尊寺行房の書風

世尊寺行房は、宮内卿經尹の長男で、行能の曾孫(?)である。後醍醐天皇に仕へ、南朝勤王の臣であつた。春宮に供奉して越前國金崎城に立て籠り、延元二年三月、尊良親王と共に戰死した人である。此の人も、世尊寺家中有數の能書にして、尊圓法親王に入木道の法をお傳へ申したのであるが、それから間もなく、後醍醐天皇の御供をして隱岐へ行つたのに、元弘二年十一月三日、光嚴天皇御即位の大嘗會の時、悠紀(ゆき)、主基(すき)の御屏風を書く人がないといふので呼び戻されたともある。又常在光院の鐘(かね)の銘も、此の人が清書されたといふ。此の鐘は今妙心寺の靈光院に在る。

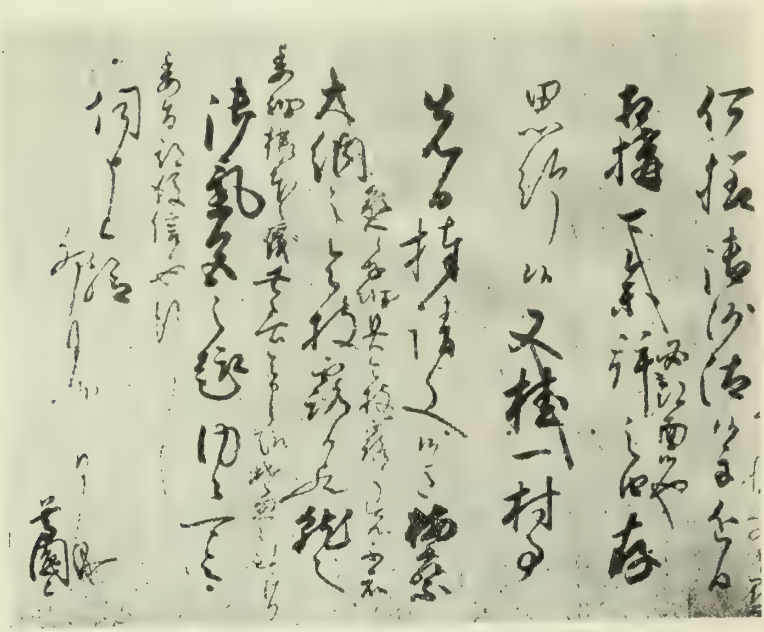
尊圓法親王と御家流

大乘院宮尊圓法親王は、伏見天皇第六の皇子にして、俗名を尊彦(たかひこ)と申した。御母を永福門院播磨内侍と呼んだ。延慶(えんきやう)三年六月、親王となり、應長(おうちやう)元年六月、御年十四にして慈深



尊圓法親王消息

僧正の弟子となり、出家し給ひて御名を尊圓と改められた。叡山無動寺の大乘院に住まれたから、大乘院宮と言つた。元弘元年七月、大塔宮尊雲法親王（のち護良親王）が天台座主でおはしたのに、笠置の行宮へまゐられたので、十月、天台の座主になられた。暦應元年十月、三品の位を得られたが、觀應二年南朝の軍が京に入つて慈嚴和尚を座主に据ゑた間は、打ち籠められて居られたが、幾くもなく南朝の軍が都を去つたので、再び座主になられた。斯くして文和元年十二月、上表して粟田の御室に移らせられ、延文元年九月二十三日、十樂院坊に於いて薨ぜられた。御年五十九に在したといふ。その後二十五年を經て、康暦二



谷森眞男氏藏

年九月一品の位を贈られた。親王は入木道を世尊寺行房及びその弟行尹より受けられ、次第にその蘊奥を究め、上代の疲瘦を改めて、新たに豐肌流麗の風を創められた。けれども筆力は柔脆に流れず、おのづから上代の風があつて、俗に御家流と稱するものは、此の親王より起るとされる。文和元年十一月、後光嚴天皇御手習の際、宣道を蒙つて御手本を書きまゐらせられた。また行房、行尹が口傳したことを書き綴られたものは、有名な「入木抄」であつて、實に入木旨の根源とせられるのである。或る人、親王に向つて、入木道のことをお尋ね申したところ、『たゞ左をして右の如くならしめよ』とだけ仰せられた。その人

御意を解し兼ねて、罷り歸つたが、或る識者は、不自由なる左をして、便りよき右の如くせよとは、一切不自由なる筆をして、いくかへりも習つて、自由になるまで熟練せよとの御意であらうと推したといふ。今、古筆切の中で有名なものには、

金澤文庫切　巻物、萬葉。眞鍮泥の罫。一行一七字、片假名がつけてある。

半きり切　杉厚紙、自詠歌、二行となつて、前に題があり、點もある。

四半切　伊勢物語。

巻物　白紙、墨字、金罫、上下に金銀砂子がある。

巻物切　古今。雲紙。たけ一尺餘り新古今。歌二行書き。雲紙。往來物、詩歌等種々、寸法不定。緣起、一行十六字。

などの類があつて、片紙隻字をさへ尊重する人が多いのである。

素眼法師の書風

僧素眼は時宗の僧にして、京都四條道場に住み、壽福庵と號した。歌をよくよみ、書をもよくした。書は殊に尊圓法親王の上足の門弟にして、後に一流を出し、世に素眼流ともてはやすものである。今も前田侯爵家に傳へる「新札」といふ往來帖の奥書に、「貞治六年丁未七日卒爾馳筆了、金蓮寺隱士眼阿書」とあるものに依つて、その時代を證することが出來る。本阿彌光悅の如きも、はじめは此の人の書風を慕つて習つたといふ。關白秀次も亦、善く彼の書を賞し、その筆

である「四條道場一遍上人緣起」十卷が、他へ典物に入れてあつたのを受け戻し、文祿二年五月十七日、改めて四條道場に寄附せられ、『寺家不出』であるべき旨の朱印を與へられたもの、今も金蓮寺に存してゐるといふ。此の法師はつねに雲水の遊歷を事とし、その終る所をも知らない。

一條禪閤の書風

藤原兼良は、一條經嗣の子で、その官は關白太政大臣にまでのぼり、從一位に叙せられた人である。この人、當時才學絕倫にして、朝廷の典故に通じ和歌をよくし、かねて神佛の道にも精しかつた。嘗て室町將軍義尚の爲めに、「樵談治要」を著はされたが、此の他に「花鳥餘情」、「古今秘訣」「歌林良材」「文明一統記」、「東齋隨筆」「尺素往來」等の著書もある。文明五年出家して、法名を是惠と號せられたから、これより世の人、後成恩寺殿と申し、また一條禪閤とも呼んだ。文明十三年四月、年八十にて死なれた。應仁の亂に際して、兼良の桃花坊の文庫が燒けて野原となり、その附近の盜賊共が、七百餘合の書を蹂躪し、大路を反古で埋めたといふことが、その自著にかゝる「竹林抄」の中に見える。蓋し七百餘合の書とは、一合五十卷として三萬五千餘卷である。當時斯く多數の文書を藏したのは、以てその篤學博覽のほどを知る可きである。此の人の能書であつたことは、多種類の歌道國文に關する抄物を始め、懷紙短册は勿論、「藤川日記切」、「源氏の註」などいふのを見れば解るのである。

持明院基春と其流風

持明院基春は、權中納言基藤の二男にして、官は參議左衞門督にまでのぼり正三位に敍せられた人である。入木道を世尊寺行高に受け、その奧義を究めた。嘗て將軍足利義澄の大旗小旗を書いたことがあるといふ。而して從來、朝廷の御儀式に用ひられる御書は、世尊寺の一家で書いたのであるが、世亂れて、頭中將行房が金崎城で戰死してから、弟宮內卿行尹、その家道をつぎ、以下行季に至るまで、聖賢障子、年中行事障子、大嘗會屛風、飾御旗、武家の旗、社寺の額等、殆ど專任を以て書いて來たが、享祿二年に世尊寺十七代行季の死んだ頃には、山名・細川の合戰打ち續き、將軍義晴さへも、江州朽木へ逃れた程であるから、王室の式微甚しく、入木道の事も亦顧る者がなくて一時斷絕したのを、後奈良天皇、甚だその道の陵夷を慨かれ、持明院は代々世尊寺の門弟であるからとて、特に彼の家の業を基春に勅許されて、こゝに世尊寺に代つて持明院の筆道なるものが起つた。固より、書風の巧拙を以て言へば、必すしも稱すべきではなかつた。此の人は、天文四年七月廿六日、年八十三にて死んだ。

逍遙院實隆の書風

實隆は、內大臣實繼の二男にして、はじめ名を公世といひ、また公延とも呼んだ。侍從左近衞少將、參議權大納言等を歷て內大臣までのぼり、永正十三年四月剃髮して、法名を堯空と稱し、緇衣を身に纏ひて名區をさぐつたといふ。「高野詣日記」の如き斯くして出來たものであ

る。天文六年十月、年八十三で死んだ。此の人、科隱、逃虚子、聽雪等の號があつたけれども、世に逍遙院殿と稱してゐた。その書風は尊圓法親王の流から出でゝ、一流を立て、三條流といつたのである。

五、近世和樣の趨勢

足利末期の書道書蹟　足利時代の末期、應仁の亂の頃よりして世は所謂戰國時代となり、群雄諸國に割據して、攻伐略守を事とし、朝廷は式微し、幕府の政令は行はれず、民人塗炭に苦しむものがあつたけれども、その將に足利幕府の崩壞せんとするに先つては東山將軍義政があり、大亂の漸く平定して桃山時代に入るや豐臣秀吉があり、引きつゞい德川の昇平に入つたので、一面に血腥き戰塵の立ち亂れてゐたと共に、他面にはまた風流韻事の意外に廣く深く玩ばれつゝあつた奇現象を見るのである。殊に義政は茶道に耽りたるが爲めに、これに附隨する書畫骨董を愛玩すること甚しく、茲に我が國の風流鑑賞史に一新時期を劃したのである。されば、書道も亦それにつれて特別の方向へ進んだが、しかも義政及びその帷幕に參する人々の趣味は、禪の思想を中心とした宋元の趣味であつたので、その玩んだ書蹟も亦唐以前の物よりも寧ろそれ以後のもの、殊に支那に於ける禪家高僧の墨蹟を最も尙

び、或はその我が邦に歸化したる名僧、本邦著名の禪僧等の遺墨を愛することゝなつたので、美術上の書は當時の持明院流、世尊寺流、御家流などゝは、相干渉するところが、比較的薄かつた。然れども、曩に一條禪閤兼良あり、足利の末期に至つても細川幽齋・太田道灌の如き歌人があつたので、國文國歌を全然閑却したのではなく、當然これに隨伴すべき和様の假名書き等も亦、風流人の間にもてはやされた。貫之・道風以下、西行・定家に至るまで、皆珍什として尊重せられたことは、宗祇法師が定家の小倉色紙を藏したことに依つても知られる。

秀吉等の古筆趣味　殊に豐臣秀吉及び秀次は最も古筆を愛し、盛にその集蒐に力めて斷簡零墨と雖も、珠玉の如くに愛惜したるが故に、臣屬の諸將、若しくは當時の茶匠輩も亦、茶室の裝飾品として、はた習書の手本として、和様（廣義の）の古筆を探求した。實に古筆なる一名目は當時より始まつたので、徳川時代を通じて古筆趣味の衰へなかつたもの、秀吉等の趣味から導かれたものである。併しながら是等は猶ほ古筆の鑑賞好事に止まつて、禮に嫺ふことの淺き武人間には未だこれを學んで自から善書の域に達した者は乏しかなかつた。然るに豐臣氏の勢衰へ徳川氏の世になるや、こゝに三百年泰平の氣運勃興し、書道は奐然として榮えたので、鎌倉初期以來の盛況を呈した。中にも近衞信尹（三藐院）本阿彌光悦・瀧本坊昭乘（松花堂）の如きは、世にこれを寛永の三筆と稱するほどの名家にして、共に遡

つて古代の名蹟を研究し、更に各々一格を開いて信尹流、光悦流及び松花堂流を出した。その中信尹は初め尊圓法親王の御家流より出でたる、昭高院道澄法親王の流を學び、光悦は初め同じく御家流の青蓮院尊朝法親王の傳授を受け、のち空海・道風の書法を慕ひて一家を成し、當時その流を汲む者多くその上足の門人角倉蘇庵の如く別派を起した者さへもある。而して松花堂昭乘に至つては、唐様の先達とも言ふべき近衛前久(龍山公)に書法を學び、のち空海の筆意を研究して遂に空海の眞に迫るの書風を出したのである。これより和様の書風も再び語るべきものがあつた。

持明院流から賀茂流へ

然れども是等は御家流その他の流風を追つたとは言へ、各々別派を立てゝ我れより新様を出したもの、以て古來の傳統を系承したとは言へない。それは即ち持明院流の成り行きを見ねばならぬ。持明院家は持春より四代にして基久があつたが、彼は慶長二十年五月七日、大阪の落城にて陣歿し、此の傳統も亦一時は絶えなんとしたが、その父基孝の門人に良恕法親王があり、これを受けて更に基久の養子基定に傳へ斯道の名義は再び起つたけれども、見るに足るべき書風も出さなかつたので、ついで後水尾天皇の叡慮により、賀茂の神官藤木敦直の能書なるを擧げて書博士となし、勅して公事の書役を掌らしめ給ふことゝなつた。蓋し敦直は書道を伯父成定に承け、成定は飯河秋共に承け、而して秋共は天文年間に曾我刑部大輔孝成より、上代様の書法を學んだもののこと

である。世にこの一派を賀茂流と稱し、持明院に代つて朝廷の書師となつてゐた。然るに敦直の曾孫司直に至つて家絕え、家の法のみは司直の門人賀茂縣主岡本邦氏に傳はり、書博士の名義を持してゐたが、邦氏も死するに及んでその家二たび絕えた。時に賀茂縣主岡本保考なる者、斯の道を司直の門人花山院常雅に承けて書博士となり、それより子孫相承して明治に及び、賀茂流の家元と呼ばれてゐる。斯くて、凡そ右事の書役は賀茂流に移つたけれども、入木道の相承は依然として持明院家にこれを掌り、賀茂眞淵・加藤千蔭の如きも嘗てその門に入つたのである。

近世國學者及歌人

然れども持明院流、賀茂流の如きは、たゞ書道の傳統と典型とを相承するのに止まり、美術としての能書家は、德川時代に入つて更にこれ等の流派以外に現はれた。その、他の方面は暫く措き、和様のみについて見るも、慶長寬永の昔に、公卿烏丸光廣・武人細川玄旨幽齋があり、一は磊落の書様を以て、他は洒脫の筆致を以て、當時の三筆と並び稱せられ、他に木下長嘯子・深草元政・飛鳥井雅章の如きがあつた。ついで元祿に入つては國學復活の名家として北村季吟・僧契沖あり、荷田東麿・賀茂眞淵・本居宣長に至つても亦書蹟を今に珍重せられてゐる。村田春海・加藤千蔭・小澤蘆庵・伴蒿溪・富士谷成章・上田秋成・清水濱臣・平田篤胤・香川景樹・橘守部・小山田與清・千種有功・石川依平・大國隆正・八田知紀、女流に於ては大田垣蓮月・高畠式部、而して近へ

は明治の國學者、歌人の遺墨に至るまで、相當に見るべき書風を出し、隨つて或は短册に色紙に、或は幅物に卷物に、玩賞の價値あるとされてゐる。只玆には是等の傳歷を一々詳述せず、「國學者傳記集成」その他の類書に讓り、最も能書の聞え高き人のみを略說する。

六、尊朝法親王と寛永三筆

〔尊朝法親王〕 龍池院宮尊朝法親王は、伏見宮邦輔親王の御子で、正親町天皇の御猶子となられたが、元祿元年十一月、青蓮院に入り、同じ五年剃髮して敎を尊鎭法親王から受けられた。その翌年親王宣下があり、つゞいて二品に叙せられ給うた。延曆寺を再造せられるや、天正十三年二月、天台座主となられ、慶長二年二月十三日に薨ぜられた。御年四十六、世に龍池院宮と稱するのである。青蓮院風の書をよく書かせられて、尊朝流と稱した。彼の「墨池常譜」といふ入木道に於ける有名なる書を著はし、また「唐崎松記」等をも書かれた。

〔三藐院信尹〕 近衞信尹は、はじめの名を信基といひ、天正十年信輔に改め、また慶長四年信尹に改めたといふ。官は關白左大臣にまでのぼり、從一位に叙せられた。關白大政大臣近衞前久（龍山公）の子で、書畫共に堂に入つてゐた。天正の頃から法名を三藐院と號したから、世に三藐院殿を

以て通稱した。慶長十九年十一月二十五日、年五十で死んだ。陽明家には、代々能筆の人があつたが、殊に此の人最も有名で、はじめ道澄流を學び、のち一風を出して、當時瀧本坊昭乘・本阿彌光悅と共に三筆の一人と言はれた。三藐院流と稱するのは、此の人から始まる。

本阿彌光悅

藝術のあらゆる方面へ天才を發揮した我が光悅については、他書にも詳しく述べてあるが故に、（「日本畫の智識」「骨董の智識」等の諸卷參照）茲には主として書道に關することのみを語つて置く。光悅幼名を次郎三郎といひ、太虚庵と號し、また自德齋、德友齋などゝも號した。父を次郎左衛門入道光二といひ、母を妙壽と言つた。光悅は幼年より多能にして、刀劍の鑑定、磨礪、淨拭の三事に長じたのみならず、書畫をよくし、また陶器、蒔繪をもよくした。書は、はじめ素眼を習ひ、中ごろ空海を慕ひて、その蘊蓄を養ひ、更に、入木道のことを青蓮院宮から承はつたといふ。のち道風の「古今集」

について假名をも習ひ、その妙境に入つた。この「古今集」は、今「本阿彌切」と稱して傳はるものであるといふ。又光悦は、尊圓法親王の御硯匣の、紺かきの彩色の具の入れ物になつて居たのを買ひ求めて、常にこれを用ひたといふ。當時近衞三藐院・八幡松花堂とを併せて三筆と稱したことは、他の各項に語る通りである。光悦流も亦、學ぶ者頗る多かつたが、殊に嵯峨の角倉素庵はその上足の弟子であつたといふ。書については光悦自身でも得意であつたと見え、或時、三藐院殿が、光悦に尋ねられるには、『今天下に能筆と言ふのは誰であるか』と。光悦答へて曰く、『先づ。さて次は君、次は八幡の坊(松花堂)でありませう』と。三藐院重ねて曰く、『先づとは誰か』。光悦答ふらく、『恐れながら私にござります』。又或る時、三藐院が俄に光悦を召されたから、何事かとあはてゝ參ると、御前に召して、光悦の手をきつと捉へて『汝は、汝は！』と、聲もあらゝかに仰せられる。光悦は思ひも寄らぬことであるから、『御意を得ません。覺えもござりません』と恐れ〴〵申したから、三藐院はにこ〳〵と笑つて、『おん身は、どうして斯うも上手に字を書くのか』と戯れられたこともあるといふ。光悦の書はひとり我が邦人の賞翫するのみならず、明人も亦大に賞翫したことは、長崎へ來つた、單鳳翔が、光悦の書を見てその奥に、「一幅日本書、半是中朝字、渾如草澤間、飛出龍蛇勢」と書きつけたのでも知られる。その遺墨今日に傳へて珍重せらるるもの頗る多い。晩年洛北鷹峰の地を賜はつて、閑居した

が、寛永十四年二月三日、年七十にて死んだ。

瀧本坊昭乘

昭乘は通稱を式部卿惺々翁と號し、また松花堂とも言つた。南都一乘院の坊官中沼左京の弟にして、幼年の時より男山八幡に入つて僧となり、阿闍梨法印にまでのぼつた。はじめ鐘樓坊に住み、のち瀧本坊に住んだ。故に瀧本坊を以て稱としたのである。のち瀧本坊をも弟子に譲つて、松花堂をいとなみ、これに移り住んだのである。書は、はじめ尊朝法親王・近衛龍山公などについて習つたが、中頃空海を慕つてその入木道を繼がうとする考を起し、天王寺に行きて張伯英の墨池になぞらへ、龜井を掬んで研水として、筆法の工夫に夜を日についだといふ。後つひに一流を出し、世に瀧本流、又は松花堂流と稱するものこれである。嘗て關東へ降つて、將軍家の御前で物を書いたところ、關東は水が惡くて筆の勢ひが伸びかねると言つたので、都ではどんな水を以て書くのかと問はれ、京の柳の水が輕くてよろしいと申した。將軍怪しいことに思つて、ひそかに都へ人をのぼせ、柳の水を瓶に入れて取寄せしめ、重ねて試みたところ、筆を把つて硯に浸し、少しばかり字を書きかけたが、筆を止めて傍に向ひ『これは誠に輕くてよい水である。京で用ゐる柳の水に少しも異ならない』と呟いたので、皆人大に驚いたといふ。彼の能書については今更言はず、書も亦三筆の一人であつたので、當時の最も優れた人であつたことは解る。今も世間に大小の遺墨が多くして、語るを

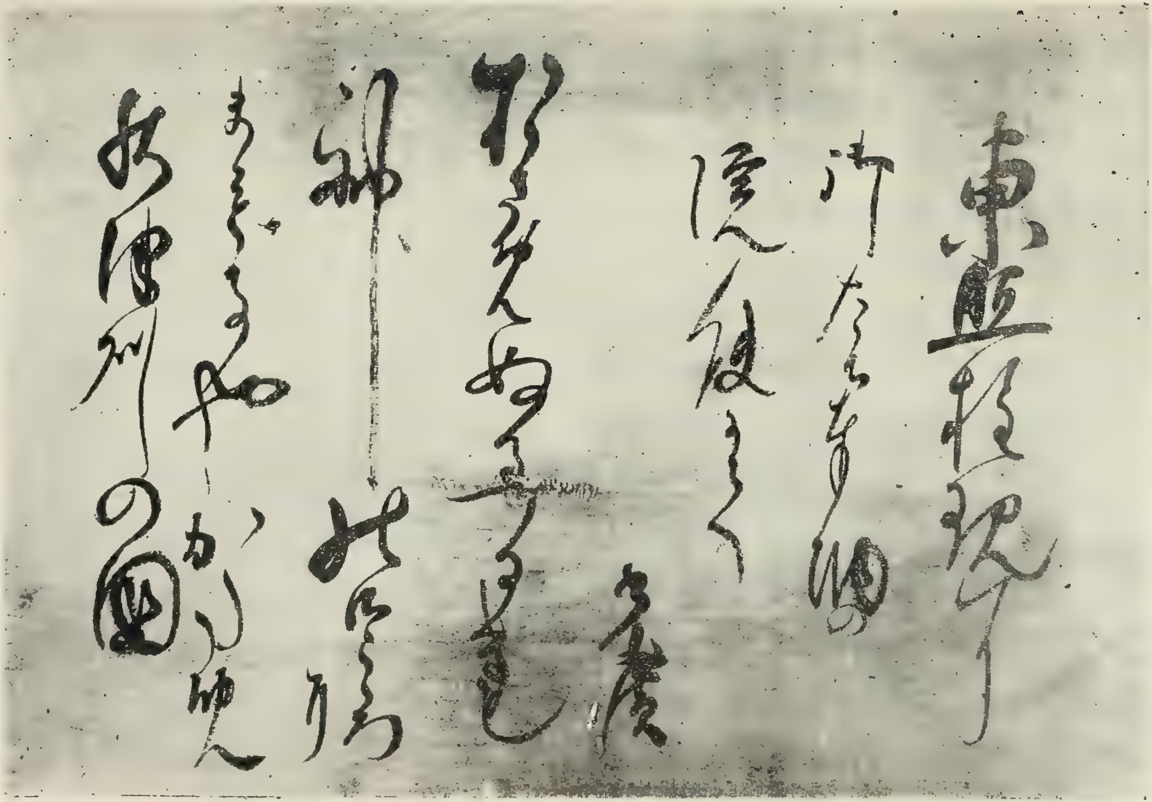
要せないであらう。殊に茶人の間にもてはやされ、光悦の書と共に、當時より尊重せられたこと、その死に臨んで小堀遠州等が馳せ參じて、いたく哀惜したとのことでも知られるのである。彼の「和漢朗詠抄色紙」は今コロタイプ版として世に行はれるが、その原本は京都建仁寺塔頭禪居庵にあり、六曲屏風に張りつけた二十二枚のものである。又「三十六歌仙色紙」も、コロタイプ版の法帖となつてゐる。同じく京都仁和寺の什寶にして、下繪のある地紙に、墨痕淋漓として揮灑したもので、三十六葉ある。又「新歌仙」なるものも、松花堂の眞跡中最も清勁なるものとされて、原本は松方侯爵家の所藏であつたのを、同じく寫眞版の帖として用ひられる。彼は又和歌をも詠じ、殊に秀逸とせられた。寛永十六年九月十八日、年五十六で死んだ。

七、烏丸亞相、角倉素庵、小堀遠州

烏丸光廣

烏丸光廣は、儀同三司光宣の子で、號を烏有子といひ、官は權大納言までのぼつた。正二位に叙せられた。故に、世に烏丸亞相と稱したのである。書は定家流、光悦流を好みて一派を出し、畫もまた巧者であつた。寛永十五年七月十二日、年六十四で死んだ。法名を宗山法雲と言つてゐる。彼の人となりについては、嘗て遊蕩姦淫の罪を以て、大炊御門賴國・猪隈敎利・花山院

烏丸光廣



忠長・飛鳥井雅賢・難波宗勝・松本宗信・徳大寺實久等と共に、海島に流竄せられたが、間もなく光元・實久の二人は罪を宥されたとのこともある。この人常の居間に書物を繙きならべ、四枚の襖を二枚開き、机一脚に硯があつて、三本入の扇子箱に筆があり、その間へは年月經ても人の入り來ることなく、故に坐つたあとがあつて、その外は塵が滿ち滿ちてゐたといふ。彼は又公宴參内の時にも、右の硯を入れた扇子箱を離さず、手に提げた儘乘輿に入るを常とした。江戸に下つて三年間居て、歸京あるべしとのことであつたので、かねて座敷の前に庫があつたのを、留守に置かれた雜掌の云ふには、卿は久しく江戸におはして廣き所になれ給ひ、歸京の後も此の庫が眼の前に在つては御邪魔になるであらうと言つて毀して仕舞つた。庫には、數十年諸家から贈つた物を積んであつたので、その品物は書院にならべ、詳に書き記して家人に分配したのであつた。斯くて光廣が歸京して程經たけれども庫のことは言ひ出されない。そこで雜掌の方から『庭の樣子が變りまして』と申すと、『左樣に見える、庫は如何にしたか』とのこと、しか〴〵と申すに『内の寶物は』とのお尋ね、『皆に配り與へてござります』『それはまことによかつた、汝は何を得たるぞ』と問はれたから、『いや何も得ませんなんだ』と率直に答へると、『それは無調法のことよ』と笑つた限り、取りあひもしなかつたといふ。以てその胸中の磊落を知ることが出來る。

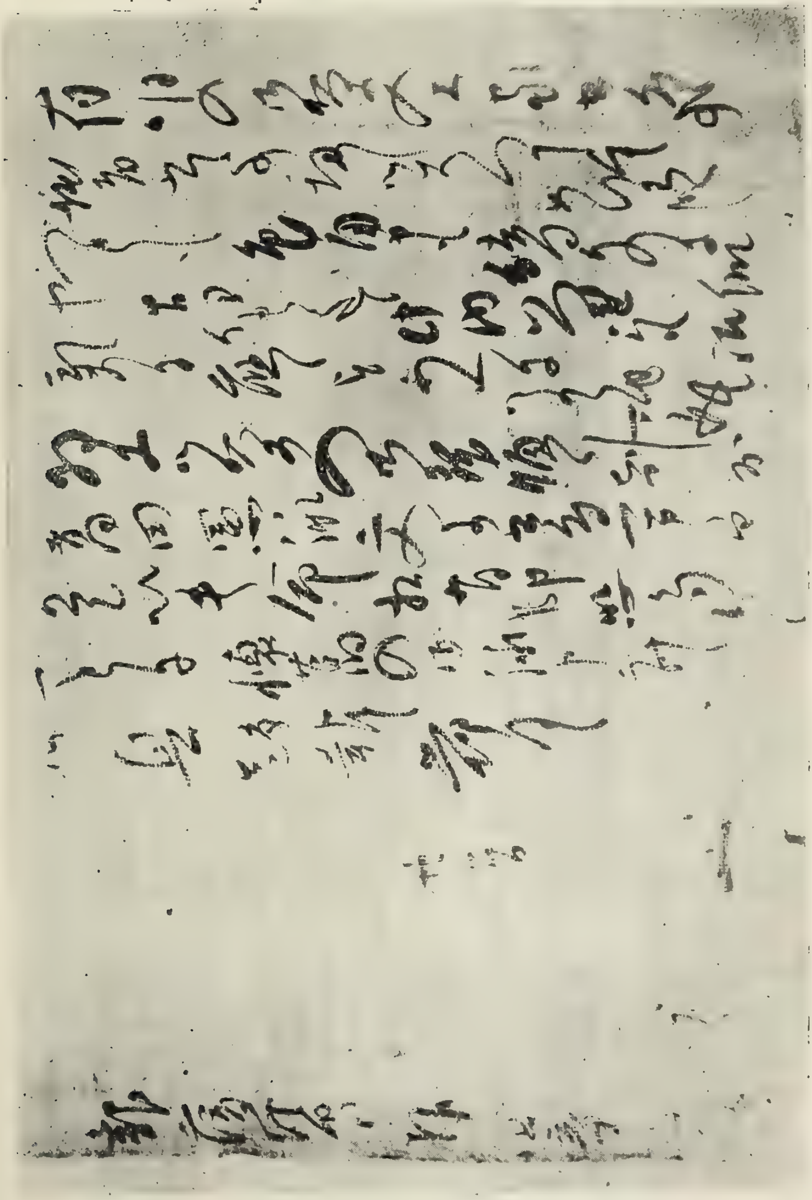
角倉素庵

素菴は元佐々木家の支族にして、氏を吉田と稱し、世々近江に住したが、五代の祖徳春の時、出で丶將軍義滿、義持に仕へ、つひに鄕里を去つて洛西嵯峨にうつり、角倉の地に住したといふ。故に人呼んで角倉と稱した。素菴は了以の子にして、通稱を與一郞と言つたが、人皆、「郞」の字を省いて與一と稱した。名は光昌、字は玄之、一に子元また貞順といひ、薙髮して三蘇菴と號した。のち三の字を省いて蘇菴と改め、また蘇の字を素に改めたのである。年若き頃、豪氣にして死を恐れず、危險を冐すこと數度にして、三度殆ど死地に陷つた事があれど、幸に生を得て、家計もゆたかになつたから薙髮のはじめは往事を追懷して三蘇庵と號したのであるが、のち萬事素に歸すといふことを悟つて素菴と改めたといふ。素庵は水車を持ち、また淀川三十石の船を數多持つたが、慶長元和二役の後は、他人にて淀川通行をする者の船税などをも收納することをゆるされたから、年分の所得は甚だ多かつたといふ。又、大船にて年々暹羅地方へ交通し、貿易を試みたので、その富は大名高家にも劣らなかつた。寛永九年六月二十二日、年六十二にて死んだ。學問は藤原惺窩に受け、書は光悅に學んで、その流の隨一と稱せられ、のち自から一風を出してこれを與一流、角倉流など稱へ、當時此の流を習ふ者が多かつたといふ。殊に彼は書に心入が深かつたから、古筆などを多く所有したと見え、阿佛尼自筆の奥書ある後撰集全部を所藏したのを、古筆了佐が請ひ得て切となしたもの

世に角倉切とて今に散在して居る。また素庵は諸書を上梓して文學上に利益を與へたことも少なくない。即ち「伊勢物語」「源氏物語」「平家物語」等を上梓し、また明凌稚隆の「史記評林」をも上梓した。世にこれ等を稱して嵯峨本又は角倉本と稱するのである。また彼は觀世黒雪、觀世宗雪など、光悦の同門にて親交のあつた所より、謠曲の譜本を上梓したこともある。世に光悦の謠本と言ひ傳へるもゝ中には、素庵の自筆本もあつて、今は紛れて分ち難いといふ。

小堀遠州

小堀政一（こほりまさかづ）、姓は藤原、通稱を作助といひ、號を宗甫、孤蓬庵などゝ言つた。近江の人にして、小堀正次の子である。父正次、はじめ大納言秀長に仕へ、三方ヶ原の戰に高名して三千石を領したが、秀長の卒して養子秀俊も亦早世するや、太閤秀吉に仕へて二千石の加增あり、五千石を領した。その後關東方に屬し、關ヶ原の役に大に盡力したから一萬石の加增ありて備中の松山城を守り、且つ大久保石見守、板倉加賀守と同じく五畿七道の政務を沙汰し、事每に連判を加へてゐた。政一も、はじめ大閤秀吉に仕へたが、慶長九年、父正次の卒して後は關東に仕へて、父が遺領一萬五千石の内一萬三千石を領し、二千石を弟正行に分つた。慶長十三年從五位下に叙せられ、遠江守に任ぜられた。これより人その名を呼ばずして、たゞ遠州と稱した。慶長十一年以來、禁裏、仙洞をはじめ、二條、大阪、駿府、名古屋、伏見、水口等の如き大工事より、種々の茶屋數寄屋の如きもの

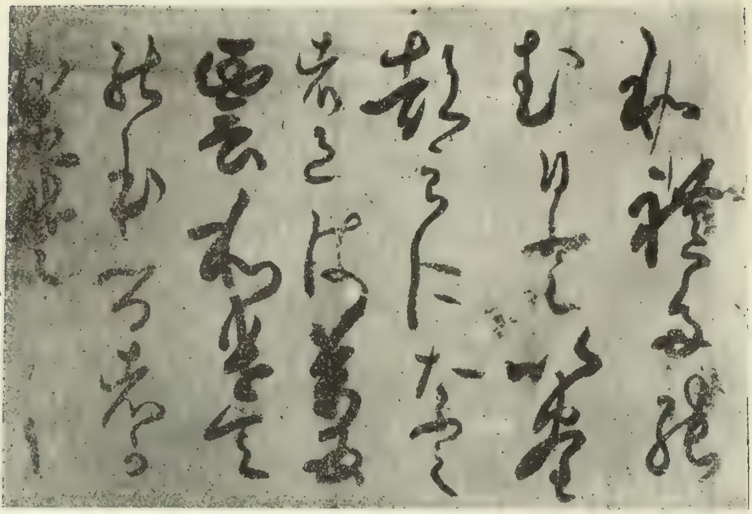


に至るまで、大概彼が奉行にて成功したのである。此の外、彼が政治上の思想に富み、治世の才に長じたことは、大阪の役兩度とも、郡山に出張して新に大阪應援の道を遮斷し、暴徒を未發に防いだ如き、或は宇多、姫路、和歌山、福知山等に出張して、政務を沙汰したるが如き、或は河内近江の奉行となり、且つ五畿内の訴訟をあづかつたが如き、或は伏見奉行となりて、在職二十五年、よく治績を擧げたるが如き、一箇の政治家としても、充分に仕事をした。伏見奉行在職中、正保四年二月六日、六十九歳で死んだ。紫野大徳寺中孤蓬庵に葬つた。蓋し孤蓬庵は彼が開基だからである。政一は古田織部隨一の門人として、茶道に秀でたことは言ふに及ばない。和歌をよくし、繪畫に巧みにして、殊に書畫骨董の鑑識に於いては古今に比なしとされる。而しては書は定家樣を好んで、時に六々山人の隸書の風をも書いた。定家樣の眞髓を得て居たことについては次の逸話でも知られる。嘗て加賀大納言が、定家卿の筆を一幅買ひ求めたので、政一を招きて、これこそとてその掛物を馳走せられたところ、政一これをつく〴〵眺めながら、一向言葉がない。座付何となく物さびしかつたので、取持ちに參つた坊主ども、政一にさゝやいで、あの掛物をお求めになつた御披露に今日貴公を請じ申されたのです、定家卿の筆であれは、一入おほめなされませと言ふと政一打ち笑ひ『あの掛物は、正しく私の書いたもので、證據もあります。それ故最前から心付いてゐたけれども、御馳走に我が手跡をかけられ

たものであらうと存じて居ました。我が書を我れながら何うして褒められませうぞ』と答へるに、坊主共もその能書なる事を感じて返答に及ばず、興をさましたといふ。彼には六男六女があつて、長男喜三郎は早世したから、二男大膳正之、父のあとをつぎ、三男淺井權十郎政尹、父が遺領の内千石を領して別に一家をなした。大膳、權十郎は共に父に似て定家様をよくしたが、殊に大膳の如きは、禁裡に召され、御前に於いて面目を施したこともあるといふ。

藤木敦直

藤木敦直は、世々賀茂の社の祠官であつて、從五位上甲斐守に任ぜられた。入木道を飯河秋共（曾我部刑部大輔孝成の弟子にして、官は治部少輔姓は淸原、一雨齋妙佐と號した）併に秋共の弟子にして敦直の伯父なる賀茂縣主成定（正五位上駿河守）より受けて、遂にその奥義を極めた。はじめ年十九、筆を把ることを知らなかつたが、一日三條の大橋を過ぐるや、たま〳〵馬丁の來つてその送牒の宛名を問ふに、敦直これを讀むことが出來ず、慚愧骨に徹し、それより夜を日について學問と書法とを研究し、のちに書は空海三跡の筆意を慕ひて、その妙を得たのであるといふ。嘗て敦直は庭中に賀茂川の水を入れて眺めて居たが、偶々伯父成定の來つて、徒然かと問ふに『いや手習ひをしてゐます』とのこと、傍を見ると、筆も硯もない。こゝに於いて伯父も大に喜んで、流石は我が甥であると賞めて歸つたといふ。敦直は山を見ても水を見ても、字を習ふ心持を忘れなかつた。後水尾天



藤木敦直

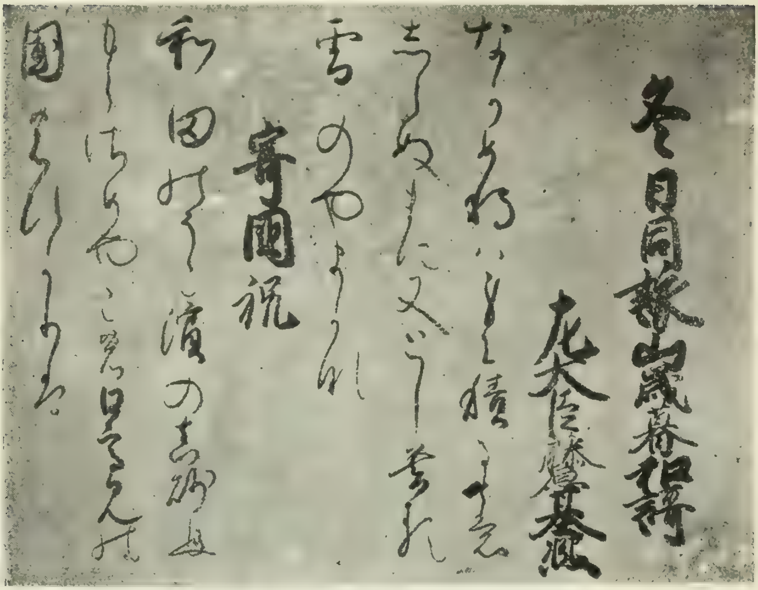
皇の叡慮にて書博士の宣下を蒙り、これまで持明院にて書いた御即位の時の萬歳幡その他を書くことになつた。その子孫代々書博士となつた。慶安二年正月四日、年五十八で死んだ。世に賀茂流とも甲斐流とも稱するのは、彼等から起る。子の寂源(高良山座主)門人の荒木素白・佐々木志津磨皆よく書法をもて顯はれた。

荒木素白と渡邊素元

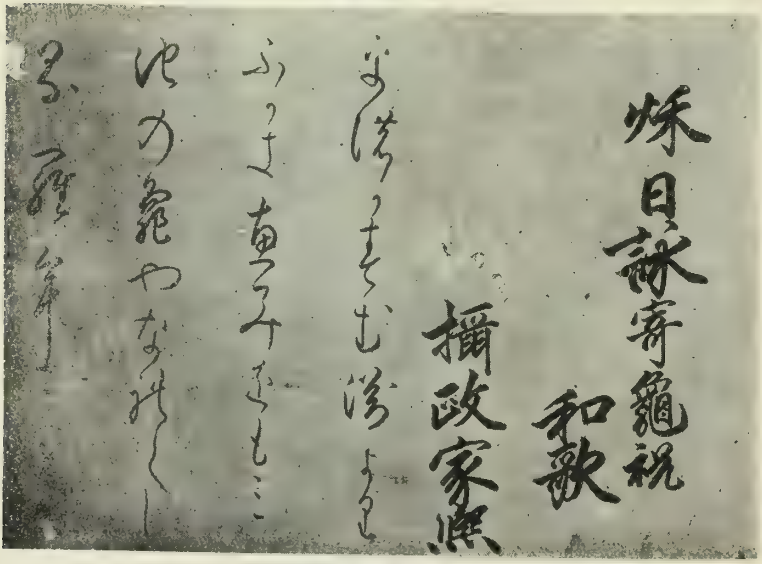
素白、はじめの名は光辰通稱は内膳といひ、烏丸亞相の家來にして、のち水野藤堂等の諸侯に仕へたが、故ありて京にかへり、靈隱寺の一絲和尚に從ひて禪學を修め、名を虛空素白と改め、また出でゝ仕へなかつたといふ。書を藤木敦直に學んだけれど、道風を慕ひ、殊に假字をよくした。嘗て後水尾天皇、素白が書名を

きこしめして、烏丸資慶をして旨を傳へられ、團扇色紙等に書を書いて奉らしめられた。後西院天皇も亦、書名をきこし召され、宸筆天滿宮額字の評をせよとの勅を傳へしめられたといふ。貞享二年、年八十六で死んだ。門人渡邊素元がその後をついで、書名殊に高かつた。素元は、はじめ素平と言つた人で、名を正信と言つた。この人もまた道風の法を慕ひ、假字をよくしたといふ。元祿中、年七十餘にて入木道のことを記したが、持明院持時これを見て、名を「臨風抄」と命じたと傳へる。

豫樂院家凞　家凞は近衞基凞の子で官關白太政大臣にまでのぼり、従一位に叙せられた。號を虚舟と言つたが、享保十年十二月二十四日、落飾して法名を眞覺豫樂院と號したので、世人これより豫樂院殿を以て稱した。元文元年十月三日、年七十二で薨した。手跡は上代の筆風をよくしたがその心入れの厚かつたことは、宇治鳳凰堂の扉の色紙に書いた堀川左大臣の筆跡を慕つて、折々これを影寫し、また和漢の能書家の眞蹟より選り拔いて、「流代草書」と云ふ四冊の字書をも編んだといふ。この書はもと錦小路家に在つたのを、青木信寅が求め、更に小杉榲邨の手に歸してゐた。空海・逸勢・道風・佐理・行成・道長・俊房・伏見天皇・慈道法親王の九大家に、王羲之・王献之・智永・唐の太宗・張懷素・孫過庭の六家を加へたものである。また細井廣澤が上木した正面摺朱晦庵の帖に、みづから筆を染めて序文を書いたこともある。「心經」「遺教經」、「和漢朗詠」「歌學大概」等此の



近衛基熙

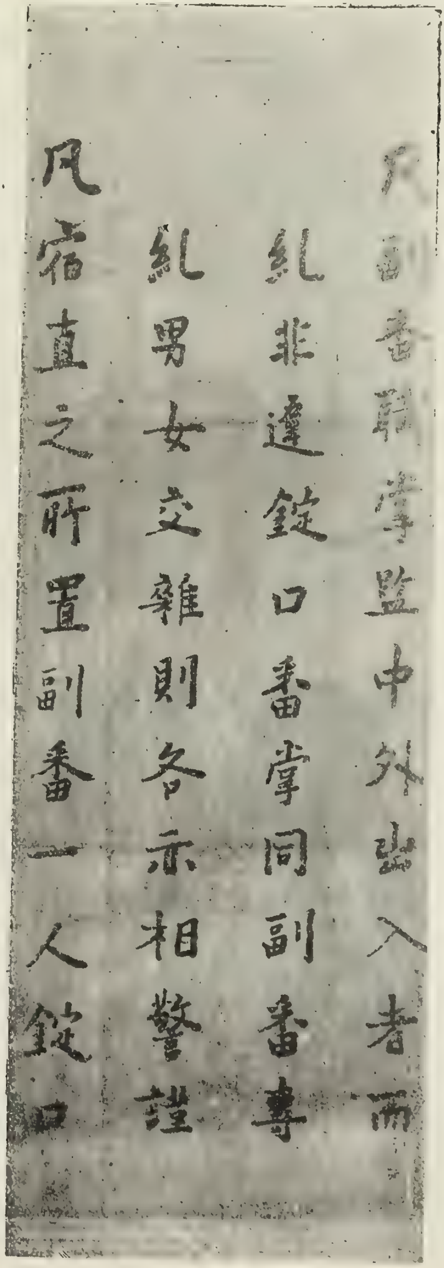


近衛家熙

人の眞蹟で墨帖となつたものも極めて多いといふ。此の人は墨畫をもよくして、竹などに美事なものを見るのである。

賀茂眞淵

眞淵は賀茂縣主氏にして、その遠祖は神魂神の孫、鴨武津之身命で、此の

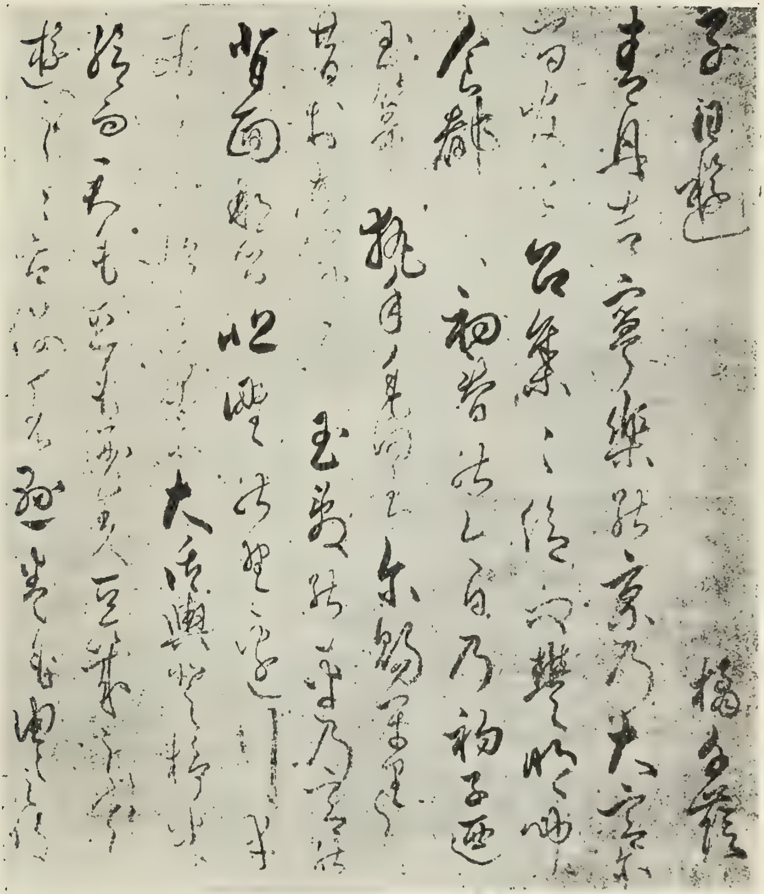


神の末が山城國相樂郡岡田、賀茂大神を齋してゐた。師朝といふ人、文永十一年遠江國敷知郡濱松莊岡部郷なる賀茂の新宮に來り、その郷を賜はつて神官となつた。眞淵は此の岡部新宮の禰宜岡部定信の二男で、はじめ通稱を參白といひ、後に衞士と改めた。縣居はその家號である。早くより古學に心

を傾け、享保十八年に京へ上つて稻荷の荷田東麿の敎を受けた。その後寛延三年に江戸に下り、田安家に仕へたが、寶暦十年致仕して義子定雄に家を讓り、明和六年十月晦日、年七十三にて死した。東京在品川の東海寺少林院の後山に葬つた。彼は書字の技極めて優れ、その大字萬葉書きなどの、飛動の運筆は實に驚くに堪へたものがある。兼ねて王右軍の古法帖を模し、また假字を持明院家の門に入りて、上代の風致をうかゞひ、その奥旨を得てゐたのである。その國學上の造詣、及び歌人としての面目は改めて傳へるまでもなく、實に近代の一大人物と稱すべきものであつた。

加藤千蔭

千蔭はその姓橘にして、字を常世麿といひ、通稱を又左衛門と稱した。此の人別に薬園・芳宜園・耳梨山人・江齋・逸樂窩等の號があつた。加藤枝直の子にして江戸の人である。父は享保五年はじめて與力となり、町奉行越前守大岡忠相に屬してゐた。彼も亦性和歌を好み眞淵の江戸に來るや、招きて近隣に住ませ、何くれとなく心添をなしたといふ。故に千蔭も年十二三の頃より歌よむことを父に受け、十四の年千蔭と改め、眞淵の門に入り、深く古學を慕ひて、のち遂に「萬葉集略解」三十卷を著はし、官に上りて銀若干を賜はつた。書は松花堂を慕ひてその妙を得たが、また入木道傳授の法をも受けて、遂に一流を出し、千蔭流とて世にもてはやされ、その墨蹟及び手本類の刊本も多く傳はつてゐる。また畫を建部凌岱に學んで、その戯墨も時に人の賞翫する所となつた。江戸



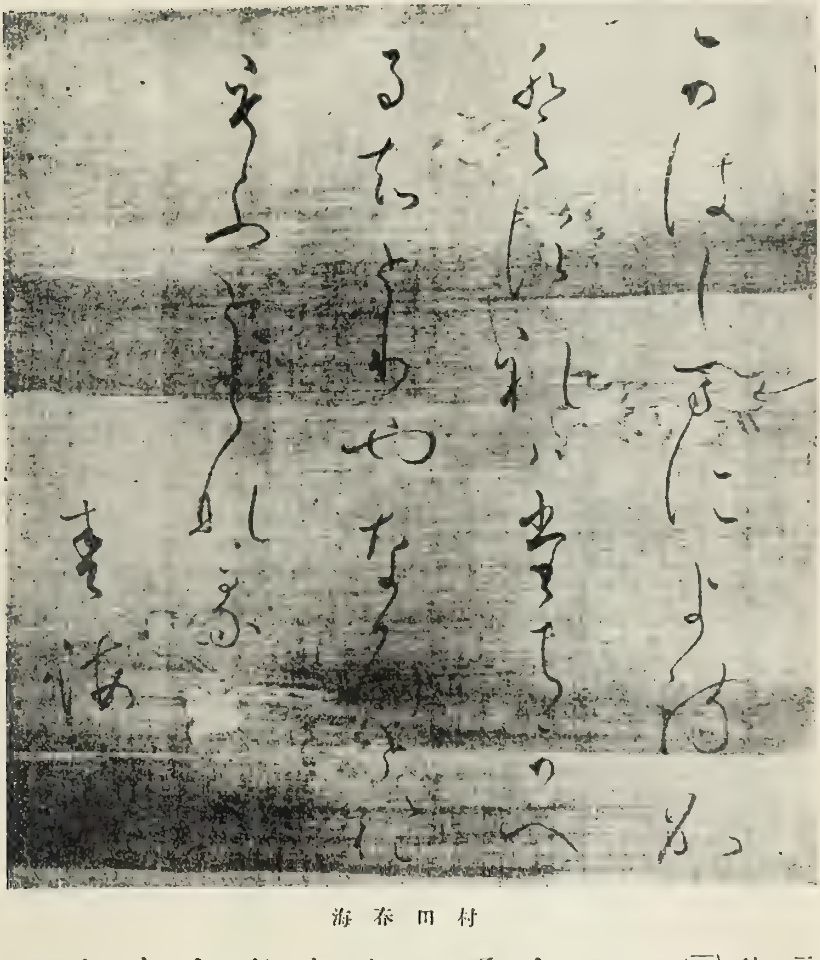
橘千蔭

の金花堂主人（岡部守黒とて紙商估であつた）千蔭に乞ひて小倉の「百人一首」を梓に上せ、世に傳へんとし、千蔭の親友にたよりてこれを乞うたから、それはいと易いことである。小倉の百首より新百人一首がよからうとて、日ならずして入木道傳授の書法を以て揮毫してやつた。すると或る人が、

その秘傳を猥りにすると言つて難詰したから、千蔭は笑つて曰く『自分は物を秘することは嫌ひである』と。以てその人となりを推し測ることが出來る。文化五年正月墓參の折、「橘千蔭之墓」と自筆にて題した紙片を回向院の住持に渡して曰く『自分が死んでから、これを墓標として下さい、普通の人が生前に好まないことを、死後だとて强ひるのはよくない』と言つて歸つたといふ。その年九月二日とし七十四にて死んだ。文化十一年九月、門人相謀つて墓碣の銘を大學頭林衡に乞ひて、千蔭の墓側に建てたといふ。

村田春海

村田春海は、江戸の商佐宇兵衛、實名を春道といひ、號を尙古堂といふ者の二男である。姓を平と稱し、字を士觀といひ、號を琴後翁、また錦織齋とも言つた。通稱は平四郎と呼んだといふ。その人となり豪放にして、家業をつとめず、常に客を好み、學問は和漢を兼ねてゐたが、殊に加茂眞淵の門に入りて、和歌和文をよくし、かたはら本邦の律令を研究した。白河樂翁に愛せられ、また妙法院宮の敎を奉じて、しば〳〵和歌を奉つた。書字も極めて堪能にして、假名は佐理貫之をまなび、眞名は米南宮を摸した。その文字俊腴にして、品格高きものがあつた。只世人の多くは、和歌の作者なるを知つて、書法の賞すべきを知らなかつた。文化八年二月十三日、年六十六で死んだ。深川本誓寺の、兄春鄕の墓側に葬つた。皆川淇園・市川寛齋・圓山應擧・加茂季鷹等は、最も



村田春海

彼と親交が深かつた。

岡本保考

岡本保考は、賀茂社の祠官岡本保起の子にして、通稱を辨之助と言つた。一條關白忠良に仕へて諸太夫となり、書法を花山院常雅より受けて、書博士に任ぜられ、甲斐守と稱して、家の名を□○齋といひ、和歌をもよくした、光格天皇御即位の時、勅を奉じて萬歲

幡を書いたが、その後天明八年皇居炎上の時も、亦勅を奉じて紫宸殿、陽明門の額を書いて、名を揚げたといふ。此の人、從六位下中務少錄より、正四位下治部大輔にまで上り、文政元年四月十九日、年六十八で死んだ。その子胡保、その孫保誠も、また書博士となつて甲斐守に任ぜられた。

森川世黃

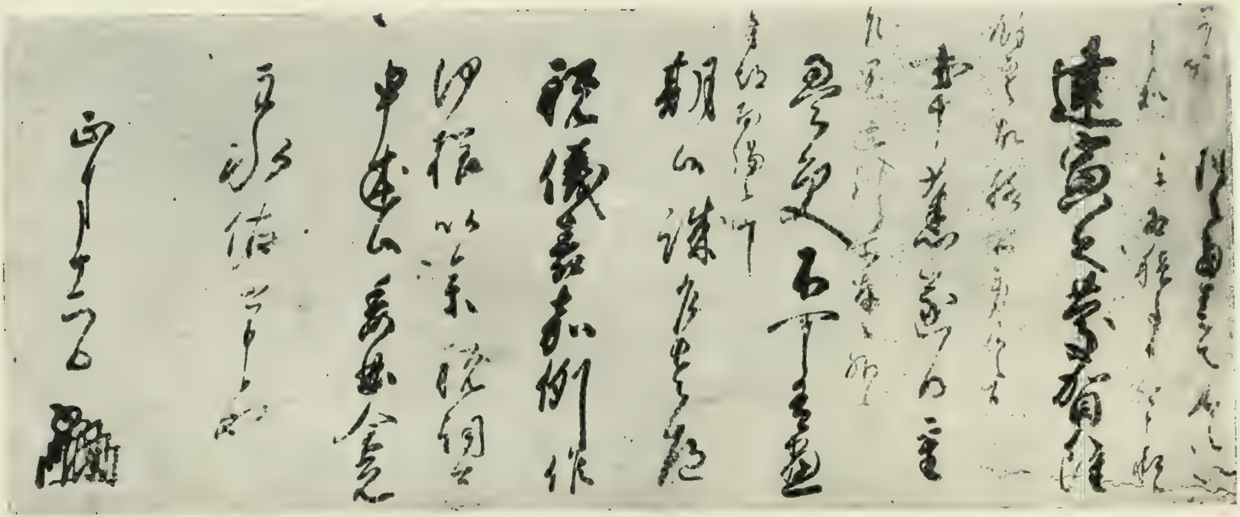
森川竹窓は、もと大和國鳥尾村の人である。名は世黃、字は離吉、通稱を曹吾といひ、號を竹窓と稱した。十七歲の時江戶に出でゝ、佐竹侯に仕へたが、幾程もなくして大阪に移つた。書は古法帖を慕ひて、世評が高い。篆刻をよくし、また南畫を學んで墨竹に巧みであつた。此の人、平生書畫古器物を蒐集して愛玩し、「浪華帖」「雨粟餘情」、「草行集」、「字句選」等を著はした。その他古筆の模本を數種に亘つて刊行した。また當時、松平樂翁の囑託を受けて集古十種の編纂にも盡力したといふ。天保元年十一月二日、六十八歲を以て死んだ。大阪城南の大應寺に葬つた。嘗て文政十年七月、自刻の墓碑を建てゝ、豫め埋骨の所を定めて置いたといふ。

第四編　唐樣及儒者物

唐樣の傳統

和樣と唐樣の別

德川時代に入つてより、翰墨界を二分して恰かも對峙の觀を呈しつゝある和樣と唐樣とは、その書風、傾向、出發點に於いて相異るものがあり、恰かも現代に於ける西洋畫と日本畫との對立の如くであるが、これ素より然るべきで、和樣は專ら和歌和文を書くに假名書きを以てし、その傳統も亦古來我邦に發達せるものを相承してゐるのに對して、唐樣は主として漢文詩を書くに宋元明淸の筆法を以てし、且つ師範を彼土に取つて必ずしも我が國流に依らないのである。故に一方は公卿、歌人、國學者の側に用ひられ、他方は士人、詩宗、儒者流に玩ばれ來つた。然れども畢竟するに和樣もと支那より傳はり、而して同化作用に依つて一種の國風をなせるもの、源流を尋ねればたゞ傳來の前後あるに過ぎない。所謂唐樣なるものも、決して支那人の書字をその儘に模倣してゐるのではなく、所謂和習は何人の書にも免かれずして、又これ日本的支那書たるを出でない。しかも年所を經ることの比較的淺いが爲めに、醇熟同化したる第二の和樣とならないのである。



近衛前久筆書狀　　荻野由之氏藏

唐様書風の源流

唐様の書風なるものは、專ぱら德川時代に入りて行はれ、殊にその後半期に於いて最も盛んとなつたのであれど、その源泉を辿れば、必ずしもさうではない。蓋し、前にも述べた如く、足利時代の末にあたり戰亂の餘、文學の大權は五山の僧侶に歸し、啻に禪の思想を以て當代の人士と交渉したのみならず、儒學の府も亦禪林に合置せられたる觀があつた。彼の足利學校、金澤文庫の如き、已に京都を離れて關東に學府を築き、鎌倉の諸僧と相關するものがあつたのみならず、當時の支那に留學して新智識を輸入し來る者も亦禪僧の外になかつた。而して禪僧中には、絕海・義堂・桂悟の如く、諸學に通じ、或は漢詩に巧みなると共に、書法に於いても宋元以來の支那名家の筆蹟に親炙し、これを模して一家の風をなす者も少なくなかつた。況んや歸化僧の巧者が與へたる感化は甚しきもので、禪僧の風格と相待つて一部を風靡したこと、既に德川時代に先立つて然うであつた。

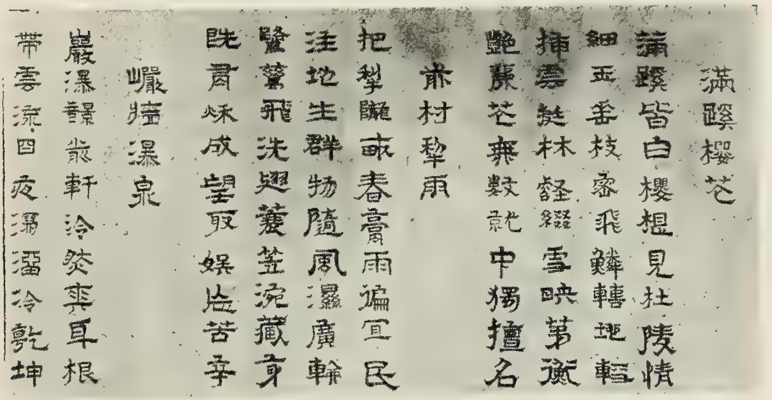
德川時代と唐様

德川時代に入つては、更に僧侶以外、近衛龍山公(前久)は太政大臣關白の身を以て、尊圓流の和様をよくすると共に、また唐様の魁をなし、ついで藤原惺窩林羅山出でゝ德川初代の儒者となり、新様の書風を示してゐた。而して石川丈山に至つては、宋人の隷體をよくし、書道の爲めの書道を以てこゝに唐様流行の端を開いたのである。その後、明末の亂離を避けて我國に來投するもの多く、加ふるに宇治黃檗山の創立と共に、支那の高僧續々として歸化するを見、彼等皆能書家に

超えたるが故に、黄檗山は書學の樞要地と見られるに至つた。のみならず、德川幕府が文教の奬勵をなすと共に、漢學盛に行はれて、支那の文物を崇拜するの念また著しく發達したので、學者は概ね和樣を捨てゝ唐樣を學ぶの風を馴致した。殊に寬文の頃、肥後の人北島雪山が明人兪立德より文徵明四傳の書法を授けられ、更にこれを江戶の人細井廣澤に敎ふるや、廣澤は後年自ら專門の書家として立つことゝなつた。繪畫に專門家のあるが如く、書家にも專門家あるに至つたのは、實に廣澤等に始まるので、これより著作に揮毫に、盛に唐樣を主唱した。その門人關思恭・三井親和・松下烏石の徒亦到る處にこれを鼓吹したので、明風の書道は頗る勢力を得るに至つた。斯くて儒者士人の輩出と共にそれ等の餘技として、將又半ば專門的の一藝能として、唐樣を書くもの日に多きを加へた。趙陶齋・龍公美・韓天壽・澤田東江・篠崎三島及び小竹・市河米庵・龜田鵬齋・卷菱湖の如きこれであつた。

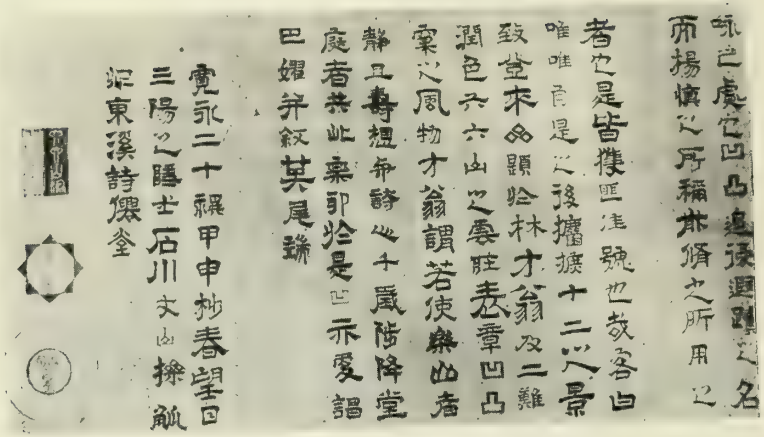
重ぜられる儒者物

然れども唐樣の名稱に一括して擧ぐ可きは啻にこれ等の人々に止まらず、寧ろ德川時代を通じての學者文人詩人の殆ど凡てを包括するのである。所謂儒者物の筆者は、即ち唐樣の書家と見なくてはならぬ。近衞龍山・藤原惺窩・林羅山の如き既に然りであり、中江藤樹・野中兼山・山崎闇齋・山鹿素行・熊澤蕃山・木下順庵・伊藤仁齋等もまたその錚々たる人である。德川光圀と、その庇護の下に在つた明の亡命客朱舜水の書も亦大に尊重せられる所である。降つては荻生徂徠は近代



石川丈山

儒學者中隨一の能書家とせられ、その片字隻句も千金に價するを見るのである。新井白石・伊藤東涯の遺墨も亦容易に得難き珍品とせられ、貝原益軒・室鳩巢・安藤東野・西森芳洲・山縣周南・服部南郭・大宰春臺・林鳳岡・安積澹泊・秋山玉山・靑木昆陽・平賀鳩溪・三浦梅園の如きすら、雪山・廣澤等專門的書技家の作に比して數倍するの價格を以て迎へられる。更に近世に於いては賴家の一族に春水・山陽・杏坪・聿庵・三樹の如きがあつて、皆群を拔いて賞揚せられ、大鹽中齋の如き、尾藤二洲の如き、菅茶山・狩谷棭齋・柏木如亭・中井竹山・同じく履軒・古賀精里・平山子龍・細井平洲・山本北山等の如きも、その墨蹟を珍重せられつゝある。要するに、儒家詩人の筆蹟は、和樣に於ける近世歌人のそれに倍して尊重せられつゝあるが、併しこれ必ずしも筆の美事なるが爲めのみではなくて、或はその學殖を慕ひ、或はその志氣を欣び、或はその人格を尊ぶので



石川丈山

あつて、殊に勤王的志士、愛國慷慨の人物の書蹟は、最も重んぜられるので、中齋・山陽の如きは然らずとするも、松陰・象山若くは林子平・高山正之・蒲生君平等のものは、寧ろその爲めに什寶とせられるのである。

石川丈山と北島雪山

石川丈山

石川丈山、名は凸、初めの名は重之、通稱を嘉右衛門と呼んだ。丈山はその字にて、別に四明山人・六々山人・凹凸窩・藪里翁・大拙・烏鱗・山木・山材・東溪・三足等の號を用ひた。三河國碧海郡の人にして、世に徳川氏の旗本である。大阪夏の陣に、丈山傷寒を煩ひ、病の重かつたのに、その母江戸より文して、汝世々徳川家に仕へ、此の度の軍に武功がなくは、また對面しないと勵まされた。丈山、人に讀ませてこれを聞き、涙ぐみ

て物を言はず、五月五日、家康の既に二條を出でたと聞いて、強いて助け起され駕籠にかき乘せられて、八幡に至り、水を三酌掬ひ呑みて、胸の中の苦を頓に忘れた。家康、六日に大阪に押し寄せ拔け駈けを禁ぜられたに、七日の曉、丈山眞先に拔け駈けして敵を殪したが、軍令に背くの故を以て賞に預からなかつた。家康の旗を未だ駿河に歸さぬに先立ちて、京都の妙心寺に隱れた。これより學問の志厚く、日となく夜となく書を讀み、經史に通じ、詩をよく作つた。その後板倉内膳重昌、丈山の零落をいたみ、淺野長晟に語つたのに、長晟賓客の禮を以て遇し、懇にしたから、老母を伴ひて安藝に行つたが、母の死するや、寛永十三年、とし五十四にて安藝を去りて京都にかへり、叡山の一乘寺にかくれ、詩仙堂を起した。これより丈山を以て名としたのである。詩仙堂とは、唐宋諸名家三十六人の詩を一首宛自書し、像を探幽に描かして、梁上に掲げたからである。これ本朝の歌仙になぞらへたものであらう。斯くて後は京へ出でることをなさなかつた。後水尾天皇、その風流を聞し召して、徵されたけれども固く辭して

わたらしなせみの小川の淺くとも
老の波たつかげもはづかし

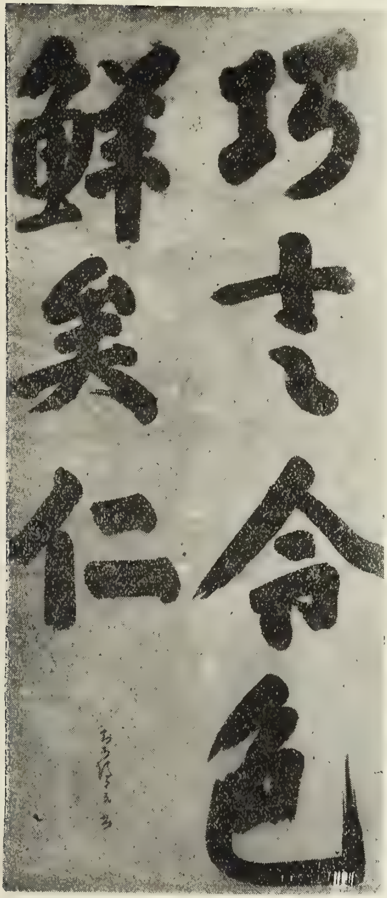
と申し上げたから、あはれにおぼして、心に任せよとの勅があつたが、殊に「波立つ」の句を「波そ

ふ」と御筆を加へ給うたといふ。寛文十二年五月二十三日、歳九十で死んだ。この人の隷書は、宋人より出でゝ遂に一家を成したもので、世に丈山の隷書とて賞翫する所である。丈山は妻妾を置くことをなさず、故に嗣子がなかつたから、門人安宅某ついで詩仙堂を守つた。のち僧尼が住して、詩仙堂は洛北の一名所となつてゐたのである。

北島雪山

雪山は通稱を三立（さんりつ）と言ふが、號を以て世に知られる。又別に花隱・蘭隱などの號をも用ひたといふ。肥後熊本の人にて、代々北島三立の名を以て加藤家に仕へた侍醫の後である。加藤忠廣闕國の後は、細川家に仕へて食祿四百石を賜はつた。雪山二歳の時、父の三立學問を好むところより、國主に願ひて雪山を具し、長崎に遊んだ。時に明人愈立德なるもの、深く雪山を愛し、授くるに文衡山の筆法を以てした。雪山は、はじめ陽明學を修め、藏書が甚だ多かつた。然るに細川侯は、國中に令して陽明學を禁ぜられたから、茲に於て雪山國を辭して長崎に移つたといふ。彼れ文學にも長けたけれども、獨り書を以て名が高い。雪山常に貧にして、屋破れ雨漏るもこれを繕ふの資力がないので、盥を高く釣り、その下に座して書を學んだといふ。或る時長崎の橋下に一夜寢ねて、翌朝附近の酒家に入つて酒を求めると、主人その價を請ふに及んで『なし』といふ。その家を問ふも『なし』と答へるから、『さらば何をする人ぞ』との問ひに、『ものをかく』と答へた。その主人も亦なみ外

れの人であつたから『それでは、此の頃忙しいから、酒賣の日記を書いてくれよ。その酒の代にあてよう』と言つたから、素よりさして志す所もないので、日を重ねて留まり、日毎にこれを書き附けてゐたのはよけれど、何しろ唐様の草書であるから、何うしても讀むことが出來ない。流石に能書だとは知つたものと見えて、その人がらも無我なのを深く信じ、遂に何くれとなく世話をしたといふ。その後、隣國の某侯、額字を支那へ依囑しようとて、その草案を雪山に書かしめられると、大きい筆を持たなかつたので、軒にかけた簾の萱を取つて打ち挫ぎ、それを持て書いた。さて、彼の國に渡すと、支那の人は大に驚いて、我國にも斯様な能書はないと言つて返して來た。そこでその草案をやがて額にしたといふ。これより長崎の人その能書なるを知つて揮毫を乞ふ者多くなつた。



北島雪山

一北島雪山の書風一

雪山は、はじめ書法を僧獨立、即ち戴曼公に問うたけれども、撥鐙法を得てから後は、たゞ方外の友とし、書法は問はなかつたといふ。或る時、獨立の云ふやう、書を如何程書いても、筆力精神は雪山に及ばない。それは何故かと云ふに、我は獨立であつて、雪山は三立である。二立足りぬのぢやと。のち黄蘗の僧に伴はれて江戸に來り、青山海藏寺に住んでゐたが、間もなく室町浮世小路へ移つた。時に書の門人が五六輩あつて、細井廣澤の如きもその一人であつた。のち長崎に歸り去つた。雪山もと權勢富貴の人を嫌ひ、性酒を嗜しみ、賤者といへども酒をすゝめ、字を求むれば揮毫して與へたから、賤者に多く雪山の書を傳へたといふ。或る年雪山、東叡山の櫻が盛に開くと聞き廣澤に向つて『晴れた日には人出が多くて喧しい。雨の中の花を見よう』と。約

束して數日、天が曇つたければ雪山は廣澤はじめ門人兩三輩を伴ひ、酒肴を携へ、東山に至つたところ、雨いよ〳〵降り來つた。時に雪山濡れながら大杯を傾けて樂しんだが、やがて櫻樹よりしたゝり落つる雨の雫にて全身をうるほし、ます〳〵大醉して泥土に轉びながら歸つたといふ。その豪放の氣質、思ひやられるであらう。元祿十一年二月十四日、長崎に於いて死んだ。長崎に歸つてのち十六年間といふもの沐浴をすることなく、爪を切ることもなく、赤貧にして儋石の儲けもなかつたが、長崎の人は尊敬して名を呼ぶ者なく先生とのみ言つたといふ。酒のない時は字を書いて酒屋に與へ、文字の數によつて酒肴を送らしめ、平生醉を盡したといふ。彼は書を作つて多く落欵をなさず、曰く『我が書は名を署せずとも、自から知る人があらう』と。又概ね印章をも携へなかつたから、無落欵、無印章のものが甚だ多い。

三、細井廣澤と其門下

細井廣澤の略傳

廣澤、名を知愼といひ、字を公謹と稱した。通稱は二郎太夫で、廣澤・菊叢・玉川・蕉林庵・今日庵・思貽齋等の號があつた。萬治元年、遠州掛川に於いて生れた。年十一にして

江戸に出で、はじめは馬喰町に家居し、母の氏を冐して辻辨庵と稱し、醫を業として漸く世を渡つてゐた。然るに年三十の時、細井氏に改めたが、その頃より王陽明の學を好み、諸子百家の說にも通じたが、傍ら射術槍劍の技より、天文算數の事に至るまで、通ぜずといふことはなかつた。書は雪山より受け學びて、文衡山の法を唱へ、のち一流を出し、唐樣の書を學ぶ輩の爲めには新木鐸となつた。元祿元年三十六歲の時、河越侯柳澤吉保より、賓客の禮を以て召聘せられたけれども、甲府の綱豐にも仕を辭したとの故を以て諾はなかつたから、吉保は、甲府卿は賢人を用ひるの要はない、我は天下の政治を執る者であれば、一日も賢人がなくてはならぬ、天下の爲めに仕へよとて、甲府にもその由を告げて、懇ろに乞うたので否みかねて出仕した。斯くて儒官の格にて、祿二百石を與へられ、凡そ十年ばかり仕へたが、のち故ありて仕を辭し、青山に隱棲して居た。その間も吉保より年に五十兩宛を贈つて、舊の如く愛顧して居たとのことである。その後は專ら墨池を好みて、他の事を顧みなかつた。故に人々書家を以て目し、遂に經史その他の造詣も、書名のために掩はれたけれども、少しも意にかけなかつたといふ。享保二十年十二月二十三日、年七十九にて死んだ。等々力村滿願寺に葬つたのである。廣澤の門からは、關思恭・三井親和・松下烏石の徒が出でたが、皆書名を以て現はれる。

細井廣澤の書風

廣澤は書道については非常に意を注ぎ、その功が甚だ多い。廣澤常に賀茂流

の佐々木志津磨等が、くづれた和様を書くのを見て、憤然として書道復古を志したことは、正徳二年門人に語つたところの「臨池復古篇」を讀めば解る。又享保十年には某侯の爲めに「觀鵞百譚」を著はし、和漢の臨池に關する故事を示した。その他「紫微字樣」「篆體異同歌」、「撥鐙眞詮」「字林長歌」などゝいふ、有益な著書が多い。また「管城譜」を造つて筆の製法を示し、墨帖、碑文などの正面摺を工夫して、大に世を益した。嘗て淺草觀世音の左柱の聯に、『具足神通力』の五大字を書いたが、或る年將軍家これを見て、筆者を別當に問うたので、それより遠近聞き傳へて書名が高くなつた。また寳永のはじめ、妙法院堯延法親王の教を奉じて『焚レ香聽レ雨』といふ四大字を書いて奉つたところ親王いたくその書を愛せられ、扁額にして御座に掛けられたが、のち仙洞御所の叡覽に供へたところ、上皇も亦御感あつて仰を蒙むつたから、『惟南献レ壽』の四大字を書いて奉つた。而してその際、權中納言菅原長義の執達の文に、『字樣奇勝』の語があつたから、これより奇勝をもつてその室に名づけた。廣澤の社會的功蹟として最も著しきは、その柳澤吉保に仕へるや、保元以降六百年、諸陵のしば〳〵兵燹に罹つてその所在を失つたもの二十五なるを聞いて、これを慨嘆し、幕府に建議して古史記錄にもとめてその所在を明にした。その他彼が赤穗の義士と交はつて、堀部父子の如き最も親しかつた。義士討入の夜の如き、その成否を案じて、夜半屋根に上つて吉良の屋敷を視たといふ。然し彼は

生前嘗て此の事を人に語らず、死後秘筐を開いて始めて知つたといふ。その子九皐も亦、家をついで書をよくした。廣澤の書の品格はこれを師の雪山に比すれば遠く及ばないけれども、諸體を兼備して、書家の資格を有する點では、寧ろ廣澤に存する。その書風が天下を風靡したのも故ありとせねばならぬ。

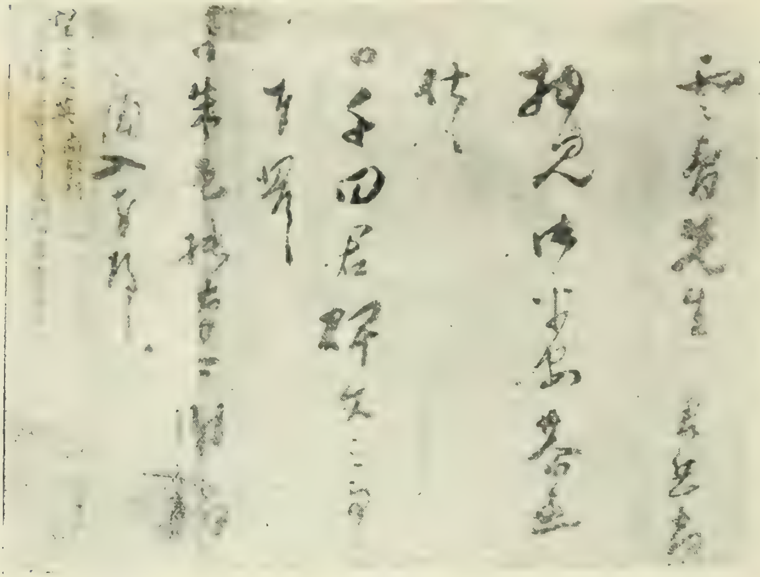
三井親和

三井親和は字を孺卿といひ、號を龍湖・萬玉亭・深川漁夫などゝ稱した。通稱は孫兵衛である。もと信州の人にして、江戸に來つて廣澤の門人となり、深川に居住して安永・天明の頃專ら世に鳴つた能筆である。殊に篆書をよくし、當時絹綾・縮緬などに、親和が書風の篆書を染抜いて、これを親和染と號して大に流行した。斯婦女子に至るまで彼の書を持て囃したのであれど、然し彼は書よりも尙ほ優つたものに弓術があつた。三十三間堂の通し矢など、毎に人の眼を驚かした所である。彼が深川三十三間堂の題額に『圓通』と書した時の逸話は有名なものである。(本叢書「書畫骨董珍談逸話」參看)兎に角彼は物に拘泥せざる濶達にして剛氣なる人であつた。天明二年三月七日、年八十三にて死んだ。深川區寺町增林寺に葬られた。

關思恭の書風

關思恭は字を子肅、號を鳳岡と言つた。もと伊藤氏であつた、故ありて關氏を冒した。年十四にして、はじめて細井廣澤にまみえ、その奇兒なるを感ぜられて義獻二王の法、撥

人、大小の諸侯すべて數十に及び、迎へて學ぶ者殆んど虛しき日がなかつた。東叡山の法親王も、嘗て廣澤の門人は甚だ多いけれども、思恭の右に出でる者はない。廣澤或る時、思恭をして代書をなさしめ、人に言ふには、私が書いてもこれ程は出來ないから代書をさせると。それ故思恭の名ますく世にあらはれた。淺草待乳山なる歡喜天の堂に掲げた所の『金龍山』といふ篆書の額字は、廣澤の印文があるけれども、その實は思恭の書いたものであるといふ。嘗て思恭が廣澤の許へ行きて居る折柄、豫ねて金龍山の額を賴んで置いた人が來つて、早く書いて下さいと請求したので、廣澤は、『實は筆を執るのが憶劫で、まだその儘になつて居るが、丁度思恭が居るから、私が文字の割りを考へ命令するから思恭に筆を下させよう』とてやがて三大字を篆書せしめた。そして乞ひに來た人に示して『これは自分の書いたも同じである』とて、印文を押して與へたといふ。思恭も亦廣澤と同じく文事に通じて、文學を太宰春臺に受け、博く經史を諳んじ、詩賦をば天門上人に學んで、頗る近體に熟したと。又、廣澤は測量の術に精しく、西人の器を一變して玄黃儀といふものを造つたが、思恭も彼に從つてその法を學び、その器に依つて測り試みるに、遠近高下寸分を失はなかつた。又射術をよくするを以て、年二十七にして土浦侯に仕へ祿を受けた。それ故廣澤が死んだ後は、思恭の名ますく海內に震ひ、筆力の精妙なる、恰かも驟雨の如しと言はれた。門弟凡そ五千鐙の術等は殘る所なく數へられた。



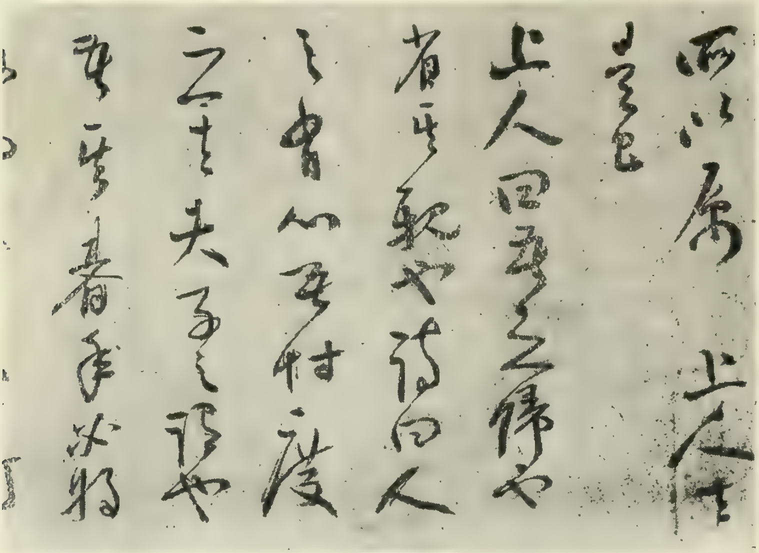
松下烏石

て彼を召して櫻町天皇に上る所の詩を代作せしめられたから、思はずして天覽を忝くするに至つた。又此の法親王、豫ねて天皇から額傳の秘法を受けられたけれども、たま／＼その一部にお忘れになつた所があつたので、思恭に尋ねられた所、思恭詳に辨じ奉つたから、大によろこばせられて、わが失つたところを悉く取り返し得たと仰せられた。勿論、思恭は額傳を受けて居た次第ではないけれども、筆法を論ずるに至つては、符節を合して居たのである。晩年名聲最も高く、支那の人にして遙に思恭が墨妙を傳へ聞きて、可亭、艸亭など言ふ人、詩を寄せて稱譽した。明和二年十二月二十九日、年六十九にて死んだ。小石川稱名寺に葬られた。

〔松下烏石〕松下烏石は名をはじめ君嶽といひ、字を神力といつた。後ち名を葛辰、字を龍仲と改めた。烏石・東海陳人は皆その號である。江戸の人にて古川に居住し、その地に黑い石があつたので、烏石と號をつけたといふ。經史を服部南郭に學び、書を細井廣澤に習つた。遂に一流を出して世にもてはやされるに至つた。「書學大概」は彼の著である。のち京都に移り、安永八年九月二十三日、年八十で死んだ。南禪寺に葬つてある。此の人、親鸞上人大佛號のことにて咎を蒙り、又文衡山の書を贋せて大名方へ賣つたりなどしたので、兎角に論ずる人もある。

四、物徂徠、左文山、趙陶齋

〔荻生徂徠の書風〕徂徠は名を雙松、字を茂卿といひ、避けるところがあるより字を以て稱した。通稱は總右衛門、徂徠・蘐園等はその號である。その先は本姓物部、三門荻生の人、荻生出雲守卿忠より出でる。祖父の荻生玄圃の時、江戸に來つて醫を業とした。徂徠の父荻生方庵名は篤は、常憲公の時召されて幕府の侍醫となつたが、延寶七年、事に觸れて上總に流された。徂徠は五歲にしてよく字を知り十五歲にしてよく文を作つたといふ。元祿三年、父が赦されて江戸に歸るや、徂徠も亦江戸に來り、芝增上寺の門前に居を卜して、講筵を開いた。時に年二十五であつたといふ。これより專ら



物徂徠

古文辭を以て古經の楷梯となし、一家言を創めて自ら復古學と稱し、大に宋儒の說を罵つたから、海內翕然としてその說に風靡し、一時その門より大宰春臺・山縣周南・平野金華・安藤東野・服部南郭の如き名士を出した。その學問該博にして、和漢にわたり、軍旅、法制、度量、樂律の類に至るまで、通じないことがなかつた。また經文を解するに假名を以てしたから、兒童婦女の類に及ぶまで、その德澤に潤ふことが出來た。その著書三十三種、百九十卷の多きに達してゐる、柳澤吉保の婦女に賓禮を以て聘せられ、殊に、政治上の顧問となり、連りに寵遇せられて食祿五百石を賜はつた。吉保の引に依つて屢々常憲公（綱吉）に見え、經史を辯論して

時服を賜はつた。また有德公にも召し出され、六諭衍義を訓點し、それより屢々登城して恩賞にあづかつたといふ。享保十三年正月十九日、年六十三で死んだ。三田の長松寺に葬つた。長松寺はもと壽命山と稱したが、徂徠を葬つてからは、人稱して徂徠山といふに至つた。徂徠は平生人に向つて、書は姓名を記せば足るなどゝ言つて、只管學問のみをすゝめて居たが、夜半人靜まつて後、古法帖を出して習つたといふ。上總に居た頃、漸くにして草書「淵海」一部を得、それを繰り返して習つたと言ひ傳へる。斯くて書は好んで書いたけれども、筆硯好事などいふこともなく、常に硯箱と煙草盆とを一つにして用ゐられたといふ。徂徠得意の草書に至つては、筆勢流動驚蛇の草に入るが如く、その片紙と雖も、今にこれを得んためには千金を惜まない。現時に於いて、儒者物墨跡の第一を位占めると稱してもよいのである。

佐々木文山の書風

佐々木文山は、名を襲、字を繼龍といひ、又臥龍とも呼んだ。通稱を百助と稱したが、文山の號を以て世に稱せられる。又墨花堂の別號もある。江戸西久保に住し、その志は風流に厚かつた。兄の玄龍と共に書を以て名高く、故に都鄙の神社佛閣の匾額、皆書を文山に求めた。その性甚だ酒を好み、醉裏筆を揮へば殊に絶妙であつた。世に醉龍の後身であると言つた。賓井其角は玄龍に書を學んだところより、文山とも親しく、酒友の交りが深かつた。一日、文山は富家の主人、

（一説にこれは紀文大盡といふ）及び其角と花街に遊び、酒酣なるの時青樓の主人、文山が書名高きを知つて、春山櫻花を描ける屛風を出して、贊辭を乞ふや、文山筆を執つて、『此の所小便無用』と書した。主人これを見て頗る不興の色があつた。そこで其角は更に筆を取つて、これについで『花の山』と書いた。つひに俳諧の一句となるや、主人大に喜びて家寶としたといふ。すると、あづま童の口さがなき誰彼は、『此の處、小便無用佐文山』と戯れたと。彼が爽邁の氣象は此の一事でも知られる。享保十二年五月七日、年七十七で死んだ。芝增上寺塔頭、淨蓮院に葬つた。

趙陶齋

陶齋、名は養、字は仲頤、別に息心齋・清暉閣・枸杞園などいふ號がある。

清人趙氏の胤にして、肥前長崎に生れた。幼少の時、二親を喪ひ、清僧笠庵（享保八年歸化し、興福寺七代となり、同十九年黄檗山十三代に補せられた人である）の弟子となり、清服を着けて四方に遍遊すること二十年、その足跡は西薩摩より東陸奥に至る、凡そ五十八箇國に亘つた。性頗る讀書、寫字を好み、南船北馬嘗て一日も廢したことがないといふ。書ははじめ笠庵に學び、中年に至りて一流を出した。江戸に住すること十四年、その常に字を寫すを以て寫字先生と稱せられた。後ち移つて大阪に住すること十餘年、それから更に和泉の堺に移り行きた。到る所、書法の門人が多かつたが、殊に賴春水・十時梅涯・僧南山の如きは、その上足の弟子であつたといふ。天明六年四月廿日、年七十四にて死んだ。長島侯の儒臣十時梅涯、諸門人と謀つ

て喪事を營み、陶齋が七十の時に書いて置いた自誌銘を石に刻み、その事由を長島侯增山正齋（正賢）に乞ひて碑蔭に鐫りつけたと云ふ。

宮崎筠圃　宮崎筠圃、名は彥、字は子常、通稱を常之進と云つた。尾張國海西郡鳥地村の人である。生來温厚謙遜にして、しかも聰慧强記、十歲の時に詩をよくした。十八歲の時、父舜弼と共に京師に移り、その父が伊藤東涯に學を受けるの故を以て、またついでこれに事へた。東涯死するや更に蘭嵎に從つた。學成つてその名都下にあらはれ、來り學ぶ者頗る多かつた。また書は趙松雪（子昂）を學び、深く軌範を得、また畫をもよくした。墨竹は殊に風韻一家をなしたから、世人平安の四竹の一に數へたと云ふ。（「日本畫の知識」參看）然るに母の意志に依り、彼は中年以後斷然畫筆を投じ、書も亦次第に書かなくなつたから、世ます／＼それを珍重するに至つた。京師に住すること數十年に及んだけれども、少しも俗風に染まず、世情に疎きこと小兒の如くであつた。一日東山に行き、歸途雨に遇つて二條加茂川の東なる賤妓の居所を過ぎ、簷下を歩んでこれを避けると、妓ども入り給へ入り給へと連りに呼ぶ。筠圃歸つて人に語るらく『仁といふものは誠に天性である、雨に濡れるのを見て軒每に私を呼んだ。多分止むまで休んで行けとか、傘を貸せようとか言ふのだらう』と。人笑つて、これより『仁といふ者』と異名した。安永三年十二月十日、年五十八で死んだ。東山禪林寺の墓地に葬つた

門人私に諡して行恭先生と言つた。

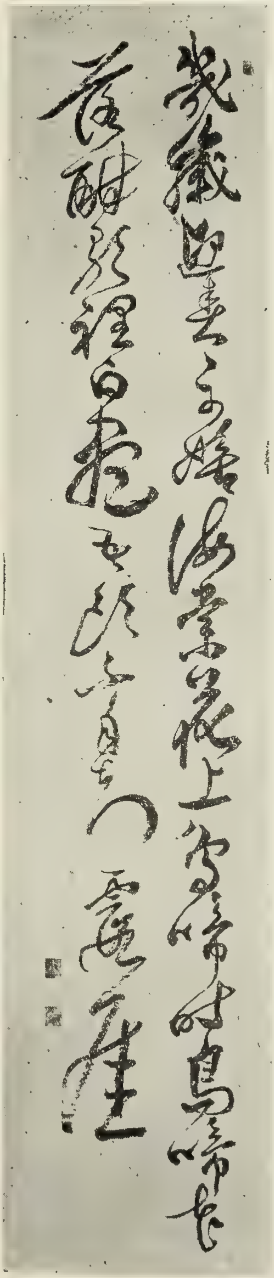
龍草廬　草廬はもと伏見の人である、名は公美、字は君玉、通稱は彦次郎、後ち衛門と改めた。草廬・明々恩・綠蘿洞・吳竹翁等は皆その號である。十一歳にて父に訣れ、母と共に京都に住して苦學したが、常に諸葛武侯（孔明）と陶靖節（淵明）との人となりをしたひ、故に草廬を號とし、松菊をもつて居に名づけたといふ。或る時嵯峨に遊んだところ、酒樓のあるじ、横扁の看板に字を乞うたから『釀成春夏秋冬酒、醉倒東西南北人』と認めた。主人喜びてこれを門にかけて看板とした。それより好事の者、横扁を出して看板とすることが流行したといふ。寛延三年彦根に聘せられて行き、居ること十八年、安永四年致仕して京都にかへり、草堂を下河原菊谷に卜して、世を避けた。この人、臨池の癖があつて、若き頃より李北海・趙文敏を慕ひて習つたが、惜しい哉、その書體婉麗にして軟弱に流れるの弊に陥つた。清人程赤、これを評して婦人の書と言つた。けれども、一時天下に書名を揚げ、遠近に知られてゐた。又時として丹青の筆を執ることもあつて、山水などを得意とした。寛政四年二月二日、年七十九で死んだ。東山の高臺寺に葬る。

澤田東江　東江、姓は源、名を鱗といひ、字を文龍と稱した。通稱は文治である。東江・來禽堂・萱舍・青蘿館・玉島山人の數號がある。家、代々江戸の町人であつたが、東江に至つて商を

私に諡して弘道先生と云つた。

頼春水

頼春水は、その先を備後國三原の人とする。高祖道圓の時、はじめて安藝の竹原に移り住したといふ。本氏は頼兼、頼を以て通じてゐる。名は惟寛、字は千秋、號を春水・霞庵・拙巣・和亭などゝいふ。通稱は彌太郎である。明和元年、歳十七の時、病を癒する爲めに大阪に遊び


頼春水

つひに留まつて講說した。天明元年、本國に召されて儒官となり、俸三十口を賜はつた。その後しきりに寵遇を得、祿三百石を喰んでゐた。嘗て建議して學校を建て、自から學制を編したこともある。また藩主の命にて江戸に來り霞ヶ關の藩邸に住し、世子某に學を授けて補導の任に方つて居た。當時柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里などゝ交はつて、最も親しかつた。寛政十二年、幕府に召されて昌平

坂學問所の敎官となり、ます〳〵その名を揚げたといふ。その後、安藝に還り、文化十三年二月十九日、年七十一にて死んだ。春水、はじめ寒鄕に產れて、師友とすべき人もないので、幼年の頃はやうやう隣地の寺家に藏する松下烏石の「千字文」を借り來つて、日每に二字宛鈎摹（かごう）したといふ。大阪に出づるに及んで、堺に到り趙陶齋に從つて書道を聞いたが、中年に至り好んで米南宮の十紙說といふものを習ひ、つひにその妙境に入つたといふ。古賀精里は殊に春水の書を愛翫したが、或る年對馬に行きて韓使と對話し、偶々本邦の能書家を問はれたから、春水を第一の能書家として答へたといふ。春水の二弟春風、杏坪より、子の山陽に至るまで、いづれもその書法米南宮より出でゝ能書の聞えが高かつた。けれども最も優れたのは春水で、彼は實に賴家の書を代表した者と言はなくてはならぬ。故に今人、賴山陽にもまして、春水の書を珍重する次第である。

丹羽盤桓子

盤桓子、名は勗、字は子勉、通稱を嘉六と云つた。盤桓子はその號である。

尾張國春日井郡四谷村の人にて、いと貧しい農家の子である。然るに天性臨池を好み、四五歲の頃よりよく物を書いたから、村の者共は神童であると言つてほめはやしたといふ、七歲の頃より鈴木朗について和漢の學を修め、寬政中はじめて名古屋藩の史局に出仕して史書を寫し、その後右筆にあげられて祿二百石を賜はつた。當時誰れ云ふとなく、海道無双の手かきと稱したから、遠近の諸藩士の來

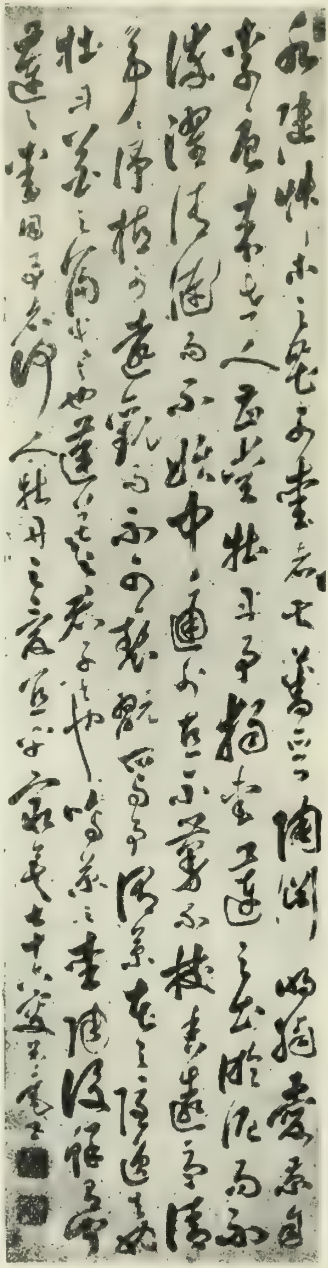
つて教を受ける者頗る多かつた。故に今も尙、尾濃地方には、此の書風が殘つてゐる。天保十二年三月七日、年六十九で死んだ。門人等相謀つて四谷村長光寺に葬る。此の人の書ははじめ董玄宰を好んでそれに習ひ、中年宮崎筠圃の遺墨を愛し、それより專ら趙松雪の書を習つてその妙を得たといふ。殊に細楷は最も得意とする所である。

巻菱湖　巻菱湖、名は大任、字は致遠、菱湖・弘齋等の號がある。北越巻村の人で、年十九の時江戸に出でゝ、業を龜田鵬齋に受け、詩をもよく作つたといふ。けれども書名の高きが爲めに、皆掩はれて聞えなかつた。書ははじめ近衛豫樂院の「遺教經」を習つたが、のち歐陽詢を窺ひ、また支那の諸碑を見てつひに一流を出した。この人、書については心入も深かつたから、「書法類釋」といふものを數種編述しようと思ひ筆を起した。「十體源流」の如きその一種である。また「書法質疑」「罌池餘滴」「書人錄」「草書韻合補益」などいふ、有益な著書がある。天保十四年四月七日、年六十七で死んだ。谷中天王寺に葬り、子百里（字は景遠、號は棠洲）が、龜田綾瀨に碑銘を乞ひて墓側に立てたといふ。

市川米庵　米庵、姓は源、名は三亥、字を孔陽と言つた。米庵・樂齋・小山林堂・金羽山人・百筆齋・顚道人等は皆その號である。その先は上野の人にして、祖父を蘭堂といひ、善書を以

て名があつた。父を寛齋といひ、鴻儒を以て世に聞えた。江戸栃町に於いて、安永八年已亥九月亥日の刻に生れた。故に三亥の名がある。業を父寛齋に受け、又林述齋、柴野栗山にも受けた。天性臨池を好みてはじめ米南宮を習ひ、つひに晉唐に溯つた。殊に楷法は顔魯公をも好んで習つたが、のち明の神宗の書を得て妙を悟つたといふ。或る年長崎に遊び、清客胡兆新に接して書法を論じ、頗る益す

市川米庵



る所があつたといふ　寛齋は儒を以て富山侯に仕へて居たので、米庵の書名の世に著はれるや、金澤侯祿四百石を與へて召聘せられた。これより書名日にあがり、業を受ける者五千八の多きに至つた。文政五年、書畫碑帖各五十品、及び書籍藁本若干を昌平の學府に納めて不朽に傳へた。米庵また詩をよくし、集八卷ある。その他「書訣」、「墨談」「筆譜」、「楷行薈編」、「略可法」「墨場必携」等皆上

梓して世に行はれる。嘉永二年、年七十一にて致仕し、壽藏碑銘を佐藤一齋に乞ひて建て、安政五年七月十八日、年八十にて死んだ。日暮里本行寺に葬つた。子三亂、孫三鼎、皆書をよくして家の業をついでゐる。

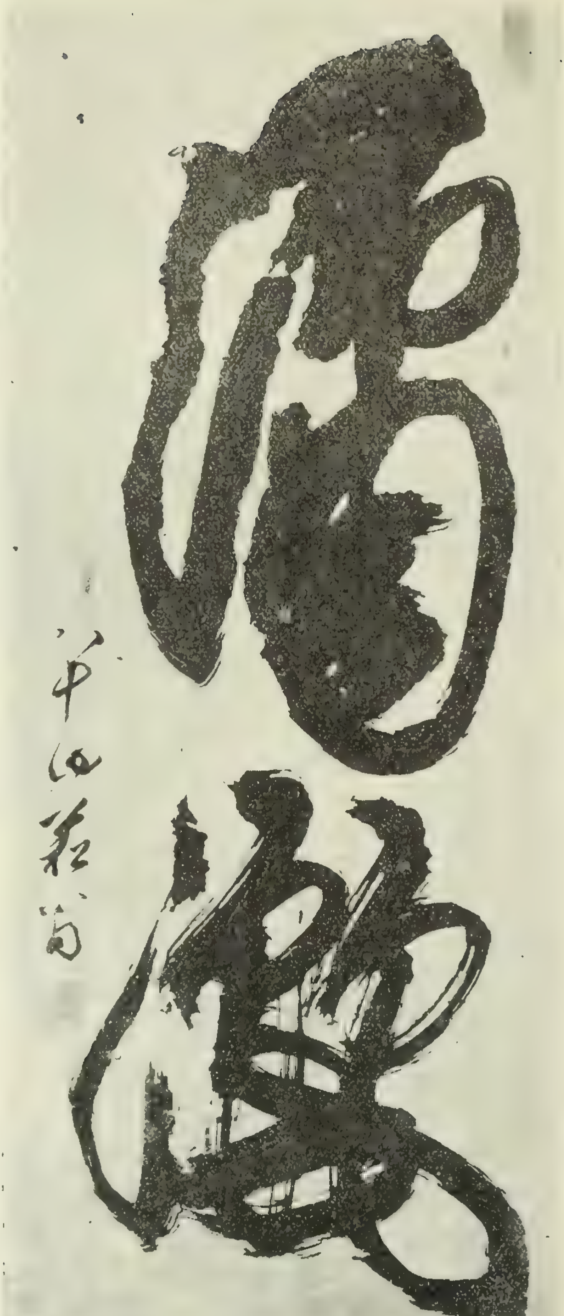
江馬細香

細香女史は美濃大垣の醫師江馬蘭齋の女で、通稱をきやうと云つた。故に名を裊と稱し、號を湘夢と稱した。けれども、細香の字を以て稱せられた。幼より書畫を好み詩をよくし、星巖の妻紅蘭とならび稱せられた。しば〳〵京都へのぼつて經史を賴山陽より受け、又畫を玉潾和尚・浦上春琴などについて習つたが、のち一格を出して餘韻頗る高きものがあつた。（「日本畫の知識」參看）又その書は好んで支那の古法帖を窺ひ、のちつひにその堂に入つた。文久元年九月四日、年七十五で死んだ。彼れ終世人に嫁せず、只筆硯を以て自ら娯んだ。その死後、甥の某、詩稿を集めて「湘夢遺稿」と題し、上木して世にひろめた。

貫名海屋

貫名海屋、名は苞、字は君羲、海屋はその號である。六十の頃より海屋といひ、七十に至りて菘翁といつた。氏を貫名と呼ぶのは綽號にして、本姓は松井と名乘つて、阿波侯の藩主吉井永藏藤原直道の弟である。通稱はじめは省吾といひ、後に泰次郎といつた。その性質温柔なるに加へて、多病であつたから、本職の武道には折々おくれを取ることのあるのを、深く自ら憂ひて

壯年の頃徳島を辭し、醫道に從事せんとて那賀郡黑津地村に假寓したが、その頃より旣に畫法を同藩の士にして外祖なる矢野某に學んだ。のち、南の山水畫に入つて大家となつた。(「日本畫の知識」參看)書道は、はじめ徳島の人西宜徳といふ者の、少しく米法を書いたのがあつて、これについて學んだ。のち轉じて



貫名海屋

高野山にのぼり、文學を研究すること年あるに及んで、屢空海の眞蹟を見、はじめて書法の高尙なる趣致を看破し、それより書道に心をひそめて、ます／＼練磨を積んだといふ。その詩文畫共に、時好に投ずるを厭ひて、殊に一種の興味を玩んだ。その後東海道を漫遊して江戶に入り、晩年には京都岡崎に居を卜し、菜蔬の緣にて貫名を氏とし、更に菘翁とも號した。文久三年五月六日、年八十六で死んだ。

僧即非

僧卽非は、明の福州福淸縣の人である。姓を林といひ、名を如一と稱した。十七にして僧となり、「孝經」及び詩論を聞き、その大義に通じたといふので、神童の名を得てゐた。十七にして僧となり、隱元禪師に從つた。三十六の時雪峰に住したから、それより雪峰の號を用ひた。隱元の聘せられて渡來するや、書を遣はして卽非を招いた。卽非つひに海に浮びて、明曆三年二月、長崎に來つた。衆僧その碩德なるをきゝ、推して崇福寺の住職とした。寬文三年八月、黃檗に移つて首座となり、間もなく豐前小倉侯に聘せられて赴き、豐後國に廣壽山福聚寺を創め、居ること數年、僧獨立を招きて廣壽山に住ましめた。獨立は白雲堂を築きて少時らく足を停めたといふ。卽非はその後再び長崎に歸り、推されて崇福寺の住職となり、寬文十一年五月廿日、同寺に於いて死した。年五十六。この人、最も善書の聞えがあつて、北島雪山の如きも、書の事に關しては、折々この人に糺したといふ。

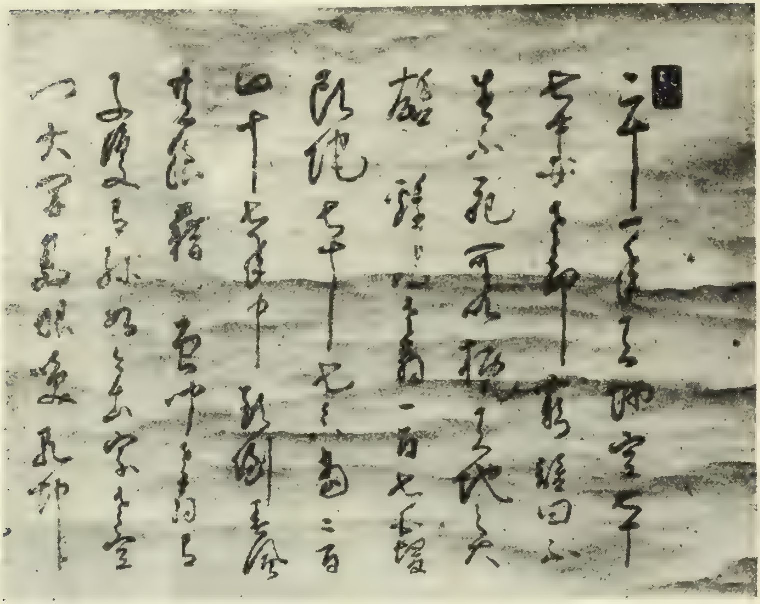
心越

僧心越

心越はもと、明の浙江金華府浦陽縣の人にして、姓を蔣といひ、名を興儔と稱した。東皐はその號である壽昌無明禪師の法嗣にして、はじめ杭州の永福寺に住んだが、滿天の胡塵に衣を汚されんことをおそれ、つひに延寶五年、海に浮びて我邦に投化した。天和元年江戸に來り、元祿五年水戸に聘せられて同所に赴き、代宗山天德寺に住んだが、同じ八年九月三十日、五十七歲にて死んだ。のちその寺の名を攻めて壽昌山祇園寺と號し、心越禪師を以て開山とした。蓋し壽昌の一派、我邦に傳承することは此の人より始まるのである。彼れ書畫をよくし、書幅畫贊も見ることがある。又篆刻にも巧みであつた。その筆蹟の尋常でない所を見て人物の風采韻致を思ひやられる。

僧　獨立

獨立はもと、名を笠（りつ）といひ、字を曼公と稱した。明の神宗の萬曆二十四年二月、杭州仁和縣に生れた。はじめ名を觀胤、字を子辰と言つたが、中ごろ名を鼎立、字を則之と改めたといふその先は晉の戴安道より出で。世々山陰の會稽に住んだ。祖父に至つてはじめて家居を他邦に移した。天資穎悟にして、書を讀めるに、日を過ぐれば即ち誦した。幼學子業に擧げられ、早く黌序に登つたといふ。年二十五にして會城の冠に擢りまた魏豎の朝の亂すにあたつて、遂に文筆をすてゝ、西湖に放遊して、山水の趣を領するを喜んだ。年三十の頃まで、詩を作ることが出來なかつたのに、或る日、社友が獨立に迫つて詩を賦せしめるに及び、聲に應じて曰く、『我來座溪歌。溪月留我宿』と。たゞ此の上句を以て衆皆大に嘆じた。これより後題を得て筆を下すに、沛然として藻思傑出し、清新にして自然なるものがあつた。常に他人の糟粕を洗ひ盡し、人の語を襲ふことがなかつたといふ。年五十に及びて、明亡び、清の世となつて、一天虜塵を蒙むつたのを憤り、去て長崎に來りて我が邦に投化した。時に承應二年である。『漢澹軒懷戴氏曼公負笈向日東不歸』といふ詩がある。翌年七月、普照國師隱元の、聘に應じて東渡し、大に法威を振ふものあるや、獨立年既に六十に近く、餘命幾くもなきことを思ひ、自から出家して普照國師の弟子となり、名を性易、字を獨立と改め、儒をすてゝ、釋に歸した。而して國師に從ふこと七年、書記の役をつとめて居たが、故ありて長崎に歸つ



獨立

後は、地を釋ばずして居住し、物を救ふは菩薩の本行であるとて、到る處にて藥を施したに、奇効があつたから、人々皆此の人を神と稱した。殊に書をよくしたが、その筆法に至つては、專ら正鋒を用ゐ、古に逼り、神氣含光あり、人その片紙隻字を得ても珍襲せざるはない。殊に篆隷に巧みにして、その書法は王履吉より出で、筆法に逼るものがあつた。寛文十二年十一月六日、隱元を宇治に省せんとして、途に病んで死んだ。年七十七。從者、宇治へ護送して、黄檗山に葬つた。龍庵・苛鉏人・天外一間人・天間獨立・惕芳・就老庵等の數號がある。遺稿十五卷、題して「天外老人集」と稱してゐる。

以上を以て吾人は、所謂能書家について一考を與へたから、次に、一般に鑑賞せられる諸人について概說しよう。中には右に述べたところと重複する所もあらうが、心して見られたい。

第五編　鑑賞書蹟の筆者

一、總　說

書家以外の書蹟

余輩は第二編に於いて、或は専門の書家と看做され、或は書學に精しとされ、若しくは古來、能書の故を以て、最も世に聞えた人々について、一瞥を與へた次第であるが、さて、我邦には是れ等書道の達人以外に、臨池道の價値如何は第二とするも、その人格功業、名聲、學殖等の上より、人となりを慕ふのあまり、彼等の手にかゝる墨蹟をば特に尊崇、貴重するといふ例を多く見るのである。寧ろ、或る場合に於いては、専門的書家の筆蹟よりも、遙に高き尊敬の念を拂はれ、價値を置かれることとすら決して少なしとせない。實に、書勢書格は措いて問はず、先づ筆者の人格を基準として鑑賞珍愛するといふやうな、一種の風が、殊に我が國人に多いのである。故に書道及び書蹟を講述するに當つても、可なりの分量を、是等の方面に分つべきことゝなる。

本編講述の範圍

然るに、玆に一つの困難がある。卽ち斯くの如くして鑑玩の對象とすべき古今の筆者を索むれば、殆んど天下の名ある人物といふ人物は、一人も殘さずに網羅せねばならぬ結果

となる。蓋し、偉人として、英傑として、名士として、假りにも名を竹帛に止める限りの人ならば、必らずやその斷簡零墨をも珍重せらるゝのであるから、一々これ等の人士を列擧し行けば、尨然數千頁の大人名辭書を以てこれに代ふるも、尚ほ且つ憾みなきを得ぬのである。斯くの如きは、固より本書の收容力の能ふ所ならざるのみならず、また斯る網羅主義は本書の主意にあらず、稍脫線的の誚をも免れないであらう。さればとて、是等の要領を省略することは、折角の本書に、大部分を白紙の儘で置くと同じ結果となるを以て、茲には偏頗ならざる限り、幾分、部分的の嫌ひはあれど、學者、文人、宗教家、志士等、その人物に精神的意義の比較的多き人々を標準とし、しかもその最も代表的の人物について、簡敍を試みると共に、それ等の方面の内外に亘つて、鳥瞰的說明を加へて置くことゝする。

敍述の順序と分類

さて、その場合に於いても、何しろ、畫家、若しくは專門の書家のやうに系統的關係を辿つて敍述の次第を立てるわけに行かないので、或る場合には業務的群團に分ち、或る場合には專業の師弟的關係を追ふといふ風な、秩序があるやうでない、極めて非科學的な、敍述の順序に依ることゝした次第である。例へば、最初に儒者と志士とを一群と見、儒者を强いて程朱派、折衷派、復古派などゝ分けて、しかも、儒者と志士との區分の如き曖昧に濁し了つたが如き、皆これ便宜

上から出でたことで、分劃することから既に無理なること故、また止むを得ない次第であつた。且つ又、これ等に、歴代の英明なる天皇、皇族をはじめ、中世の大臣大官、近世の將軍武人、最近の高官名士等を加へなかつたのは、遺憾であれど、斯くては遂に限りないこと丶なるから、これ等も亦、鳥瞰的說明のみを以て、一切省くの止むを得なかつたのである。

講述に就ての注意　しかも叙述が動もすれば、乾燥無味なる傳記の羅列に歸したことも、余の物足りなく思ふところであるが、これを一々人々について要領よく說明して、書字の特色や遺墨の研究等に及べば、一二人に於いて本編全部を占領せらるべく、況んやそれに肉を附し味をつけて、面白く讀ませるものにするには、一層の頁數を要するのだから、無味蠟を嚙むが如きは承知の上で、斯るものとしたのである。されども、また所謂書畫の辭書とはおのづから態度を異にし、讀みもて行く中にはあり〳〵とその人物風采を思ひ浮べることが出來るやうに、叙述することには、ひそかに努力を拂つてある。

閑話休題として、先づ儒者及び志士の面目から、覺束なくもお話を進めて行くことにしやう。

二、儒者と志士

儒學の諸派

儒者とは云ふまでもなく、徳川幕府の時代に於いて、儒學を以つて身を立てゝゐる人達のことで、志士とは精しくは勤王志士にして、明治維新の前後にあたり、君國の爲めに盡した人々、並に明治初年の功臣をまで含めて稱するのである。これ等の儒者又は勤王志士の遺墨は近來ます／＼尊重されて來て、本邦の書蹟では古筆切、墨蹟物と共に最も珍玩せられてゐる。然るに一口に儒者物、或は志士物と言つても、何しろ三百年來の名士の大半を網羅すること故、その數は頗る多い。且つ同じ儒學にしても、程朱學派もあれば復古派もある。その又程朱學派中に**惺窩**の系統に屬する人、**順庵**の系統に屬する人、或は水戸學派とて水戸に發達した學問の一派などゝなか／＼複雑なもので、無論それ等の中には大家、中家、小家とり／＼にして、且つ學問の點では左までゞないが、一世の人物としては、一流の學者を凌ぐものあり、また儒より出て、洋學を研め、佛家の學を修めて儒者となり、更にこれを出でゝ神道家になつたといふやうに、一人の經歴、境遇でも幾變遷ある者もあれば、或は詩をよくするもの、文に巧みなるもの、或はこれ等を兼ね善くする者、全く省みざる儒者等、實に多種多樣を極めてゐる。こゝには假に學派的の區分をざつとして見る。しかしそれすら、一人にして、二系統三系統に屬するものまた少なからざる有樣で、まことに、はつきりしないのである。

程朱學派の諸家

程朱學派とは、宋代に於いて儒學の一見識を開いた、程明道・程伊川・朱文公等の解釋所說に依つて孔子の教を祖述する一派で、言はゞこれが江戸時代の官學であつたから、これを以て長く學說の正道(せいだう)であるとされ、隨つて最も勢力があつた。しかし此の學派は極めて尨大なる人員を含むから、系統もいろ〳〵あつて、先驅者であつた藤原惺窩に從つた窩門の四天王、卽ち林羅山・堀杏庵・松永尺五・那波活所及び石川丈山・菅得庵・三宅寄齋の如きを一括する。これは時代に於いて一番古るい方の人々で、多くはこれ等の人々から系統的の分脈が出來たのである。卽ちその林羅山が、德川家康に召されて學府(がくふ)を起してから、門下に集まつた人々、及び羅山の子弟の張つた一つの系統がある。これ大流中の大流でその中には林家の一屬たる林鳳岡・林鵞峰・梁田蛻巖・後藤芝山などより、降つては、林述齋・柴野栗山・安積艮齋等あり、近く鹽谷宕陰・安井息軒・篠崎東海・岡島冠山・秋山玉山・人見道生などを網羅して非常に多いのである。又松永尺五の門から出でた木下順庵・那波活所などの系統に屬する菅茶山・西山拙齋・江村北海等の一群、順庵門下の新井白石・雨森芳洲・榊原篁洲・室鳩巣・祇園南海・三宅觀瀾・松浦霞沼その他の十哲、同じ系統に屬する貝原益軒・安藤省庵・柳澤淇園等もあり、鳩巣からは更に三浦梅園を出し、別に谷時中、その門下の山崎闇齋・野中兼山等南學派と稱するもの、闇齋に從つた淺見絅齋・三宅尙齋・佐藤直方、それ等より岐れたる西依成齋・

古賀精里・佐久間洞巖・三輪執齋・新井白蛾等も亦一つの別派をなしてゐる。精里門からはまた古賀穀堂・同侗庵・野田笛浦・草場佩川・羽倉簡堂・篠崎小竹・齋藤拙堂等を出し、その分枝として最近の齋藤竹堂・藤森弘庵・川田甕江・依田學海・坂谷朗廬・曾我耐軒・草場船山・南摩羽峰・向山黄村・土井聱牙・三島中洲などがある。賴家一家も亦、此の學派に屬すると見るべく、春水その子山陽・山陽の子聿庵・支峰・三樹・森田節齋・藤井竹外・後藤松陰・村瀨太乙・春水の弟杏坪等がある。更に市川寛齋と同米庵その門下大窪詩佛・菊池五山・柏木如亭の如き、五井蘭洲門下の中井竹山、同じく履軒・竹山門下の帆足萬里、同じく杏雨の父子の如き、水戸學派に屬する朱舜水・徳川光圀・安積澹泊・安東省庵或は同じく立原翠軒、その子杏所、門人藤田幽谷・青山延于・藤田東湖・會澤正志齋・青山延光、等の如き、仙臺に蟠居せる大槻家の一門の如き、皆これを程朱學の一派として見るべきである、實に斯く列べ擧げたゞけでも、その盛んなる有樣を見るに足ると言はねばなるまい。

復古學派の人々

次に復古學派といふのは、官學に對する野黨の學派で、程朱の學派に依らず、孔孟の古義に復つてオリジンを研究しようとする一派であつた。卽ち伊藤仁齋・山鹿素行・物徂徠の如きがその頭領であるといつてよい。彼等は官學系統から迫害されたり攻擊漫罵を受けたりしたが、學理の信念の前には堂々として自説を立て通し、その德行に於いて、志氣に於いて、識見に於い

て、今に尚ほそれ〲に重きをなされるところより、彼等の書蹟も亦大に尊重せられてゐる。殊に素行・徂徠の物に至つては最も尚ばれ、仁齋の物亦遺品の少き爲めに爭つて求められる。中に徂徠の如きは既に書家として說述した如く、近世稀に見る氣魄ある能書の人である。さて、此の學派にも、數個の系統がある。先づ伊藤仁齋には、その子の東涯・蘭嵎あり、門下の並川天民・中井岷山・東涯の門下なる青木昆陽・宮崎筠圃・松崎觀瀾の如きがあつた。又、素行學派の人々には、山鹿素行の門下に彼の大石良雄の如き、味木立軒の如きがあつた。しかし古學派の中心勢力をなすものは荻生徂徠の一派と言つてもよい。例へば太宰春臺・平野金華・服部南郭・山縣周南の如きは、その錚々たる大儒名家にして、それ等の門下からも亦濟々たる多士を出し、村上佛山・廣瀨旭莊・廣瀨淡窓・瀧鶴臺・湯淺常山などを數へられる。

折衷學派と註疏學派　これ等に對して折衷學派ともいふべき、官學、私學の兩者の說を採つて、中庸を唱導したのは、林鳳岡に學んで、程朱派の中堅とも見れば見られる、良野華陰・澤田東江・井上蘭臺・澁井太室の如きより、井上四明・井上金峨・山本北山・龜田鵬齋など、また山本北山の門下なる大窪詩佛・太田錦城・朝川善庵・蒲生君平・柏木如亭・小川泰山・梁川星巖等がある。鵬齋門下なる龜田綾瀨・卷菱湖・芳野金陵の如きもさうであらう。又別に註疏學派なるものがあつて、巖垣松苗・

猪飼敬所・山脇東洋・龜井南溟、畫を以て知られる田能村竹田・那波魯堂・片山兼山・松崎慊堂・その門下の曾我耐軒・林鶴梁・雲井龍雄・谷干城、若しくは細井平洲・高山彦九郎・宇野士新・片山北海・龍草廬等を此の一派中に入れることも出來る。然れども折衷派といひ、註疏派といふものは、必ずしも、劃然たる區別をなすべきに非ずして、たゞそれ等を研究し、師弟關係等を有したと見るべき人が多く、彼此に跨つた人が多いのである。

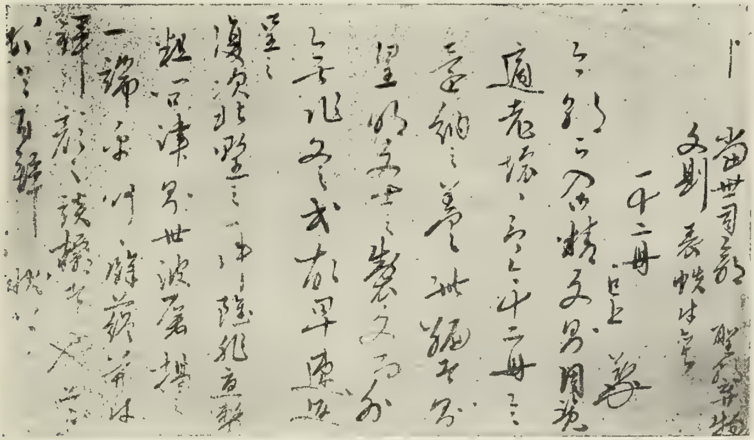
陽明學派の人々

稍色彩の鮮明なるは陽明學派である。それにも中江藤樹の派、佐藤一齋の派、梁川星巖の派とある。近江聖人藤樹の門下には熊澤蕃山があり、佐藤一齋には安積艮齋・佐久間象山・吉田松蔭・高杉東行・久阪玄瑞・大橋訥庵・山田方谷・春日潛庵・三島中洲・川田甕江・中村敬宇の如き一世の人物がある。星巖にもまた大沼枕山・小野湖山・岡本黄石・江馬天江・森春濤・森槐南・の如きがあるが、これは流石に詩人が多い。大鹽中齋も、此の一派の最もすぐれた一人であつた。さて、これ等の諸學派には、數へ盡せぬほどの名家があつて、書をよくする者も多く又、よくするとせざるとに拘はらず、今日に書蹟の尙ばれる人は甚だ多いのであるから、今こゝに一々これを語り盡すことは出來ぬ。たゞ、思ふに任せて最も人に膾炙せる人達を拾ひ上げて行かう。

惺窩と羅山

一藤原惺窩一

徳川時代は儒學の全盛期である。斯の學問の興隆したることは前古無比であるが、その先頭に立つてこれが開端を示したのは、實に藤原惺窩その人であつた。惺窩は名を肅、字を斂夫といひ、別に北肉山人・柴立子・廣胖窩等の號がある。彼の歌人として、また假名書の名人として有名なる中納言藤原定家十三世の孫にして、父は參議爲純である。世々播州三木郡細川村を食んだが、土豪別所長治の侵すところとなり、爲純とその世子爲勝とはこれを禦ぎて敗死した。時に羽柴秀吉天下に令名あるを聞き、惺窩はこれに告げて父の讐を報ぜんとしたが、秀吉は時期を待つに若かずと答へて力を藉さなかつたので、遂にその采地を失つて了つた。彼れ、幼にして穎悟、僧吳東明に依つて心經、法華經等を學び、祝髮して僧となり、名を舜と稱し、妙壽院と號した。長じて京師に遊び遂に儒學に志した。天正十九年、關白秀次の召に應じて五山の僧徒と詩を相國寺に鬪はせたこともある。他日復た召されたけれども、疾と稱して應じなかつたので、秀次はこれを不快に思つて居たといふ。恰かも是の時、朝鮮の役があつて、太閤秀吉は行營を肥前に設けてゐたから、惺窩も秀次の害を避けて同地に赴き、舊知なる小早川秀秋の客となつてゐた。時にたま／＼徳川家康が、彼の賢なるを聞いて引見し、聖學の要を問うた。既にして再び京師に還つたが、世に良師なきを患ひ、奮然海に航して明に遊ばんと欲し、薩摩に往き坊の津に宿して明船の來舶を待つてゐた。しかるに、その宿の



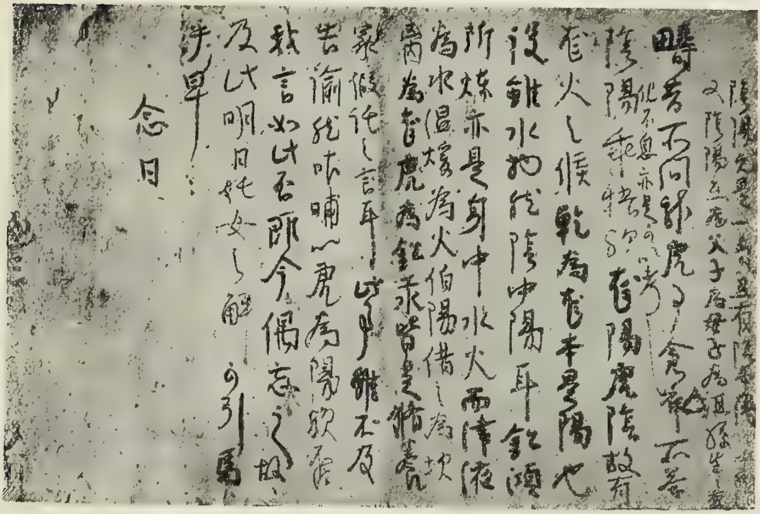
藤原惺窩

隣家に於いて、毎朝書を讀む聲がするので、何となくこれを聞くに、文句最も高尙にして、嘗て彼の知らなかつたところの聖教と思はれた。大に驚いて、行きてその書を見れば「大學朱熹章句」の序文である。惺窩再び驚き『何人か此の僻遠の地に在つて此の書を教へるか』と問ひ、遂にその師が島津日新齋であることを知り、手を拍つて欣んで曰く『吾れ天地間に於いて是の種の簿書を思ふこと久しかつた。今、明土を踏むも朱熹既に歿し、復た望むところがない』と、乃で日新齋について、その明國に求めるところの朱學の要書を請ひて京師に歸り、これより大に程朱の學を表章することゝなつたのだといふ。關原の亂の平ぐに及び、家康の京師に入るや屢々惺窩を延いた。惺窩は儒服して入見し、家康の面前に經史を講じた。只、その折に坐側に僧の靈三・承兌の如きがあるのを樂しまず、終に病と稱して

退き、洛北市原邑に隱居して、それよりは戸を閉ぢ俗を絶ち、深く韜晦して人に會はなかつた。然れども、その聲譽いよ〳〵高きを以て、諸侯の聘するもの頗る多かつたが、身を終はるまで祿を受けなかつた。のち羅山の建議に依りて、將軍秀忠の爲めに聘せられんとし、それも果さゞるに病みて歿した。元和五年九月十二日である、年五十九。此の人またかねて和歌をよくし、文集、歌集共にすぐれたものを遺してゐる。彼れが近世の文運に貢獻したことの偉大なるは今更言ふまでもない。たゞその書蹟に至つては、傳へるものが頗る稀である。

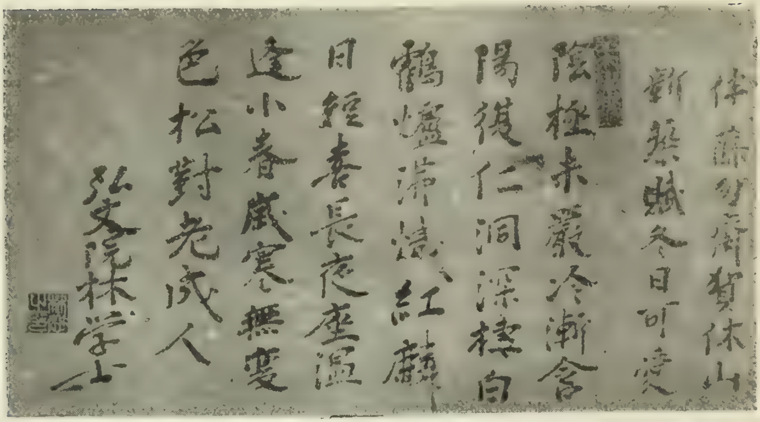
林羅山

惺窩の門下中、今に最も知られたるは林羅山である。彼は德川時代初期教學界の明星にして大儒中の隨一である。彼れ莫りせばまことに德川三百年の儒學も斯くの如き興起を見なかつたかも知れない。羅山、名は忠、又の名は信勝、字は子信、小字は又三郎、幼名を菊麿といひ薙髮して道春と號し、民部卿法印に叙せられた。羅浮山人・浮山・羅洞・四維・長胡・蝶洞・瓢庵・夕顏巷・雲母溪・尊經堂・梅花村・麝眼等の別號がある。その先は加賀の人にして、のち紀州に移り住んでゐたが、更に京に出でたものと見えて、彼は、天正十一年八月を以て、京の四條新町に生れた。幼にして神彩秀徹であつたと傳へられ、殊に和文學に通じた。十三才にして既に國學を解し、演史稗說を誦し、且つ支那の書卷をも繙いたが、強記にして忘れなかつたので、時人これを稱して羅山の耳



林　羅　山

は嚢の如しといつた。年十四にして、建仁寺に入りて書を讀むや、僧徒等試に彼に質問を出せば、卽ち娓々として淀みなく答へたから、衆みな舌を卷いて懼れたといふ。明年人、佛徒たることを勸めたが、羅山は頭を振りて肯んぜず、遂に家に歸つて了つた。長ずるに及んで英邁曠世の才を發揮し、益々百家に馳せ、凡百の書、窺はないものはない程であつた。而して最も六經を尙び、鋭意して程朱の學を振興し、これを以ておのれがつとめとした。僅に弱冠を超えたばかりで、徒弟を集めて四書の新註を講じ、遠近傳へて一奇事としたといふから、以て彼の抱負と識見とを知られる。この時にあたり、藤原惺窩は洛北に隱れて、頻りに同學を唱導してゐたので、羅山また彼れを敬慕し、

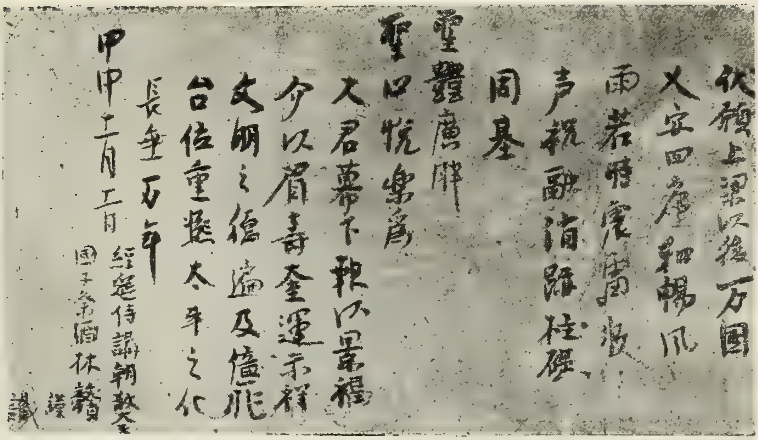


林鵞峰

弟子の禮を執つた。徳川家康、また、夙に羅山の名を聞き時に、むかへて諮詢することもあつた。慶長十一年には召して博士となし、以て己が顧問に備へたのである。それより大に家康の眷遇を蒙り幕府の文書は概ねその手になるに至つた。彼れの撰著編輯した書巻は頗る多いのである。明暦二十三年正月二十三日、年七十五で歿した。謚して文敏といふ。

鵞峯と鳳岡

林家は一世の羅山以後、世々江戸にあつて儒學の大宗となされ、従つて時々人才を出さぬでもなかつたが、中にも最も世に知られるのは、羅山の子鵞峯、その子の鳳岡、及び後の述齋の三人である。鵞峯は春齋と號し、他に向陽軒・葵軒・竹牖・爬背子・晞顔齋・也魯齋・格物庵・温故知新齋・頭雪眼月庵・傍花隨流堂・辛夷塢・仲林・南牕・恆宇・南墩・櫻峯・碩果等の號もあ

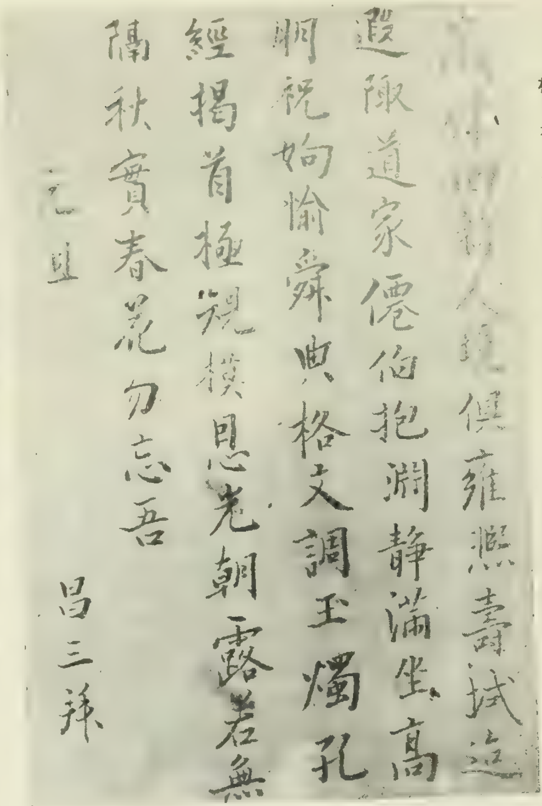


林　鳳　岡

り、本名は恕、また春勝と呼んだ。羅山の第三子にして、十七の時父に從ひて江戸に降り、將軍家光に謁して以來その好遇を受け、「寛永系圖」三百卷を編集し、また「本朝通鑑」三百十卷を撰して一世の大儒と重んぜられた。彼れまた詩文にすぐれ、多くの集を遺してゐる。歿したのは延寶八年五月にして、六十三であつた。私謚して文穆といふ。

その第二子鳳岡は、名を戇、一に信篤といひ、字を直民、又整宇と號した。年はじめて二十六、父に代りて諸生を統べ、父が「本朝通鑑」編輯の命を受くるや鳳岡もそれに參與し、永享以來の事蹟を撰した。延寶年間に父の職をつぎ、大藏卿法印に任ぜられ、弘文院學士の號を賜はつた。人となり剛俊、儒家の爲めに大に氣を吐き、以來儒官はすべて僧形であつたのを、將軍綱吉の命を受けて髮を蓄へ、大學頭信篤と稱した。又「鵞峰全書」二百四十卷を輯し、これ

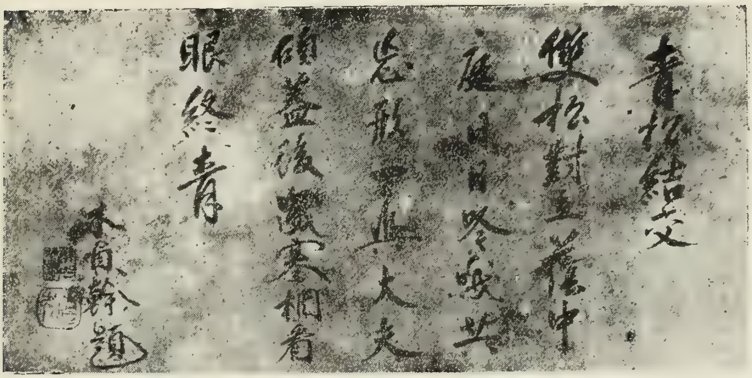
を官庫に納めたのも彼れである。享保九年致仕し、その十七年六月一日、年九十九で歿した。私諡して正獻といふ。その子榴岡・鳳谷も亦、父の後を承けて相ついで大學頭となり、幕府に仕へた。林述齋は後年の人であるからこゝに語らない。



松永尺五

尺五と順庵

惺窩の門人中、羅山と名聲のをさ〳〵劣らざるもの松永尺五がある。松永尺五は京都の人にして、連歌師として有名なる松永貞德の子である。名は遐年、通稱は昌三郎、又講習堂と號したが、昌三で人に知られる。藤原惺窩に師事し、年十八歲にして豊臣秀賴に見え、「大學」を講說したことがある。のち加賀の前田侯に遊事し、晩に京都に春秋館を開いた。板倉所司代より更に宅地を賜はり、講習堂と名づけ、一時名聲を高めた



木下順庵

が、明暦元年、年六十六で歿した。その子昌易の外、多くの門生を教育した。中にも木下順庵最も著はれてゐる。昌易は寸雲子と號し、春秋舘に在つて講說するの傍ら俳諧をよくして世人に知られた。順庵は名を貞幹、字を貞夫、通稱を元允、また錦里・敏愼齋・薔薇洞と號し、京師の人である。年十三、「太平頌」を賦するや、烏丸大納言これを奇とし、朝廷に上つて、後光明帝の嘉賞を賜はつた。既にして松永昌三の門に入りて性理の學を修め、勤苦碎勵、學業大に見るべきものがあつた。長じて柳生宗矩に從ひ江戶に來り、家光に仕へんとして果さず、京に還つて東山に屏居し、諸子を集めて教授すること二十年、その名大に天下に聞えた。當時の名士貝原益軒・安東省庵・宇都宮遁庵の如き、皆彼を推して先達と稱した。加賀侯の如きは禮を厚くして招聘したが、辭して先師尺五の子を薦めたので、侯これを聞き嘆じて曰く『順庵の如きは古人の風がある』と遂

に二人を共に召された。天和二年、將軍綱吉、召して幕府の學識に補し、命じて國史を修めしめた。又綱吉の自ら「周易」を講ずるや、順庵は命を奉じて經筵に侍したこともある。元祿十一年十二月二十三日、年七十八で歿した。私に諡して恭靖といふ。彼れも數種の著述がある。二子簡・汝弼の外、門弟が頗る多い。中にも所謂木門の十哲なるものが最も知られる。

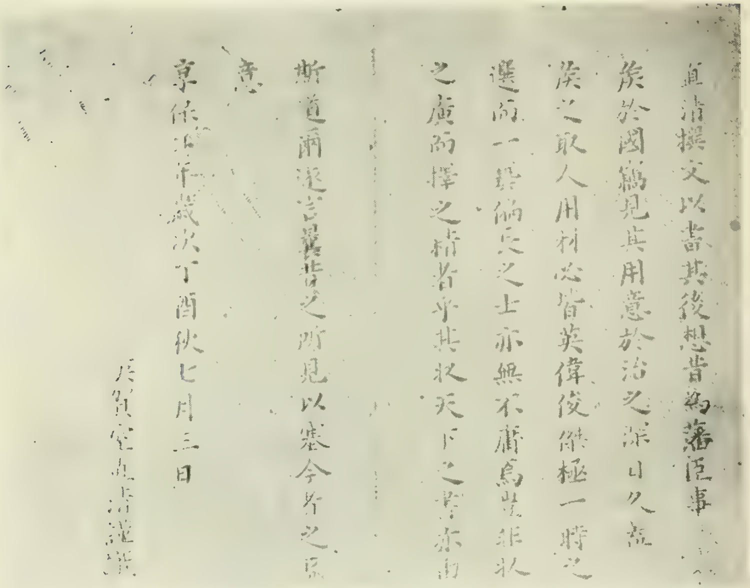
新井白石

木門の十哲とは、新井白石・室鳩巣・榊原篁洲・雨森芳洲・祇園南海・松浦霞沼・南部景衡・服部寛齋・向井三省・三宅觀瀾にして、みな一代の鴻儒である。新井白石は名を君美といひ、字は在中、初名は璵、一に濟美、白石はその號であつて、他に紫陽・錦屏山人・天爵堂・勿齋等とも號した。素より江戸の人にして、その先を新田二郎といひ、父正濟、久留里侯土屋氏に仕へたが、明暦三年に侯の邸の出火するや、正濟も從つて侯の族内藤氏の邸に避け、偶々そこで白石を生んだので、侯因つて彼れを火兒と呼んだ。白石生れて岐嶷頴敏、三歳の時よく大字を書した。侯その早慧を愛し、召して膝下に置くと、一日盛岡侯來り見てこれを異しみ、吾が嗣子にと乞はれたが、臣下の子なることを辭ずれば、更に盛岡侯は『成長後必ず我れに賜へ、祿千石を與へん』と強いた。されども土屋氏またこれを固辭した。主侯の卒して後、正濟故を以て罪に坐し、禁錮せられた。白石倜儻不羈にして膽氣あり、嘗て慨然嘆じて曰く、『大丈夫、生きて封侯を得ずんば、死してまさに閻羅

王となるべし』と、これより奮勵努力して大に讀書した。富人河村瑞軒が、金錢を以て誘惑したるにも應ぜず、貧苦と戰ひながら經史百家の書を讀破することに汲々としてゐた。天和二年、古河侯堀田正俊に仕へ、また木下順庵の門に遊び、門下の該博者を以て稱せられたが、故あつて堀田侯を辭して去つた。その去るにのぞみてたゞ靑錢三百、米三斗あるのみ。しかも江戶に隱れて貧に居ること晏如、何等の拘はるところなき如くであつた。元祿六年、德川家宣の、なほ甲府藩邸にあるや、辟されてその儒官となつた。時に年三十七歲。それより待遇日に加はり、進講畢る每に必ず謁を賜ひて國家の事を說かしめられた。彼が「藩翰譜」を撰したのも家宣の命に依つたのである。寬永元年、家宣が立つて將軍の儲となつたのちも、一日として白石のことを忘れず、つひに幾くもなく召してその侍講とされた。ついで家宣の將軍となるや、祿五百石を賜ひ、文學を以て殿中に給事せしめ、事大小となく必ず召してこれを詢られた。爾來、白石に依つて行はれた幕政の改革は眼覺ましきものあり、遂には朝鮮の使節に對する外交的禮節の向上をさへ劃つたが、未だ彼の經綸の緒につかざるうちに、家宣の薨に逢つた。茲に於いて萬事休すとなし、また門を閉ぢて出でなかつた。その著述三百餘種。享保十年五月十九日、六十九で歿したのである。

室鳩巢

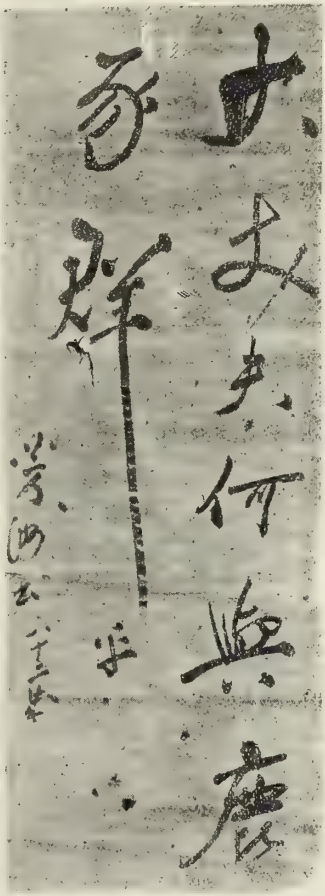
室鳩巢は名を直淸、字を師禮、一に汝玉・順祥とも稱した。小字は孫太郎



室鳩巣

又滄浪と號した。齋を名けて靜侯といふ。江戸の人である。幼にして聰悟老成の風あり、寛文十二年春、加賀侯に召されて「大學章句」を講じたのが、年十四のことである。侯嘆じて曰く『眞に英物である』と、乃ちこれを祿し、命じて益々學を勵ましめられた。又木下順庵の門に遊ぶや、順庵常に稱して曰く『師禮（鳩巣）は忠信篤敬、聖學に志あり、吾が益友である』と。彼はまた羽黒成實に從ひて闇齋流の學をも修めた。貞享三年夏、加賀に遷り名を新助と改めた。元祿中加賀にて癈屋を貰ひてこれに住し、因つて鳩巣と扁し、遂に我が號とした。著述頗る多き中にも「義人錄」を著はして赤穂遺臣のことを論じ、當時

諸儒間に異同の説あつたに拘はらず、敢然として四十七士を以て義士と目した。これ實に彼を以て始めとするのである。正徳元年、白石の薦によりて將軍家宣に召され、學職となつたが、その薨じて白石の退くや、止まつて尚ほ職に在つた。正徳三年、邸を駿河臺に賜ひ、これより世人呼んで駿臺先生となした。吉宗統を繼ぐの後、高倉館の教授を統べ、ついで擢んでられて侍講となつた。吉宗屢々政事の得失を諮詢した。享保十九年八月十二日、年七十七で歿した。



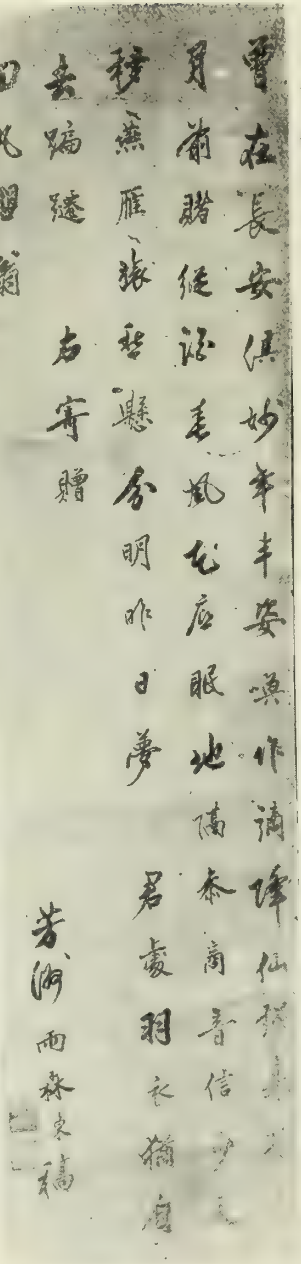
雨森芳洲

其他の人々

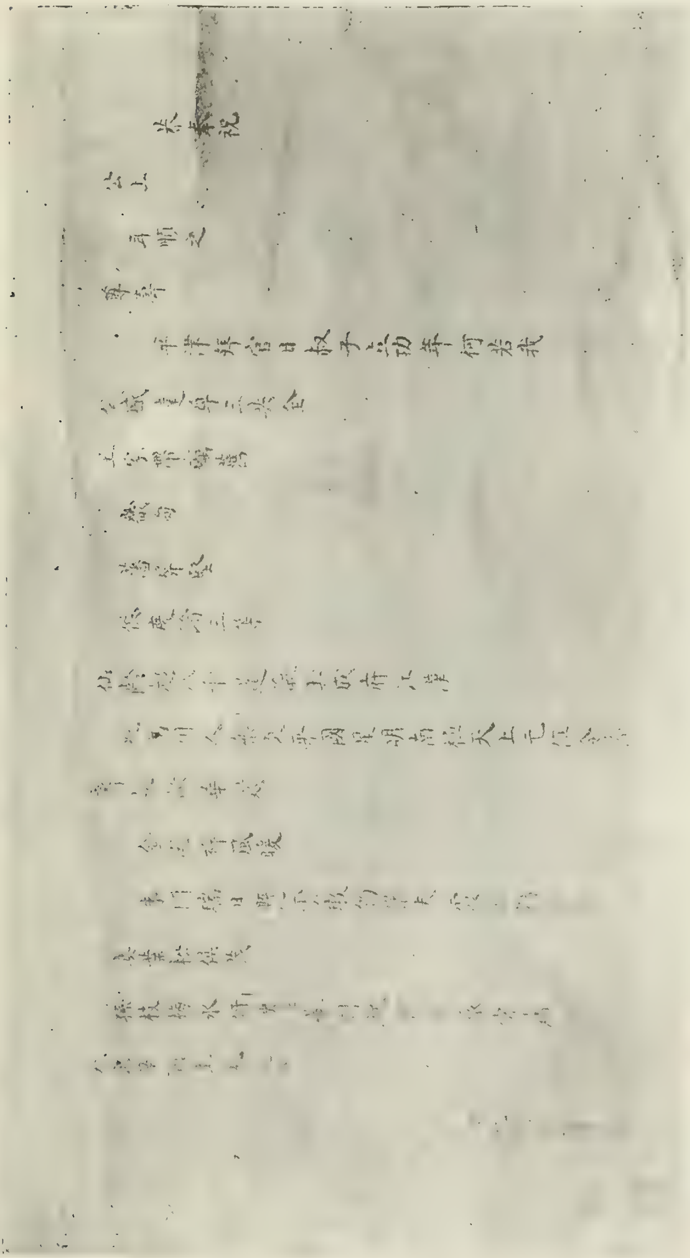
雨森芳洲は名を東、また誠淸、字を伯陽、通稱を東五郎といひ、また絅尚堂と號し、京都の人であつた。儒を木下順庵に學び、對州侯の文學となつた。年八十一にして始めて國學に志し、「古今集」を誦すること一千遍にして、おのづから名詠をいだすことを得たので、それより

大に作り、一萬首に達したといふ。寶永五年正月六日、年八十八で歿した。また榊原篁洲は名を玄輔、字を希翊、通稱を小太郎といひ、本姓は下山にして、和泉の人である。順庵に學び、紀州藩の儒官となり、傍ら星暦、鎗術、射御、醫卜より茶香、圍碁、猿樂の類に至るまで、通ぜざることはなかつたと云はれる。その歿したのは寶永三年正月三日にして、五十一であつた。三宅觀瀾、名は緝明、字は用

雨森芳洲



晦、通稱は九十郎、また端山と號し、京都の人にして、初め淺見絅齋に學び、のち順庵に師事した。最も文章に名があり、水戸義公に召されて史館の編輯となり、二百石を食んだ。累進して總裁に至り、正徳二年に室鳩巣と共に擢んでられて幕府の博士となつた。享保二年八月廿六日、四十五で歿した。松浦霞沼、名は儀、字は禎卿、通稱は儀右衛門、播磨の人である。幼にして京に遊び、南部草壽に師



祇園南海

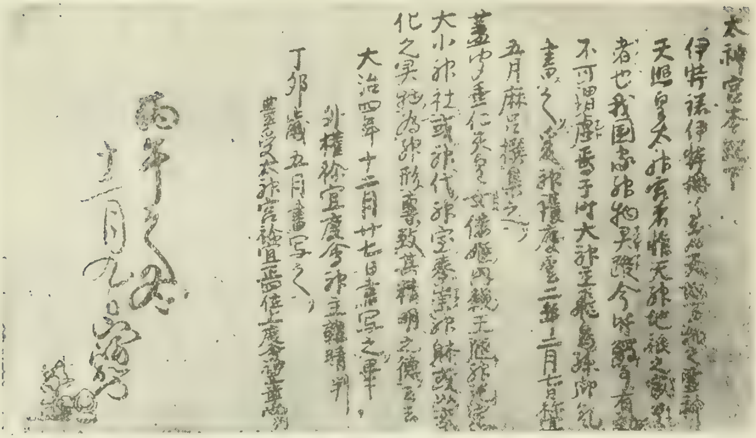
事したが、對馬侯から學資を給せられて木下順庵の門に入り、祇園南海と共に木門の二哲と呼ばれた。享保十三年九月朔日、年五十三で歿してゐる。

祇園南海　木門の十哲中、詩書兩能を以て尤も人口に膾炙せられたるものは祇園南海である。書家としての彼については既に本叢書第一巻に述べてあるから、儒家、詩家としての彼の略傳に止める。彼れ、初の名は正卿、のち瑜と改め、一に貢といひ、字は白玉、また履昌斌・汝珉とも字した。南海はその號にして、自ら祇南海と稱した。また蓬萊・鐵冠道人・箕踞人等の號もある。俗稱は與一、その居に題して湘雲と曰ひ、またその内方の一亭を觀雷と名づけた。紀藩の士にして家もと醫を業としたが、南海天資儁逸にして、文藻に富み、幼時父に隨つて江戸に來り、年十四の時木下順庵に學んだ。夙に文才を以て儕輩を驚かし、順庵の如きも彼の詩作を以て神技とした。嘗て事に坐して海上に謫せられること數年、正徳に至つて召し還されて朝鮮使節に江戸にて會見するの役を蒙り祿を增して儒職に復した。詩才を以て松浦霞沼と二妙の稱あると共に、白石・梁田蛻巖と相伯仲するを以て世呼びて三大家を以てした。寶暦元年九月八日に歿した。年七十五。彼れは著書もまた頗る多かつた。

丈山、闇齋、南學派、益軒

その他、德川時代前半期の、程朱派に屬する人々を順序なく語れば、先づ石川丈山がある。彼れ名は凸、初め重之、嘉右衞門と稱した。丈山はその字にして六々山人と號した。別に四明山人・凹凹窩・大拙・烏鱗・山水・山材・藪里・東溪・三足等の號がある。三河の人である。人となり驍勇、武事に熟練すると共に、又好みて書を讀み歌詩をよくし、かたはら茶道に通じた。年二十餘にして藤原惺窩の門に遊び、林羅山・堀杏庵・菅原得庵・野間三竹等の諸名士と相交はつた。大阪の所司代板倉周防守は、丈山と舊知であつたので、よくその人となりて知つたから、德川幕府に薦めんとしたが、丈山これを固辭して寬永十八年、叡山の麓一乘寺に詩仙堂を營み、こゝに居つて出なかつた。而して本朝の歌仙に擬し、畫師狩野探幽に漢魏より唐宋までの詩人三十六人の像を描かしめ、自ら詩を贊して楣間に列べ、日々その下に吟哦して優遊自ら娯しんだ。諸名侯の經過する毎に、その高風を慕つて立ち寄るので、後にはその煩をも厭ひ容易に人に接しなかつたといふ。その最も長ずるところは詩であつたが、かねて書と畫とに得意にして、隸書は最も巧みであつた。後水尾天皇、嘗てその風流を聞いて、召されたけれども、

石川丈山



山崎闇齋

わたらじなせみの小川の淺くとも
　老の波立つかげもはづかし

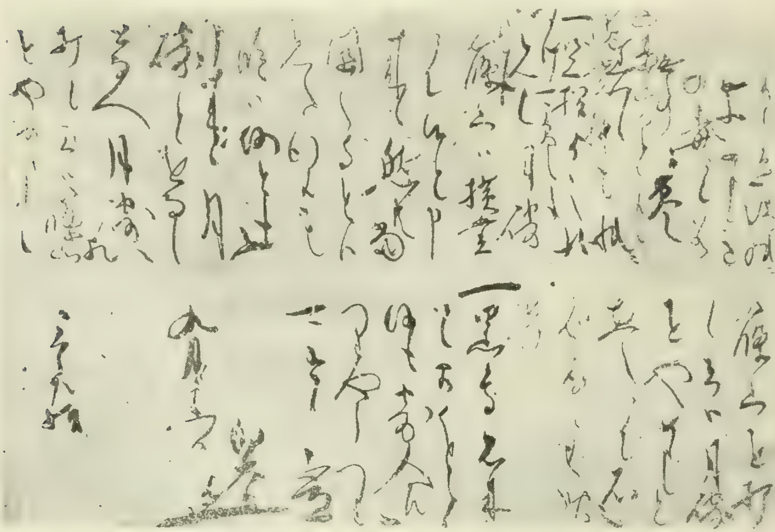
との歌を奉りて、遂にこれに應じなかつた。天皇憐れに思召して、心に任せよとの詔あり、かつ「波たつ」の句を「波そふ」と御筆を加へられたことは、有名な話である。寛文十二年五月二十三日、年九十で歿した。

山崎闇齋

丈山にはやゝおくれ、木下順庵と殆ど同時に世に在つた人に山崎闇齋と貝原益軒とがある。闇齋は名を嘉、字を敬義、小字を長吉、のち淸兵衞、又嘉右衛門とよび、闇齋・垂加・梅庵等の號があつた。京都の人にして、その先は播州山崎邑の人である。彼れ幼にして狡悍無賴、父の患ふるところとなり、妙心寺に入つて僧たらしめられた。絶藏主と號したのである。天資豪邁、一意之を修めて憚らなかつたが、しかも性行は悛らなかつた。

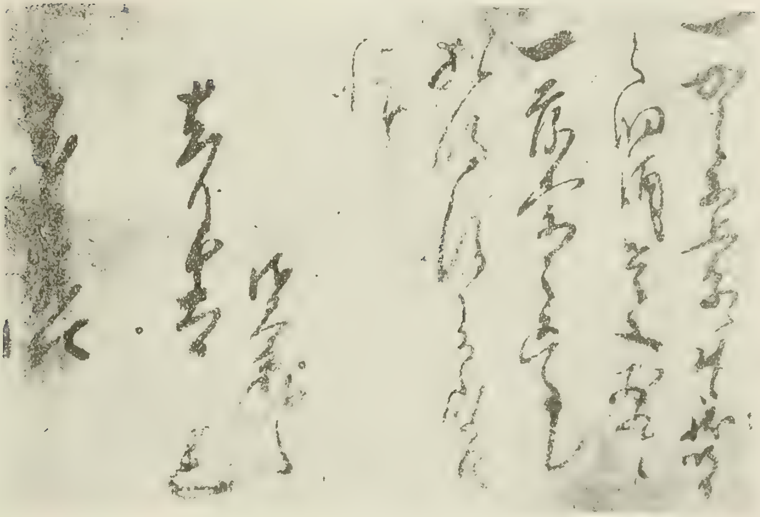
土佐の公子、彼の人となりを聞きて、土佐の吸江寺に移らしめた。時に谷時中と野中兼山が、土佐にあつて、闇齋を見て深くこれを器とし、勸めて經籍を讀ましめた。闇齋卽ち四書及び朱子の文集語類等の書を讀み、「闢異」一卷を著はし、寺門に貼りつけて去り、遂に儒となつた。時に明暦元年のことである。のち闇齋は江戶に來りて敎を垂れたが、貧窶洗ふが如く、漸くに書籍商の隣に賃居してその賣るところの本を借りて見てゐた。井上河內守、その名を聞き書籍商を通じて引見せんことを交涉した。闇齋毅然として曰く、『侯道を問はんと欲せば先づ來り見よ』と。侯これを聞き、駕を命じてその居を訪うた。會津侯保科正之・美作侯加藤泰義、亦た禮を厚うして闇齋に師事した。會津侯最も彼に敬服したのである。然るに侯の卒するに及んで、又京都に歸つた。その門に學ぶもの上中を通じて數千人に及んだといふ。彼は程朱の學を攻むと雖も、博覽を喜ばず、又詩文を好まず峻嚴凜烈を以て敎を立てた。殊に晩年吉川惟足に從つて古神道を研究し、大にこれを唱導した。闇齋の門下中最も聞えたるは佐藤直方と淺見綱齋とである。

時中と兼山　闇齋を語れば勢ひ土佐南學派の二人物、谷時中と野中兼山とに及ばねばならぬ。谷時中名は素有、字は時中、通稱は大學、のち三郎右衛門と改めた。土佐の人である。初め僧となり、慈冲と號した。天文中南村梅軒の徒天室に從ひて程朱の學を講じ、終に還俗して儒を以て業と



野中兼山

し、大にその學を州内に唱へた。當時これを南學の一派と稱した。兼山・闇齋また來つて彼の業を受けた。國侯彼を徴すけれども遂に辭してつかなかつた。著はすところ文集及び語録がある。慶安二年十二月晦日、年五十二で歿した。兼山名は止、字は良繼、通稱は傳右衛門、小字を左八郎といひ、土佐侯の重臣である。又主計を改め、更に伯耆と稱しついで今の名に改め、又高山と改稱した。少うして谷時中に從ひて學び、歸りて祿萬石を食んだ。即ちその學ぶところを以て國に施し、頗る改革するところが多かつたのである。然れどものちには讒に逢ひて退けられた。門人頗る多く、山崎闇齋の如き、その隨一人である。寛文三年四十三で歿した。



淺見絅齋

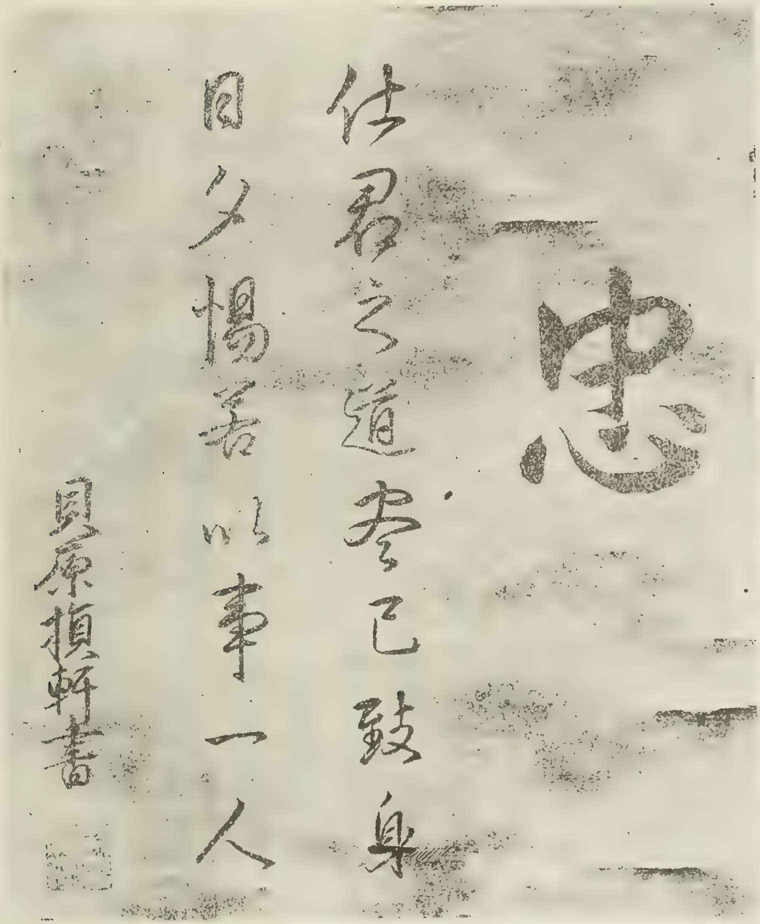
直方・絅齋・尚齋　尚ほ闇齋門下の三傑と稱せられるものに、佐藤直方・淺見絅齋・三宅尚齋の三人がある。直方は小字を五郎左衛門といひ、備後の人にして、はじめ闇齋について儒を修めたが、闇齋の神道を唱ふるに及びその說を異にするを以て絅齋と共に破門せられた。後年、結城侯及び厩橋侯に仕へたけれども、辭して神田明神の附近に卜居した。享保四年八月十五日、年七十で歿したのである。絅齋は名を安正・重次郎と稱し、望楠軒と號した。近江高島の人にして、初め醫を業とし、高島順良と稱したが、のち淺見氏に改めた。家もと豪富なりしも、家産を破りて一時は豪傑に交はつてゐた。闇齋と知るに及びて、清苦の中に儒學を學んだが、のち學說の相違より破門せ

られた。しかも後年、先師にそむくを悔いて、香を焚き稽首してその靈に謝したといふ。正德元年十月、六十歲で歿した。尙齋は名重固、字實操、八重郎と稱した。のち儀平二、また儀左衞門、最後に丹治と改めた。播州明石の人である。年十九にして闇齋の門に入り、學就つて阿部家に仕へた。のち土佐侯の請に應じてその師となつた。元文六年正月二十九日歿した。年八十

貝原益軒

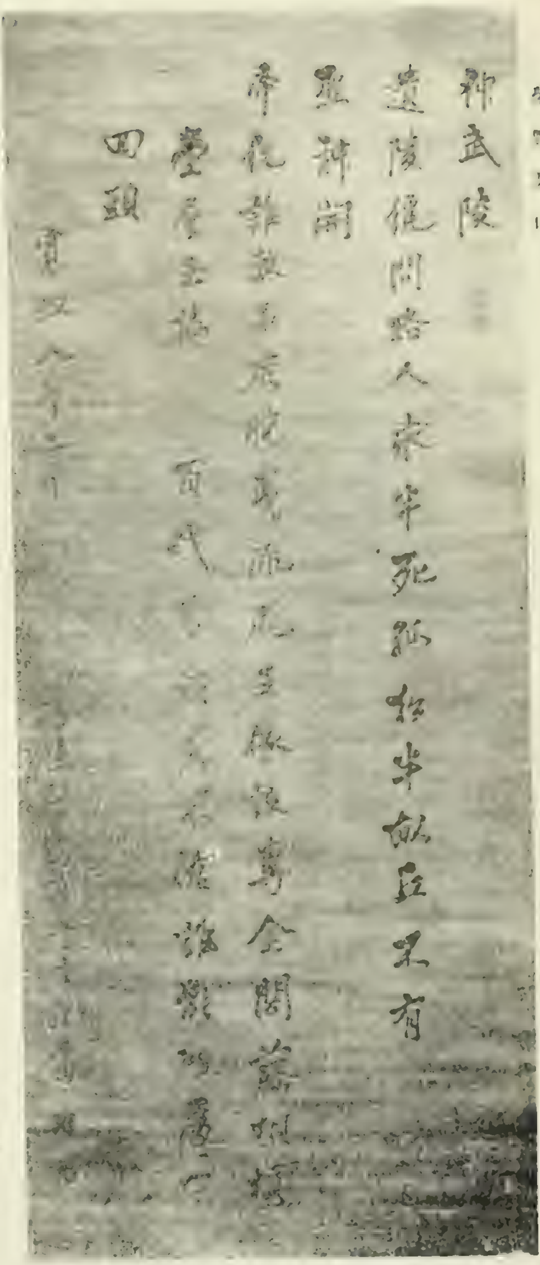
益軒は名を篤信、字を子誠といひ、益軒はその號である。また損軒とも號した。久兵衞と稱し、初め柔齋と號んだ。筑前の人にして、世々福岡侯に仕へ、父寬齋は醫を業とした。益軒、幼時醫書を讀み、また好んで佛書に親しんだ。しかるに兄元端に四書の句讀を受けるに及び、大にその非をさとり、是よりまた佛書を手にしなかつた。明曆年間京都に遊び、松永尺五・山崎闇齋・木下順庵等の諸儒に從つて學び、日夜刻苦すること七年、大に業の進むのを見た。初めは陸王の學を尊び、「學蔀通辨」を讀むに及びてこれを「尙書」「論語」に質し、しかるのち深くその非をさとり、盡く舊學を棄て改めて洛閩の學についた。中年、京師に學を講じた。博覽强記にして究めざるところなきと共に、性謙遜なるを以て他に傲らず、居常深く韜晦して好んで書を著はした。しかもその書、多くは國字を以てし、田夫野人と雖も解し易からしめた。彼れまた奇勝名蹟をさぐることを好み、足跡殆んど天下に遍ねく、またその行程を記して旅人に便にした。且つ深く攝生を重んじ、老に

及びて矍鑠として衰へず、正徳四年、國に歸つて歿した時は八十五であつた。彼はまた和歌を嗜みて詩を嗜まなかつたが、消息の筆札等大いに見るべきものがある。



貝原益軒

柴野栗山


柴野栗山

三博士と賴家一族

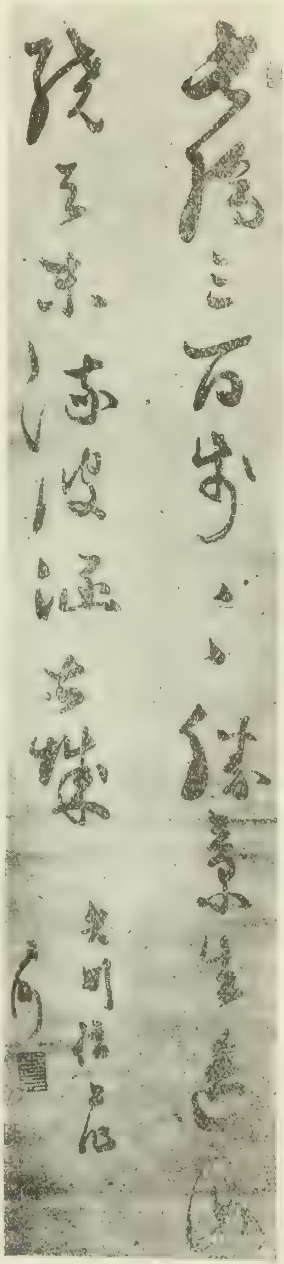
以上の諸人を程朱學派の系統の、徳川前半期の人と見る時、後半期には、例の寛政の三博士の一派と、詩人の二派、殊に山陽、星巖の二者のあつたことを見るのである。寛政の三博士とは、柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里の三人である。その中で栗山が首座、二洲が良佐、精里が輔助と呼

ぶ為めに、寛政三助とも稱する。共に寛政前後に於ける昌平黌の教官として、程朱學を奉ずる一世の學風を發揚したるを以て有名である。柴野栗山は自から修して柴栗山といひ、名は邦彥・彥輔と稱する。栗山はその號、また古愚軒・三近堂と號す。讃岐高松の人にして、初め後藤芝山に學び、のち東遊して業を林氏の門に受けた。英邁不群を以て、經籍に讀み耽り、傍ら詩文をよくした。學成つて阿波侯に仕へ、その儒員となつて、祿四百石を食んだ。京師に住して宋學を唱へ、西依成齋・赤松滄州・皆川淇園等と友としてよかつた。天明八年、五十三歲の時幕府に召され、江都に來つて昌平黌の教官となり、幕命を受けて林祭酒・岡田寒泉と共に學政を料理し、世の學者をして一に程朱の說を奉ぜしめるに努めた。當時伊藤藍田・市川鶴鳴・冢田大峯・古島昔陽・龜田鵬齋・豐島豐洲等ありて、異學を樹て、都下の書生皆これに薰染したる中にあつて、たゞ栗山等のみ毅然として動かず、學政を修むることを以ておのが務めとした。故を以て國學の規模一新して稍々程朱に向ふを知るに至つたのである。のち布衣班に進み、公子の侍講となつた。文化四年十二月朔日、年七十四で歿した。彼は書を著はすことを好まなかつたから、今に殘るところ甚だ少い。

尾藤二洲

尾藤二洲は名を孝肇、字を志尹、一に約山と號した。通稱は良佐。伊豫國川江村の人である。幼にして足疾あり、大阪に來つて學を片山北海に受け、復古學を講述してゐた。こ

の時、安藝の頼春水も亦その社友であつたところから、友として親しかつた。春水この時洛閩の書を得てこれを喜び、乃ち二洲に勸めて讀ましめた。二洲また甚だこれを喜び、以て正學となりて、相共にこれに從ふことに決心した。また中井竹山の兄弟と親善であつた。寛政中、德川幕府に召されて教官となり、俸二百石を賜はる。その足疾のあつたのを以て特に官舍を黌の境內に賜ひ、のち第を壹岐

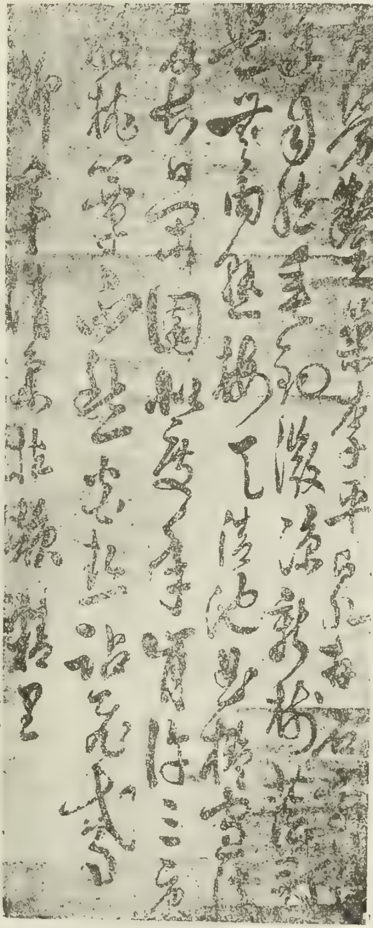

尾藤二洲

坂に賜ひて老を養はしめた。二洲人となり恬淡簡易、詩は陶柳、文は歸震川を愛し、老に及んでまた白傳を喜んだ。文化十年、年六十七で歿してゐる。著書は比較的多い方である。

〔七〕賀精里

精里は名を樸、字を淳風、といひ、通稱を彌助と呼んだ。佐賀の人にして、初め福井小車に從ひ、のち西依成齋等に師事した。最後に大阪に寓し。尾藤二洲、頼春水等と交はり

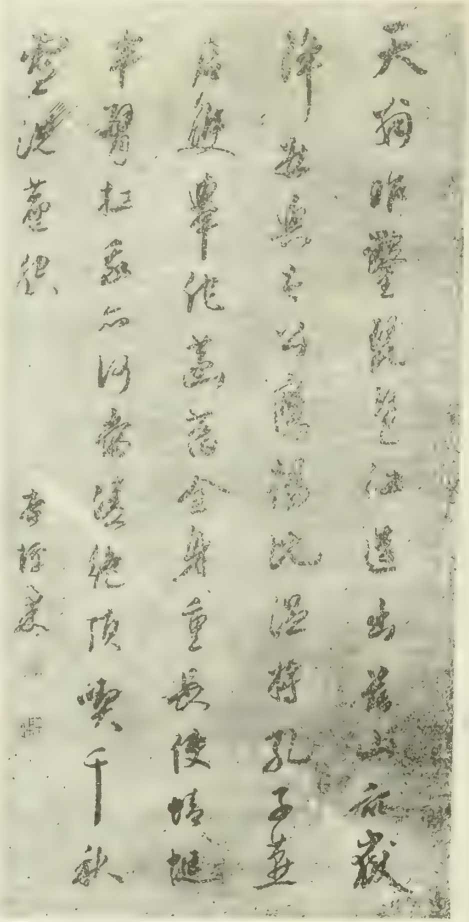
が殊に厚かつた。藩侯の學校を刱設するに當り、精里その敎授の事に任じたが、寛政三年江都に來りて、七年幕府の儒員となり、既にして昌平黌の敎授に陞り、海內仰いで斯道の泰斗となすに至つた。詩は漢魏を祖とし、李杜を宗とし、文は周秦を祖述し、材を兩漢六朝に取つた。最も經義に深く、また書法を好んで趙子昂を學び、のち米南宮・董其昌の諸家を參照して、晉唐に遡り、雅健老蒼、一時に冠たるものがあつた。三博士中、書の精能を以てすれば彼れを推さねばなるまい。かねて鎗術にも通じた。文化十四年五月四日、年六十八で歿した。著はすところ數種の好書がある。


古賀精里

賴春水

賴家の一族は、學者としては必ずしも一流ではなかつたかも知れない

が、稀世の才人山陽外史をはじめ、人格の士春水あり、慷慨の人三樹三郎あり、みな以て大に語るべきものである。頼春水、名は惟寛、字は千秋、一の字は泡菴・彌太郎と稱した。また霞崖・拙巢・和



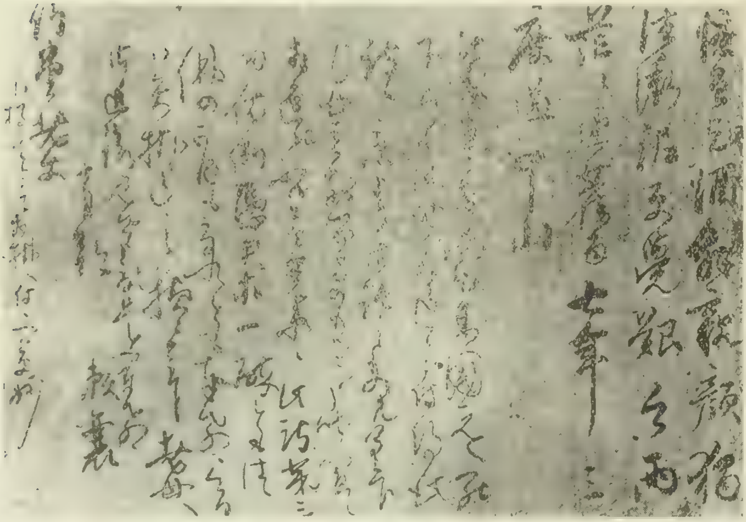
頼杏坪

亭等の號がある。安藝竹原の人にして、父を亨翁といふ。十七にして京都に遊び、諸名士の間に交つたが、既にして歸りてまた大阪に至り、遂にこの地に留つて徒に授けて生を爲した。時に十九であつた。是時にあたり、片山孝秩・葛子琴・岡公翼等の詩社たる混沌社に入り、詩名忽ち同人を驚かしたが、既して洛閩の書を得てこれをよろこび、奮然として舊來習ふところを棄て、尾藤二洲・古賀精里と共に程朱の學を講究

し、中井竹山兄弟・西山拙齋・菅茶山と往來して、ますます切磋の功を積んだ。斯くして天明元年の冬には本藩の儒員に任ぜられた。蓋し此の時、藝藩はじめて學校を建て、春水爲めに學制を定めたのである。その三年、江戸に赴きて世子の伴讀となり、世子が封をつぐに及びて東觀往來には必ずこれに從つた。春水の初めて仕へた時は俸三十口であつたのも、累增して祿三百石に上り、文化十三年二月十九日を以て、年七十一で歿した。彼れ風格峻整にして、妻子と雖も未だその惰容あるを見なかつたといふ。その妻梅思風また賢母を以て名がある。蓋し山陽はその生むところである。名は靜・飯岡義齋の次女にして二十歳の時春水に嫁し、翌年山陽を生んだのである。淑德の名高く、また歌書をよくした。天保十四年十二月九日、年八十四で歿した。

賴山陽

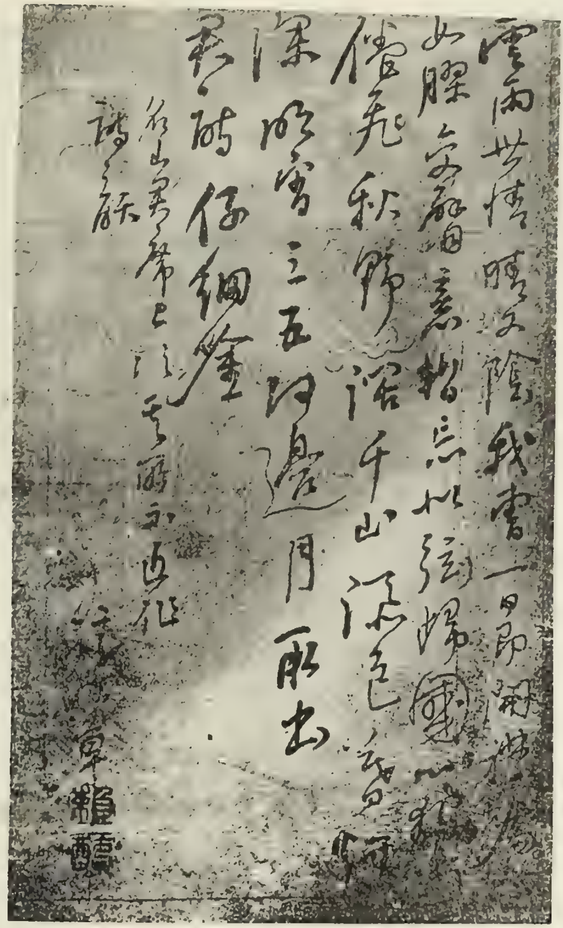
山陽、名は襄、字は子成、通稱は久太郎、山陽はその號である。京に入つてまた。三十六峯外史と號した。彼れは江戸に生れたが、幼にして鋭感、嶄然頭角を見はし、年十三にして、春水の江戸にある際、山陽詩を作りてこれに寄せたのを、柴野栗山見て大に歎賞し、曰く、春水子あり、これをして實材と爲さず、乃ち詞人たらしめんと欲するか、宜しくそれをして史を讀み古今の事を知らしむべし、而して史は通鑑綱目より始めよと。山陽これを聞きて感奮して日に綱目を讀んだ。然れども治亂の大勢を記するのみ、書法發明等は讀むを屑とせない。栗山聞いてますますこれ



頼山陽

を寄とした。年十八、叔父杏坪に従ひ東遊して尾藤二洲の塾に在る事一年、才學日に進んだ。文化七年備後に遊んで菅茶山の塾生を督し、明年去つて京都に遊び、遂に止まる。時に年三十二。文化十三年春水疾篤しと聞くや、時に徒を聚めて莊子を講じてゐたが、巻を投じて即ち發し、晨夜馳せ赴く。京より廣島に及び殆ど百里、五晝夜にして至つた。然れども既に父の死の後であつた。山陽の遺憾比ぶるものなく、これよりまた終に一生莊子を手にしなかつた。文政元年二月、春水の大祥忌に廣島に歸省し、喪除いてより九州に遊び、明年春廣島に歸り、母を奉じて京に入り、ついで廣島に送つた、爾後必らず一年に一回は母を省した。六年、家を三本木に移し、山紫水明處と稱した。然るに天保三年六月、忽ち喉

嗽を發して血を吐く、醫曰くこれ積年神を勞するの致すところ、所謂肺血疾とて、不治の疾である。先生高邁、死を怖れざるを以て敢て實を以て告げるのであると。山陽曰く、死生命あり、然れども我れ上に老母あり、且つ志業未だ成らず、たとひ一の生理なきも宜しく療醫を加ふべし。我れつゝしみて業を服し、傍ら死計を爲さんのみと、時まさに日本政記編述に著手して居た。乃ち日夜刻勵して稿を構へた。曰く、我れ必ずこれを成して地に入らんと欲すと。已にしてその九月廿三日、年五十三を以て歿した。春水及び山陽については、既に書家として記したけれども、文



頼三樹三郎

人として再び錄した次第である。

程朱派諸家　上

因是・述齋・澹所

次に昌平黌一派の人として文化の五藏がある。葛西因是（健藏）・林述齋（熊藏）・平井澹所（直藏）・松崎慊堂（退藏）・佐藤一齋（捨藏）これである。因是は名貫、字體文、通稱健藏・因是と號した。父は陸奧の人にして、彼を大阪に生んだ。既にして江戸に移り、學を平澤旭山に學び、のち林祭酒の門に入り、昌平黌の講員となり、また膳所・濱田の二侯、延招して門閣とした。文化六年四月六日年六十で歿した。述齋は名衡、字德詮・述齋また蕉隱と號し、幼名は熊藏といつた。幕府の儒官となり、大學頭に任じたが、生父は松平能登守乘蘊である。林祭酒（簡順）の歿して嗣なきや、幕府は特に述齋を擢んでてその後を承けしめた。天保十二年七月十四日、年七十四で歿した。林家の人物としては、鵝峰・鳳岡以來の英才と稱すべく、學殖、手腕兩つながら兼ね備へてゐた。澹所は名直藏、字可大、一に君敬・澹所と號した。伊勢の人であるが、江戸に出でゝ關松窓・平澤旭所に學んだが、更に兩氏の紹介を以て昌平黌に入り、學成りて桑名侯に仕へ、二百石を食んだ。文化十四年、年五十九で歿した。

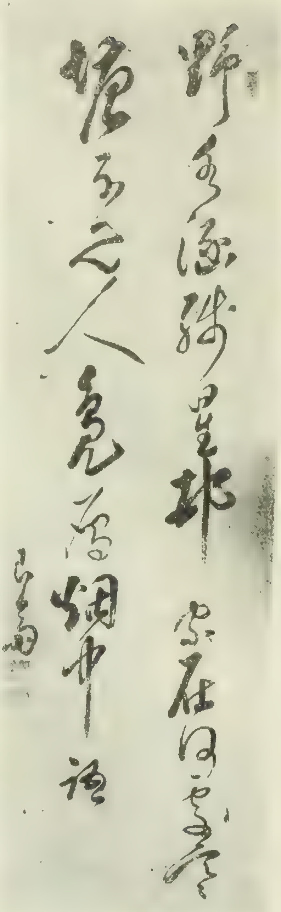
慊堂と一齋

松崎慊堂は初の名密、字退堂、又益城と號した。肥後の人にして、幼時僧と

なつた。十五の時江戸に來り、昌平黌に入り、林述齋の家塾に寓し、一齋と共に學を勵んだ。のち掛川侯に仕へ、弘化四年四月、年七十四で歿した。一齋は名坦、字大道・一齋また愛日樓・老吾軒等と號した。江戸の人である。はじめ信行、のち久藏に改め、更に捨藏と稱した。岩村公の臣にして、林述齋の門に入りて儒を學んだが、また井上四明・鷹見星皐の門にも出入した。更に浪華に遊び、中井竹山の門に入り、のち休箇順にもついた。かくして一齋の學才漸く進み、文化二年林氏の塾長となり、衆門生を督し、つひに一世の名儒となつた。安政六年八月廿四日、年八十八で歿した。

【太室・艮齋・宕陰】 程朱學派の主なる人々にして、上に洩らしたのを一括して順序なく拾つて見よう。先づ澁井太室・安積艮齋・鹽谷宕陰・安井息軒・岡嶋冠山・秋山玉山がある。太室は名孝徳、字子章、通稱平左衞門、佐倉の人にして、初めは折衷學派に赴いたところ井上蘭臺に學び、のち林整宇に師事して都講となつた。佐倉侯に召されて侍講となり、天明七年に侯が大阪城代となるや、擢んでられてその老職に任じ、天明九年六月十四日、大阪に歿した。年六十九。艮齋は名重信、單に信を以て行はれる。字は思順、通稱は祐助、又見山樓ともいふ。奥州二本松の人にして、佐藤一齋に師事した。のち林祭酒の門に入りて名聲都下に震つた。尤も文章に長じ、また詩名があつた。天保の末、本藩學館の教授となり、幾くもなくして昌平黌の教授となつた。列侯以下相延いて講經を聞き、殆ん

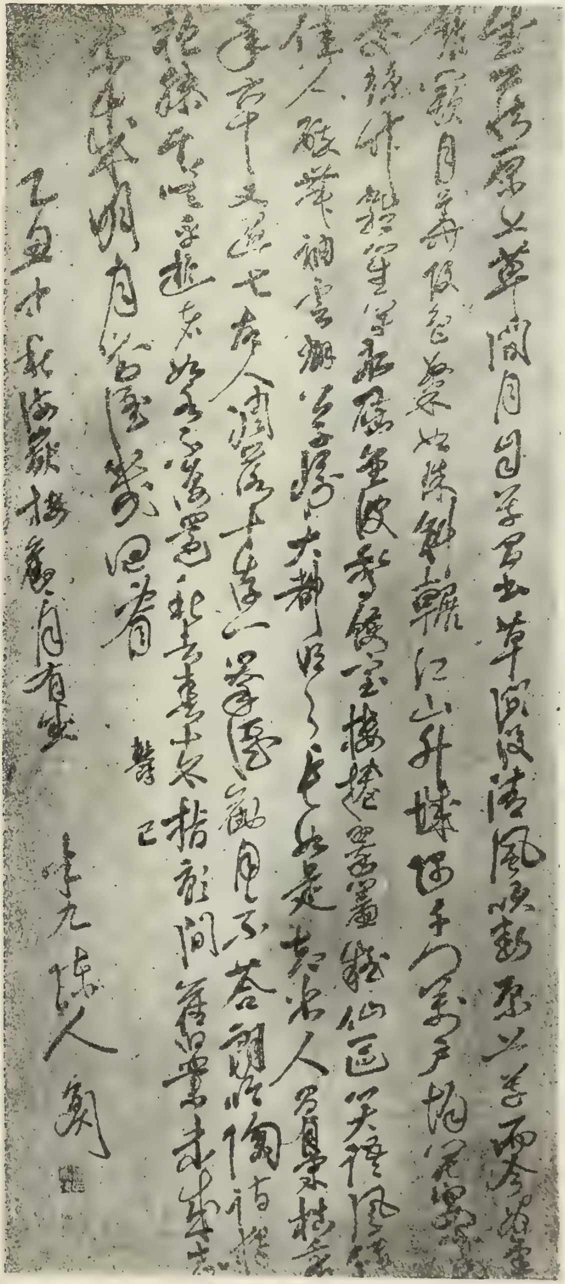
ど虛日がなかつたといふ。安政六年、年七十六で歿した。宕陰、名は世弘、字は毅侯、一に九里香園、と號した。江戸愛宕山下に生れたから斯く號するが、或は山形の人ともいふ。その生るゝや箔金の甲を遺るものがあつたので、甲藏と稱した。兒たる時、嬉戲するに軍容を裝ひ麾を執りて床に踞り、群童をその膝下に俯伏せしめるを常とした。父桃蹊これを奇とし、自から句讀を授くるに、神童の觀がある。十六歳にして昌平黌に入り、二十一歳にして關西に遊んだが、父死するや江戸に帷を垂れ、教授して以て母を養つた。水野越前守の爲めに擢んでられたが、たま〳〵主侯の老中となるや侯を補佐すること少なくなかつた。つひに俸二百石に上り、國政を聞くに與つた。やがて書を著はして憂國の策を議するや、幕府の命により て將軍に謁を賜ひ、ついで儒官となつた。慶應三年九月三日、年五十九で死んだ。



安積艮齋

安井息軒

安井息軒名は衡、仲平と稱した、日向の人である。父は朝定、滄洲と號し



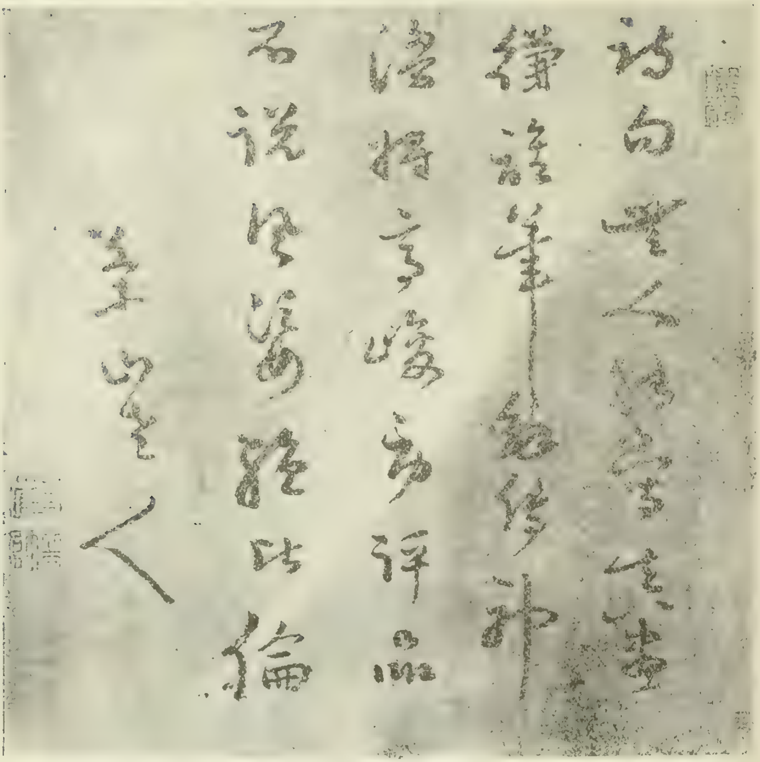
安井息軒

た。息軒はその次子である。丈低く、面に痘痕あり、容貌愚に似てしかも識見明かに、色温にして且つ氣剛であつた。その鄕里は海隅にあつて人皆朴陋、文事を喜ぶ者は殆んどなかつたが、息軒ひとり發憤して書を讀み、矻々として惰らなかつた。弱冠にして大阪に遊び、篠崎小竹に見えた。小竹大にその人物に驚き、詩を賦して贈つた。更に江戶に至り昌平黌に入り、贄を松崎慊堂の門に取つた。彼の主飫肥侯、その名を聞き召して侍讀と爲し、明年藩校を創立して助教に遷し、又九州を巡覽せしめた。既にして權要の爲めに阻まれたので、遂に職を辭して東行し、再び昌平黌に入り、ついで增上寺の僧寮に寓し苦學ののち、徒を聚めて業を授けた。玆に於いて、主侯再び彼を起用すべしとし、祿百石を給せんとしたが、息軒疾と稱して出なかつた。のち「海防私議」一卷を著はすや水戶烈公の顧みるところとなり、幕府に召されて兵を談じた。その歿したのは明治九年九月廿三日にして、年七十八東京に終つた。性淡泊にして素儉自ら奉じ、たゞ圍碁を好むに過ぎなかつた。その書また、俗氣を止めず、頗る見るに足るのである。

冠山と玉山　岡嶋冠山、名は明敬、後ち璞と改めた。字は援之、のち玉成、通稱は彌太夫長崎の人である。初め通譯官となつたが、のち辭して京攝の間に遊び、また江戶に出で、林鳳岡の門に學んだが、晚に京都に住した。彼は儒者といふよりは、「水滸傳」その他を和譯した人として知られ

る。寶延年中年五十五で歿した。岡嶋竹塢はその男である。秋山玉山は名を儀、一に定政、字を子羽、儀右衞門と稱し、又靑柯と號した。本姓は中山氏、叔父秋山需庵とて、醫を業とする人の養子となりその技を習つたが、また學を好むところより、舅水足屛山に從つて儒を受け、博く群藉を凮つて發明するところが多かつたので、藩主は儒庵に命じて、更に他子を養つて醫を嗣がしめ、玉山をして一に儒學を專らにせしめた。乃ち藩主に從ひて江戶に至り林鳳岡の門に入り、留學十年に及ぶや、鳳岡その才を奇とし、講說の日己れ事あれば玉山をして代らしめるに至つた。のち國に歸り侍讀となり、擢んでられて鳥銃隊長となり、また寶曆四年、熊本の新に學校を起し時習館と稱するや、玉山これが提學となつた。寶曆十三年、年六十二で肥後に歿した。數種の遺著がある。

【菅茶山】それについては、菅茶山と西山拙齋・伊藤坦庵の一派佐久間洞巖・山縣大貳・古賀穀堂・齋藤竹堂の如きがある。茶山、名は晉帥、字は禮卿、太冲と稱した。備後神邊の人で、家世々農商を業とした。茶山學を好み、少時備中の西山拙齋と同じく京師に入り、那波魯堂に從ひて洛閩の學を受けた。既に歸つて鄕里に敎授しのち、その宅の東北に一塾を築き、黃葉山に對するを以て黃葉夕陽村舍と號した。拙齋と往來最も親しかつたが、その歿してのちは山陽・南海諸國の子弟を率ゐ、詩名遠近に高かつた。福山侯、初めその名を知らなかつたが、林述齋について、方今海内の詩人、



菅茶山

菅晉師の右に出でるものなきを聞き初めてこれを擢用せんとした。然れども茶山病を以て辭したので、儒員に準じて時に召し對するに止まつた。人となり骨格岩偉、方面高顴、老に及んで朱顏白髮、これを望みて威あり、接して温和、恂々として田舍翁の如くであつたといふ。文政六年秋、大目附に進んだが、八月十三日、遂に八十を以て歿した。私諡して文恭公といふ。著書が多い。二弟あり、長は汝卿・季は晉葆、恥庵と號した。

西山拙齋

拙齋、初めの名は思義、字は見利、後名を正、字を士雅と改め、至樂居と號した。備中國鴨方の人である。年十六にして大阪に遊び、醫術を古林見宜に學び、儒業を岡學齋に受けた。學齋の歿後、外孫那波魯堂を師とし、また和歌を紀美領、伴蒿溪等に學んだ。拙齋人と爲り敦厚にして、深く程朱の説を信奉し、異學を惡むこと最も甚しかつた。初め越中侯の樞機に當るや、人才を求むるに急にして、栗山に問ふに、儒中の學徳共に高きものを以てしたから、栗山は拙齋を以てこれに答へた。古賀精里また嘗て曰く、『今世の儒にして豪傑の資あり、學純正ならざるものは復軒なり、君子の徳ありて學また純正なるものは拙齋なり』と。以て人に推服せられてゐたのを知られる。彼れにも好著が數種ある。寛政十年十一月五日、年六十四で歿した。因に茶山及び拙齋の師なる那波魯堂は活所の孫にして、名は師曾、字は孝卿、通稱は至膳、鐵硯道人と號した。播州姫路の人にして阿波侯に仕へ、寛政元年八月十一日、年六十三で歿した人である。その養子を網川といふ。

伊藤坦庵一派

次に伊藤坦庵の一派に言及しよう。坦庵は名宗恕、字元務、別に白雲散人・不輟齋・自怡堂と號し、京師に居つて業を那波活所に受け、程朱の學を專らとした。越前侯召して文學とし、祿千石を賜つたが、猶ほ止まつて京都に居た。のち讒にあひて福井に幽せられること三年、結局寃を以て釋されて京都に還り、寶永五年八月廿五日、年八十六で歿した。その養子に龍洲がある

名は道甚、一に元基、もと淸田氏である。播摩の人にして、坦庵に學び、養はれて嗣となり、職を襲つて福井侯の文學となつた。龍洲の子に錦里・江村北海・淸田君錦の三人があり、「伊藤氏の三橋」と呼ばれた。錦里は名縉、字若夏・莊次郎と稱し、又鳳陽と號し、平安の人である。夙に家業を受け、經藝を以て聞えた。資性愼重、名聞を求めず、謁見を乞ふ者と雖も、贄をとるに非ればこれを謝絶した。越前侯に仕へること殆ど四十年、屢々江戸又は福井に至つたけれども、門の外に出でることは稀であつた。安永元年三月九日、六十三で歿した。江村北海は、名綬、字君錫、通稱は傳左エ門、宮津の靑山侯の文學たる江村毅庵の嗣となり、養父の職を襲ぎ、擢んでられて京邸の留守居となつた。のち致仕して室町に對梢館を築き、詩文を敎ふるを以て業と爲した。大阪の片山北海、江戸の入江北海と共に「三都三北海」と稱せられる。天明八年二月二日、年七十六で歿した。淸田君錦は、名絢、字君錦・儋叟又孔雀と號した。彼もまた越前侯に仕へ、天明五年三月、年六十七で歿した。尙ほ錦里の家は養子君嶺これをつぎ、錦里の門人には近江の人端隆があり、龍洲の門人には、播摩の人緒方維友、越前の人松下見櫟があり、君錦の門人には淺井梅櫟があつたことを附記して置く。

程朱派諸家　下

毅堂と侗庵

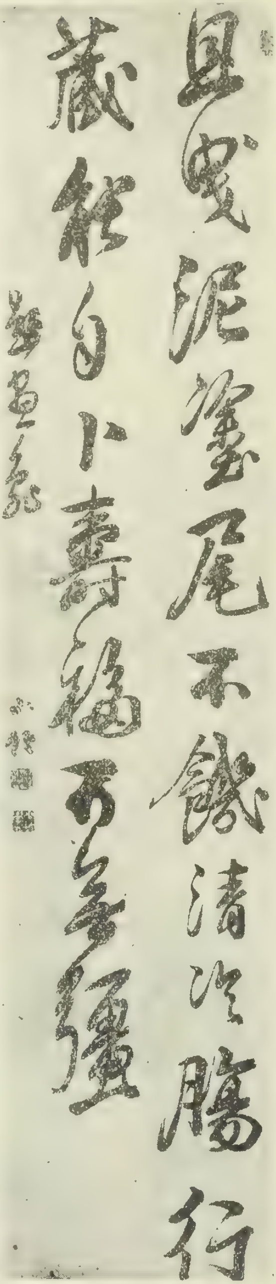
前に述べた古賀精里の門からは、近世の多くの儒者を出してゐる。先づその

子に穀堂と侗庵とがある。穀堂は名壽、字溥卿、幼名文太郎、のち敬一・太郎右工門、一左衛門、修理等と改め、最後に藤馬と稱した。また清風堂・琴鶴堂・潛窩等の號がある。佐賀の人にして精里の子である。父に學んで栗山・二洲・竹山・春水等に往來し、深く稱評せられた。ついで藩に仕へ、教諭に任じた。世に立つに及びて年寄役となり、祿五百石を食み、のち幕府に登庸されて昌平黌の教授となつた。彼はまた瑰麗にして氣韻に富む詩を作つた。天保七年、年五十九で歿した。その弟の侗庵は、名煜、字季曄・小太郎と稱した。寛政八年精里が幕府の召に應じ家を擧げて東に移るや、彼またこれに從ひ、父より業を受けた。文化六年擢でられて儒官となり、米二百苞を賜はり、更に御儒者に轉じ兩番の上に班した。弘化四年、六十歳を以て歿した。その男茶溪、名は增、字は如川、嗣いで幕府に仕へ、明治十七年十月卅一日、年六十九で歿した。その他齋藤竹堂・藤森弘庵・坂谷朗廬・曾我耐軒の如き、皆侗庵の門を出でた最近の鴻儒である。又、精里の門下には、野田笛浦・草場佩川・羽倉簡堂・篠崎小竹・齋藤拙堂の如きを出した。

笛浦・佩川・簡臺・小竹

野田笛浦は、名逸、字子明、俗稱命一といひ、丹後田邊藩主牧野氏の臣である。はじめ家貧しくして備さに艱苦を嘗めたが、精志勵行、學問文章共に大に進んだので、藩主の聞くところとなり、學資を給せられた。十九の時昌平黌にあり、淸人と問答して彼等を敬服せしめ、文詩

の應酬を行つて名聲を博した。安政三年七月二十一日、六十一で歿した。草場佩川は名韡、字棣芳、又玉女山人、濯纓堂主人の號があり、嵯助と稱した。肥前多久の人にして、儒を以て佐賀侯に仕へ、又書をよくした。慶應三年、年八十一で歿した。船山はその子にして、父及び小竹に學び、儒を以て立つた。羽倉簡堂は名用九、字士乾・蓬翁と號し、精里に學び、幕府の儒官となり、文久二年九月二



篠崎小竹

日に歿した。篠崎小竹は名弼、字は承弼、通稱は長左工門、又畏堂と號した。三島の義子である。三島は徂徠の學を奉じたけれども、彼は精里に學んで程朱の學に從つた。その詩最もすぐれ、晩年自ら機軸を出して流麗雅健、兩らこれを兼ねた。その能書の名また甚だ高かつたから、當時書を著はす者必らず彼の序跋を需め、詩を好む者も門楣柱壁必ずその揮毫を懸けざるはなかつた。嘉永四年五月

三日、年七十一で歿した。齋藤拙堂は名正謙、字有終、また鐵研、通稱は德藏、致仕して拙翁と稱した。江戶に生れた。幼にして頴悟、稍長じて昌平黌に入り、業を精里に受け、日々刻苦、中にも力を古文に用ひた。藤主藤堂氏の學校を創むるや、その學職に擢でられ、家を津に移した。時に年二十四。のち講官に任じ祿百五十石を賜はつた。又屢々江戶に扈從し、諸名士と交はり、名聲益々高さを加へた。累進して三百石を食み、致仕するに及んで津の城山下に草堂を營み栖碧山房と曰び、また茶磨山莊と號した。慶應元年七月十五日、年六十九で歿した。土井聱牙・三島中洲の如きは彼の門から出でゝゐる。

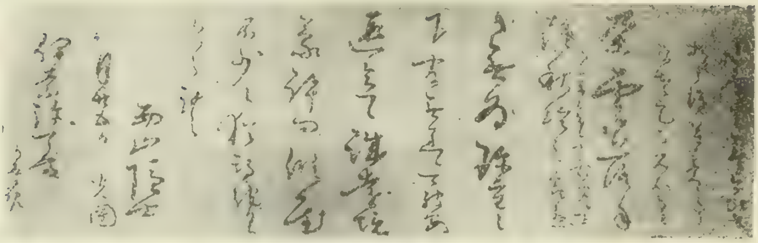
其他の程朱學派

その外、秋月韋軒・南摩羽峰の兩人は精里門の安井帽山に學び、向山黄村は同じく精里門の千坂莞爾から出でゝゐるのである。又前に言ひ落したが、賴山陽の門下には、森田節齋・藤井竹外・後藤松陰・村瀨太乙・牧百峰・江木鰐水・岡田鴨里・宮原節庵の如きがあり、篠崎小竹門下からは、養子篠崎竹陰をはじめ、安藤秋里・奧野小山・高橋坦堂・橋本香坡・山中靜逸・內村鱸香等を出して、以て近年の儒學界を賑はしたのである。

水戶學派

光圀と舜水

玆に程朱學派の槪略を終るに當つて逸すべからざるは水戶學の系統である。



徳川光圀

蓋し水戸學派は、徳川光圀に依りて開かれ、これを助くるに歸化人朱舜水の如きがあり、安積澹泊を經て、後には立原翠軒・藤田幽谷父子・青山延于父子・徳川齊昭・會澤正志齋等を出し、近くは内藤恥叟の如き人物を見るのである。光圀については、こゝに詳しく說くの要を見ない。彼は初名徳亮、字觀之、後子龍と改め、日新齋と號した。又常山人・率然子・梅里等の號がある。元祿三年致仕して、翌年居を西山にトし、西山隱士と號し同十三年十二月六日、七十三歲で薨じた。「兵革始めて息み、文教未だ明かならざるに當りて尊王を唱へ、名分を正し、心を修史に盡し、以て千古の癈典を起した功は長へに盡きざるものであるが、一派の儒道を勃興せしめたる點もまた記さなければならぬ。朱舜水名は之瑜、字魯璵、明の浙江餘姚の人である。業を朱永祐・張肯堂・吳鍾巒等に受け、舉げられて南京松江府の儒學生となり、崇禎の末、恩貢生に擢でられた。考官吳鍾巒の貢劄に、稱して開國第一とある。崇禎年中より徵辟を被むること前後十二回であつたか、皆辭して受けなかつた。明朝の滅ぶるや、逃れて我國に來り、

光圀の爲めに聘せられて賓師となり、天和二年四月十七日、江戸駒込の邸に歿した。年八十三。私諡して文恭といふ。水戸學派は實に此の人あつて始めて勃興したのである。その門下には安積澹泊・安東省庵の如きがある。

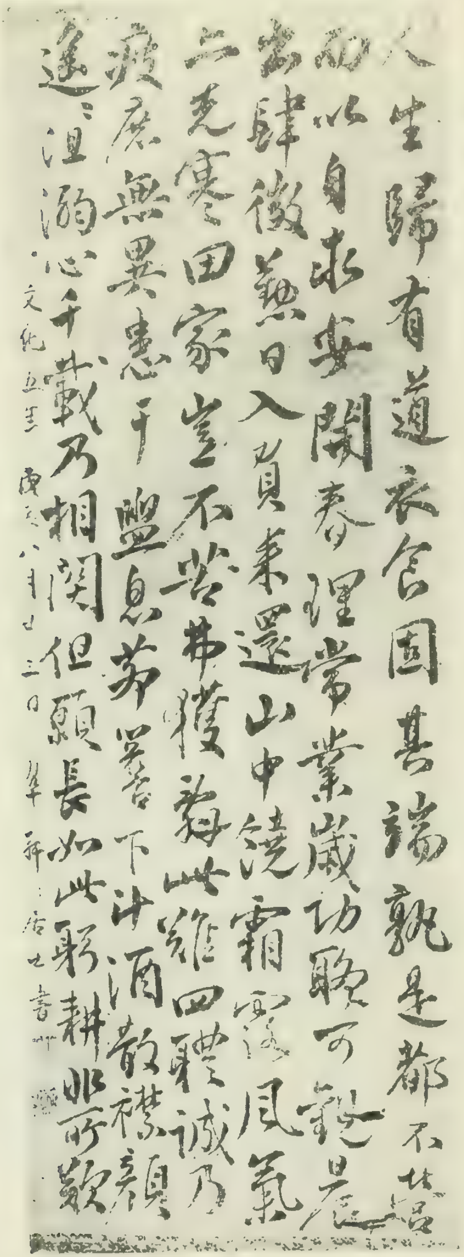
澹泊と省庵

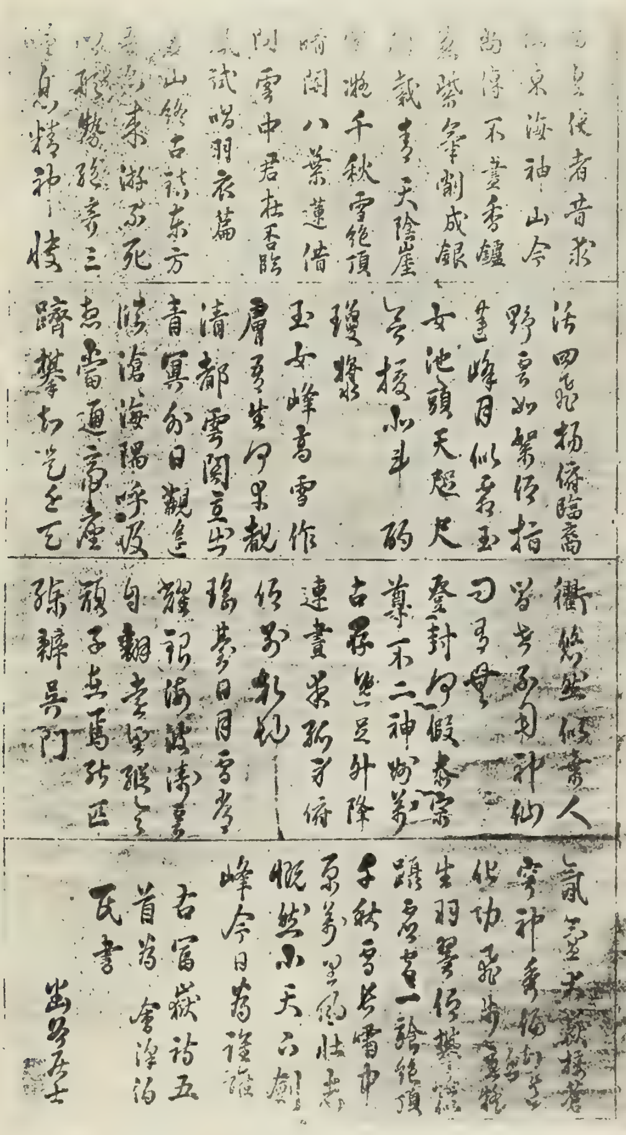
澹泊は名覺、字子先、通稱は覺兵衛、又老圃・常山等の號がある。晩に老牛居士と號し、幼にして朱舜水に師事し、能文にして史學に通じた「大日本史」の編あるや、彼れその總裁に任ぜられ、職番頭に至つた。文久二年、年八十二で歿した。安東省庵は名約、字魯默、一の字子牧、初の名は守正、もと筑後柳川の人である。京師に遊びて業を松永尺五に受けたが、朱舜水の長崎に來るやついてこれに師事した。そして俸祿の半ばを割いて贈つて居たといふ。のち伊藤東涯の如きは彼を稱して關西の巨儒と號した。元祿十四年十月廿日、年八十で歿した。彼は水戸と何等の關係もないけれども舜水學派の人としては最も主なるものである。その子侗庵また柳川藩の儒者にして、名を守直、字を元簡・正之進と稱し、大になすあらんとしたが、不幸父の死せる翌年十二月廿五日、年三十六で夭折した。

翠軒と杏所

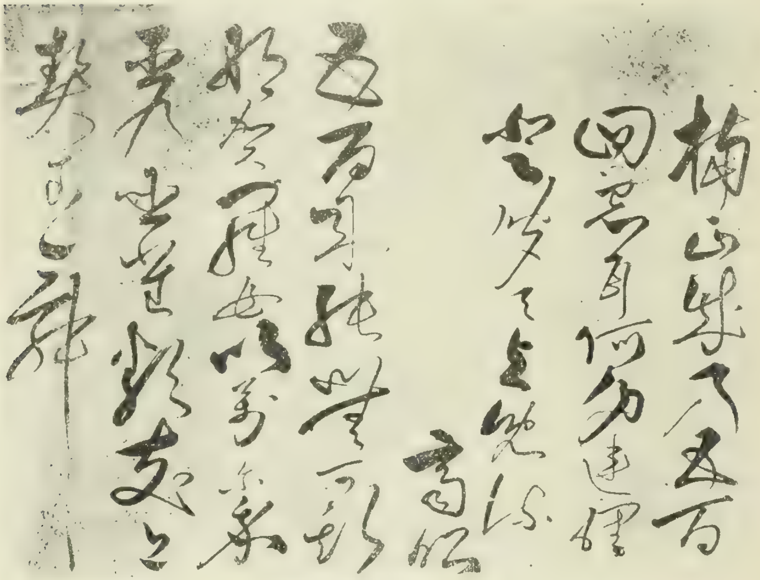
立原翠軒は、名萬、字伯時・甚五郎と稱し、又東里と號した。水戸藩の儒員にして、父を蘭溪といひ、はじめ學を江戸に出で丶餘熊耳に受け、また唐音を紀徳民に學んだが、學

立原翠軒


人生歸有道衣食固其端孰是都不營
而以求自安開春理常業歲功聊可觀晨
出肆微勤日入負耒還山中饒霜露風氣
亦先寒田家豈不苦弗獲辭此難四體誠乃
疲庶無異患干盥濯息簷下斗酒散襟顏
遙遙沮溺心千載乃相關但願長如此躬耕非所歎



藤田幽谷



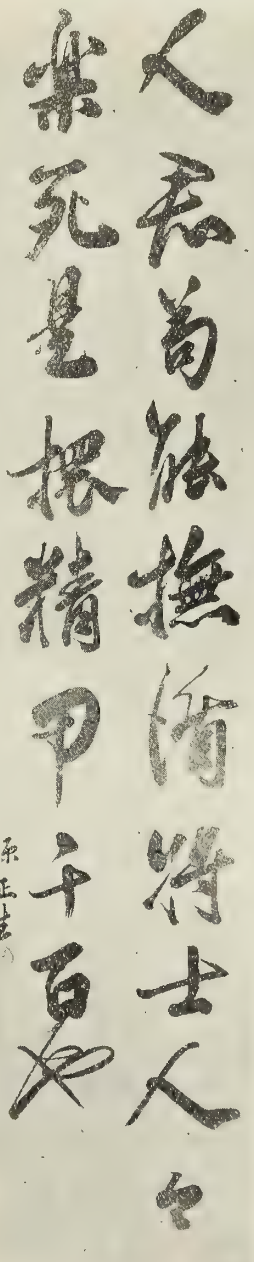
徳川齊昭

成りて水戸に歸り、儒員となり、遂に史館總裁に累進し、又政治に參與した。時に松平定信、幕府の執政であつたから、數々上書して時弊を濟つに。精里・二洲の幕府に用ひられた如きも亦翠軒の建議に出でるといふ。殊に水戸學の晩近大に唱導せられ、以て王政維新の先驅をなしたのもゝ專ら翠軒が鼓吹したところである。その子杏所は南畫家としても有名である。名は任、字は遠卿・杏所の外、東軒・主珥舍・香案小史等の號がある。儒を父につきて學び、また書法は趙子昂及び文徵明の風を學びてのち一格を出した。天保十一年五月二十日、年五十六で歿した。しかし彼は水戸學派の人としてよりも、書畫家として

より多く聞えてゐる。

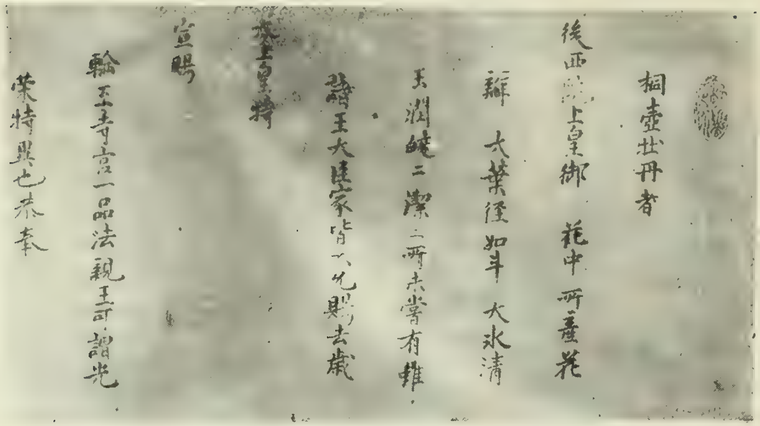
幽谷と東湖

藤田幽谷は、名を一正、字を子定といひ、次郎左エ門と稱した。水戸市の商家に生れたが、幼にして穎悟人に絶し、初め句讀を志水元禎に受け、のち立原翠里を師とし、學業日に進んだ。年十五にして館生となり、召されて藩邸に國史を侍讀した。既にして事を言ふに座して職



武田耕雲齋

を免ぜられ、數年にして再び史館に入り、編修に參與した。更に擢んでられて編輯總裁となり、祿二百石を食んだ人となり。豪邁にして、至誠敎ふるには忠孝を專らとした。實に水戸の思想の精は彼に依つて樹立せられたのである。文政九年十二月朔日、年五十三で歿した。その子東湖、名は彪、字は斌卿・虎之助と稱した。のち誠之進に改めた。人となり衆にすぐれ、皆藤田氏子ありと稱した。その

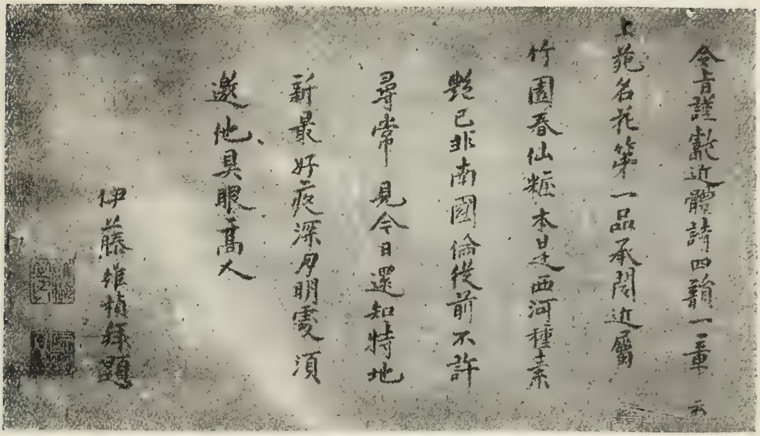


伊藤仁齋（一）

尊王の大義を唱へて後進を誘掖せる事蹟は、詳く語るを要しない。安政二年十月二日、江戸大地震あるや、災にかゝりて歿した、年五十。

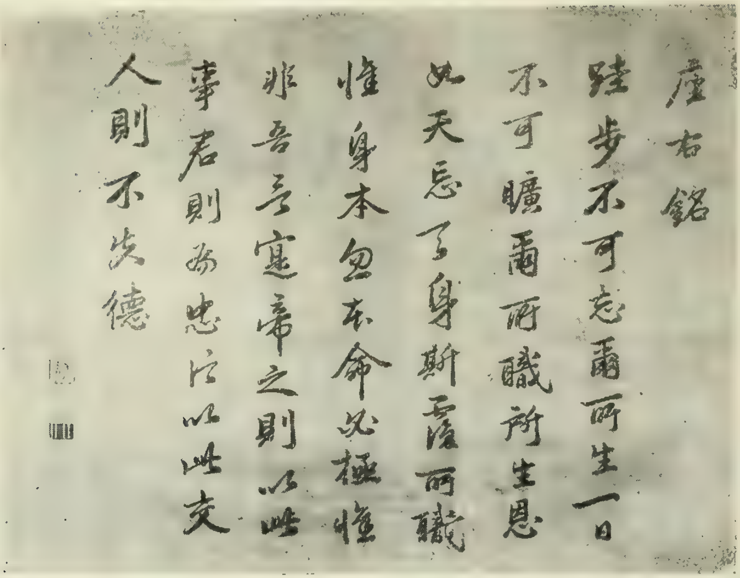
復古學派　上

伊藤仁齋　復古學派の大立物は伊藤仁齋である。彼れ、名は維楨、字は源佐、初名は源吉、幼名源七、又古義堂と稱し、別に堂隱の號がある。堂前に一株の海棠があつた故である。京師の人にして、幼より穎異、群兒に異り、夙に儒學を以て一世に知られんと欲し、刻苦精勵を重ねた。十九歳にして「李延平問答」を讀むや反覆輟まず、紙爲めに爛れ敗れたといふ。これより意を性理の學に用ひ、日夕研磨して遂に「心學原論」「太極論」及び「性善論」を著はした。皆二十八九歳の頃にかゝる。その居る所の室に『誠修』の二字を掲げて自ら警めた。たま〳〵病に



伊藤仁齋（二）

罹りて人事を謝絶すること殆ど十年、これが爲めに家產を傾けんとしたので、家事を仲弟に委ね、自分は別居して一心に書を讀んだ。その間また老莊佛子の書に眼を曝し、既にして一見識を立て、始めて宋儒の學は孔孟の意に乖くといふ疑を發し、これより考索すること多年、略々緒につくことを得た。乃ち謂へらく、「大學」の書は孔子の遺書にあらず、明鏡止水、冲漠無朕、体用一源等の說は老佛の妄說にして、聖人の意に背いてゐることを闡明した。こゝに於いて、門を開き生徒を集め、大に自說を吐いたが、門前忽ち市をなした。彼れの經書を講ずるや、先づ毎朝、必ず書齋の壁間に掛けたる聖像を拜した。人物を品第して生徒を勵まし、又は策問を私に擬作して生徒を試驗し、或は復文を以て文章を習はしめ、毎月それを例となした。元祿の末、仁齋の博學なること遂に天聽に達し、詔してその文



伊藤東涯

を案めしめられた。仁齋、家屢々窮乏したけれども、毫も意に介せず、常に平然として居つた。寛永十二年三月、年七十九で歿した。諡して古學先生といふ、これ仁齋の自ら命ずるところであつたといふ。その子東涯・梅宇・介亭・竹里・蘭嵎・皆世に知られて居る。中にも東涯はその家をついで多くの門生を養つた。又五男蘭嵎は、墨蘭をよくするを以て聞える。安永七年に歿してゐる。

伊藤東涯　東涯、名は長胤、通稱は原藏、別に慥々齋と號した。京都の碩儒である。幼にして書をよく讀み、年長じて博聞強記、文章をよくしまた經書にも詳しかつた。人と爲り沈靜寡默、恭儉謙愼、その言語

は吶であつたけれども、經義を解剖するに至つては精微貫徹し、毫も人の過失を擧げなかつた。臺閣の公卿、その人格を慕つて門に來るものが多かつた。紀伊侯の如きは、東涯の名を聞いて聘したけれども、ついに就かなかつた。此の時、俊秀の士が回方に輩出し、各々學派を以て互に相牴排すれども、東涯は平然として競はず、しかも尙ほ菅麟嶼を始め、東涯を慕ひ學ぶもの頗る多かつたのである。時として、人の彼れに揮毫を求むるものがあれば、貴賤長幼を論ぜず、直ちにこれに應じたといふ。彼は日夕常に手より卷を釋くことなく、而して得るところあれば必らずこれを錄した。故に天下有用の著述少なくない。その數約百餘種に及んでゐる。元文元年、年六十七で歿した。自ら諡して紹述先生といふ。その子に東所・東所の子に東里があり、また門人としては青木昆陽・宮崎筠圃・松崎觀瀾・澤村琴所・穗積以貫・香川太仲・倉成龍諸・原田東岳・島出松岳・廣瀨一峰・垣內熊岳・三谷良朴・朝枝玖珂・山田麟嶼・松波光與・木村鳳悟・原双桂等があつて、皆世に知られてゐる。尙ほ伊藤仁齋の門下生としては、並川誠所・並川五一・並川天民・小河立所・中井岷山・瀨尾用拙齋・松岡宇達・林九成・笠原雲溪・松崎蘭石・北村篤所の如きがある。

昆陽・天民その他

青木昆陽は、名敦書、字厚甫、通稱元藏といひ、武洲の人にして、元文四年幕府の命を拜して典籍の事を管し、ついで儒者に轉じ、終に書物奉行となつた。嘗て歳々飢饉あるを

患ひて甘藷を栽培し、「甘藷先生」と稱せられたのである。又並川天民は、名亮、字簡亮、平安の人にして、儉齋の子、誠所の弟、仁齋について更に仁齋を出でた人にして、その學說は稍仁齋と異ると雖も、終身仁齋の恩を忘れなかつた人である。仁齋の歿するに及びて、その徒分れて二となり、一は東涯に從ひ、一は天民に屬した。天民は天資開朗果斷、志氣豪邁、居常經世の大体を講究し、政治の要道を討論するに、みなこれを「論語」「孟子」「尙書」に原づき、以て聖人の大業大法を發露した。また嘗て上疏して蝦夷地方を以て內國とせんと欲したこともあるが、享保三年四月八日、病歿したるを以て事を果さなかつたので、識者皆これを惜しんだ。時に年四十。天民とは、彼の諱に播つて門人の私謚したものである。松崎蘭谷は、名格元、字子慶、一に甘白と號し、通稱は多助、丹波の人である。世々篠山藩に仕へた。仁齋の門にあるや深くこれを器とせられ、長ずるに及んで博覽弘通、時務に熟達し、最も應接の言辭をよくした。中年ののち臨池の技を好み、能書の聞えがあり、特に草隸に長じた。細井廣澤、その書を評して曰く、『筆法の整齋、林道榮・高天漪・佐文山の上にあり』と。以てその巧妙なるを知るべきである。また心を文章に留め、その行文典雅莊重、絕えて艶富に流れず、時習に染まず、傍ら本草を研究し、稻若水等と交はつて居た。享保二十年七月九日、年六十二で歿した。松岡會達は、字成章、通稱恕庵、怡顏齋と號した。初め山崎闇齋に學び、のち仁齋に師事した

が、文稻若水につき本草學を修め、かねて醫をよくし、國學にも精しかつた。實に多能の士である。京都の人にして、延享三年七月十一日歿してゐる。

復古學派　下

山鹿素行

仁齋と並んで古學の權威たりしものは山鹿素行と荻生徂徠であつたことは言ふまでもない。徂徠については、書家として既に述べたから語らず、素行について稍言及して置かう。彼れ、名は高祐、初名は義矩、字は子敬、一に隱（又因）山といひ、甚五左エ門と稱した。初め佐太郎と通稱した。兵學山鹿流の祖にして、奥州會津の人である。その先は東肥の山鹿に居つたのでそれを以て氏とした。九歳、林羅山の門に入り、十八歳、北條氏長に從つて韜略を學び、文武兼習、名敎を以て己が任とし、武學を以て世に行はれた。年未だ三十ならずして名聲既に藉甚したので、將軍家光も、彼れの名を聞きて擢庸の意があつたれど、未だ及ばずして薨じたといふ。赤穗侯淺野長直、常に素行について武學を問ひ、親ら弟子の禮を執つたが。後には更に禮を厚うしてこれを聘し、祿千石を給してゐた。時に承應元年、素行三十一のことである。居ること九年にして致仕して後も、赤穗侯の敬禮は益々厚かつた。この時に方りて素行の聲望いよ／＼高く、上諸侯幕府麾下の士より、以て藩國の士太夫、閭閻の處士に至るまで、爭うてその門に入り、多きこと數へ難きほどであつた。その

結果は家頗る富み、妻妾奴僕の數の如き、五六千石のものと雖もこれに抗することが出來なかつた。素行、性英邁卓犖、加ふるに博覽強記にして甚だ著述を好み、大に武學を發明し、また老莊浮屠巫祝の說に至るまでこれを考究せざるはなかつた。しかもおもへらく、皆正道ではないと、退いて「治教要錄」、「修教要錄」を述べ、以て聖學の要を說いた。しかしその說は尙ほ程朱の教に據つたが、既にして理氣心性の說に疑を懷き、曩さに著はすところの經解數種を以て、悉くこれを燒き、更に「語類」を作りて以て言を立てた。又その綱領を以て「聖教要錄」の一著を編んだのである。それには程朱を排斥し、辯駁排詆、忌憚するところがなかつた。恰かも當時の人、王侯貴人より士庶人に至るまで、程朱を尊信するもの極めて多かつたので、漢文六年遂に此を以て罪に問はれ、播州赤穗に幽せられ、また命じて「聖教要錄」を毀たしめられた。素行既に謫せらるゝや、赤穗侯敬待すること賓客に對する如くであつた。居ること十年、たま〱家光將軍の二十五回忌厄に會したので、よつて釋されて江戸に還るを得た。而してこれより後は、專ぱら兵學を唱へ、經藝を廢棄するに至つた。その見るところ時流と合はないからであつた。素行また好んで和歌を詠じ、弱冠の頃、廣田坦齋に從つて「萬葉集」「三代集」等を學び、かねて所謂神道學を研究して、頗るその說に詳しかつたといふ。貞享二年九月二十六日、年六十四で歿した。その子に高基あり、高基の子に尙美があり、皆父の遺意

をついで學を以て世に立つた。又門人としては、淺野長矩の父なる前記長直、大石良雄、味木立軒等がある。彼れの敎說が如何に當代に影響したかは、良雄を主監とした四十七士の行動でも解るであらう。

物門の七才子

徂徠については再び繰り返さないが、こゝにその門下生について、一瞥を加へて置かう。徂徠の家系には、その女婿にして、甥なる荻生金谷、(字は太擧、名は道生、のち惣右工門と稱す)その子の鳳鳴の幾らか知られてゐるのみである。門人には太宰春臺をはじめ、平野金華・安藤東野・服部南郭・山縣周南・高野蘭亭・大內熊耳・宇佐美灊水を以て七才子と稱するが、その他にも釋大潮・釋萬庵・篠崎東海・成島錦江・入江南溟・本多猗蘭子・管麟嶼・管谷甘谷・三浦竹溪・大野通明・土屋燕洲等、まことにこれ濟々たる才士のみであつた。中にて春臺及び七才子のみに關して、こゝに一わたり語らう。

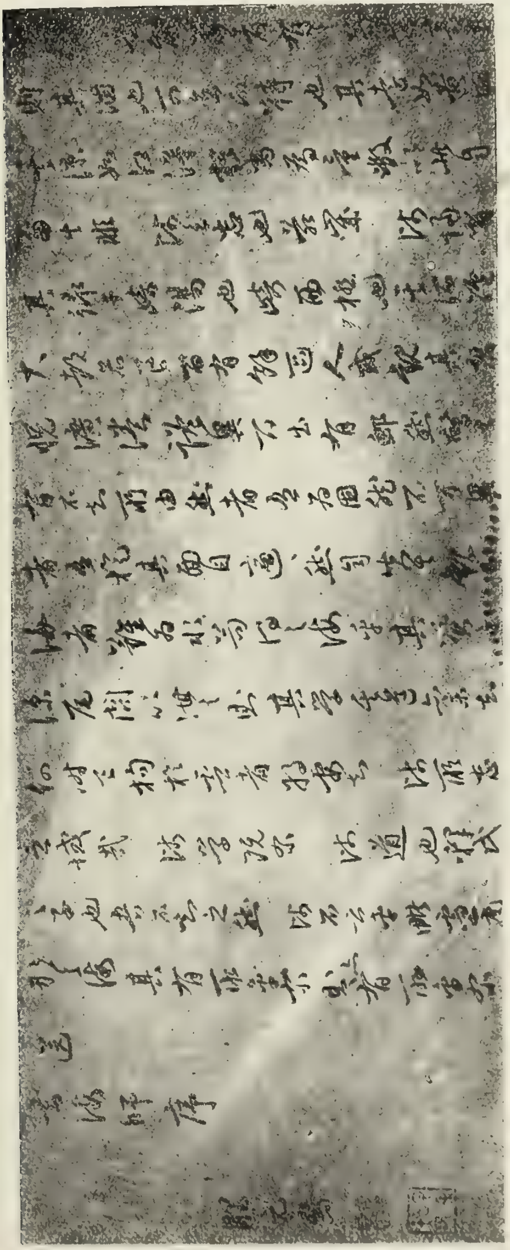
大宰春臺

春臺は、名を純、字を德夫、また紫芝園と號し、通稱は彌左衛門、本姓は平出、信州飯田の人である。祖の言親、加賀侯の太夫橫山氏に任へたが、父言辰出で、姻族太宰謙翁の嗣となつたので、太宰氏を冐した。謙翁は飯田侯の臣である。春臺はじめ父に從つて江戶に來るや、稍や長じて出石侯に仕へたが、數年ののち病の故を以て骸骨を乞ふこと三次、許されなかつたので、自

から藩を脫走せんとし、却つて發見せられて禁錮に處せられた。こゝに於いて春臺京都に行き五畿の間に浮浪すること十年、この時、物徂徠、復古の學を江戶に唱へ、安藤東野・山縣周南、これを助けて業を修め、從游する者日に多かつたが、既にして周南の西に歸らざるを得ざるに及び、徂徠は一臂を失つたのである。たま〳〵東野は少時に於いて春臺と程朱の學を中野撝謙に受け、常にその敏慧に服して居たので、因つてしば〳〵書を寄せて春臺を招いた。時にあたかもその錮を解かれたので、遂に江戶に來り、徂徠を見て大によろこび、舊學をすてゝ東野等と古學を講習した。徂徠の歿するに及び、その門分れて二派となり、詩文は服部南郭を推し、經術は太宰春臺を推した。春臺またこれを以て己が任となし、徂徠の學を紹述したが、しかし晚年には稍、師と說を異にした。春臺剛毅狷介、直方を以て自から居つた。前後見る所の諸侯甚だ多かつたが、未だ曾て己を枉げて仕進を求めなかつた。延享四年五月晦日、年六十八で歿した。彼れ博學洪識にして天文、律曆、算數、字學、音韻、書法、浮屠、巫祝、醫方、雜駁の說に至るまで、該通せざるはなかつた。

服部南郭

彼れ本氏は服部、自ら修して服に作つた。名は元喬、字は子遷、小右工門と稱した。南郭はその號である。又芙蓉館とも號した。平安の人である。幼にして穎敏、年十四、江戶に來り、十六にして柳澤吉保に仕へたが、壯なるに及び物徂徠を見て大にその學を喜び、遂にその門

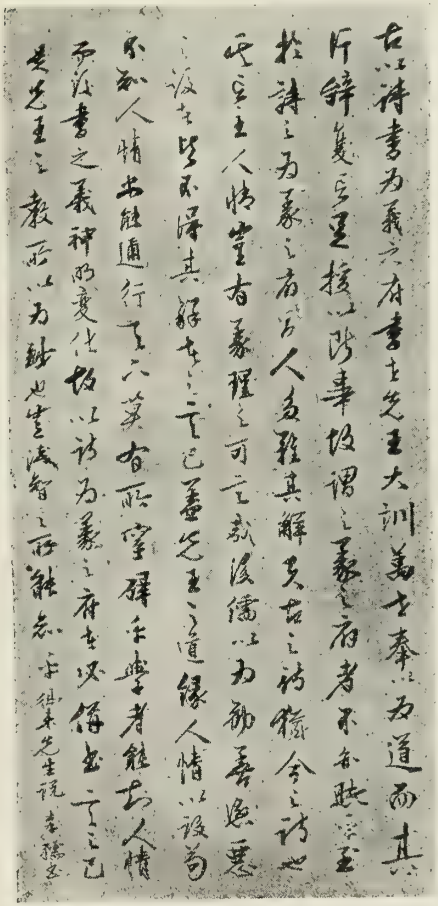


服部南郭

に入り、日夜研鑽を怠らなかつた。徂徠また彼れを呼んで妙才となした。三十四にして致仕し、專ら詩、古文辭を修めて帷を下し、徒にさづけた。彼れ人と爲り沖雅磊落、交驩の際、談笑怡々たるものがあつた。その學博しといへども自ら韜晦し、未だ曾て師儒の重きを挾まず、居常雅致を以て傍ら居り、人の時事を問ふものあれば、哂ひて曰く、『文士迂濶、事務を知らず』と。寶曆九年六月二十一日、年七十七で歿した。南郭專ら詞章を修め、年老いて推敲益々精しく、詩文兼ね長じた。傍ら書をよくし、筆法は雪舟より出でたので、書名を周雪又た觀翁と號した。山水の癖があり、自ら諸國を遍歷し見るところの勝景を寫してこれを壁間に展べ、以て自ら娛みとし、また好んで和歌を詠じた。その人物風格、二つながらおのづから春臺の好對照をなすものである。惟良・惟恭の二子皆早世したので、弟子仲英を養ひて子とした。

東野・金華・周南　安藤東野、名は東壁、通稱を仁右工門といひ、後年商丘大人と號し、白楡社と稱した。本姓は瀧田、下野の人である。初め中野撝謙に學んだが、寶永中柳澤侯に仕へるに及び、また物徂徠に師事した。詩文雋拔音律に通じ、書にも巧みであつた。年二十九にて致仕し、本多西臺侯の賓師となりて廩祿を受けて居た。享保四年、年三十七で歿した。平野金華、名は玄中、字は子和、通稱は源右工門、奧州の人である。徂徠門中の奇人と言はれたが、守山侯に仕へてその記室となり、

文章縱橫、筆端活躍して大に世に鳴つた。彼れは東野と名を等しくして徂徠の双臂と呼ばれたが、また同じく壯年にして死んだ。享保十七年七月二十三日、年四十五で歿したのである。私諡して文莊といふ。山縣周南は、名孝孺、字次公、通稱は少助、周防の人である。年十九、江戸に來りて徂徠に師事し、業成りて國に歸つた。雨森芳洲嘗て周南を稱して、海西無双となした。國侯の明倫館を起すや、周南の計劃に依る所多かつた。元文二年、館の祭酒三宅尙齋歿したので、周南代りて祭酒となり、海內屈指の名儒と呼ばれた。寶曆二年八月十二日、年六十六で歿した。



山縣周南

蘭亭・熊耳・濡水

高野蘭亭、名は惟馨、字は子式、又東理と號した。幼にして徂徠に學んだが、年十七の時失明し、是より百事を廢し心を詩歌に專らにし、つひに南郭比と肩するに至つた。茅堂を圓覺寺の傍瑞鹿山の下に結び松濤館と名け、壽碣を建てた。また俳歌をよくした。寶曆七年七月六日歿した。年五十四。大内熊耳、名は承裕、字は子綽、小字は忠太夫、陸奥の人である。唐津侯に仕へた。その先は百濟明帝の太子餘琳より出でると。亦餘を以て姓とした。安永五年四月、年八十で歿した。宇佐美濡水、自ら修して宇濡水といふ。名は惠、字は子通、惠助と稱した。上總の人、家富豪を以て聞えたが、父習翁の學を好むところより、十七の時彼を出して徂徠に師事せしめた。晩年出雲侯に仕へてその政事を與り聞いた。安永五年八月九日、六十七で歿した。尙ほ太宰春臺の門下には井上東溪・稻垣長草・釋無相・栗原柄川・五味釜川・宮田明・大鹽鼇渚等があり、服部南郭の門には湯淺常山・石島筑波・莊田子謙・安達淸河・宮瀨龍門・鵜殿士寧あり、高野蘭亭の門には松崎觀海・横谷玄圃・近藤西涯・竹子德の如きがあり、山縣周南の門には小倉鹿門・增野雲門・秦守節・小田村鄜山・和智東郊・林南溟・瀧鶴臺・山根華陽・龜井南溟の如きがあつた。

折衷學派

華陰・蘭台・太室

折衷學派としては、林鳳岡より分れ出でたる良野華陰・澤田東江・井上蘭臺、

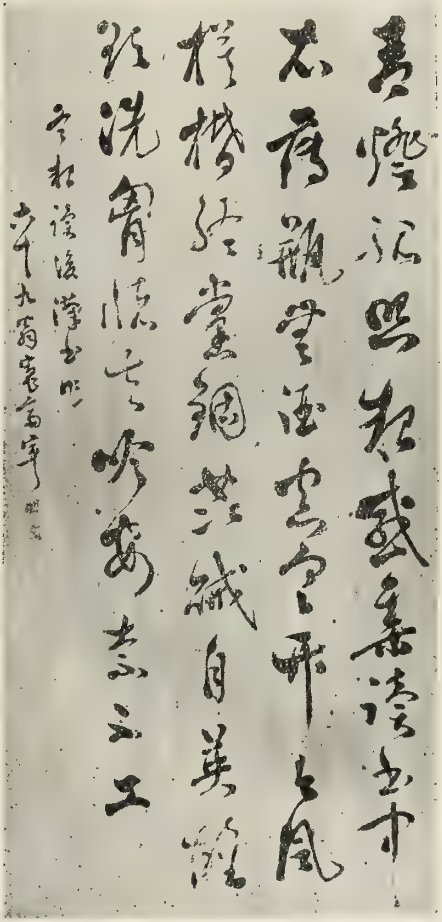
その蘭臺より出でたる澁井太室・井上四明・井上金峨、その金峨より出でたる山本北山・龜田鵬齋・又山本北山の門下なる大窪詩佛・太田錦城・朝川善庵・蒲生君平・柏木如亭・小川泰山・梁川星巖、及び鵬齋の子なる龜田綾瀨その門下卷菱湖・芳野金陵等が最も世に知られてゐる。その中にて、既に書家として語つた人を除いて、一わたり說いて置く。良野華陰は名を芸之、字を伯耕、小字を平助、といひ、讚岐の人である。江戸に來つて劍法を長沼不遠齋に學び、また儒を林鳳岡の門に受けた。のち京都綾小路室町に在つて敎授した。その唱へるところは折衷の學であつた。宇明霞と併せて宇三良平といはれた。明和七年四月三日、年七十三で歿した。井上蘭臺は、名通熈、字子叔、小字嘉膳、又圖南と號した。備前の人である。初め林鳳岡に師事し、のち紀平洲に從學した。岡山侯に仕へ、寶曆十一年年、五十七で歿した。澁井太室は、名孝德、字子章、通稱平左工門、佐倉の人である。井上蘭臺に從ひ、のち林鳳岡に師事して都講となつた。佐倉侯召して侍講となし、天明七年、侯が大阪城代となるや、彼れを擢んでゝ老職とした。天明八年六月十四日、年六十九で大阪に歿した。

四明と金峨　井上四明は、名潛、字仲龍、又佩弦齋と號した。越後の人にして蘭臺の養子である。江戸に出でゝ徒に敎授し、當時唯一の老儒と稱せられた。文政元年、年九十七で歿した。井上金峨、名は立元、字は純卿、文平と稱した。また別に考槃翁、柳塘閑人の號がある。江戸の人にして、

祖喜庵は醫を以て笠間侯に仕へたが、金峨に至つて業を變へ、初め西條侯の文學川熊峰に就て伊藤氏の學を受け、また井上蘭臺に從つて物氏の說を問ひ、のちその非を悟り、ことごとくその學ぶところを廢し、別に機軸を出して偏に一家の言を主とせず、諸家を折衷した。天明四年六月十六日、年五十二で歿した。

北山・詩佛・錦城・如亭　北山名は信有、字は天禧、通稱は喜六、叉奚疑翁・學半堂・逸子・孝經樓主人・竹堤隱逸等の號がある。幕府の士である。初め山崎桃溪に學び、のち井上金峨の折衷說を崇信して、四方の士、その門に至るもの數百人と稱した。文化九年正月十八日、年六十一で歿した。私謚して述古先生といふ。彼の門下の逸足としては大窪詩佛がある。名は行、字は天民、通稱は柳太郎・瘦梅、また詩聖堂と號した。常陸の人、從つて江戶に居た。草書をよくし、詩を以て海內に現はれた。時に市河寬齋・柏木如亭・菊池五山と共に江戶の四詩家と稱せられた。好んで墨竹を描き、氣韻頗ぶる見るべきものがあつた。夙に四方の志があり、のち詩書を以て諸州に遊んだ。彼れには逸話が甚だ多く、以て落々たる風釆を想望すべきである。天保八年、年七十一で歿した。太田錦城は彼よりも若干の年長である。名は元貞、字は公幹、才佐と稱した。加賀大聖寺の人である生れて穎異、五歲にして字を識り十一歲にして詩を作り、十三歲にして經史を講じたといふ。早く兄伯恒に醫を學んだが、四

方の志あるところより、郷を出で丶初め京師に皆川淇園に從ひ、轉じて江都に山本北山についたが、共にその說に服する能はず、是に於いて慨然これを古人に求めんと欲し、勵精刻苦して一家を成した。



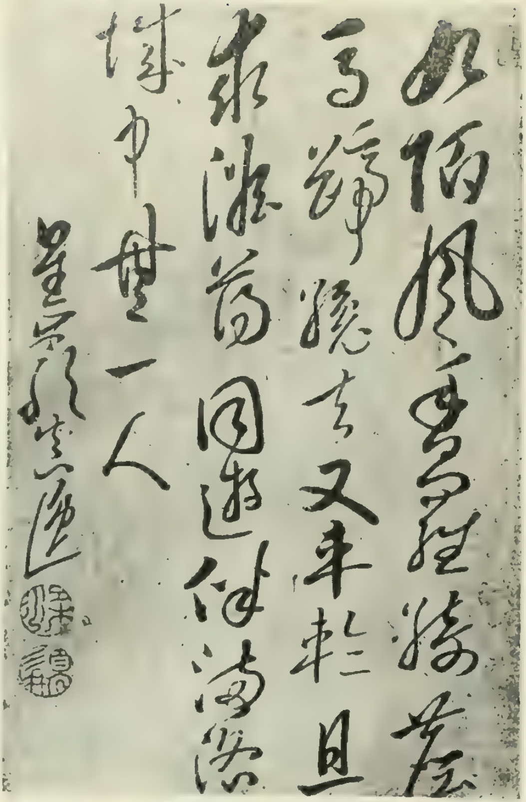
市川寬山

故に彼は北山の門下にして門下にあらざるものである。彼れ學問淵博、最も經術に長じた。文政八年四月二十日、年六十一で死んだ。

柏木如亭、名は昶、字は永日、又晩晴社と號した。江戸の人である家世々木匠を營んだが、北山について學び、また書畫をよくして世々に知られた。詩をよくし、大窪詩佛等と名を等しくしてゐた。文政二年七月八日、年五十七にて京都に歿した。

梁川星巖

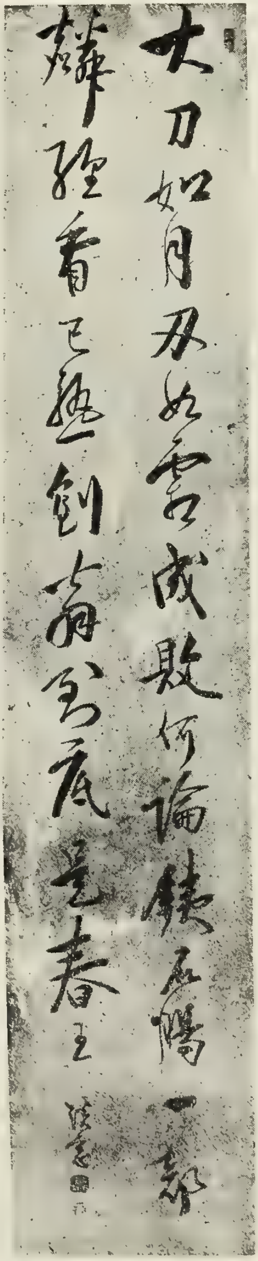
梁川星巖は近世の一大詩人である。名は孟緯、字は公圖、一字は無象、初の名は卯、字は伯兎・新十郎と稱する。星巖はその號である。また天谷・百峰・老龍庵の號がある。美濃安八郡の人にして、邑に星ケ岡のあるところより、星巖と號する。年七歳にして寺に入つたが、十五の時家を弟に付し、笈を負ひて江戸に遊び、古賀精里・山本北山に從學した。識見高邁にして最も詩に長じ、見聞悉く詩化せられざるはなかつた。蓋しその天稟である。當時大窪詩佛、



梁川星巖

星巖に先ちて、詩名を都下に馳せ、彼れもその江湖社にあつたが、詩佛の歿してのち、江湖社の附近に玉池吟社を設け、以て天下に鳴つた。晩年京に去り、鴨沂小隱を營んで居る。これより香を燒き

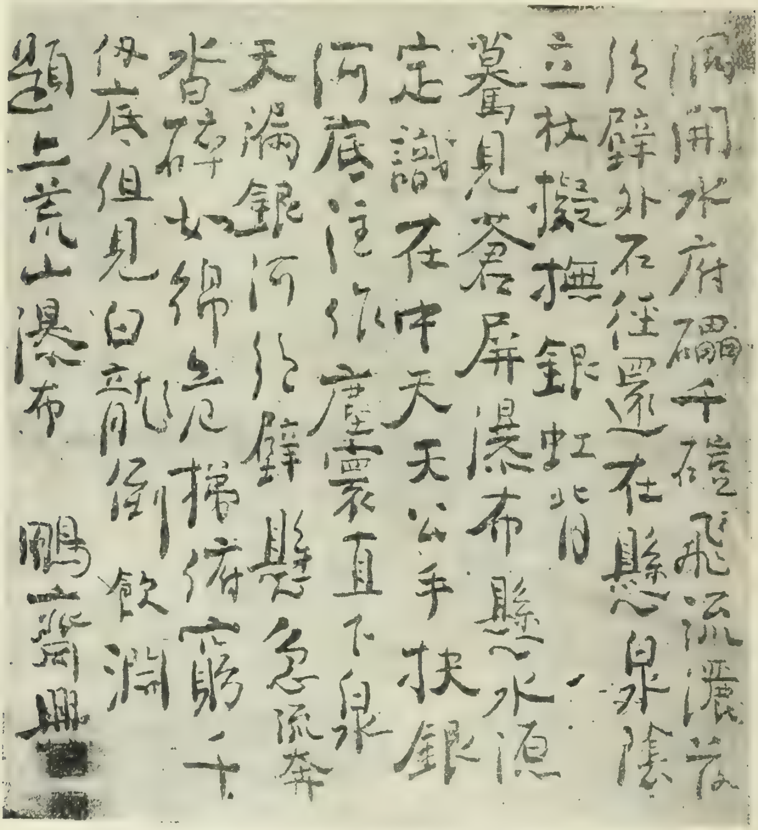
書を讀んで優遊自適、踪を雲霞に托し、影を林壑に沒し、世と相忘れ、詩を吟じてひとり樂しんだ。世人呼んで日本の李白となした。當時の詩人、茶山・淡窓・山陽等皆星巖の下にあつた。安政五年九月二日、年七十にして歿した。近世有名の詩人、例へば大沼枕山・遠山雲如・小野湖山・森春濤・岡本黄石・鱸松塘・江馬天江等皆彼れの門から出でゝゐる。その妻紅蘭また詩を以て知られた。



廣瀬淡窓

龜田鵬齋

龜田鵬齋、名は長興、字は穉龍、また善身堂とも號した。江戸の人である。井上金峨に從ひて學び、性豪邁にして世の一般の儒者を蔑視して居た。弱冠の頃、同門の士山本北山と共に、相誓つて曰く、『二人、文柄を秉り、各々一方に割據して一世の雄を振はん』と。遂に學を博くし、別に一家の言を建て、その名を一時に振はした。故あつて仕進の志を絕ち、詩酒に放浪した。

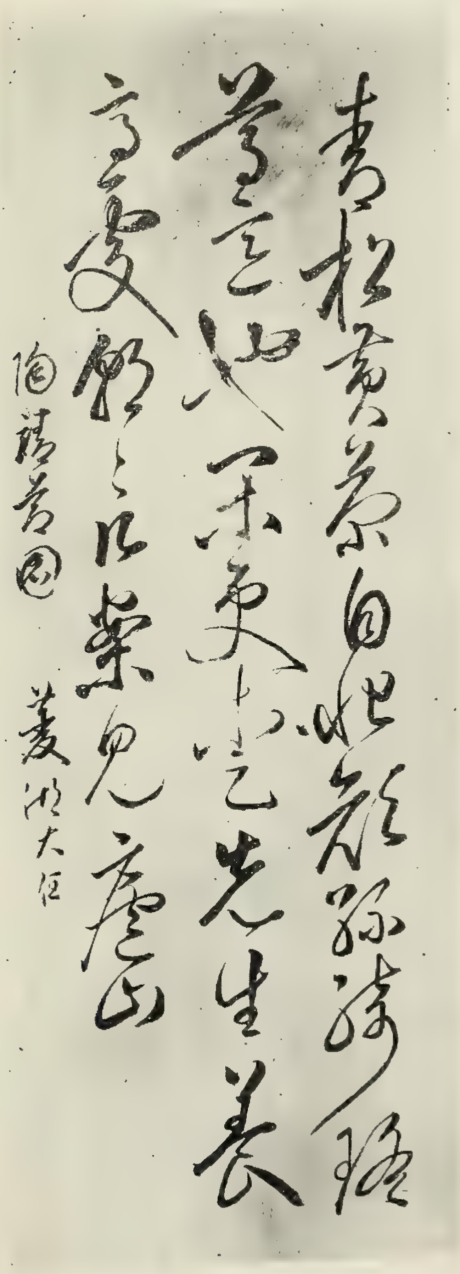


龜田鵬齋

晩年、臨池の技を好み、特に草楷をよくし、頗る古意があつた。著はすところの書も多い。文政九年三月歿した。年七十三。その子綾瀨、名は梓、字は木王、通稱は三藏、また家學を修めて詩文をよくし、かねて書字に工みであつた。その門人に卷菱湖と芳野金陵とがある。菱湖については書家として語つたからこゝに贅せず、金陵は、名世育、字叔果、通稱源三郎、のち立

藏と改めた。別に匏宇(ほう)とも號した。下總の人にして、駿州田中藩の儒官となつた。明治元年、大學教授となり、四年八月五日、年七十七で死んだ。

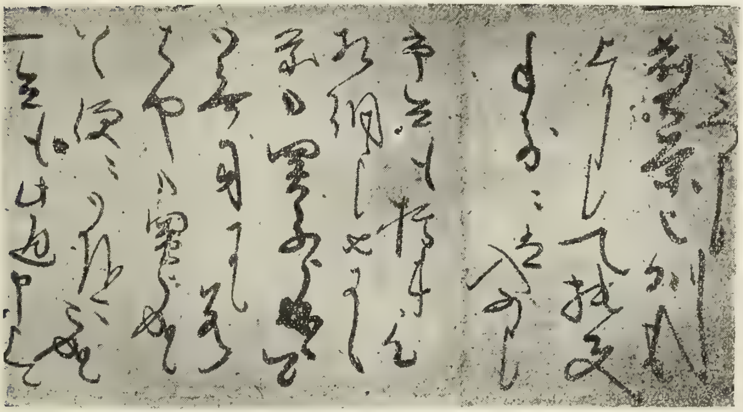
卷菱湖



陽明學派

中江藤樹

最後に陽明派の人々に言及して置く。此の派では中江藤樹の一派と、佐藤一齋の一派と、それに大鹽中齋を擧げなくてはならぬ。藤樹は名を原、字を惟命といひ、その號は藤樹の外、默軒・顧軒・天君等と稱した。通稱は與右エ門である。近江の人にして、祖父は伯耆侯、加藤泰興に仕へたが、父は近江に來り農に隱れ、祖父に先つて歿した。是に於いて藤樹は祖父に從つて伯耆に行き、更に侯の封を伊豫大洲に移さるゝやまたこれに從つた。藤樹幼にして岐嶷、その擧止衆童と異るものがあつた。一日「大學」を讀み、『自二天子一以至二於庶人一、壹是皆以レ修レ身爲レ本』の章句に至り、歎じて曰く、『幸に此の經今に存す、聖人豈に學びて至る可らざらんや』と。年十七、京都の僧の來つて「論語」を講ずるや、彼れひとり日々往きて業を受けた。それより力學多年、聖學を興すを以てその任となした。その母を思ひて常に近江に歸省せんとし、つひに情に禁ぜずして藩を逃れ去つて郷里に歸つた。時に年二十七である。それより徒を集めて書を講じた。初め程朱の學を修めたが、已にして王陽明の說を信じ、好みて「孝經」を講じ、愛敬の二字を掲出して人に誨へた。彼れ人と爲り溫厚、自ら行ふことを先にし、文詞の如きは後にした。人々その人格に服して、彼を近江聖人と曰ふに至つた。大洲侯また召せども就かず、備前侯の如きも、幣を厚うして聘したけれども、辭するに

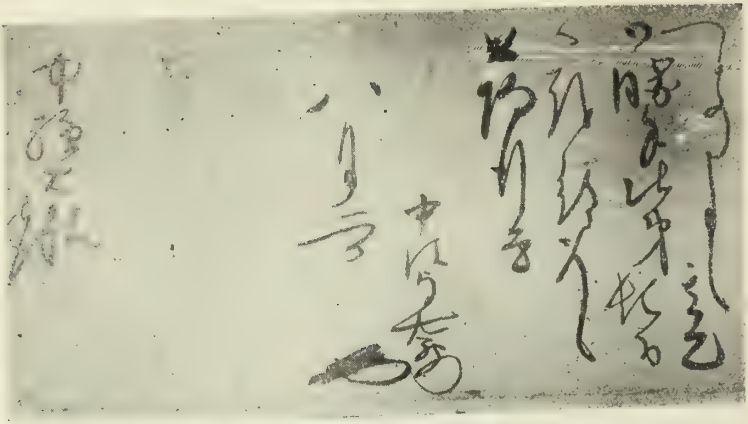


中江藤樹

老い且つ病むを以てし、その子及び諸弟子をして仕へしめた。慶安元年八月二十五日、年四十一で歿した。三子があつて、長は宣伯・仲は藤之亟・季は彌三郎、みな備前に仕へたが、のち病と稱して致仕した。藤樹の門下には熊澤蕃山をはじめ、淵岡山・中川謙叔・泉忠愛・中村叔貫・加世季弘・清水季格等がある。

熊澤蕃山

熊澤蕃山は、學者といふよりもむしろ經世家である。名は伯繼、字は了介、蕃山また息遊軒と號した。通稱は次郎八、のち助右工門と改めた。原姓は野尻氏にして京都の人である。寛永十一年、備前侯に仕へた。時に年十六。中江藤樹に從ひて王陽明の學を受け、その妙を究めた。正保二年再び備前に歸り仕へ、祿三千石を賜はつたが、時に年二十七である。これより國政に參し、治績大に揚り、備前の蕃山とて、一世に響いた。人と爲り容姿婀娜として美

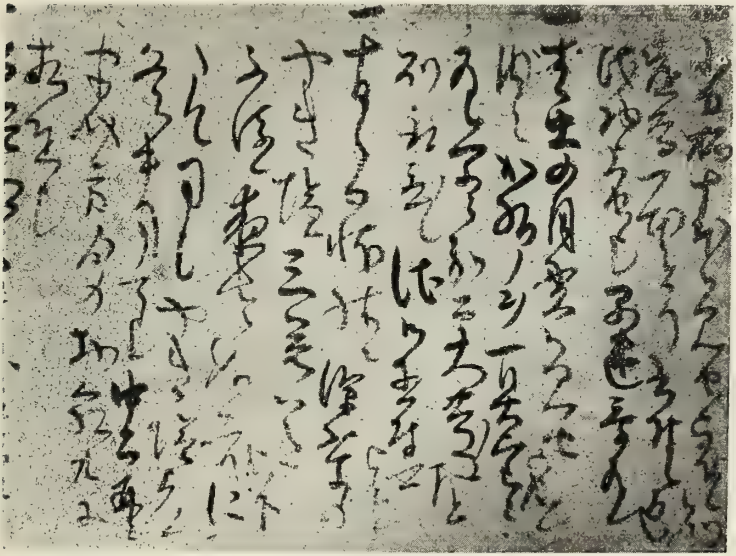


中江藤樹

なること婦人の如く、しかも神宇英邁、經營濟世の略に富んだ。侯伯權貴より士大夫に至るまで、みな欽慕して弟子の禮を執るもの頗る多かつた。此の人また雅樂を學び、國典を修めてよく通暁した。のち致仕し、寛文六年より播州明石に住し、城主松下信之のために大に待遇せられた。更に京都に歸り、晩に大和の吉野にかくれたが、元祿四年七月二十七日、年七十三を以て下總の古河に歿した。著はすところの書數十種あり皆經世の術を說いた邦文の書である。

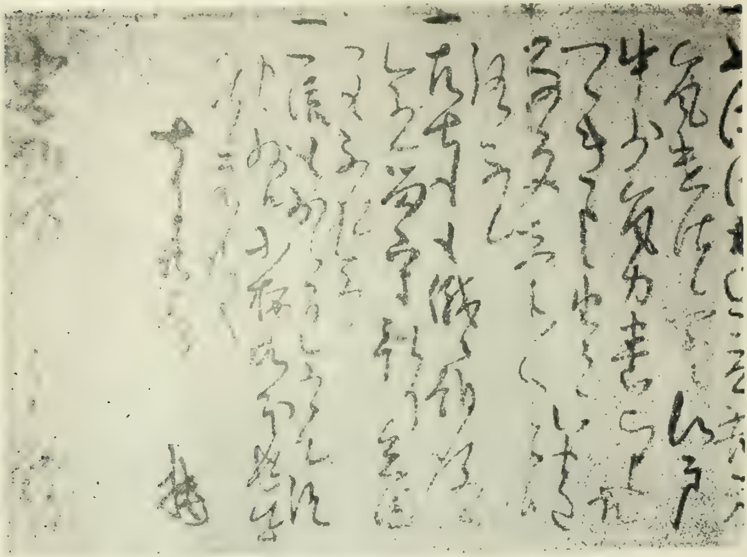
佐藤一齋

佐藤一齋、名は坦、字は大道・一齋はその號である。別に愛日樓・老五軒と稱し、その塾を百之寮、または風自寮といひ、その遊息するところを名けて錫難老軒といつた。江戸の人である。初め信行と名け、幾久藏と稱した。年二十一にして名を改め、また捨藏と稱した。幼にして讀書を好み、又臨池の技をよくし、射騎刀鎗の如きも學



熊澤蕃山

ばざるはなかつた。書は七歳にして三井親和の門に入り、篆隷書体を學び、壁窠字を作つた。十二三歳の頃、殆んど成人の如しといはれ、寛政二年、祭酒林述齋に近侍し、井上四明・鷹見星皐の門に出入した。ついで中井竹山に師事し、又皆川淇園に見え、更に林簡順の門に入り、その邸内に寓し、始めて儒を以て業とした。專ら心を六經に潜め、傍ら文辭を學んだ。のち平戸侯に聘せられ、經を維新館に講ずるや、聽くもの三百餘人、文化二年林氏の塾長となり、ついで擢でられて老臣に列せられ、天保十二年幕府に召されて儒官となつた。當時その門に入るもの無慮三千人といふ。彼れ人となり高邁にして精力絶倫、夙に經濟の大材をき施、而して文儒自ら居り、これを事業



熊澤蕃山

に施さなかつたのは、一世の惜しむところであつた。安政六年八月二十四日、病んで歿した。年八十八。その門下には、前に擧げた安積艮齋を始め、佐久間象山・大橋訥庵・山田方谷・中村敬宇・竹村悔齋・若山勿堂・河田藻海・三谷精溪・池田草庵・川崎也魯齋・吉村秋陽・中島操存齋・柳澤芝陵・奥宮慥齋・菊池廓堂・東澤瀉の如きがある。

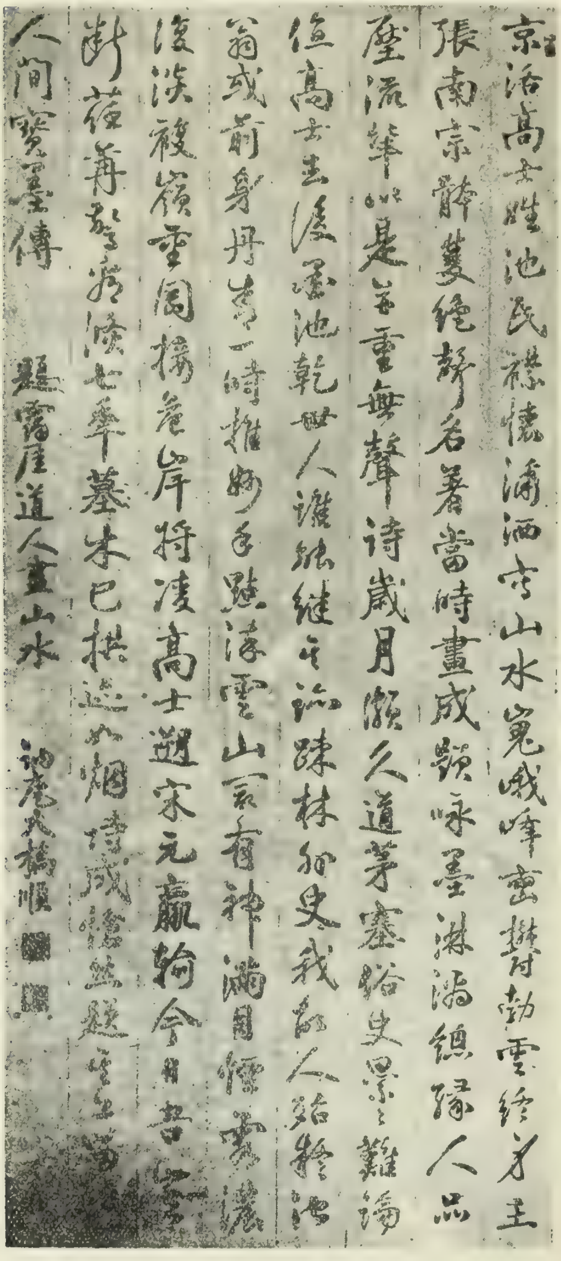
佐久間象山

佐久間象山を茲に語るは不穩當なれど、彼れ及びその門下を附け加へて置く。象山、名は啓、一名大星、字は子明、通稱は啓之助、のち修理と稱する。信濃の人である。その先は桓武帝の皇孫高望王より出るといふ。松代藩に仕へた。蓋し松代象山の麓に生れたから號とした。幼にして穎悟、人、神童を以て稱した。十

五歳にして易道の家學を其父に受け、幾くもなく「易經」を諳んじ、象數の大意に通じた。既に長じて豪邁不羈、濟世を以てその任と爲した。是の時にあたりて西洋各國屢々來りて互市を乞ひ、天下の人心恟々たるものがあつた。藩主眞田幸貫、賢にして度量があり、象山の深く國事を憂ふるを知り、愛して擢んで丶近侍とした。象山學未だ成らざるを以て固く辭したので、遊學の資を給してその業を砥礪せしめられた。天保十年鄕を出で丶江戸に入り、林述齋・佐藤一齋の二門に出入した。また梁川星巖・渡邊峰山・坪井信道の諸子と交を結んだ。もとより彼は儒生を以て甘ずる者でなかつたから、萬國の書籍を涉獵し

佐藤一齋

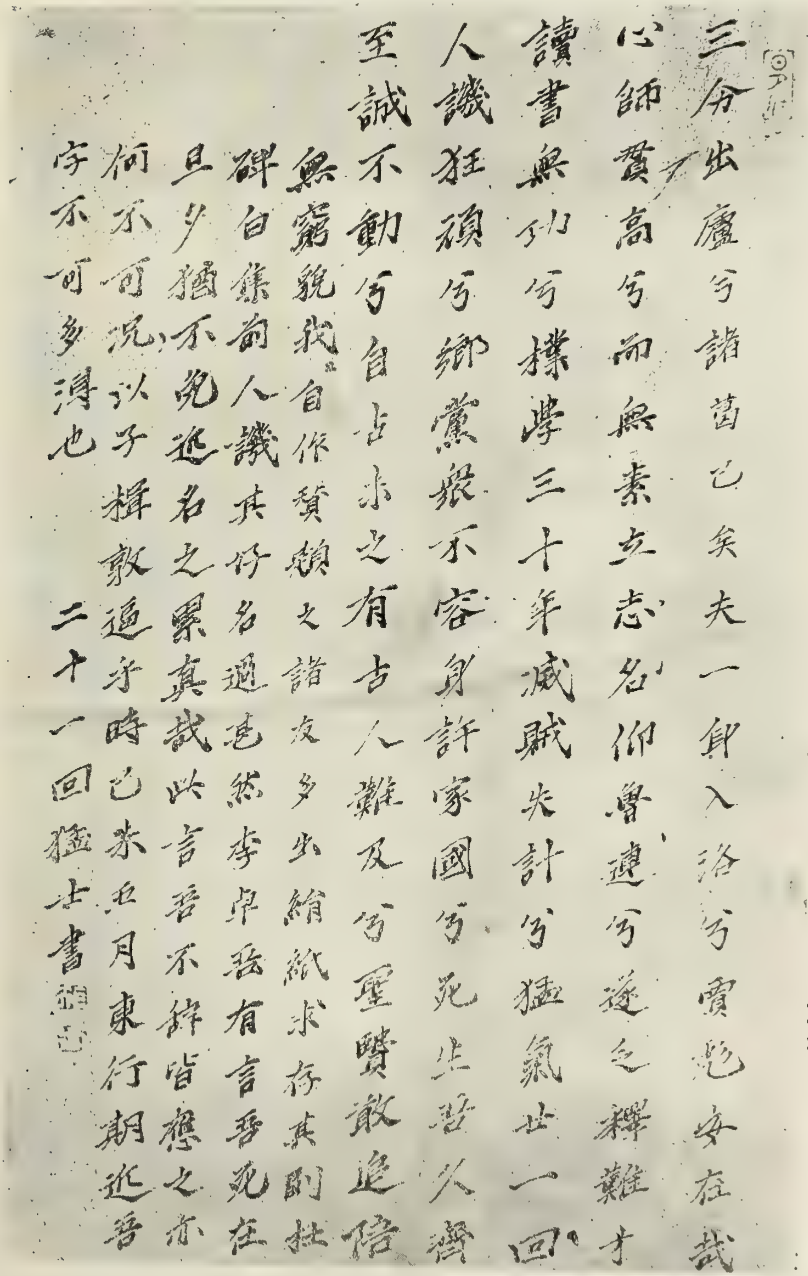
火橋訥庵


京洛高士號池氏襟懷瀟洒寫山水嵬峨峰巒攢動雲[illegible]生
張南宗髓變絕妙名著當時畫成題詠墨淋漓總歸人品
壓流輩以是畫無聲詩歲月瀰久道茅塞[illegible]史[illegible]之難[illegible]
從高士去後墨池乾世人誰能繼其蹤林和史我與人[illegible]
翁或前身丹青一時推妙手題落雲山氣有神滿目[illegible]
復淡複嶺雲間橫庵岸將渡高士遊宋元贏輸今[illegible]
斷蕉蒴聲瀉溪七平墓木已拱迹如烟[illegible]
人間寶墨傳　題露厓道人畫山水　訥庵大橋順

て以て銃砲、兵制及び築城造艦の諸技を講じ、専ら外寇を制するの策を研究した。十二年、藩主が閣老となり、かねて海防の事を董するや、のち象山を以て顧問に備へた。「海防八策」を上書したのはその翌年である。已にして藩主疾を以て閣老を辭し、象山また從つて藩に歸り、未だ久しからずして母を奉じて再び江戸に入り、木挽町に居つた。これより子弟を集めて教授し、弟子日に益々多きを加へた。初め象山、大に洋學の有用なるを悟り、大に苦學して「荷蘭語彙」を著はして、出版せんとしたが許されず、ついで砲術の書を上木せんとして又許されなかつた。その中に天下の事いよ〳〵急なるに及び、彼の日邊に警戒を加へられることもいよ〳〵嚴なるを見た遂に門人の吉田松陰の米國に航せんとして捕へられるや、彼また連坐して捕へられ、獄に下つた。間もなく放還されて松代に歸り、望月某の別業聚遠樓に閉居した。のち九年を經て始めて宥された。蓋し長門侯の力に因るといふ。故に長土の二藩使を遣はして之を聘せんとしたが、象山辭して往かず、文久三年飛鳥井亞相もまた徵命を傳へたれど赴かず、その冬將軍德川家茂禮を厚くして象山を召したので、元治元年三月、遂に京師に赴いた。是の時にあたり、攘夷の說盛んに起り、諸藩士、藩を脫して京に聚合し、洋人を刺し洋館を火き、凶暴殊に甚しかつた。ひとり象山は開港の說を持したので、家人門人頗るこれを危んだ。既に京師に入り將軍及び一橋慶喜に謁し、中川・山階の二親王も亦た召して見られ、土佐、薩摩の藩主

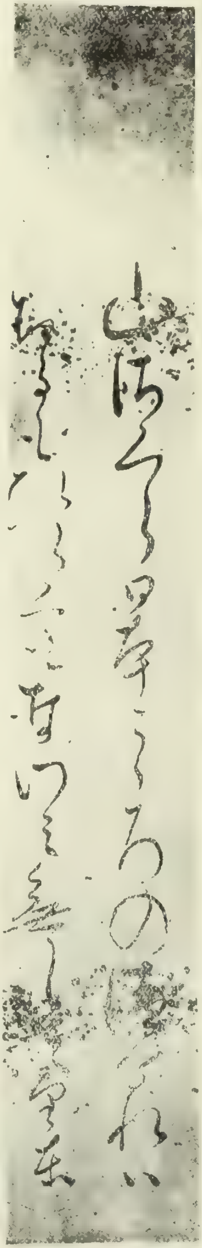
にも接見した。既にして水戸藩の士、京師に入りて攘夷の詔を請ふと聞き、愕然上書してその利害を陳ぜんとし、疏を袖にして山階親王の邸に詣り、途中木屋町を過ぎて刺客に殺された。時に元治元七月十一日、年五十四であつた。象山、經濟の學を以てその本領と爲すといへども、また頗る文事に長じ、詩に巧みに書畫をよくし、その書、晩年に及んでます〳〵圓熟し、專ら法を顏眞卿の「爭座位帖」に取り、しかも筆を下すこと苟くもせず、嚴格鄭重頗るその人と爲りに類してゐる。

「吉田松陰」 佐久間象山を語れば、それについで當然言及せねばならぬのは吉田松陰である。彼れ名は矩方、字は義卿、はじめ大次郎、のち寅次郎といひ、松陰の外二十一回猛士の號がある。長洲の藩士にして本姓は杉氏、吉田氏を嗣いだ。佐久間象山の學說に敬服し、彼に師事すること多年に及んだ。天下の風雲の急なるに際會して、志士と東西に奔走し、大に回天の計をめぐらしたが、安政元年正月、米艦の下田に來るや、松陰、その僕金子貞吉と共に密かに船に赴き、艦に便乘して米國に渡航せんとするの意を告げた。艦將、國禁を論じてこれを許さず、却つて拉して松陰等を幕使に致した。松陰の行李中、象山の送別の詩があつたから、これに於いて逮捕せられて師弟主從三人共に獄に下された。斯くて松陰は藩に送りて禁錮せらるゝこと數年、更に安政六年、梅田雲濱の倒幕事件に關して再び江戸に檻致せられ、更に老中間部暗殺の計畫を問はれて、是の年十月二十六日、遂


三分出廬兮諸葛已矣夫一身入洛兮賈彪安在哉
心師貫高兮而無素立志名仰魯連兮遂乏釋難才
讀書無功兮樸學三十年滅賊失計兮猛氣廿一回
人識狂頑兮鄉黨衆不容身許家國兮死生吾久齊
至誠不動兮自古未之有古人難及兮聖賢敢追陪
無窮貌我自作贊頼之諸友多出繪紙求存其副杜
碑白集前人識其份名過逸然李卓吾有言吾死在
且多獨不免逃名之累真哉此言吾不能皆應之亦
何不可況以予揮毫適斉時己未五月東行期迫吾
字不可多得也　二十一回猛士書

に刑に死した。年二十九。

東行と玄瑞　松陰の長州に於ける松下村塾に學べるもの頗る多き中に、高杉東行と久阪玄瑞とがある。東行・字は暢夫、通稱初め晋作、次に東一、又和助と稱し、終に谷潜藏と改めた。長州の藩士である。天資英邁不群。松陰の門に入りて、久阪と共に双璧の名があつた。赤間關海岸に於い



野村望東尼

て佛艦と戰端を開くや、晋作藩命を奉じて奇兵隊を編成し、これを統督した。俗論黨の勢力を得るや、晋作、その身の危からんことを恐れ、福岡に赴き、野村望東尼の家に潜んだけれども、藩論日に非なるを見て、出でゝ遊擊隊に入り、又鴻城軍を組織して俗黨の別軍を破つた。ついで幕府征長の役にあたり、奇謀百出、幕軍を破つたが。此の頃より病を得て慶應三年四月十四日、年二十九で死んだ。久

坂玄瑞は、名を通武、字を實甫、初の名は誠、のち玄瑞と稱し、秋湖・江月齋等の號があつた。義助を以て通稱とした。長州の醫員であつた。松陰の門に入り、また芳野金陵に學んだ。夙に尊攘の大義を唱へて諸國の志士と交はり、元治元年六月松野三平と名を變じて、奔走怠らなかつた。遂にその七月十九日の變に際し、義助鷹司邸に入りて論ぜんとした間に敵に寄せられ、銃丸義助の脛を貫いた。玆に於いて入江九一に後事を托し、寺島忠三郎と屠腹して死んだ。年二十六。

大鹽中齋

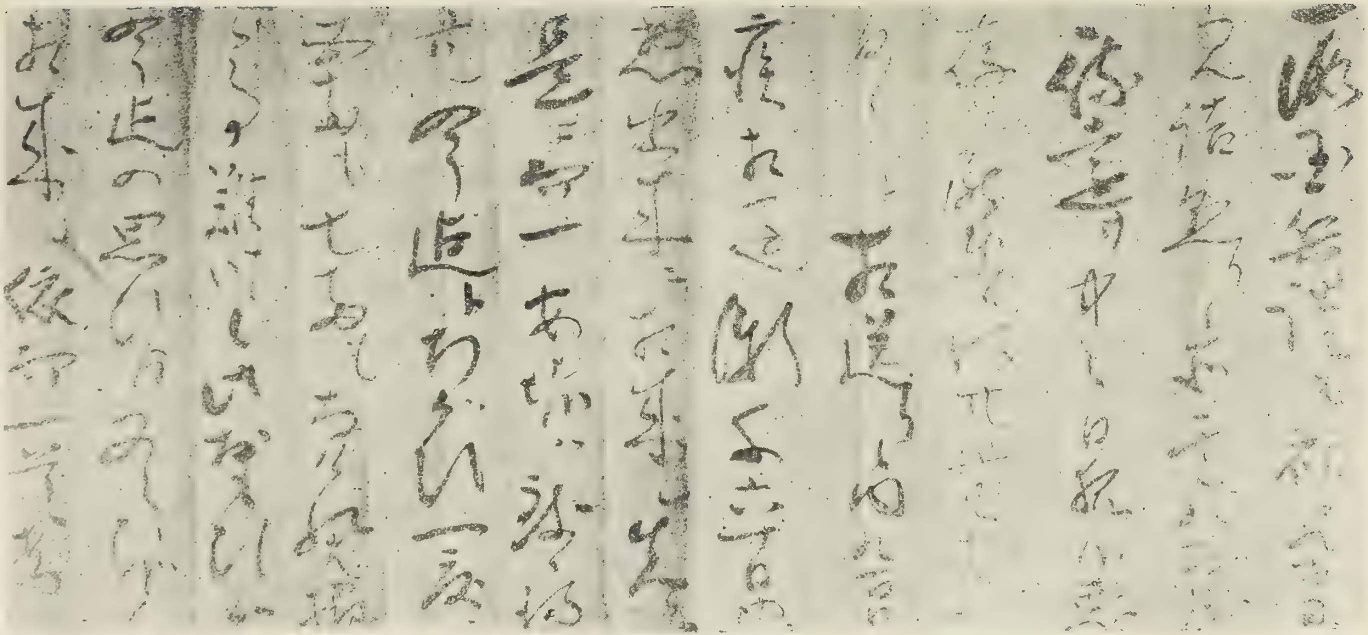
大鹽中齋は、名を後素、字を子起といひ、平八郎と稱した。少くして讀書を好み、尤も王陽明の人と爲りを慕ひ、專らその學を修め、またよく吏務に熟達した。もとより大阪の與力である。文政十年、天主教の徒を京阪の間に捕へて功あり、これを立身の初めとする。その後十二年、姦吏等窃かに豪商數人と謀りて政を亂り、人を苦しめるの事があつた。事、貴權の家人某に連及するので、人おそれて敢てこれを問はなかつた。時に高井某、大阪の町奉行であつたが、これを憂ひて中齋に謀るや、中齋、憤然として曰く『君請ふ意を勞する勿れ』と、これより日夜搜索し、大にその實證を擧げ、つひに悉く醜類を捕へて罪に處し、その私するところ三千餘金を收め、悉くこれを市民に施して難を救つた。ついで天保元年、これより先き町奉行、令を發して破戒の像を論すこと屢々であつたけれども、改める者がなかつた。こゝに至つて中齋大に怒つてその徒を捕へ、悉くこれを

流刑に處した。それよりその名遠近に聞え、勢望一時を傾けた。既にして高井某の職を辭するや、中齋また己を知る者のないのを慨き、ついで其に職を養子格之助に讓り、專ら諸生に教授した。天保八年、米價俄に騰貴し、大阪市中にも餓者頗る多かつた。中齋これを憂ひ、奉行に說いて貧民を賑はさんことを望んだが、言の容れられざるや、大に怒つて坐視するに忍びずとなし、藏書を賣り、自ら金を出した、貧民を賑はし、且つ戒しめて曰く、火の擧るを視ば集まり來れと。又檄を攝津、河內、和泉、播摩に移し、以て人民に煽動した。既にして同志の同心平山助次郎の密告に依つて事露はれたので、二月十九日、黨人數人と火を市中に放ち、城代の館を攻めたるに、城代跡部山城守逆擊してこれを破つた。中齋事の成らざるを度り、火を避くる者の風をして八軒家より舟に乘り、天滿橋下に匿れ、夜に入りて四橋より上陸し、徒黨を散じ、吉野に走ると稱して途に案內者を殺して大阪に歸り、格之助と共に油掛町の某隱宅に潜んだ。三月二十六日、吏の爲めに圍まれて、自ら火を放ちて自裁した。年四十六、格之助は二十七であつた。學力、才氣、氣魄、共に近世の人物と言つてもよい。

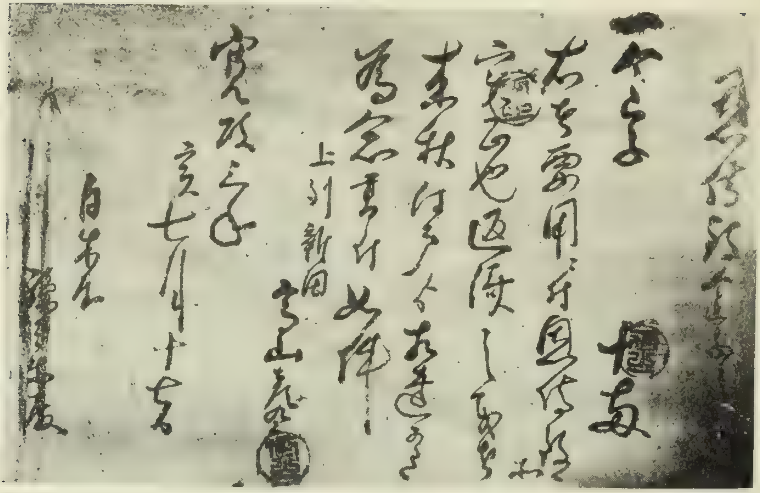
維新の志士と功臣

維新前の憂國家

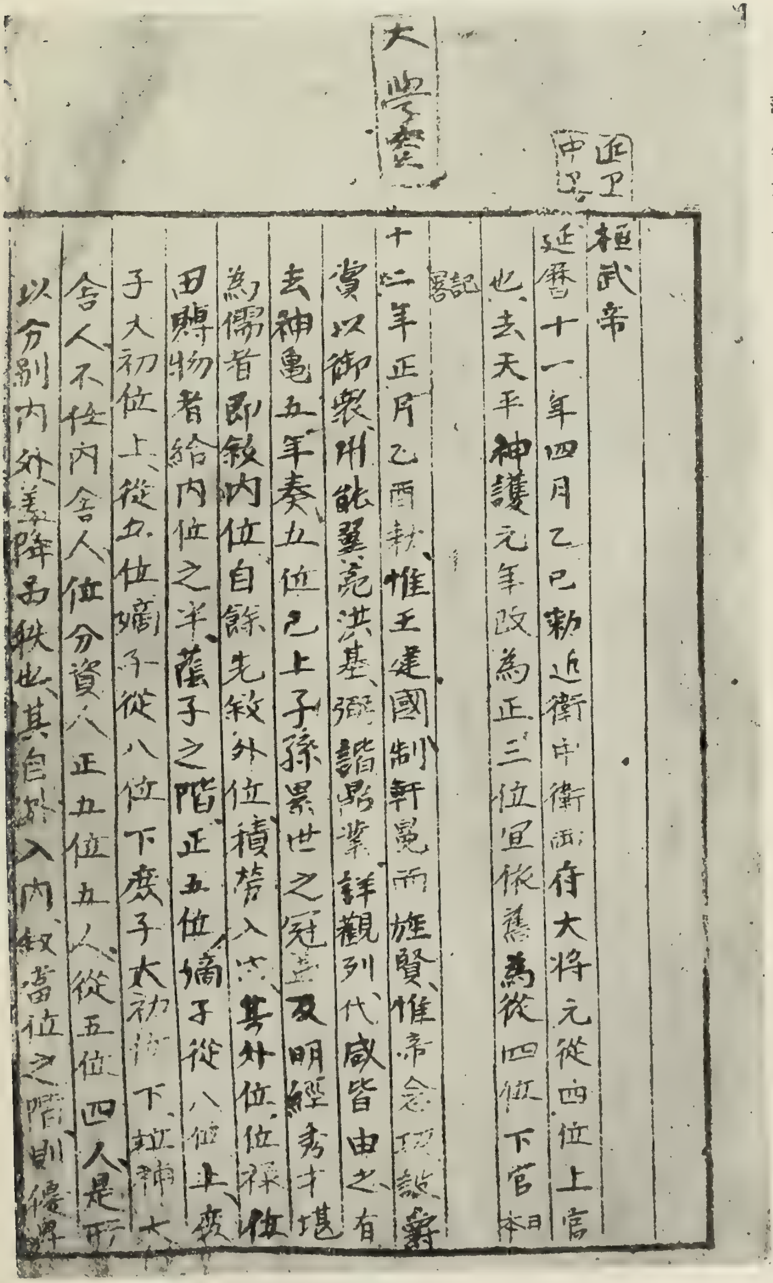
斯う語り來れば、次に所謂憂國慨世の士から、明治天皇が維新の大業を成就せらるゝに至つての功臣にまで及ぼすのが當然であらう。しかしこれは述べると非常に範圍が廣いこ



平子　林

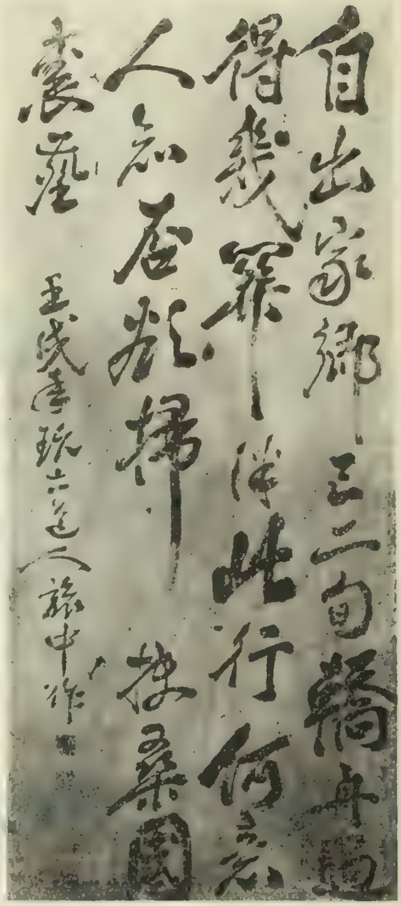

高山彦九郎

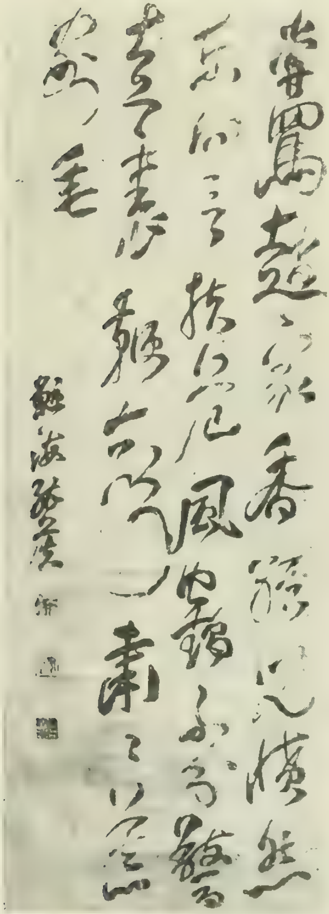
とになるから、ほんの馳け足で通過する。抑も維新の大業の因つて來るところに尊王の思想の働いてゐたのは申すまでもなく而してその思想を遡つて、徳川光圀以來の水戸學派に至るのも先づ定説と言つてもよい。だがその主要人物たる光圀・朱舜水・藤田幽谷・東湖などは既に述べたところである。又烈公齊昭については語るまでもなからうと思ふ。しかし水戸系以外に逸すべからざるは、例の林子平・蒲生君平・高山彦九郎である。此の三人は、寛永前後に於ける忠君愛國主義の模範的人物であつた。だが此の人達も今更語る必要もあるまい。年代的に言へば此の三人の中で、六無齋の林子平が一番の先輩で、高山彦九郎とは十二歳違ひで、寛政五年の同じ年に死してゐる。前者は奇人にして「海國兵談」の著者、後者は徹底的の勤王家である


大學寮

近卫中将

桓武帝
延暦十一年四月乙巳勅、近衛中衛兩府大将元従四位上官
也、去天平神護元年改為正三位、宜依舊為従四位下官
記略
十二年正月乙酉勅、惟王建國制軒冕而旌賢、惟帝念功設爵
賞以御衆、用能翼亮洪基、彌諧邦業、詳観列代、咸皆由之、有
去神亀五年奏五位已上子孫累世之冠蓋及明經秀才堪
為儒者即叙内位、自餘先叙外位、積勞入内、其外位、位禄位
田賻物者給内位之半、蔭子之階正五位嫡子従八位上、庶
子大初位上、従五位嫡子従八位下、庶子大初位下、並神大、
舎人不任内舎人、位分資人正五位五人、従五位四人、是所
以分別内外、差降品秩也、其自外入内、叙當位之階、則優


島津久光

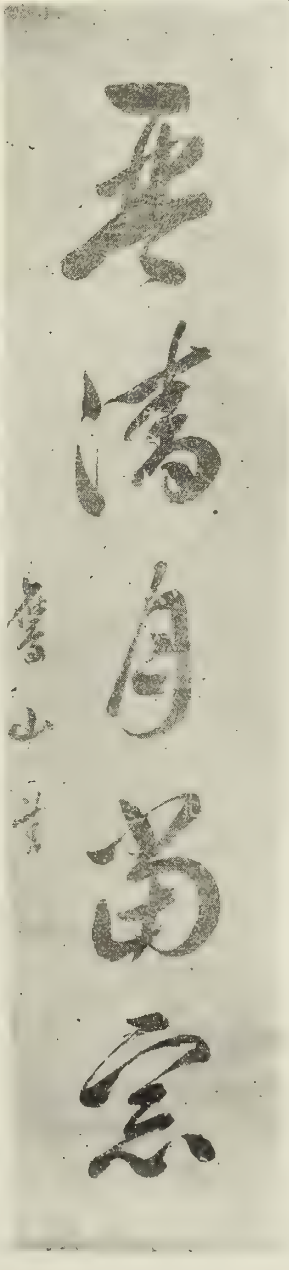

山内容堂

又蒲生君平は二三十年の後輩・山本北山の門人、これは文化十一年まで生存して居つた。

近世の名侯

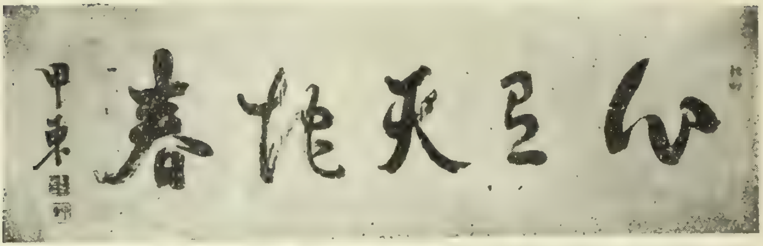
維新の仕事の大半が、薩長土肥の人々の手でやられたことも申すまでもない。そしてそれには此の四藩の主侯が、偉かつたからであることも勿論である。殊に

薩摩の島津齊彬、同じく久光、土佐の山内容堂、肥前の鍋島閑叟の諸公は、最も時勢を見るに明敏に、衆人を率ゐるに頴にして、且つ尊王愛國の至誠の情に燃えてゐられたのである。島津齊彬・久光の兄弟は、恰も幕末國歩艱難の際に生れ、その大藩たると、邊隅にありて海外より脅かされるゝの機會多き爲めとより、おのづから、心を時事に傾け、藩士の武を練り、領土の警護を嚴にし、以て宏



上杉鷹山

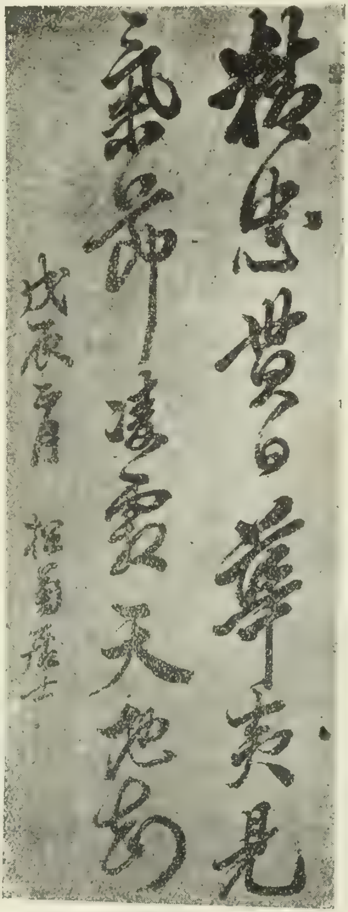
業を輔けたこと一通りでなかつた。山内容堂侯また、雄藩にして邊土にあり、より内外の形勢を知つて開國進取の國是を導き、明治初年の元勳となつたのである。鍋島氏・毛利氏またこれに劣らなかつたのである。他に今三人、時勢を見るに敏なる賢君子があつた。それは前に上杉鷹山、中に伊井直弼、後に松平春嶽の三人である。鷹山治憲は東北の藩鎮の座し、直弼は徳川最後の大老にして、春嶽慶永



大久保利通

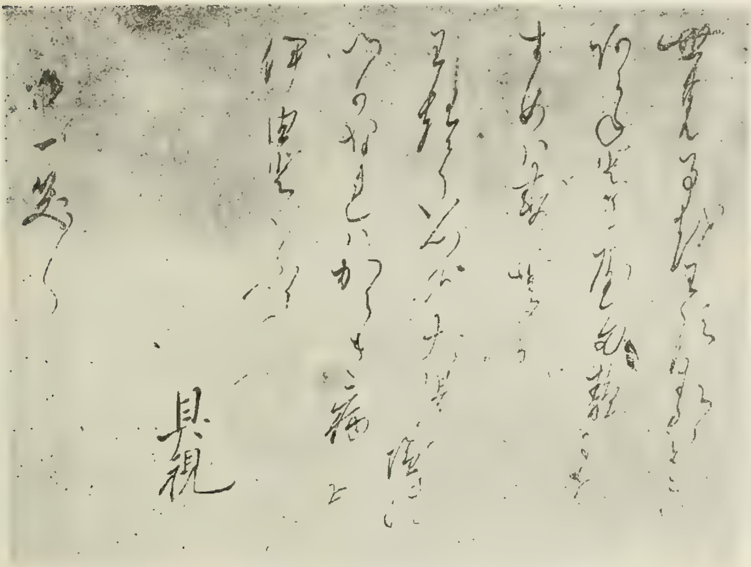
は、將軍の親藩であつたが、それ〴〵一代の人物と見るべきであつた。

明治維新の元勳―次には維新の元勳といふところを、名前だけでも擧げて見よう。木戸孝允の松菊・西郷隆盛の南洲・大久保利通の甲東、此



木戸孝允

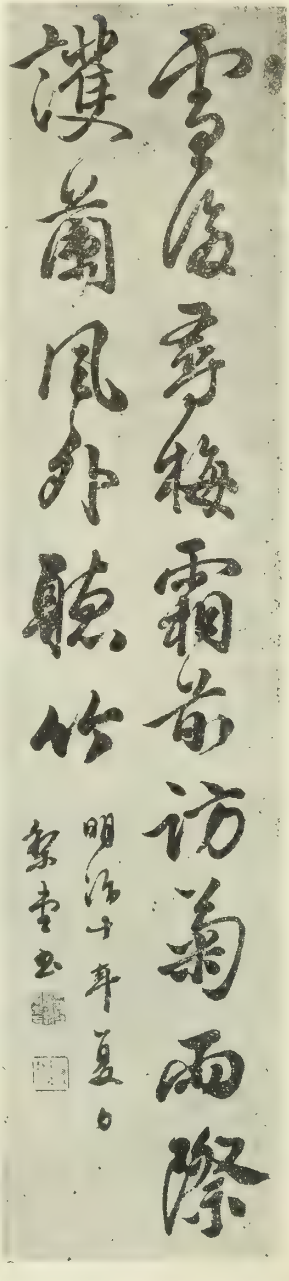
の三人物は勿論として、岩倉具視、三條實美の兩公卿も、右の三人と拮抗するに足るのである。そして文字では南洲最も珍重せられるが、松菊・甲東も敢てこれに讓らない、具視・實美は稍遜色あるとされるが、しかし



岩倉具視

皆堂に入つたものである。その次には何と云つても伊藤博文の春畝公である。あの明快暢達な自作の詩を、暢達明快な筆で縦横に揮つてあるところ、たしかに明治の元勳の壓卷である。そこへ行くと土方久元の泰山・鳥尾小彌太の得庵なんどの到底及ぶところでない。しかし明治の元勳、功臣といふところには、なか〳〵能書家が多い。右の諸家は固よりとして、山岡鐵舟・大久保一翁・勝海舟・品川彌二郎・黑田淸隆・西鄕從道・高橋泥舟・近衞篤麿・榎本武揚・大鳥圭介・谷干城・野津道貫さては曾根荒助の野村森軒の杉孫七郎の聽雨、或は桂太郎・寺内正毅・山縣含雪・西園寺陶庵なんど、皆それ〳〵に筆を持たせれば相當に書きなげる腕前を備へてゐ

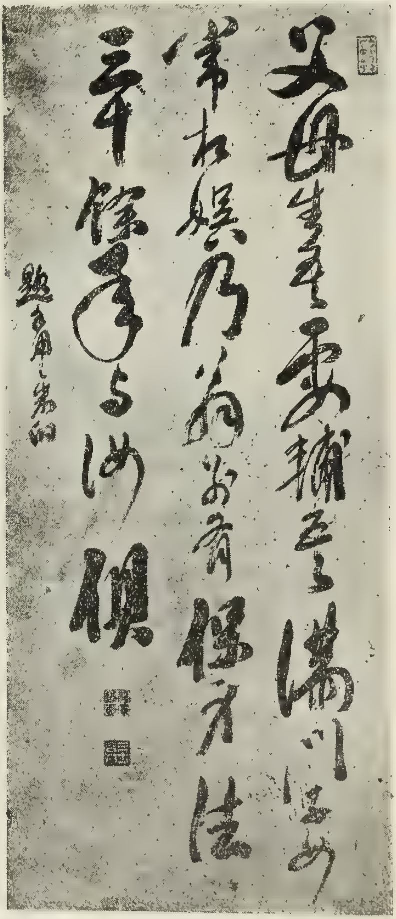
るのだ。犬養木堂・服野藍田・波多野古溪・野田大塊・大岡硯海・斯うなつて來ると、實に無限無窮といふ外はない。



三條實美

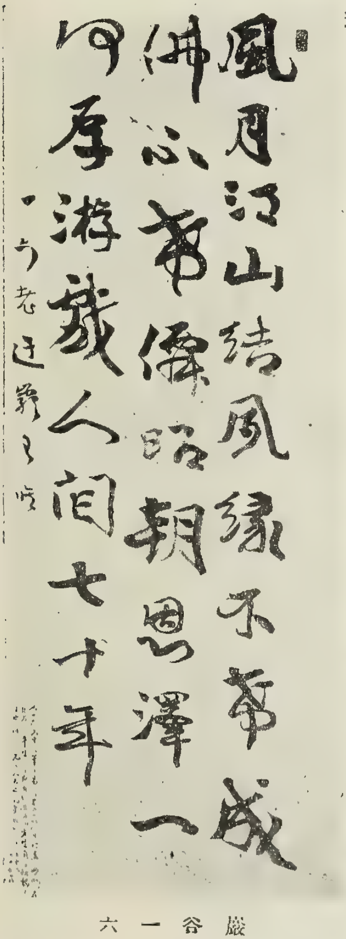
明治の學者

若しそれ眼を轉じて學者はとなると、鹽谷宕陰・草場佩川以後、これまた頗る多い。例へば横井小楠がある、安井息軒がある。石井潭香がある、曾我耐軒がある、柴秋村がある、小原鐵心がある。明治十年前後の物故者に山田方谷・林鶴梁・東條琴臺・大槻盤溪・芳野金陵・村山佛山・皆これ七十過ぎの老人であつた。詩人で菊池溪琴・野口松陽・廣瀬靑村・草場船山・森春濤・大沼枕山・向山黄村・野口寧齋・森槐南、學者文家では土井聱牙・阪谷朗廬・成島柳北・古賀茶溪・山中信天翁・菊池三溪・中村敬宇・元田永孚・三島中洲・長三洲・川田甕江・栗本鋤雲・江馬天江・西

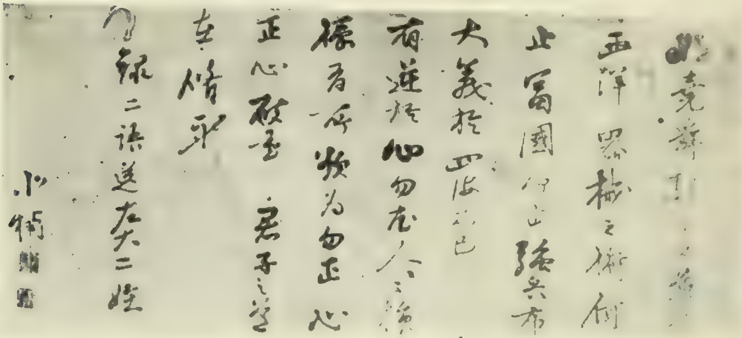


福澤諭吉

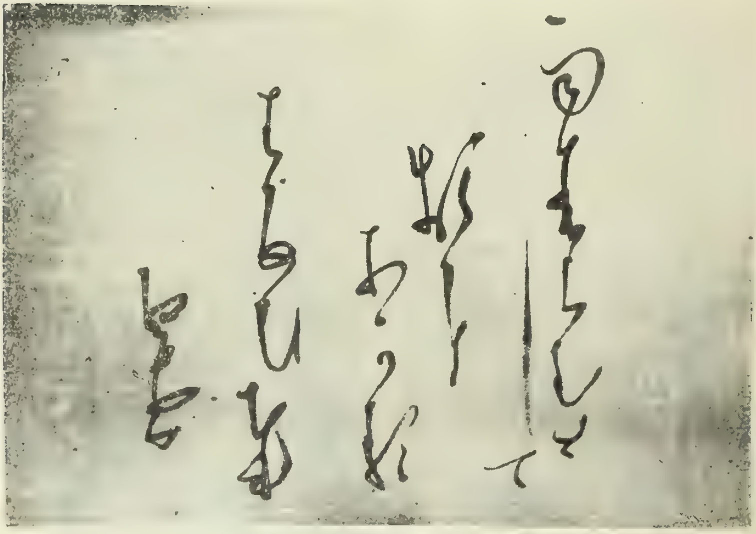
村茂樹・内藤耻叟・秋月種樹・谷鐵臣・根本通明・金井之恭・島田蕃根・南摩羽峯・依田學海・重野成齋・小野湖山・岡鹿門さては福澤諭吉翁や福地櫻痴居士、小說家では尾崎紅葉・幸田露伴・少し前になるが、脚本家の河竹默阿彌・市川團十郎・尾上菊五郎



巖谷一六

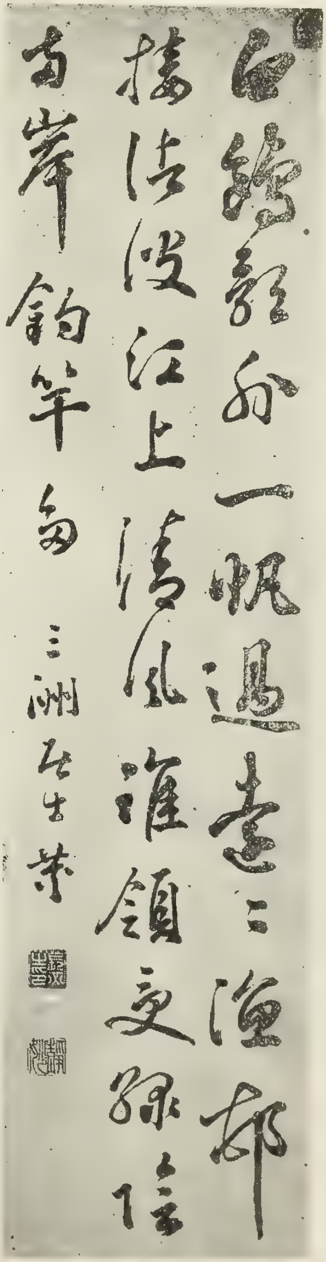


横井小楠



尾崎紅葉

長三洲



坊さんでは釋雲照律師などの書は、皆相當の程度に崇拜者がある。

三、國風家、俳家、文人

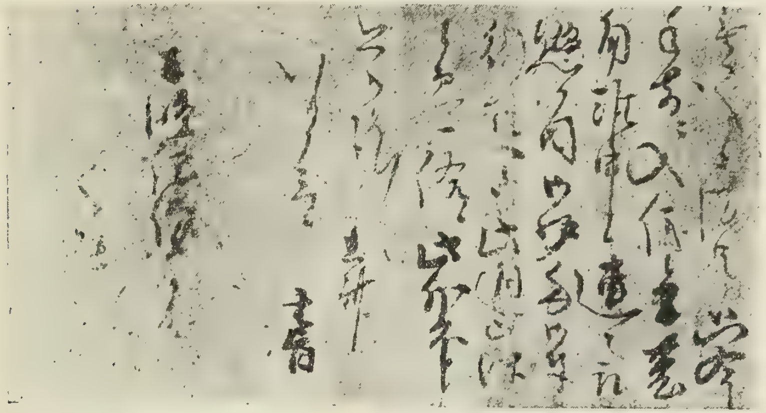
國學者

國學界の一覽　徳川時代は儒學萬能時代であつたから、諸派の儒人の頗る多きことは、言ふまでもなかつたが、同時に元祿以後、文藝の復興期に際して御國ぶりの學問もまた大に見るべきものがあつた。今、その主なる人々を列擧すれば、慶長、寛永の細川幽齋・烏丸光廣を先驅として、萬葉

研究者の僧契冲あり、連歌師にして學者であつた北村季吟あり、ついで一世の大家加茂眞淵と、その弟子本居宣長の出づるに及んで、國學の基礎は樹立せられたのである。當時、村田春海あり、加藤千蔭あり、谷川士清あり、富士谷成章あり、伊勢貞丈あり、小澤蘆庵あり、實に明和より天明の頃に於いて勃然として盛んに、或は歌、我は文、各々花の如くに咲き誇つたのである。而して彼方は皆、和樣の書道に於いても各々一家をなしたので、大に重んずべきであつた。ついでは清水濱臣・平田篤胤・香川景樹・橘守部・石川依平・太田垣蓮月等を經て明治に入り、現に和風の假名書きにすぐたれる幾人かを見るのである。それ等の中、書家として語らなかつた諸人に言及して置く。

細川幽齋

幽齋、名は藤孝、小字は萬吉、又與一郎と稱した。播磨守元常の養子にして、實は伊賀守三淵晴貞入道宗薫の子である。初め將軍足利義晴に近侍し、十五年、將軍義藤、諱字を授けて藤孝と稱さしめた。ついで義昭に仕へ、また織田信長に從ひ、しば／＼戰功があつた。元龜八年三月、從四位下侍從となり、のち丹後に封ぜられ、德政を施した。信長の弑せらるるに及んで深くその非命をいたみ、卽日剃髮して自ら玄旨と稱し、又幽齋と號した。のち秀吉を援けて各地を征討し、その西海に赴くや「九洲道乃記」を書き、又小田原を征するや「東海道乃記」を書いた。文を好み、武を嗜み、小技藝と雖も悉くその蘊奧を極め、深く和歌相傳、二十一代集、源氏物語を尊崇し、又武

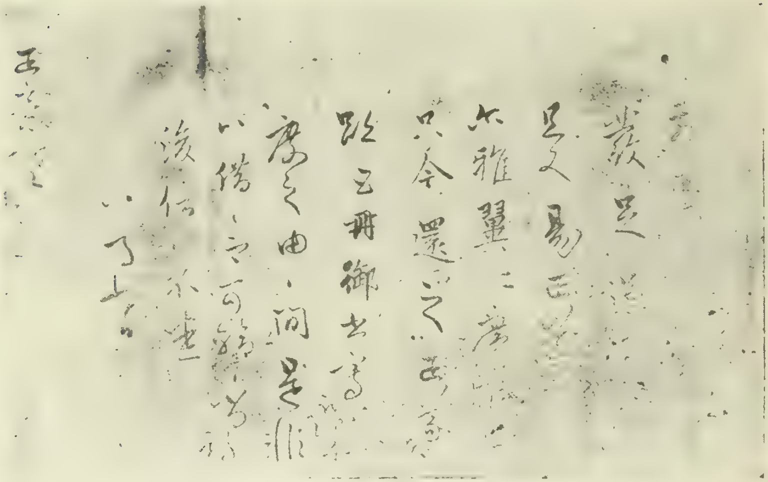


細川幽齋筆書狀　　酒井伯爵家藏

野紹鴎について茶事を學び、これをよくした、石田三成の幽齋を攻むるや、後陽成天皇、彼れ死せば古今傳授の絕えるを慮ばかり、勅旨を豐臣秀頼に傳へ、更に勅使を戰場に派してこれを救はしめられた。關ヶ原の報を聞くに及びて、幽齋、高野に遁れた。德川家康その勞を思ひ、召して京師に老いしめた。天皇、公卿の詞學に長ずるものをして業を受けさせられた。蓋し、近世國學の興る、彼よりするといつてもよい。家康が式典を制定するも、彼の意見を用ひることが多かつたといふ。慶長十五年八月、年七十七で歿した。著はすところの著、數種を遺す。

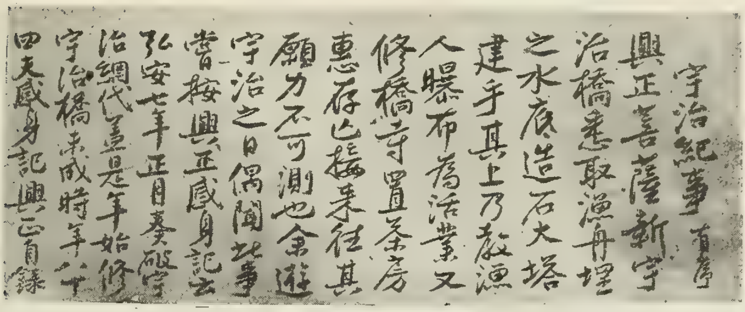
長嘯と元政

幽齋と殆ど同時に世に在つた歌人は木下長嘯子・深草元政・飛鳥井雅章・及び烏丸光廣の如きである。長嘯子は名を勝俊といひ、初字を大藏と稱した。肥後守家定の子にして、豐臣秀吉に仕へて羽柴姓を賜はり、從



木下長嘯子

四位下左近權少將に任ぜられた。大阪の亂後、京都東山にかくれ、和歌を吟詠して風月をたのしみ、また大原野に移つて天哉翁と稱して悠遊自適して居た。慶安三年六月、年八十一で歿してゐる。元政は一に幼生また、顯是に作り、姓は菅原、俗稱は石井吉兵衞である。名は日政又日峰・妙子と號し、不可思議・慧明・空子・幻子等の號もあるといふ。平安の人にして、幼より穎異、一たび句讀を受くれば皆よくこれを諳んじた。僧九嵓これを奇として曰く、『何物か寧馨兒を生む』と。年十三、彦根侯井伊直孝に仕へ、十九の時、母に隨ひて日蓮宗の寺に參り、出家の願を起した。然れども泉涌寺の周律師よりこれを止められ、直孝に從つて江戸に上つた。一日吉原に三浦屋の二代高尾と知り、遂に偕老の契を結んだが、幾くならずして、高尾

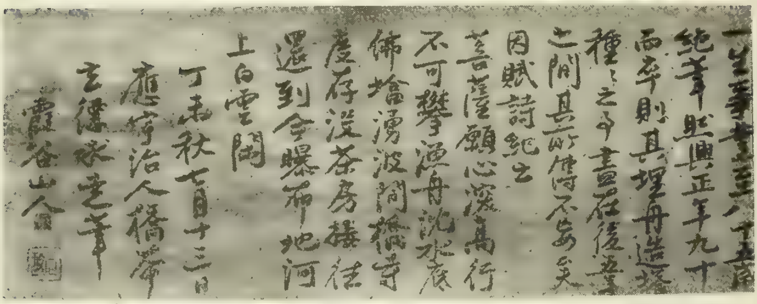


深草元政

故ありて自殺した。元政大に痛嘆し、病と稱して致仕し、妙顯寺日豐上人に事へて得度した。人と爲り精力絶倫、博學强記、かねて詞章をよくし、國學に通ずると共に好んで和歌を作り、また茶法に通じた。居を深草に占め、瑞光寺と稱した。持律甚だ嚴にして、少しも袈裟を解かなかつた。世人目して如來の化身とした。明の歸化人陣元贇と心機冥契し、方外の交を爲した。又熊澤蕃山と善かつた。寛文八年二月十八日、年四十六で歿した。

僧契冲

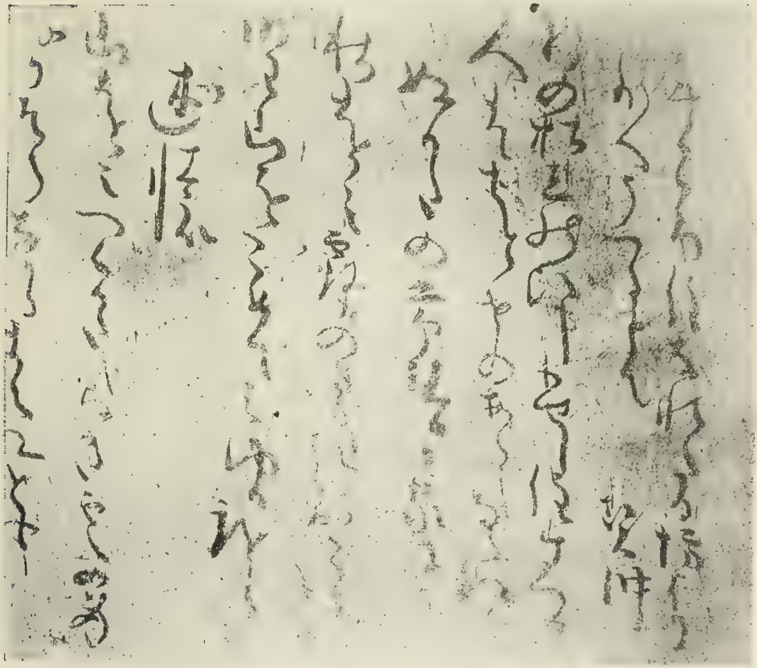
元和偃武ののち、學問興隆につれて夙に國學の振起に力を致したのは僧契冲である。彼れ、諱は空心、俗姓は下河、攝津の人である。三才にして書を作り、五才にして書を讀み、十三才にして高野山に登り快賢律師に從ひ苦練年あり、のち大阪の生玉曼陀羅院に住持となつた。圓珠庵と號する。これより大に萬葉集の研究に從事し、以て古學を中興した。詠歌もまた時流と調を同くせない。曾て水戸の西山公の命に應じて「萬葉集代匠記」二十卷、「總釋」二卷



深草元政

を著はした。同集の注釋中屈指の貴重書である。彼れ人となり寛厚淸介、人を愛して恭謙よく下つた。しかれども密法邪說ある者に至つては、敢然としてこれを避けなかつた。その記憶の强きこと世に比類なく、或る人、彼れに古歌の記憶を問ふに、三千首以上自ら知らずと答へた。元祿十四年正月二十五日。定印跏趺を結んで歿した。年六十二。著はすところの書頗る多い。

北村季吟 彼れと同時に世に在つて、國學に貢献したるは北村季吟である彼れはまた連俳をよくして、松永貞德の後業たる、當時の代表者であつたが、こゝには學者として語つて置く。通稱は久助・拾穗軒・蘆庵・湖月亭等の號がある。近江野洲北村の人である。はじめ醫を業としたが、よろこばなかつた。のち京都玉津島の社祝となりこれより國學の硏究に刻苦した。安原貞室及び松永貞德に隨つて和歌俳諧を學び、烏丸光廣の推薦に依り、幕府に召され、始めて歌學所に補せられ、再昌院法印の號を賜ひ、五百石を食んだ。これより湖月

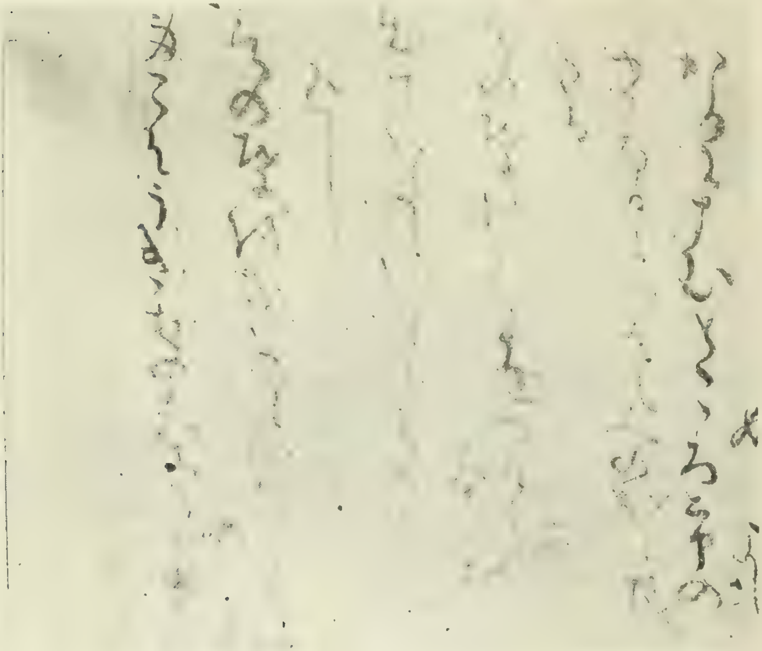


僧　契　沖

亭と號する。寶永二年六月十五日、年八十二で歿した。著はすところ、頗る多く、皆、徳川時代の國學界を裨益した好書であつた。その子に湖春あり、また父をついで國學を唱導した。

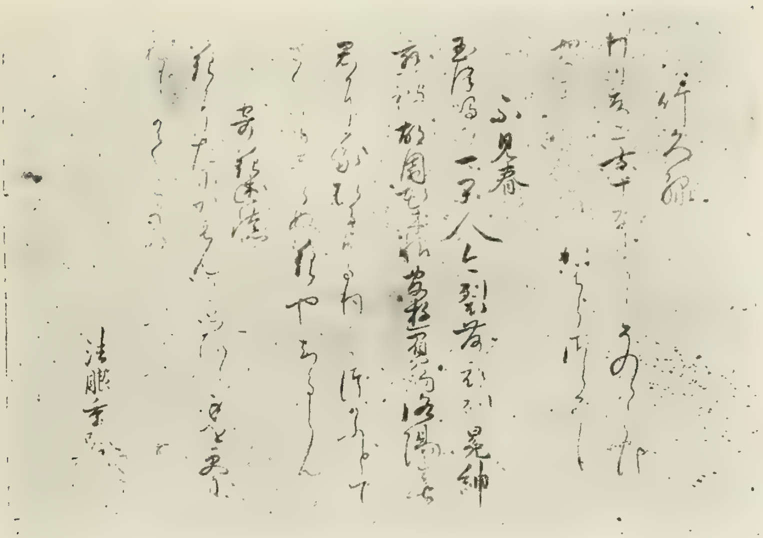
春滿と在滿

季吟にやゝおくれて荷田春滿があつた。彼れは實に眞淵の師にして、近世國學の正流を開いたものである。本姓は羽倉氏、洛南稻荷山の祠官である。通稱は齋宮、又は東麿といひ、從三位信詮の子である。夙に祠務を弟の信名に讓りて、國學の復興に志した。世に羽倉學と稱し、大に時に行はれた。將軍その名を聞き、これを見すも老



僧　契沖

を以て辭した。嘗て江戸に在るや、台命を奉じて古書を校正した。當時世の古學家十中の八九はその系統でない者はない著はすところも多い。元文元年七月二日年六十九で歿した。その子在滿、また世に聞えた。字は、持之、通稱東之進、仁良齋と號した。實は春滿の甥である。古學を唱へ、殊に有職の學に精しかつた。嘗て幕府の命を奉じ京師に赴きて大嘗會儀を錄し又貞觀式を校した。田安家に仕へたが、晩に退いて敎授を業とした。寳曆元年八月四日、年四十六で歿した。その男御風、その妹蒼生子があつた。蒼生子は和歌文章を巧みにし、紀侯の女公子



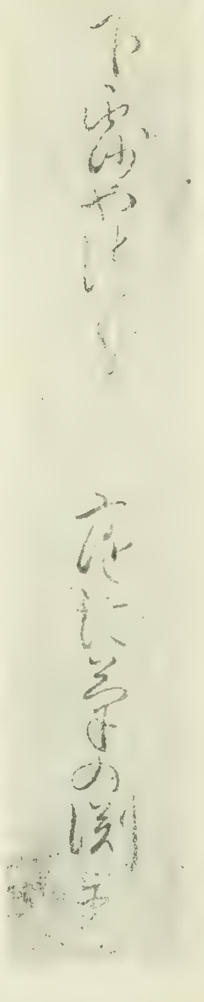
北村季吟

に仕へた。のち致仕して諸侯の女公子夫人に教へて居た。著はす所「松の下枝」がある。天明六年二月二日、年六十五で歿してゐる。

眞淵の門下　眞淵は實に德川時代三百年を通じての、國學界の第一人である彼れありで初めて、斯學の大成を見たるのみならず、また歌人として書家として、共に他に秀でゝゐた。しかし彼の傳は書家の部に語つたからこゝには繰返さない。彼の門下生には頗る多くして、本居宣長をはじめ、村田春海・加藤枝直・加藤千蔭・荒木田久老・建部綾足・塙保己一・加藤美樹・狛諸成・林諸鳥・高橋秀倉・橘常樹・平緣信・村田春道・村田春郷・小野古道・日下部高豐・橘御園・伊能魚彥・源敏樹・河津長夫・三島景雄・望月三英・

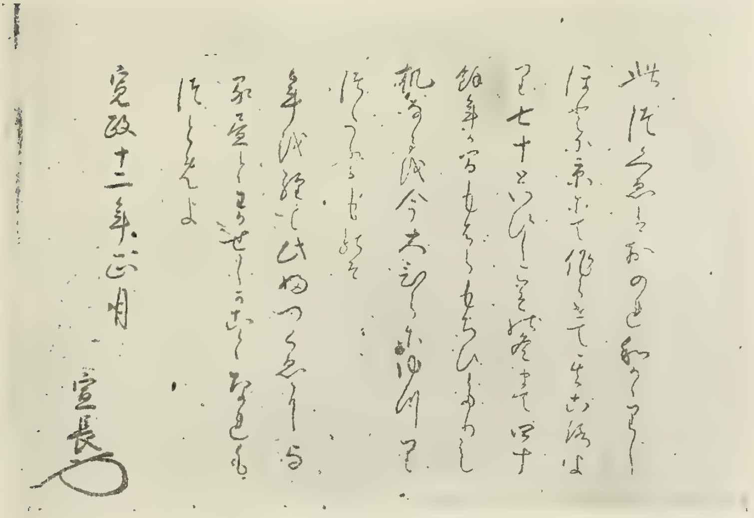
内山眞龍・藤原常香・犬上量・山岡俊明・僧海量・油谷倭文子・進藤茂子・紅子・鵜殿餘野子の如きがある。その中で、千蔭・春海については既に語つてあるから省いて、他の二三子に觸れて置くに止める。

荒木田的麗女



本居宣長

宣長は、所謂藍より出で、藍より青しともいふほどに、眞淵門下の逸足にして一世を風靡した人である。彼れ、姓は平、池大納言頼盛の裔である。伊勢松坂に生れ、春庵と稱し、のち中衛と改めた。家に三十六の鈴をかけて往々これを鳴らし、以て悶を遣つたので、號を鈴屋といふ。幼より群童に秀抜して好んで書を讀んだ。父母その才を愛し、人と爲るに及びて京都に往き堀景山に師事して儒を學ばしめた。また傍ら醫術を武川法眼に受け、共にこれをよくした。一日同友と會し誓つて曰く、『吾れ學を以て天下に冠たらずんば、再び足下に會せず』と。既にして郷に歸り醫を業としたが、加茂眞淵の著はした「冠辭考」を讀んで大に悦び、奮然として志を立て、遂に眞淵に名簿を

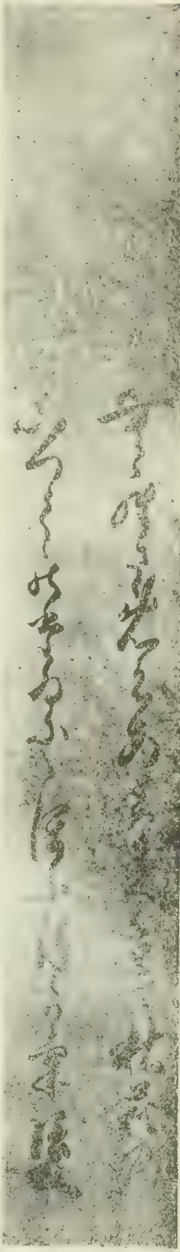


本居宣長

送りて道を問うた。時に眞淵は江戸にあつたので、宣長頻りに書を送りて師事し、それより國史律令格式、諸家記錄、歌物語等悉く渉獵せざるはなかつた。殊に古事記のその貴きこと他書の比にあらざるに、難解なるを歎じて大に精力を盡し、遂にその傳五十卷を著はし、千載の疑惑を氷解した。蓋し彼の功績の最も大なるものである。その名海内にふるひて、門に入り教を受けるもの殆んど五百人に及んだ。のち紀州侯に仕へ、屢々書を君前に講じた。彼れの學たるや、荷田・加茂・契冲・の志をつぎてこれを大成したものである。故に世の學徒、今に至りて東滿・眞淵・宣長を稱して三大人と稱する。享和元年九月二十九日、年七十二にて歿した。その著書の多きことは數へ難きほどである。

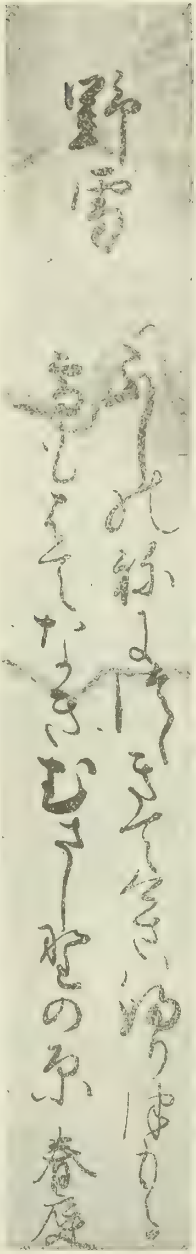
宣長の門下

宣長にはその男春庭、養子大平のある外、平田篤胤・藤井高尙・伴信友・鈴木朗・石川依平・田中道麿・横井千秋・石塚龍麿・殿村安守以下擧げて數ふべからずである。春庭は



伴信友

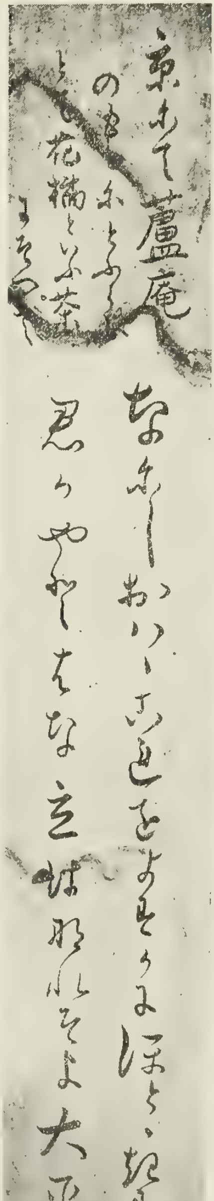
健亭と稱し、父に學んで古學を研究し、また詠歌をよくしたが、青年眼疾にかゝり、瞽となつた。世



本居春庭

に後鈴屋翁と稱する。文政十一年十一月七日、年六十六で歿した。大平は初め茂穗と名け、十介と稱した。松坂の人にして、宣長の門に學び、遂にその養嗣子となつた。同じく紀州侯に仕へ、側用人に准

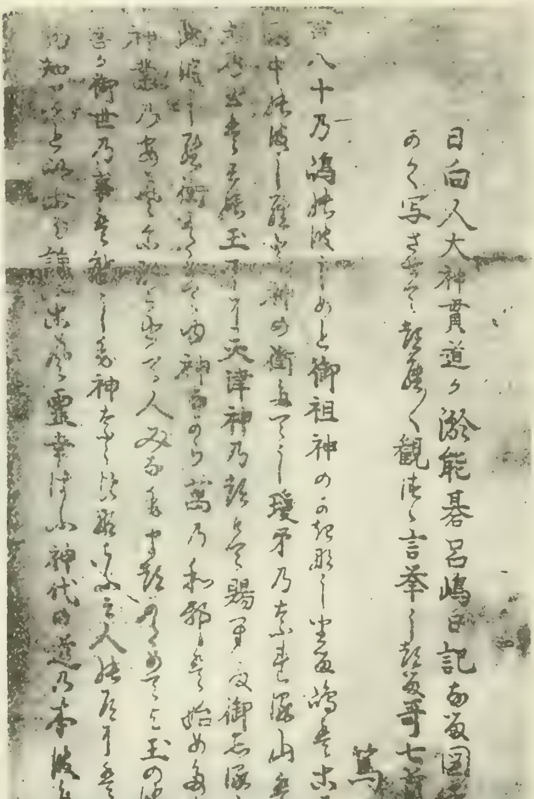
じだ。最も和歌文章に長じ、書もまた勘能であつた。天保四年九月十一日、年八十七で歿した。當時宣長の門より出づる者は、各々一家の說を立てゝ一世を震駭したけれども、多くは學者的の態度の伴はざるものがあつたに、大平のみは純然たる學究の風を持して居た。その養子內遠をはじめ、僧義門・加納諸平・中島廣足・山內敏樹・近藤芳樹・大橋重廣等最も世に知られた門下である。


本居大平

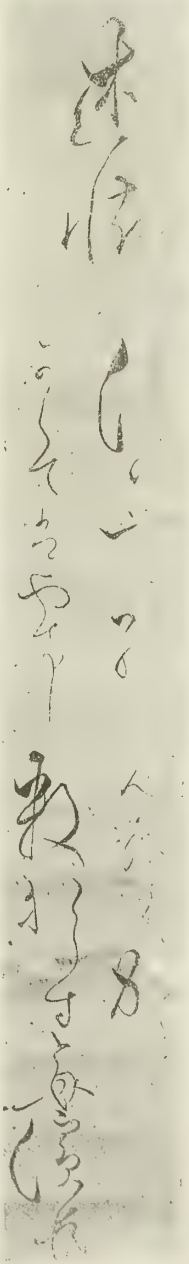
平田篤胤

氣吹迺舍出羽久保田の人、平田篤胤は初の名は正吉、通稱は大角、大壑と號した。八歳にして中山菁莪に漢籍を學び、十一歳にして柳元老に醫を修め、名を玄隊と稱した。板倉侯の士平田氏の嗣となり、宣長を慕ひて國學を修め、眞菅の屋と號し、門戶を張りて教授したが、再び醫となりて元瑞と稱した。更に伊吹の屋と號して國學を敎へた。屢々その著書を東叡山法主に進め、又これを天覽に供した。天保九年秋田藩中となり、十一年白川殿より神祇道の學頭に補せられた。著

書百餘部、門人千餘人、徳川晩年國學の一大家であつた。天保十四年閏九月十一日、年六十八で歿した。靈社の號を贈られた。その子平田鐵胤の外、六人部是香・大國隆正・中根雪江・鈴木重胤・權田直助・渡邊重春・の如きが、その門より出でゝゐる。又荻原廣通・福羽美靜の如きは隆正に學び、井上頼圀は直助についた人である。因に千蔭の門下には大石千引・加茂季鷹・清原雄風・一柳千古・正木千幹・加藤千年・岡縫子・千枝子等あり、雄風に村田了阿・季鷹には垣本雪臣の如きを出してゐる。鈴木重嶺も亦、千蔭の系統である。また春海の門にはその女多勢子の外、清水

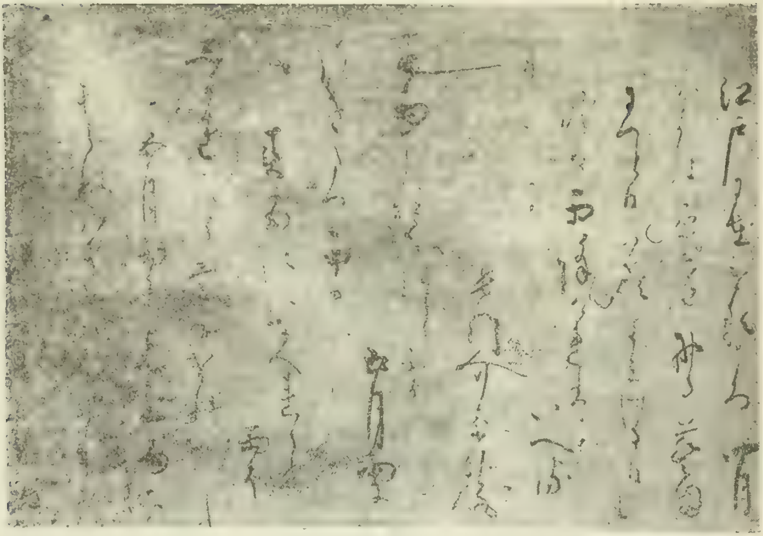

平田篤胤

濱臣・岸本弓絃・小山田與清等があつた。山崎美成は與清の門下であり、榊原芳野・横山由清・鈴木雅之・小中村清矩等も、與清の門なる伊能頴則に出でゝゐる。又清水濱臣は、通稱を玄長、沙々舍と號し、文政七年八月十七日、年四十九で歿した江戸で有名な學者であつた。嘗て述べた岡本保考は彼の門より出でゝゐる。


清水濱臣

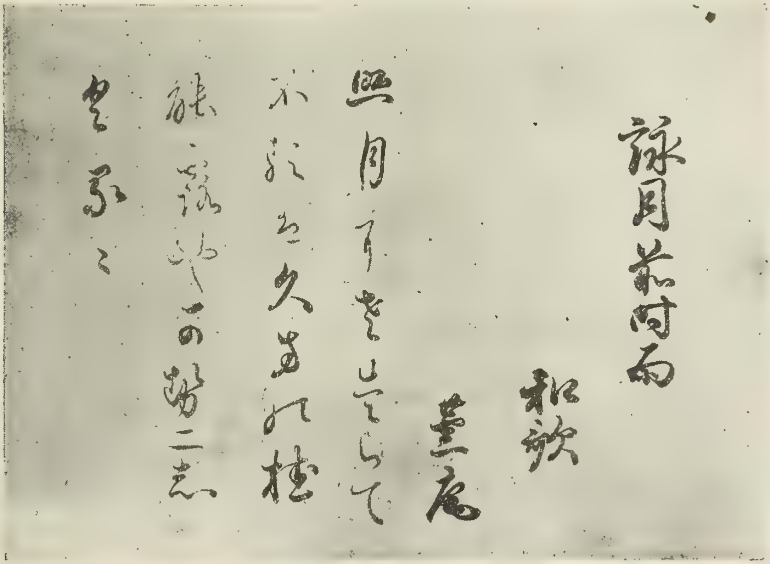
香川景樹

以上の系統的の人々の外、國學者、歌人としては香川景樹・小澤蘆庵・橘守部・伊蒿蹊等の流れに屬する人々がある。景樹を語るにはその祖宣阿よりせねばならぬ。宣阿、名は堯眞・梅月堂と號し、周防の人にして京都に住した、清水谷實業に學んで一條に卜居し、和歌をよくして世に知られた。一條の今西行とは彼れのことである。著はすところ家集「草庵集」をはじめ數種ある、享保二十年九月二十二日、年七十八で歿した。その男景親・景親の男景平・景平の男黄中、皆梅月堂と稱して家風の和歌を以て京都に家した。景樹は實にその黄中より出でる。彼れ小字は銀之助と



香川景樹

いひ、因幡鳥取の人にして、奧村氏の養子となり、名を純徳、字を眞十郎と改めた。七歳の頃和歌を詠じ、清水貞固について學び、また儒を堀南湖に問うた。十五歳にして百人一首註釋を撰み、十八歳の頃、父に請ひて京都に往き、徳大寺家に仕へ、これより勤學練行して終に香川景柄（黄中）の養子となつた。長門介と稱したが、故ありて離縁せられ、別家として歌道を持して居た。しばく轉居して終に岡崎に住し、老いて益々健全を加へ、學につく者萬を以て數へたといふ。彼れは正統派に反抗して、近世自然主義的の和歌を詠じた人である。のち仙洞より肥後守に任ぜられ、天保十四年三月二十七日、年七十六で歿した。彼にも著書は多い。その子景周・景恒の外、穂井田忠友・八



小澤蘆庵

田知紀・山科文幹・朝山常清・熊谷直好等、彼れに歌を學んで有名の人である。

【平安和歌四天王】 小澤蘆庵は名を玄仲、通稱を帶刀、といひ尾張竹腰家の臣である。初め劍法を修めんとし、諸國を遊歷したが、のち詠歌を以て天下に冠たらんとし、初め浪華に仕し、のち京師に移りて冷泉爲村の門に入り、故ありて破門せられ、一家を爲して時流に超越した。居を岡崎村に卜し、觀荷堂と號した。當時平安和歌の隨一であると稱する。享和元年七月十一日、年七十九で歿した。因に四天王とは蘆庵の外、伴蒿溪・僧澄月・僧慈延を稱するのである。蒿溪は近江八幡の人、名は資芳、のち剃髮して蒿溪と號した。有賀長伯に學び、のち武

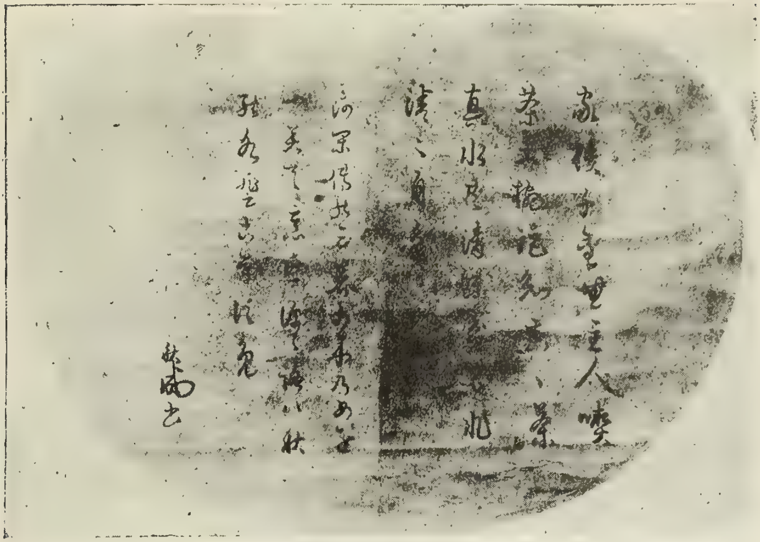
者小路實岳卿の門に入りて歌學を修め、一體をなした。のち京都大佛の邊に住して閑田廬と號した。文化三年七月廿五日、年七十四で歿した。澄月と慈延とも、皆洛東岡崎村に居つて、前者は武者小路家、後者は冷泉家の門に學んだのである。

その他の諸大家

尙ほ名だゝる人達の中から、數氏を擧げて置かう。富士谷成章は字を士達、號を層城、又北邊といひ、本姓は皆川にして淇園の弟である。三歳にして書をよくし、七歳にして詩

富士谷成章

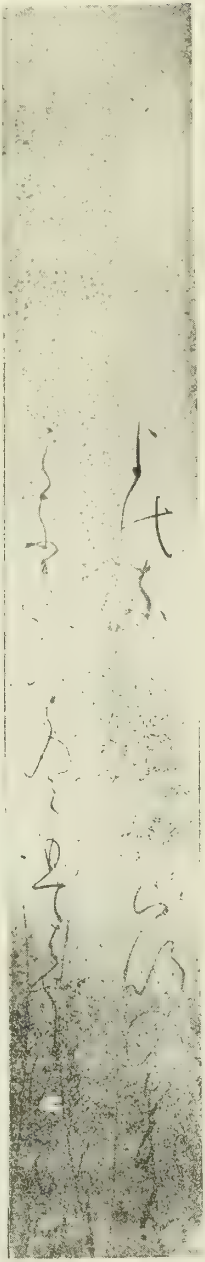
をよくしたが、又國學に通じ、和歌を詠ずること幾千萬首なるを知らないといふ。門人四方に遍ねく、その他天文暦數雜技、吹彈等、一として成らざるはなかつた。安永八年十月二日、年四十二で歿した。その男御杖も亦、和學を父に受けて家聲を墮さなかつた。文政六年十二月十六日、年五十六で歿した。伊勢貞丈は、所謂伊勢流有職學の泰斗である。安齋と號し、平藏と稱した父貞益、幕府に仕へたので、彼れもそれを襲ふて小祿を食んだ。幼より有職故實を好み、中世以降の記錄に於



上田秋成

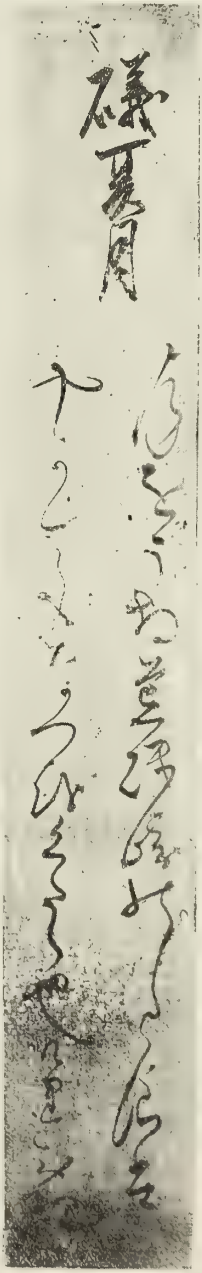
いて併尋せざるなく、これを以て一家を成した。制度典章器械服飾に至るまで、考據精密なること空前であつた。天明四年六月五日、年七十六で歿した。その著書の夥しきこと、名を擧げるの煩にだに堪へ難い。上田秋成はまた風變りの學者で且つ文人である。彼れ通稱は東作・鶉居・無腸・餘齋の號がある。大阪に生れ、妓女の子である。幼にして娼家上田氏に養はれ、長じてその業の賤しきを愧ぢ、財を賣つて醫を業としたが、既にしてこれを癈め京に出で、國學を修めた。最も和文和歌に長じ、興到れば一日數十百篇の文章を草し、名聲大に振つた。また茶事を好んだ。後世の粟田口窯と稱するものは彼れの創造であるといふ。文化七年、年七十八で歿した。その師は眞淵門の加藤

美樹等であつた。伊信友は、景樹に劣らざる名歌人として知られる。通稱を州五郎といひ、立入と號した。若狹の人にして、はじめ宣長の門に入らんとしたが、その逝去に遇ひ、卽ち事由を大平に告げて故翁の門人に列せられた。苦學絶倫、著書百部に近く、精細比類なしと稱せられる。弘化三年十月十五日、年七十四にて若狹に歿した。


足代弘訓

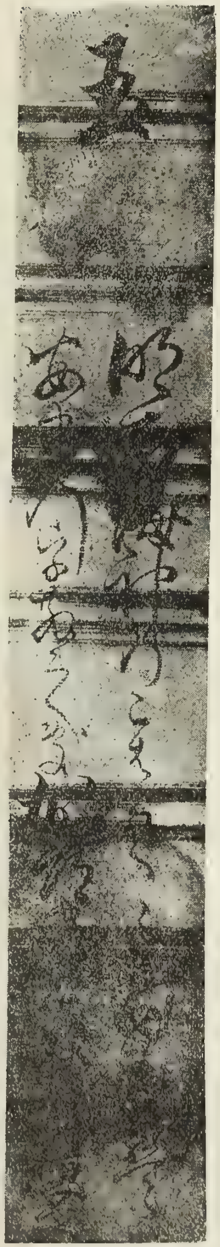
「最近の國風家」最近の歌人として、八田知紀・大田垣蓮月・大熊辨玉・高畠式部・橘守部・千種有功・石川依平の如きがある。また大國隆正・黑川春村も學者として知られる。知紀は通稱喜左エ門。桃岡と號し、鹿兒島の人にして景樹の門に入り、明治初年、宮内省に職を奉じて御製の拜見を承はつた人である。明治六年八月、年七十五で歿した。蓮月尼は、小名を誠といひ、智恩院の侍某の

子である。夫と四兒の皆早世せるを慨き、早く剃髪して尼となり、有功の門に入りて和歌を學んだ。



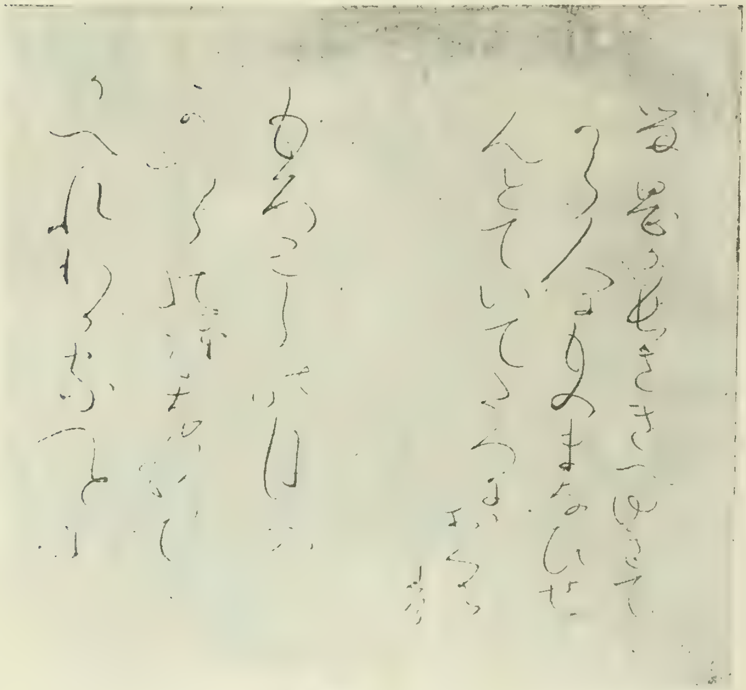
八田知紀

四十歳の頃より陶器を捏ねて自詠の和歌を描き、これを販いだ。書風幽雅にして愛すべきものがあつた。四方傳稱して詠歌を乞ふ者多く、その煩を厭ひて家居を定めず、遂に西賀茂の神光院の茶所に住



中島廣足

んだ。都人呼んで屋越の蓮月といつた。明治八年十二月十日、年八十五で歿した。その師千種有功は



太田垣蓮目尼

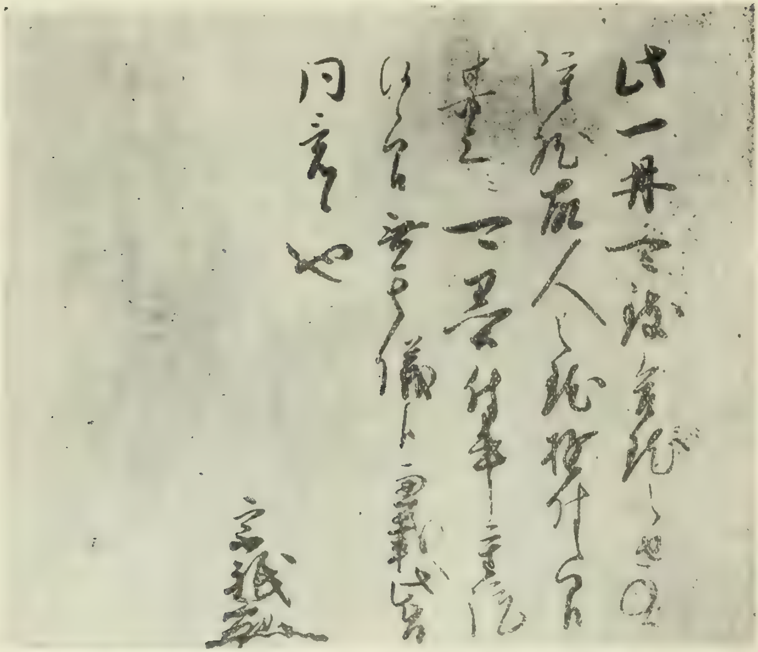
千々廼舍と號した。權中納言に進んだ人で、當時有名の歌人である。安政元年八月二十八日、年五十八で歿した。

俳人

主なる俳人　足利の季世に連歌として發生し德川時代に入りて漸やく盛んとなつた俳諧なるものは、是も普遍的なる平民詩として、近世獨得の發達を見たのである。先づその先頭に立つものを飯尾宗祇となし、ついで山崎宗鑑・里村紹巴があり、稍下つて松永貞德が出で、以て盛運を開いた。その門下に野々口立圃・松江重頼・北

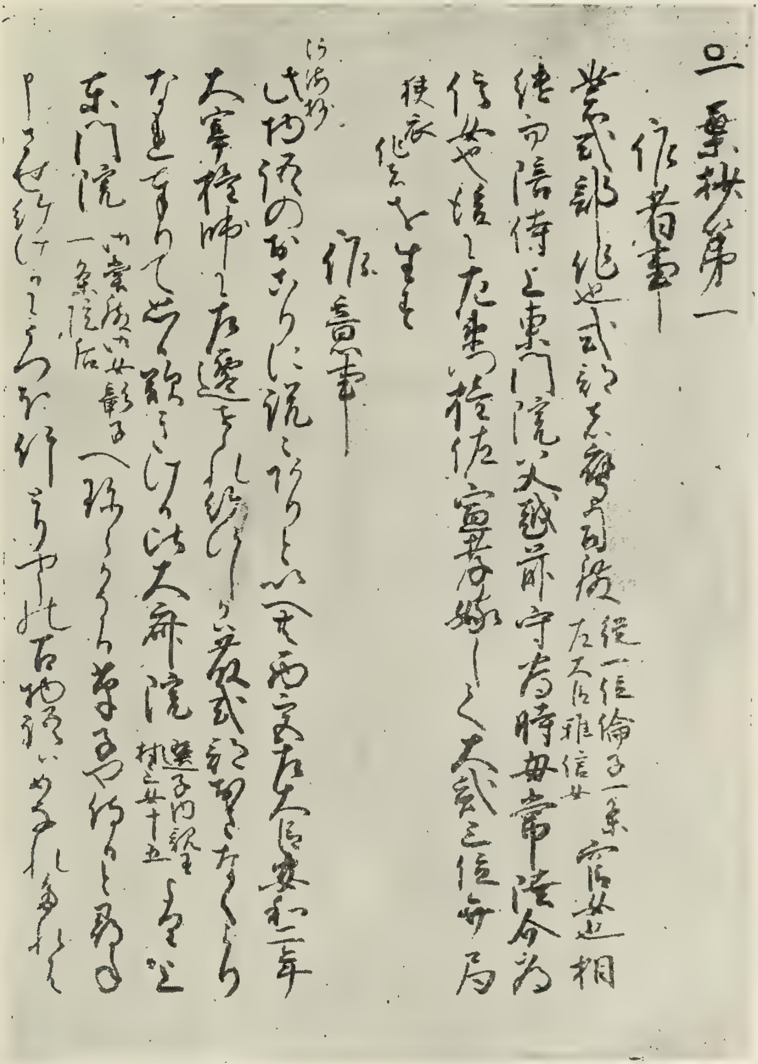
村季吟・鷄冠井令徳・安原貞室・山本西武の如きがあり、更にその立圃には高井立志あり、重頼には上島鬼貫・西山宗因あり。而して松尾芭蕉の世に出づるに及びて、所謂正風の俳諧をなして、今に蕉翁を以て俳聖と稱する次第である。芭蕉の門下には寳井其角・服部嵐雪・向井去來・森川許六・各務支考等の所謂十哲があつて、彼等に依つて、俳道は普ねく全國に宣傳られた。又其角の門下に早野巴人・秋色女の如きがあつた。斯くて俳諧はます〳〵隆昌に向つたが、殊に天明前後に於いて與謝蕪村をはじめ、横井也有・大島蓼太・久村曉臺・高桑蘭更等ありて、氣を吐くや、最も盛んなるものであつた。その後も小林一茶あり、成田蒼虬あり、櫻井梅室あり、更に明治年間に及んで正岡子規の新傾向句を出した外、晋永機・尾崎紅葉・現在せる内藤鳴雪氏の如き皆錚々たる大家である。その外、元祿の盛時には、大石良雄・大高源吾の如き義士もあれば、井原西鶴の如き文人も俳諧で知られたし、のちには畫家の酒井抱一など、餘技として世に有名なる俳人も多かつたのである。

宗祇・宗鑑・紹巴　飯尾宗祇は本姓三好氏、又自然齋・見外齋・不審等の號がある。紀伊の人である。猪苗代兼載に連歌を學び、東常緣に「古今和歌集」の傳授を受け、遂に天下第一と稱せられた。天子始めて「花の本」の號を賜ひ、また勅を奉じて「筑波集」を撰した。性旅行を好み、四方に遊歷して、足跡天下に遍かつたといふ。文龜二年七月晦日、年八十二で函根に歿した。山崎宗鑑は、近江



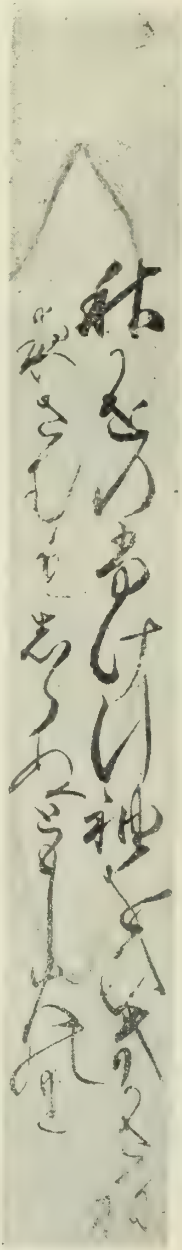
宗祇筆蹟　　相良子爵藏

の人である。將軍足利義尙に仕へ、六角高賴を征して屢々功を立て、事未だ平かないのに義尙が俄かに陣歿したので、いたく人生の無常を感じ、髮を切りて名を宗鑑と改め、庵を山城山崎なる竹林中に結び、滑稽諧謔を以て自己の生命となし、新たに俳諧の一體を完成して、從來の連歌に一大革新を加へた。その著「犬筑波集」は最初の俳句集である。天文廿二年、年八十九にして歿した。里村紹巴は、本姓松村氏、臨江齋・半醒子等の號がある。奈良の人である。周桂に從つて連歌を學び、その妙に至つたので、王侯子庶爭つて師事した。明智光秀を討つに功あつ



牡丹花肖柏筆一葉抄　　伊藤繁丸氏藏

て、法橋に進んだ。此の人また千利休に學びて茶事をよくした。豐太閤の時に於ける七名人の一と稱せられる。慶長七年、年七十九で歿した。



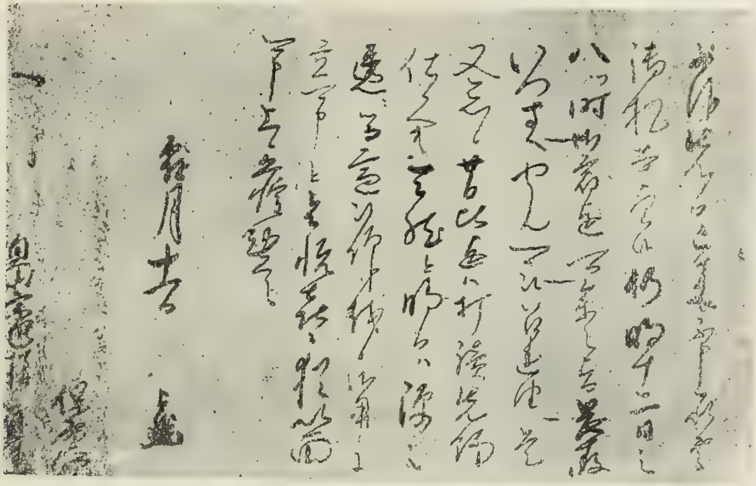
里村紹巴筆蹟　（佐藤獨嘯氏蔵）

貞徳・立圃・宗因

松永貞徳は、小字を勝熊、通稱を長頭丸、又延陀丸といひ、逍遙軒・明心居士等の號がある。和歌を關白植通・右大臣晴季・内大臣實條に學び、聯歌を僧安休・細川幽齋に學び

西山宗因

また有職故實を權大納言雅綱・參議雅敦に學び、共にその奥旨に達した。殊に俳諧をよくしたので、慶長三年花咲翁の稱を許され、一道の宗匠となつた。法皇特に花の本の號を賜うた。堯圍親王、方廣

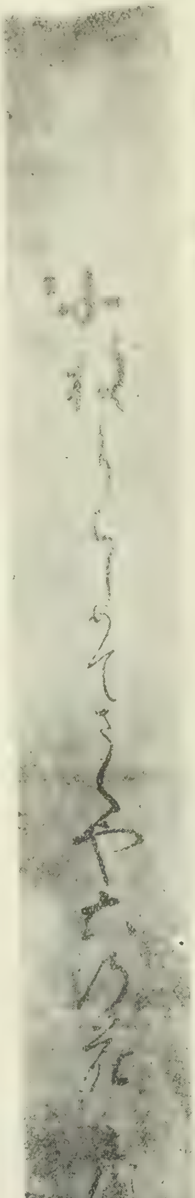


松永貞徳

寺の南地を下賜して、桃園と稱せられた。晩年に明を失つたといふ。承應二年、年八十三で歿した。門人頗る多き中に立圃・宗因を許つて置く。雛屋立圃は名を親重、といひ、松齋と號し、俗稱を紅屋庄左衛門、（一に次郎左衛、また市兵衛・宗左衛門と稱したともいふ）野々口氏にして、もと丹洲深津の人、京師に出で、雛人形を作つて鬻いだ。故に雛屋といふのである。和歌を烏丸光廣に、書を尊朝親王に學び、かねてまた俳諧に巧みにして、貞徳門の二客と稱せられる。且つ書も土佐、狩野に學んだので、一家を成してゐた。寛文九年九月、年七十一で歿した。西山宗因、名は豐、俗稱を次郎作といひ、梅翁又は西翁と稱する。別に忘吾齋・一幽子・向榮庵・野梅子・梅花翁等の號がある。肥後の八代の加藤氏の臣であつたが、主家の

潰滅に遇ひ、不平の極み薙髪して僧となり、深く宗鑑の人と爲りを慕ひ、自ら宗因と號し、俳諧の滑稽を以て自ら任ぜんことを期したが、その武術に達するを以て諸家に聘せられるも遂に應じなかつた。狩野探幽の女を妻とし、傍ら畵をよくした。連歌は里村紹巴に學び、俳諧は松永貞徳を宗とした。然れども、當世に叶はざるを知り、間もなく所謂談林調の句を唱道して一世を震動した。正保年間より浪華天滿に住し、延寶中江戸に來往し、門弟全國に普ねかつた。天和二年三月二十八日、年七十八

野々口立圃



で歿した。井原西鶴はその門下の逸足にして、西鶴門下には北條團水がある。内藤露沾・岡西惟中も宗因の門より出でゝゐる。

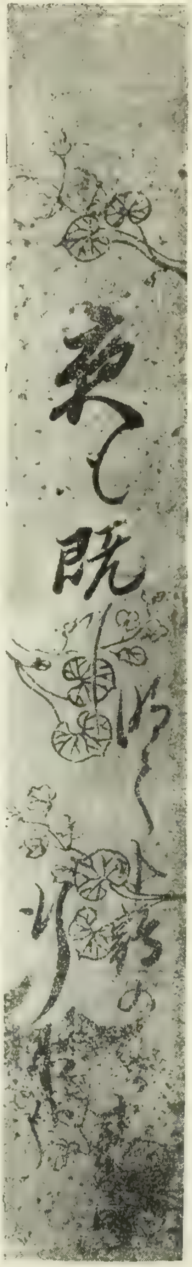
松尾芭蕉　芭蕉は初めの名は金作、(或は曰く半七郎)のち甚七郎と改めた。伊賀國柘植庄の人、(或は曰く伊野の上野に生れたと。)上野の城主藤堂新七郎に仕へてその子良忠の近侍となり、主從の間意氣投合して頗る親密の關係を有した。良忠は蟬吟と號し、初め松永貞徳に從つたが、貞徳

の歿後は北村季吟について俳諧を學んだ。芭蕉の甚七郎もまたその文學上の感化を受けたこと少なくない。間もなく甚七郎は名を忠右衛門と變へ、また宗房と改めた。二十三歳の時、蟬吟が歿したので悲嘆限りなく、六月その遺髪を奉じて高野山に赴き、これを納め、深く世の無常を感ずるところがあつた。七月飄然主家を脱走して京に赴き、季吟の門人となりて隱遁の生涯に入つた。斯くて國學歌及び貞門の俳諧を學び、傍ら伊藤坦庵に随つて漢籍を　び、李白を慕ひて名を桃青と改めた。寛文十

松尾芭蕉

二年九月、その師季吟が江戸に召さるゝや、桃青また東に下つた。時に年二十九。小澤卜尺の家で旅の草鞋を解き、此に暫らくの宿を求め、ついで深川の鯉屋杉風の別業に入り、薙髪して風羅坊と號した。しかしまだ俳人として一家を成すに至らなかつたから、或は神田上水の工事にたづさはり、或は筆耕を業とし米鹽の資に供したと傳へられる。當時江戸には談林の俳風專ら盛であつたが、天和元年に、彼が有名なる「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の句を作つて、こゝに蕉風の開眼をなした。斯

くて詩想漸く圓熟して幽玄閑寂の域に進み、此の時また佛頂和尚に參禪して、ます／＼その詩想を涵養した。貞享元年、伊賀に歸らんとして「野ざらし紀行」あり、爾來各地に行脚して足跡殆んど全國にあまねく、到るところ必ず紀行がある。「奥の細道」最も有名である。元祿三年の頃、近江の湖畔なる幻住庵に足を留め、間もなく江戸に歸り、三年ののちまた上洛の途につき、伊賀にかへり、渡會園女の招きに應じて非常の歡待を受け、更に大阪に至つたが遂に健康を害してまた起つに至らず、



寳井其角

花屋仁左衛門の裏座敷に轉宿してこゝに歿した。實に元祿七年十月十二日、年五十一であつた。近江大津なる義仲寺に葬つた。彼れが人格の俳人として古今獨歩なるはいふに及ばず、また書に巧みにして筆勢自然に出で、悠々迫らずして、しかも骨法の見るべきものもあり、眞に大家の筆たるに背かない。見るべく學ぶべからざるもの、古來の假名文字中出色の一つと言つてよからう。

其角と嵐雪

先づ其の門下の十哲を語らう。榎本其角、本姓は寳井、名は順哲、寳晋齋・

晉子・狂雷堂等の別號がある。近江堅田の人、父を榎本東順といひ、醫を以て某侯に仕へた。また醫をよくし、初め佐々木文山を師とし、のち米南宮を喜びて別に機軸を出した。その俳諧は卽ち芭蕉を師とし、所謂十哲の首めである。然れども酒を嗜んで放蕩に流れ、生業を事としなかつた。江戸に來つて嵐雪・破笠と同居し、貧窮の中に快を呼んで居た。嘗て物徂徠の隣に住んで、俳諧を附して此の大儒を嘲けつた。大高源吾また彼の俳友であつた。寶永四年二月三十日、年四十七で歿した。服部嵐

服部嵐雪

雪は、幼名久馬助、(或は曰く佐助)、雪中庵・寒寥堂・黄落堂・不中堂・玄峰堂・蓼太郎・佛山大居等の號がある。承應三年淡路國に生れた。長じて江戸に出で、彦兵衞と稱し、新庄隱岐守に仕へ、又井上相模守に仕へた。のち致仕して俳諧を芭蕉に學び、禪を濟雪方丈に學んだ。其角と並稱して蕉門の桃櫻と稱せられる。寶永四年十月十三日、年五十四で歿した。その門下に星野巴人・櫻井吏登(二世)その他の諸家がある。吏登のあとは大島蓼太がついで三世雪中庵と稱した。尙ほ其角の門には秋色女・

星野其窓等があり、紀文大盡も千山と號して其角に學んだ。

一　丈草・去來・許六・支考

内藤丈草、幼名は林之助、のち林右工門といふ。尾張の人で、犬山侯の重臣であつた。その繼母の意を圖つて、二十五歳の秋自から指を切り武門を辭し、熊野山先聖寺玉堂和尚の禪意を受け、芭蕉に從ひて俳諧を學び、湖南粟津の龍が岡に茅屋を結び、佛幻庵と號し、芭蕉を開祖とした。翁の滅後、一石一字の法華經を寫し、墳を築きてその傍に居つた。元祿十七年二月廿四日、年四十五で歿した。向井去來、名は兼時、また義焉、落柿舍と號し、平次郎太夫と號した。肥前の人にて、兄と共に京都に出で、武を以て飛鳥井家に仕へ、鴨河の東聖護院後に住した。別莊を嵯峨小倉山の麓に營んだ。落柿舍は菊亭内府の賜子名である。寶永元年九月一日歿した。年五十四。森川許六は五老井、また菊阿佛と號した。江州の人。此の人文藝に通ずるを以て芭蕉これに許六の名を與へたといふ。殊に書畫をよくした。正徳五年八月二十六日、年六十で歿した。各務支考は東花坊と號する。

各務支考

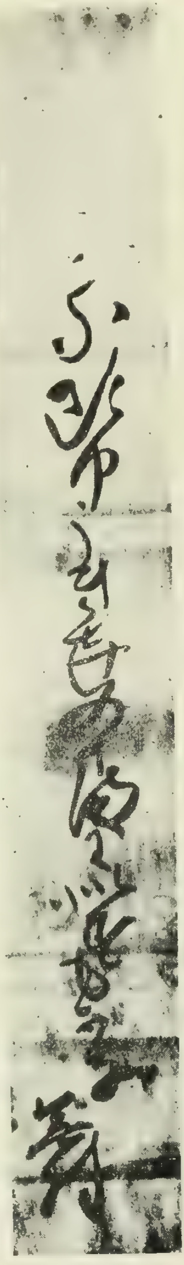
美濃の北方の人にして、初め僧となり鎮藏主と號した。中年、伊勢山田に住し、俳諧を涼菟に學び、のち師の紹介に依り芭蕉の門に入つた。世に美濃派、獅子門統と稱する一派は此の人から出でる。人と爲り磊落にして敢て法度にかゝはらなかつた。享保十六年二月七日、歿した。年六十七。

松風・越人・北枝・曾良・園女

杉山松風は、風元雅、また鶴歩と號した。のち隱栖して一元と稱する。別に採茶庵・襄翁・襄杖等の號がある。三河の人。(或は江戸の人)といふ。江戸小田原町に住し、鯉屋と稱して魚を鬻いだ。家は頗る豐かであつたけれど、生れながらの聾にして業を營むことが出來なかつた。故に意を俳諧に專にした。初め談林の風を慕つたが、のち兄の仙風と芭蕉の門に入つた。享保十七年六月十三日歿した。年八十三。越智越人・熊本の藩士で通稱は佐分利平次郎氏恒、又は七兵衛といふ。別に蘆韻・芦友の號がある。故ありて名古屋に移り紺屋十藏と稱し。紺屋を業としたが、後に歸參した。元祿十五年三月十四日歿した。立花北枝は、一に森氏、趙氏に作る。次郎右衞門と稱した。加賀小松町の人で家は研屋である。兄は牧童といひて、同じく俳諧をよくした。享保三年五月十二日に歿した。河合曾良は惣五郎と號した。信州諏訪の人、のち薙髮して宗悟と號した。寶永六年十月二十三日に歿してゐる。年六十二。渡會園女は伊勢松坂の人。芭蕉の同地に行脚した時は、招きて厚くこれを遇し、有名なる白菊の句を與へられたが、その歿後は其角に學びたといふ。享保八年

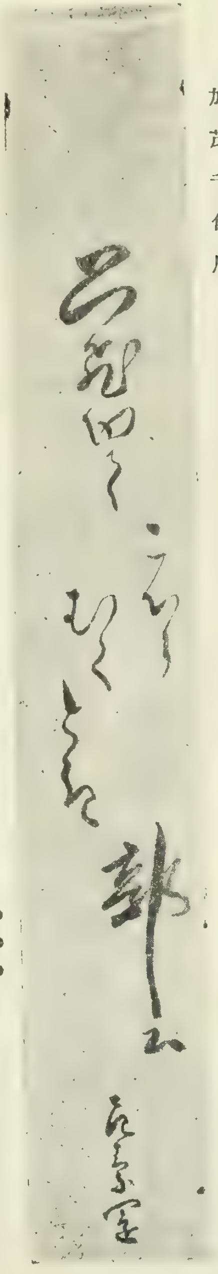
薙髪して智鏡尼と改めた。同十一年四月二十三日歿した。年六十三。芭蕉門下は、その外小川破笠・廣瀬惟然・春花園風兆・稻津祇定・志多野坡・天野桃隣等あつて、必らずしも十哲に劣らなかつたが、今は煩を厭ひて略して置く。

與謝蕪村



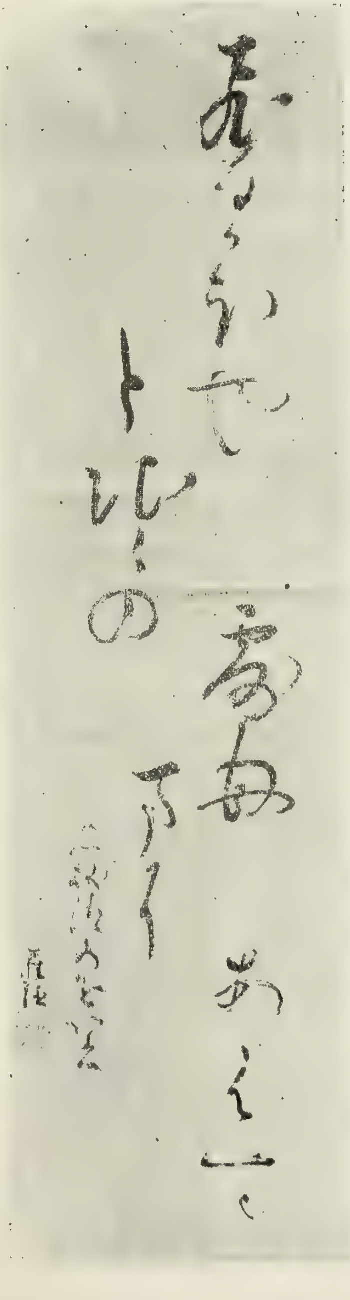
安永以後の俳人

加茂千代尼



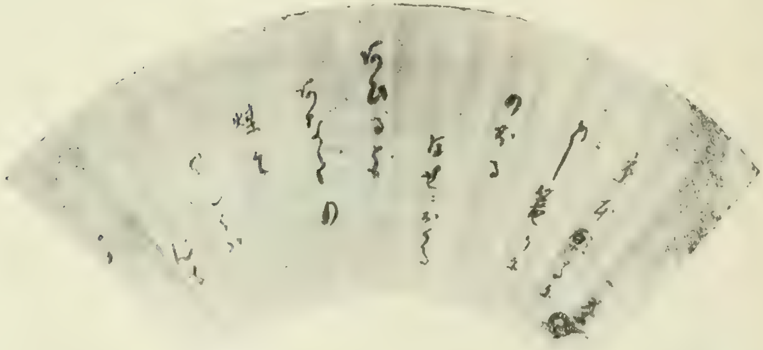
安永天明の俳人としては、勿論與謝蕪村がその筆頭であれど、彼は畫人として詳しく語つたから玆には省いて、年代順に加賀の千代尼から始める。千代女は加賀松任の人にして

のち尼となりて素園と號した。盧元坊に從つて俳諧を學び、女性らしきしほらしい句風を以て大に天下に鳴り、女性俳人を代表してゐる。安永四年九月八日、年七十四で歿した。大島蓼太は空摩居士と稱し雪庵三世の宗匠である。白隱禪師に參じて悟道に入つた人である。天明七年九月七日、年七十で歿した。横井也有は、通稱孫左エ門、名古屋の藩士である。戲畫に長じて世に稱せられた。また文雅



横井也有

を好み、俳諧に長じ、世に獨歩して名を藝林に馳せた人で、殊に俳文は他に匹を見ざる巧妙のものである。性淳朴にして頗る風流洒落であつた。天明三年六月十六日、八十三で歿した。彼はまた半掃庵とも稱してゐた。加藤曉臺はまた草村氏と稱し、通稱は半兵衞。暮雨庵・龍門・周擧・又一白居と號



一六

した。蓮阿房白尼の門に入りて俳諧を學び、梅夜(買夜)と號した。辭して蕉風を唱へ、二條家より花本暮雪の額を賜つた。天明に於いて蕪村につぐの俳人である。寛政四年五月二十日、年六十一で歿した。その門下に井上士朗がある。また加舍白雄は春秋庵と稱して、蕉風中興の祖と稱せられる人。信州の生れにして江戸に出で、昨烏と號し、鴫主庵に居たこともある。寛政三年九月十三日、年五十三で歿した。高桑闌更は金澤の商家釣瓶屋某の子にして、若年關東に出で、のち京都に住し、俳諧を希因に學び半化房と號した。畫を大雅に、書を佛頂禪師に學び、晩年東山石林寺中に芭蕉堂を築いてこれに居つた。寛政十年五月三日、年七十三で歿した。小林一茶は通稱彌太郎、俳諧寺と號する。信濃の人にして、幼より俳句をよくし、初め素丸に學び、のち隨齋成美に從つた。その俳趣脫俗、洒落の間に人生の裏面を吟じ得て、おのづから一機軸を出した。江戸に遊んで下

谷坂本に住した。俳諧寺はその當時の號である。文化十一年國に歸り、文政十年十一月十九日、年六十五で歿した。一茶よりのち、蘭更門下の成田蒼虬・櫻井梅室・士朗門下の鶴田卓池・梅室門下の日本爲山などがあつたけれど左したるほどでもなく、以て明治に及んでゐる。

戲作者・狂歌師

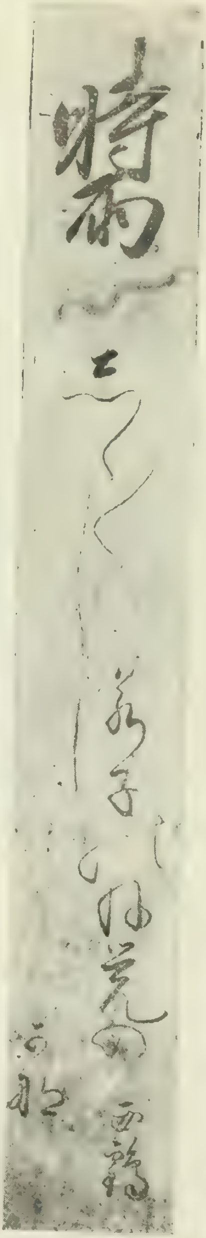
江戸時代に勃興した平民文藝家には、上述の俳人ある外、所謂戲作者及び狂歌師なるものがある。卽ち元祿の二大天才として、小說家の井原西鶴、劇詩人の近松巢林子とがあり又た竹田出雲あり、更に戲文家の江島屋其碩・山東京傳・式亭三馬・十返舍一九・爲永春水・柳亭種彥・曲亭馬琴等ありて、或は滑稽諧謔をほしいまゝにし、或は人情の機微をうがち、或は怪奇驚異の事實を構へて、當時の人心に迎へられたのである。また朱樂菅江・唐衣橘州・大屋裏住・手柄岡持・太田蜀山人・宿屋飯盛・狂歌堂眞顏の如きは、諷刺諧謔を以て寸鐵殺人的の句を三十一字に纒め、依つて時流の弊所を痛擊してゐたのである。而してこれ等の戲作者、狂歌師の書蹟は、その價値、歌人俳人の風格なるものに比すべくもないが、流石に西鶴・門左・馬琴・蜀山等のものは、その間に捨て難き一種の味を有せぬでもない。

戲作者と狂歌師

井原西鶴

西鶴は松壽軒、また二萬翁の號があり、本名は知れざれども、大阪の人にし

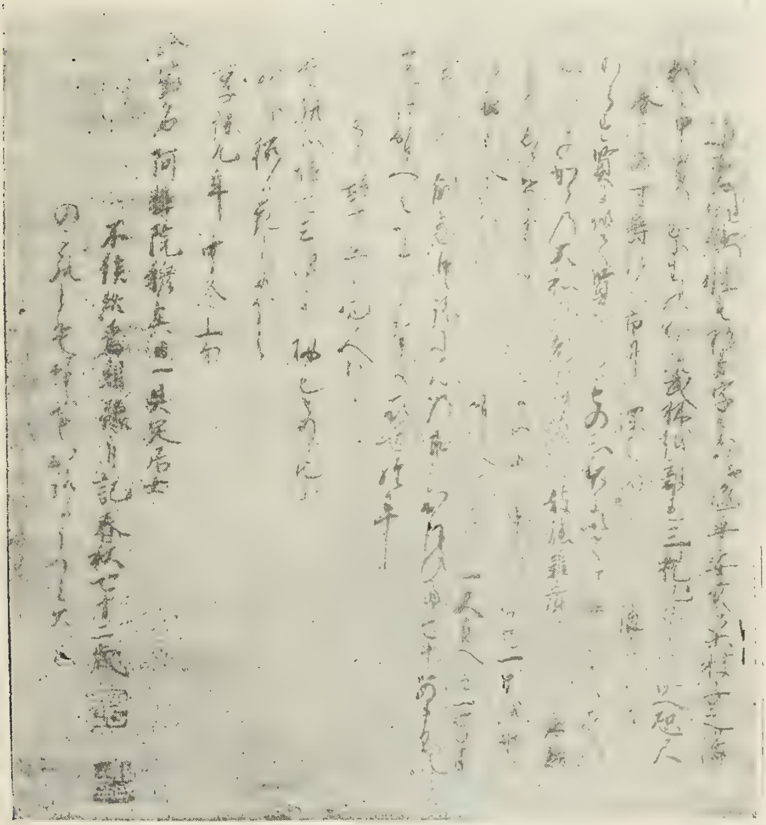
て大阪に居つたことは明かである。初め西山宗因に徒つて俳諧を學び、或る時住吉の社頭に二萬三千句獨吟歩行をやり、依つて二萬翁と稱すといはれる。たゞしその俳句は談林の常調にして、今日より見て特に賞すべきほどでもないが、散文に至つては實に委曲を盡し、巧みに人情世態を寫すこと古今獨歩と稱してもよい。彼の曲亭馬琴の如きも、敢て輕々しく人に許さざるものであつたが、しかもいたく西鶴の才に服し、西鶴歿後百九年、大阪に遊んでその墓を弔し、低徊して去る能はなかつたと傳へられる。また明治後半期に起つた尾崎紅葉等の小說家は、皆西鶴に負ふところが多いのである。元祿六年八月十日、年五十二で歿したといふ外、彼の傳記は不明である。門下に北條團水等があつた。



井原西鶴

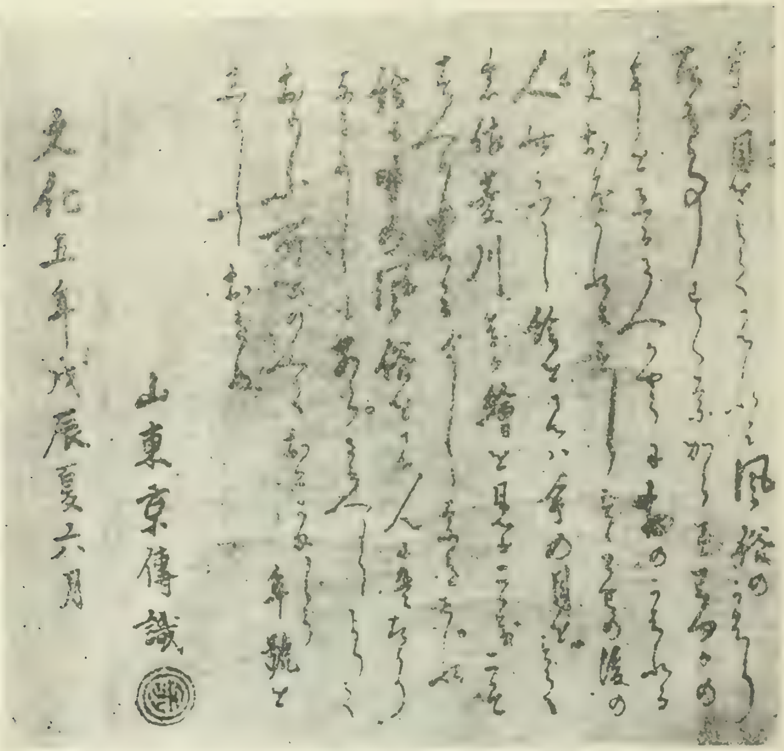
近松巢林子

近松門左衞門は名を信盛といひ、本姓は杉森氏、平安堂・巢林子・不移山等の號がある。長州萩の人にして、世々毛利侯に仕へたといふ。初め肥前の國唐津の近松禪寺に入りて剃髮



近松門左衞門

し、古洞と號した。のち京都に至つて一條家に仕へ、從六位に叙せられたが、既にして致仕して市廛にかくれ、傳奇、小說、淨瑠璃を作るを業とした。殊にその淨瑠璃に至つては、單に元祿文學の要位を占めるのみでなく、實に我邦に於いて匹儔を見ざるものである。その世話物にも時代物にも、今日尙ほ人口に膾炙せられるものゝ、殆どすべては彼の作るところである



山東京傳

といつてよい。享保九年十一月二十二日、年七十二で歿したといふ外、彼についても我々は餘り多くを知らないのである。また彼には門人らしいものはなかつた。

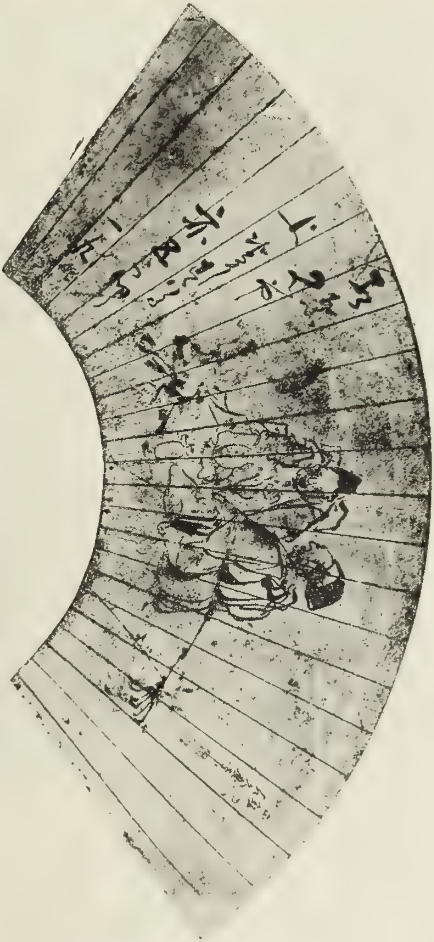
其碩と京傳

江島屋其碩は通稱市郎右工門、京師の人にして、方廣寺邊に家し、大佛餅を販いでゐた。家頗る富み、學を好むところより戯れに小説を著はし、その友八文字屋自笑に托して、その名を署せずして發售させてゐた。所謂八文字屋本

これである。奇警にして人の意表に出でた。のちは自署して公然發表した。元文元年六月、年七十で歿した。山東京傳は岩瀬氏、名は醒、字は酉星、幼名田藏、初字は甚太郎、のち傳藏また政演と改めた。山東京傳はその號である。好んで狹斜の情態を寫した。また彼は畫をもよくして、北尾律齋政演の名を以て知られる。文化十三年九月七日、年五十六で歿した。弟京山また劇作を以て名があつた。

三馬・一九・春水・種彦

式亭三馬は本姓菊池、名は泰助、字は久德、通稱は西宮太助、式亭三馬はその戲號である。又洒落齋、哆囉哩樱、遊戲堂・遠町庵・四季亭・四季三人等の別號がある。江戸本石町の書肆翫月堂に仕へ、のち戲作を試みて大に當つた。文政五年、年四十八で歿した。十返舍一九は本名を重田貞一といひ、磊落にして酒を好み、享和二年、道中膝栗

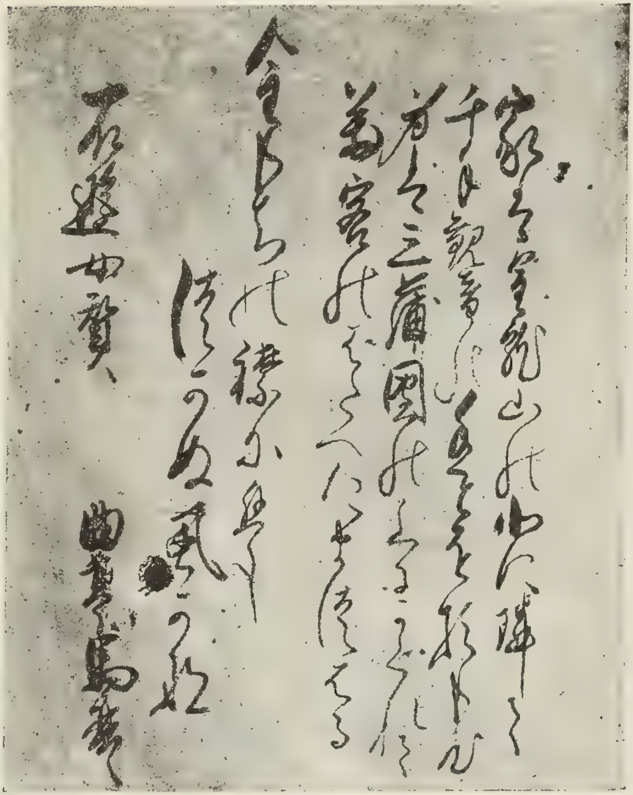


十返舍一九入

毛を著はして最も世に知られる。實に我國滑稽物の隨一である。また狂歌をよくした。天保二年に歿した。年五十七。爲永春水は、名貞高、鷦鷯正輔と稱した。初め書肆を業とし、青林堂越前屋長次郎といひ、三馬の門に入つて三鷺、また二世振鷺亭と號したが、のち狂訓亭春水と改め戲作を事とし、人情本に於いて最も成功した。天保十三年、獄に下され病みて死んだ。柳亭種彥は、通稱を高屋彥四郎といひ、はじめ畫を巧みにし、また俳諧狂歌にもよくして、愛雀軒、又足薪翁と號し、或は俳名を木卯と稱し、狂歌には柳の風成、のち心の種俊と曰つたが、「修紫田舍源氏」を著はして大に好評を博してより、遂に小說家として名を成すに至り、その居を名けて修紫樓と曰つた。天保三年七月十九日年六十で歿した。

曲亭馬琴

馬琴、名は解、字は瑣吉、小名は倉藏、のち清左衞門と改め、晚に剃髮して篁氏と稱し、曲亭馬琴と號した。また著作堂・簑笠漁隱・玄同陳人・魁蕾子等の別號がある。江戶の人にして父を興藏といひ、幕士松平信成に仕へてゐた。幼にして讀書を好み、また稗史野乘を喜んで晝夜手に卷を措かなかつた。數家に仕官したが、皆終へずして去り、醫家に寓して醫を學び、宗仙と號した。また經を龜田鵬齋に受けたが、これ等も皆終へずして罷めた。かくて小說家山東京傳の家に寓するや京傳その才を愛してこれを待つこと篤かつた。これより奮然として稗史小說の作家となつ



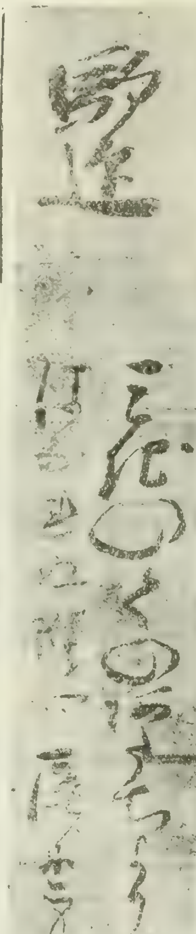
曲亭馬琴

た。更に書肆蔦屋重三郎の家に居ること三年、飯田町の履商伊勢屋の寡婦に入婿した。しかれどもその間筆硯益々さへて、例の八犬傳を出す頃より、洛陽の紙價彼が爲めに高きことを見た。七十餘にして眼を患ひ、殆んど盲して字を作すことが得づ、乃ち嗣子の婦に授けてこれを寫さしめた。「八犬傳」は二十八年の歳月を閲して大成した作である。嘉永元年十一月六日、年八十二で歿した。

○馬琴は五年にして豪宕不羈であつたが、のち行を改めて老いてます〳〵方正剛毅、世と俯仰せず、全く戯作者流と面目を異にしてゐたから終に京傳・京山・北齋等と絶つに至つた。

菅江・橘洲・裏住

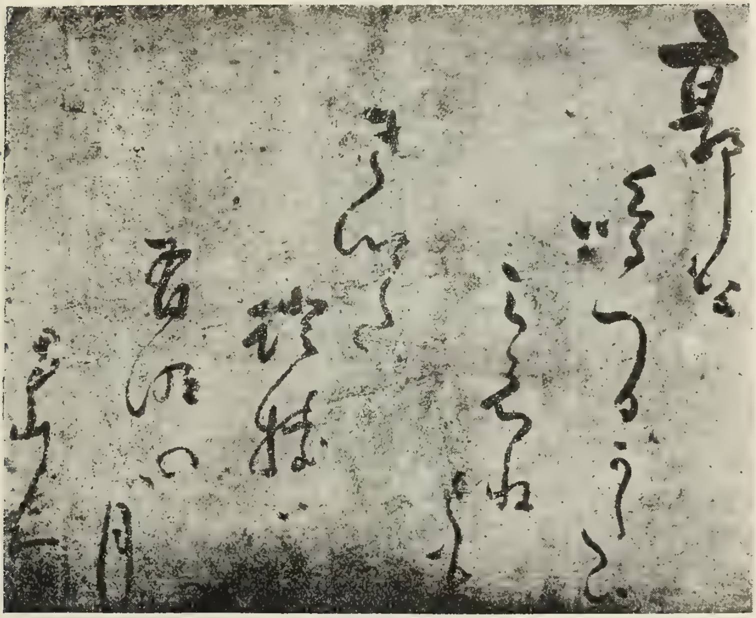
狂歌師(きやうかし)なるものは早く徳川時代の初めから世に在つて、石田未得・半井卜養・等の名を知られるが菅江・橘洲あたりから専門的に最も知られる。朱樂菅江には淮南堂と號し、江戸の人にして、寛政十年は六十一で歿した人、唐衣橘洲は砕竹庵といつて、同じく江戸に居り、享和二年六十で歿した人である。ついで出でた大屋裏住は、萩の屋とも號し、文化七年に七十七で歿し、また手柄岡持は明誠堂と號し、共に江戸にあつて、文化十年七十九で歿してゐる。



朱樂菅江

蜀山人と飯盛

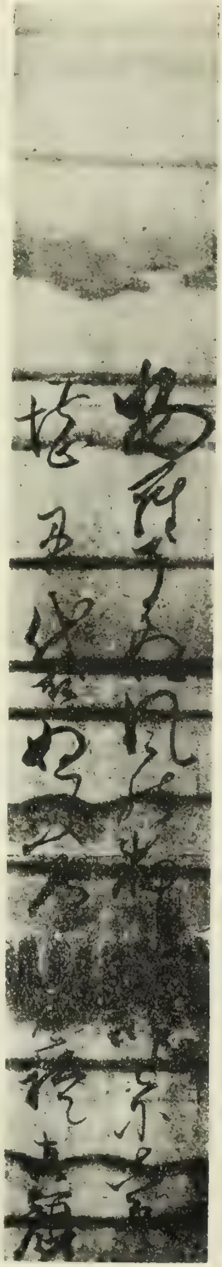
狂歌の代表者は太田南畝である。彼れは名を覃、字を子耜、號を南畝といひまた蜀山人・杏花園・晩櫻山人・石楠齋等の別號があつた。直二郎と稱し、のち七左衛と更めた。幕府の士である。幼より學を好み、文章をよくし、旁ら狂歌を作つてゐたが、滑稽諧謔の才、讀む人を絶倒せしめざるはなかつた。蜀山人を以て世に通じてゐる。南畝はもとより尋常の狂歌師ではなくて、經學の蘊蓄の人に秀でたものがあつたれど、不幸にして志を得ず爲めに放浪自恣を以て一世を終つた



太田南畝

のである。文政六年四月六日、年七十五で江戸に歿した。彼れの如きは一種の詩人と稱すべく、その書蹟もまた見るべき一流の筆格を具へてゐる。彼れの門下に宿屋飯盛がある。本名は石川雅望、字は子相、宿屋飯盛は狂名である。家號を五郎齋、また逆旅主人、稱を五郎兵衛と呼び、また六樹園とも呼んだ。父は糟屋七兵衛とて、小傳馬町に旅館を業として居た。狂歌と蜀文とに名があり、壯年の時放逸であつたが、父の歿後改悛して學に志した。狂歌を小島温之に學び、のち太田蜀山人につき、又古屋昔陽を師として學を受けた。最も「源氏物語」を好み、俗事を記すにも雅言を以てした。故に狂歌俳文を以て世に鳴つ

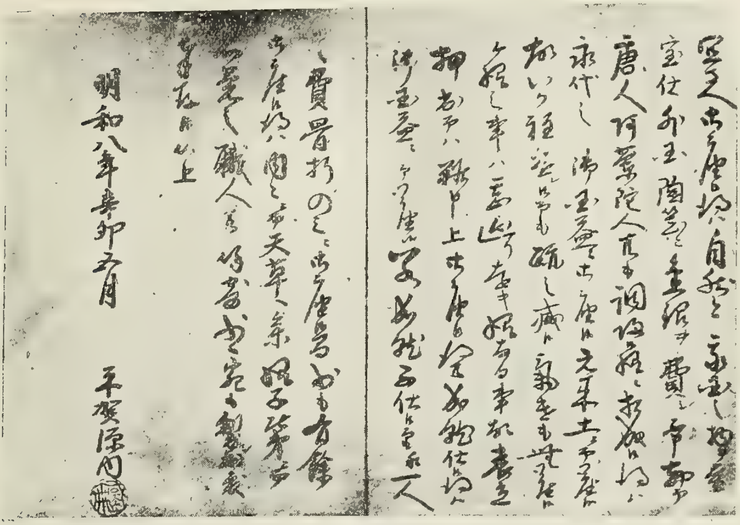
たけれども、これは本意でなかつたといふ。のち京都より法眼に叙し、宗匠の號を賜はつた。文政十三年三月二十四日、年七十八で歿した。彼には「雅言集覧」「源註餘滴」の如き眞面目なるものより、「北里十二時」の如きものに至るまで、著書が頗る多い。


眞顏

宿屋飯盛

平賀源內

最後に奇人平賀鳩溪を語つて置かねばなるまい。彼れ名は國倫、字は士彛、源內と稱した。また戲作の書には天笠浪人・松籟齋・風來散人・森羅萬象翁・無根叟・福內鬼外等の



平賀源内

諸號を用ひた。本草學者にして戯作をよくした。讃岐の人である。幼にして英質があり、藩の重臣眞田宇右衛門に事へて、茶坊主となつた。暇あれば儒書を繙き、秀才の名藩中に聞えて天狗小僧の名があつた。藩命にて藥園附きの小吏となり平賀源内と稱した。大に感ずるところあり、疾と稱して暇を請ひ、長崎に往き唐人館に出入した。唐人輸入の藥物につき、その贋物は悉くこれを斥けたので、唐人いたくその本草に通ずるに驚いた。また和蘭語を學び、或は蠻國の珍器を購入して工夫を凝らしよくこれを模造した。去つて大阪京都その他に往き、その地の豪商と交つた。寶暦中江戸に來り、鴻儒三浦瓶山の食客となり、また官醫田村元雄に物産の學を修めた。湯島天神祠前に住居し、こゝに儒と醫とを業とし、

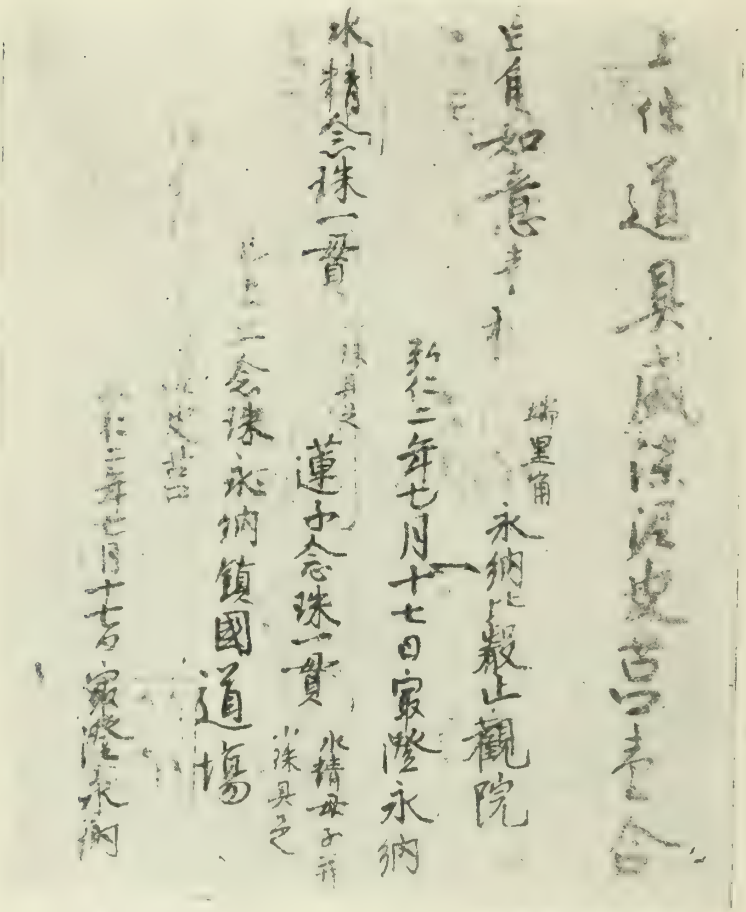
深く相馬侯の知遇を蒙むつた。たゞ一世を不遇に過し、大言壯語して世を罵つて居たが、事に坐して獄に下り安永八年十二月十八日、瘡を病んで歿した。年五十七。人となり卓犖豪放にして才智を先にし、德行を後にした。彼れの作つた淨瑠璃本その他の戲作的著述頗る多い。

四、禪宗の高德

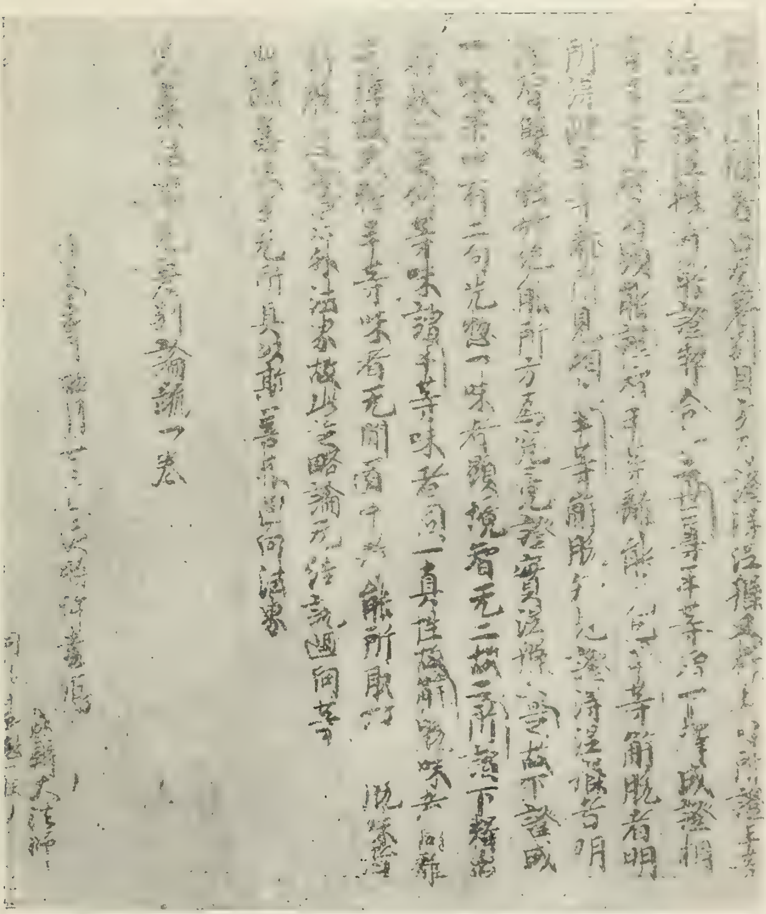
高德と書

高僧と其遺墨

こゝには禪宗の高德といふ頭を掲げたが、今に於いて遺墨を珍玩せられる僧侶は、必らずしも禪宗の高德とのみに限つた譯ではない。由來、宗教家といふものは、日本に限らず支那でも印度でも、所謂知識階級の代表をなすものであつて、殊に中世以降、最近世に至るまで、學問文教の未だ今日ほどに一般的に進まなかつた頃には、宗教家が學者の大部分を占め、教學的修養ある人は、先づ宗教家であると言はねばならなかつた。中世紀のお公卿樣、近世の儒者、國學者、文人などの外は、文字でも書ける人は大抵宗教家であつた。のみならず、宗教家はまた人格一世に秀でた人であつたことは申すまでもない。今の所謂宗教家と、昔の宗教家とは人格に雲泥の差があつて、皆生き佛樣と稱してもよい位であつた。されば其等の人の手になつた書蹟が、殊に隨喜渴仰の的であつたし、また現にあり得るのは勿論である。故に尊貴すべきはひとり禪宗高德のそればかりではないのである。聖德太子の古へより、日蓮・眞鸞以降各宗の長老碩德の墨蹟には、極めて重んずべきものが決して少くはない。



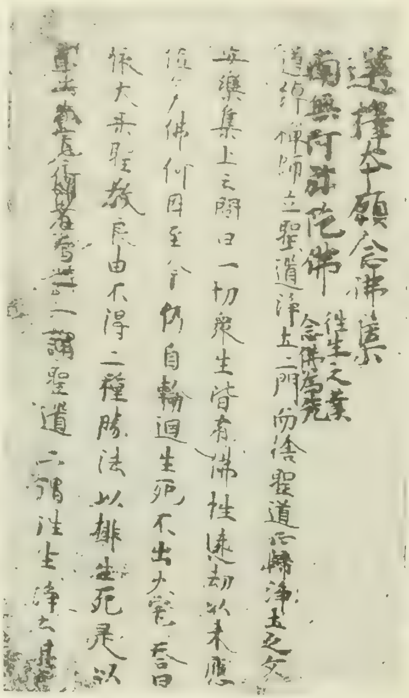
傳教大師筆蹟　　延暦寺藏



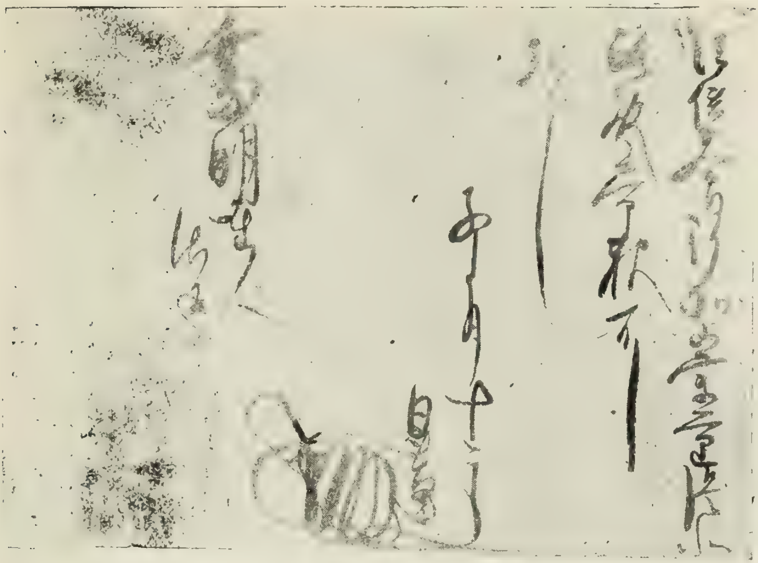
明恵上人筆蹟　　　朝吹常吉氏蔵

重なる高僧

例へば、飛鳥朝の聖徳太子、さては良辨僧正の昔より、平安朝に入りて、弘法・傳教・兩大師の手蹟については、すでに書家として語つた通りである。その他天台宗にては前に慈覺大師・智証大師、後に尊圓・尊朝・尊鎮の諸法親王の如き、みな一流の大家であつた。又眞言宗には理源大師あり、興教大師あり、解脱上人あり、淨土宗の圓光大師（源空）、眞宗の眞鸞上人・眞如上人・法然上人、日蓮宗の日蓮上人の如き、一宗を開き、若しくは一宗の大立物たる聖僧の遺墨にして、若し現在に傳へられたものがあらば、その宗の信徒たると信徒たらざるとを問はず、異常なる崇敬を以てこれを拜するのであつて、それ等は神聖その物を認められるのである。けれども若し翰墨的價値を以て見れば、要するにそれ等は一種の神聖化せられたる象徴物質にして、天台、眞言の諸僧、法然・親鸞・日蓮等の祖師の遺蹟の外は、果して我等の觀賞的對照として見るべき性質のものなるか否かを知ら


選擇本願念佛集
南無阿彌陀佛　往生之業念佛爲先
道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正歸淨土之文
安樂集上云問曰一切衆生皆有佛性遠劫以來應
値多佛何因至今仍自輪迴生死不出火宅答曰
依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死是以
出火宅何者爲二一謂聖道二謂往生淨土

法然上人筆撰擇集　盧山寺藏



日蓮上人筆蹟　　法華經寺藏

ない。たゞ、そこへ行けば禪宗の高德の物に至つては、實に翰墨の氣に滿ちたる、頗る見るべきものであることを疑はない。

禪僧と書道

蓋し禪僧なるものは、最も思想的の鍛錬を要求せられ、その教義既に幽玄微妙なる一種の象徴界に出沒し、これが表現說述には文字を立する能はざる底の宗教なるが故に、研修最も深遠なるものである。されば鎌倉時代以降、德川時代に及ぶまで、禪家の諸僧中には識德共に高くして、且つ書字も亦堂に入つた人が頗る多いのである。殊に學識一世に秀で、人格また古今に稀なる聖僧にして、且つ清雅隱逸の生活を尙びて、おのづから高士の面目を備へたる人を多く見るのである。のみならず、その或る人は宋・元

●明よりの歸化した人にして、所謂本場の教養をば遺憾なく積める者であり、中には支那にても一二と言はれる高徳さへあつたのである。或はまた我れに於いて一山の聲望を鐘めて、遠く彼の土に留學すること年あり、切瑳琢磨を經て珠の如き光輝を放てる名僧である。即ち彼等が、時に法語として書き與へたるもの、閑餘の手すさびとして遺し置けるものなどの、凡常人の翰墨と趣を異にするは今更云ふを待たないのである。

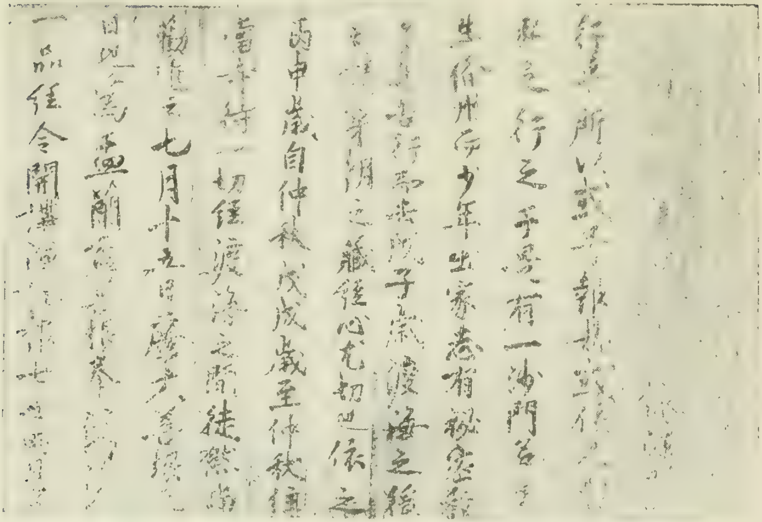
本邦の禪宗

禪家翠道家の主なるものを語る前に、臨濟禪、曹洞禪、及び黃檗禪について一とわたりの説明をして置かう。抑も禪宗とは釋尊成道四十九年の後、釋尊の拈華と迦葉の微笑とに淵源し、その後二十八年して菩提達磨に至り、達磨が梁の大通元年支那に入り、こゝに一世の祖となつたのである。達磨の法は慧可に附せられ、四傳して弘忍に至り、慧能の南宗、神秀な北宗と別れ、南宗は更に二分して臨濟と曹洞となつたのである。而して本邦に於ける傳來は、已に文德天皇の御宇にあるとするけれども、時機未だ來らずして、その後も數度に宗義を傳へたれども弘通するに至らなかつた。建久二年榮西宋に入り臨濟宗を傳へ、道元また宋に入り安貞二年曹洞宗を傳へてより、こゝに禪宗は國教の一となつたのである。爾來北條●足利二氏執政の間最も隆盛を極め、京都、鎌倉に五山、十刹の大禪寺競ひ興つたのである。降りて江戸時代に入り、承應三年に僧隆琦（隱元）歸化して

臨濟宗中の一派を傳へ、のち黄檗宗と稱し。これより我が禪宗に三派の對立を見るに至つたが、分野に於いては黄檗宗最も狹きは、新しき爲めの現象であらう。

禪宗の大家

源頼家が榮西禪師の爲めに京都に建仁寺を創してより臨濟宗は次第に瀰淪（びりん）しついで北條時頼が建長寺を起し宋の蘭溪道隆を延き、九條道家が東福寺を建てゝ辨圓圓爾（聖一國師（しやういちこくし））を始祖たらしめ、北條時宗が圓覺寺を營んで宋の無學祖元を推し開山とし、龜山法皇が南禪寺を興して無關普門をしてこれに居らしめ、花園法皇がまた關山慧玄を迎へて妙心寺を開き、北朝の光明天皇も尊氏をして天龍寺を創めしめ、夢窓疎石を入れ。佐々木氏頼は永源寺を剏めて寂室至元を居らしめ、足利義滿は春屋妙葩の爲めに相國寺を闢いたのである。而して本宗の所謂五山十刹を定めたのは、北朝至徳元年のことである。これに對して曹洞宗は、道元禪師が宋よりこれを傳へ歸りて、宇治に興聖寺を創め、ついで寛葩二年秋越前に永平寺を建立し、後嵯峨天皇の勅願道場に定められたに基づき、爾來、徹通・寂圓・瑩山・寒巖・峩山・明峰・通幻・大源・大智・無端等が出でゝ全國に弘道した。斯くて萬治寛文の頃、月宗宗胡あつて、黄檗の隱元と對峙したが、更に寛文五年に支那の心越禪師が來朝し、大に宗運を挽回した。又黄檗宗は、もと臨濟宗なりしもの、明代に至りて一派を別ち、我が邦に於いて明人隱元が、承應三年に歸朝し、初め長崎に止まり、ついで宇治に黄檗山萬福寺を開



榮西禪師筆誓願寺盂蘭盆一品經緣起　大泉坊藏

いて以來のことである。その門下の木庵・即非ありて二甘露門と稱せられ、また鐵牛・獨湛・高泉の如き大德があつて、大に禪林の盛をなしてゐた。以上の高僧の中、書蹟に於いて殊更に尊重せられるのは、概ね室町時代以前の開山、中興等であり、また大德寺の一派は、一休以來特に書の美を以て知られ、後年、黃檗の諸僧また臨池の技を以て賞せられるから、これ等を一わたり說くことゝする。

臨濟、曹洞の高僧

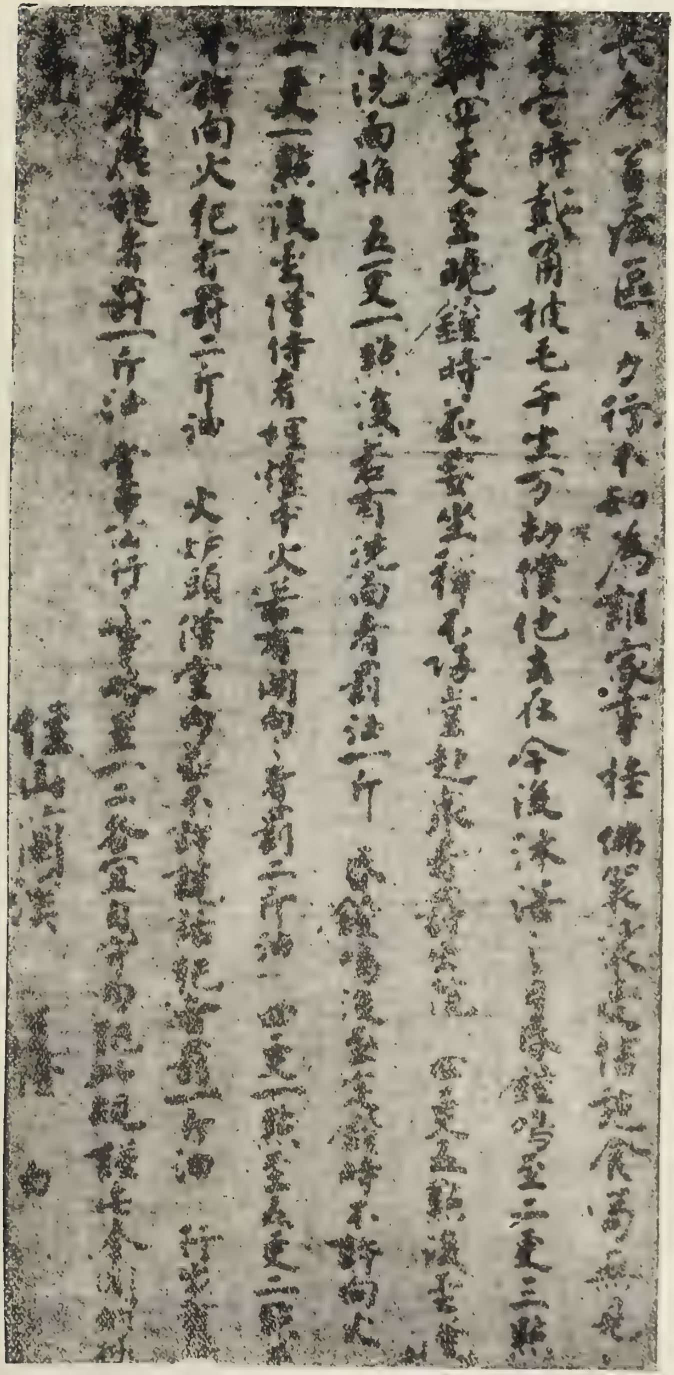
榮西（明菴）　榮西禪師、字は明菴、のち千光祖師と稱する。京都建仁寺（けんにんじ）の開山である。備中吉備津の人、俗姓は賀陽氏、永治元年四月を以て生れた。長じて出家の志があり、郡の安

養寺に投じた。のち比叡山に登りて得度し、諸方を回遊したが、大に感憤するところあり、仁安三年四月宋に渡り、明州に着し、更に天台山に登り、同年九月東歸し、また叡山に止まり、遂に一流を開いて葉上流といつたが、更に再び宋に渡り、禪宗の大德名宿を叩き、陸路印度に達せんとして果さず、依つて再び天台山に登り、天童山に移り、建久二年に歸朝し博多に聖福寺を開いた。蓋し我邦禪寺の最初である。臨濟禪は、さきに承安年中、叡山の覺阿、宋に航して傳へ來つたもの暫らく中絕して今榮西に依り一宗を確立するを得たものである。然るに叡山の僧法これを聞き、命じて新宗を停止せしめた。是に於いて榮西東西に流浪し、禪宗の新宗にあらざるを示し、鎌倉に下り源賴家に謁してその興隆を企てた。遂に幕府の歸依を受け、壽福寺に居り、ついで建仁寺を開き、建保三年六月五日、鎌倉に歿した。年七十五。書畫を共によくし、大に見るべきものがある。初めて茶を植えたのも榮西であるとされ、その喫茶往來は本邦茶道の基源とされる。

道元（希玄）　道元禪師は榮西禪師と共に、我が國最初の禪僧である。殊に曹洞宗は彼れに依つて我れに入つたものである。希元と號し、佛法房と稱した。越前永平寺の開祖である。京の久我通忠の子にして、幼より俊敏、世典師訓によらずしてよく大義に通ずることを得た。建曆三年叡山に登りて登壇具戒し、更に三井寺の公胤につき、その勸めに依つて建仁の明菴西に參じた。菴の遷化の

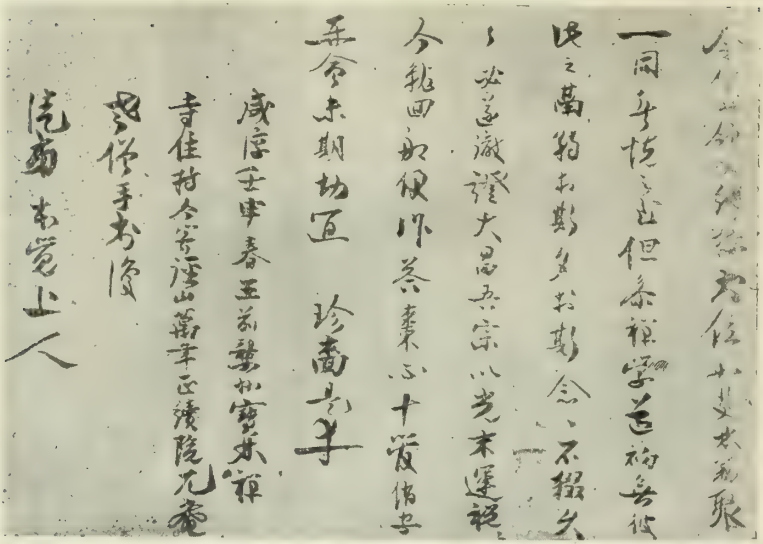
のち、明全禪師に依つた。乃ち貞應二年、歳二十四の時、禪師に從つて、宋に入り、明州の界に抵つた。それより徑を天童に取り、徑山に往き、再び天童に長翁淨和尙に參じ、印證を得て歸朝した。のち洛に上り建仁寺に寓止したが、深草に興聖寶林寺を營みてその第一世となり、更に越前永平寺の建つや開山始祖となつた。のち北條時頼の强請により、鎌倉に下り、諸人の爲めに法を說き、再び永平寺に歸つた。又後嵯峨天皇より紫衣を賜はり、再三辭して許されず、拜受したれども終生これを着用しなかつたといふ。建長五年八月廿八日、年五十四で歿した。勅諡して佛性傳來國師といふ。のちまた承陽大師と賜號せられた。

道隆（蘭溪）　道隆禪師、姓は冉氏、蘭溪と號した。宋國西蜀涪江の人であつて、年十三の時、大慈寺に入つて髮を薙り、のち遊學して浙に入り、範無準・冲癡絕・簡北磵等の諸大老に見えたが、皆契るところがなかつた。漸くにして陽山に無明性禪師に依つた。寬元四年日本に來り、始め都城に居り、轉じて相模に赴き、時頼の爲めに延かれて常樂寺に居り、時頼卽ち巨福山を開いて大禪苑を構へ、道隆を請じて開山說法せしめた。建長寺これである。居ること十三年、京都の建仁寺に移り、遂に上皇の爲めに宮中に召され一謁を奏した。再び建長寺に歸り、一時甲州壽福寺に止まつたが、弘安元年七年廿四日、建長寺に歿した。年六十六諡して大覺禪師といふ。時頼最も彼れを尊信し、常時



蘭溪道隆筆蹟

建長寺藏



兀庵普寧筆蹟　　酒井伯爵家藏

來禪して心志を練つたといふ。彼の書は謹嚴にして重厚、おのづからその人格に接するの感がある。今建長寺に眞蹟を藏して秘寶としてゐる。

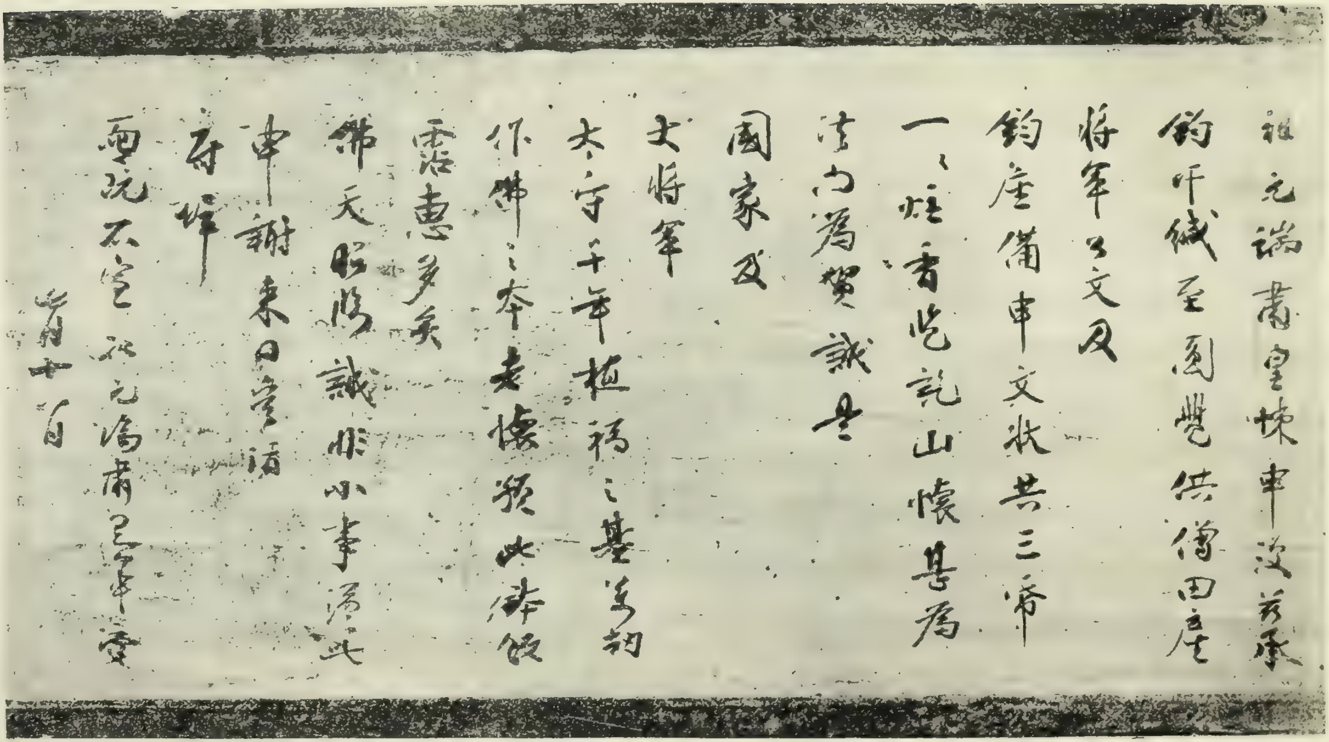
普寧（兀庵）

普寧禪師、號は兀庵宋國西蜀の僧である。幼年にして祝髮し、笈を唯識宗の講肆に負ひ、數歳を經て峽を出で南遊して諸老に遍歷し、建唐の蔣山に抵りて痴絕冲の上堂に遇ひ、その話說を聞いて忽然として本來の面目を認得した。常に遠遊を志とし、景定二年、遂に意を決して海に泛び、筑前の博多に達し、聖福寺に寓した實に我が文應元年である。ついで京都に至り、東福寺の聖一に迎へられ、客位につかせられ、是に於いて京都の緇法皆これを仰ぐに至つた。北條時賴、普寧の道價を聞き、迎へて巨福山に寓居せ

しめた。これより時賴の信仰日に厚く、漸く命じて函丈の位に居らしめた。禪規整齋にして號令愼密、皆な以て彼の法窟に進んだ。のち支那に歸り、江浙に漫遊し、晩に温州の江心竜翔寺に住し、至正十三年、病んで歿した。年壽については詳かにしない。

無學（祖元）　無學禪師、姓は許氏、名は祖元、鎌倉圓覺寺の開山にして、宋國慶元府に生れた。性沈重雄偉、十三にして父を喪ひ、乃ち志を勵まして杭州の南屛山に投じ、簡禪師を禮して髮を薙り、更に翌年徑山に佛鑑を拜した。鑑遷化の後、月石溪に雲隱に聞き、偃溪に玉口に謁し、のち飛來に寓した。台の眞如寺に居ること七歲、兵戈起りて寺刹を擾したので、温州の陛陽に往き、更に四明に轉じ、天童の第一座に居つた。弘安二年、鎌倉建長寺の席虛しきに及び、時宗の爲めに迎へられて來り、山に入つた。翌年冬、圓覺寺の成るや、祖元に命じて開山第一の祖たらしめた。開堂の日群鹿筵に臨んだので、これを吉兆として、瑞鹿山と名づけた。弘安九年九月三日、年六十一で圓覺に歿した。彼れ容貌俊麗にして顧眄法とる可く、平居衣を卸さず、しかもまた一被の上に僧袈黎を綴つた。蓋し夜分に供するのである。諡して佛光圓師といふ。彼の書名は頗る高きものがある。

子曇（西礀）　無學祖元禪師と殆ど同時に我が邦に渡來した人に、子曇禪師があつた。禪師は宋の臺州の人にして、幼より佛道に入り、偏ねく各地の禪林を經めぐりて、當代の宿老に參した



祖元端肅皇悚申沒旁承
鈞旨纖至圓覺供僧田産
將軍子文及
鈞座備申文狀共三幅
一一炷香見說山懷甚爲
清白爲賀誠是
國家及
大將軍
太守千年植福之基首初
作佛之本者懷殺此祥做(?)
靈惠多矣
佛天昭鑑誠非小事深此
申謝來日當詣
府拜
再說不宣　祖元端肅呈上覆
月十(?)日

無學祖元墨蹟　　圓覺寺藏

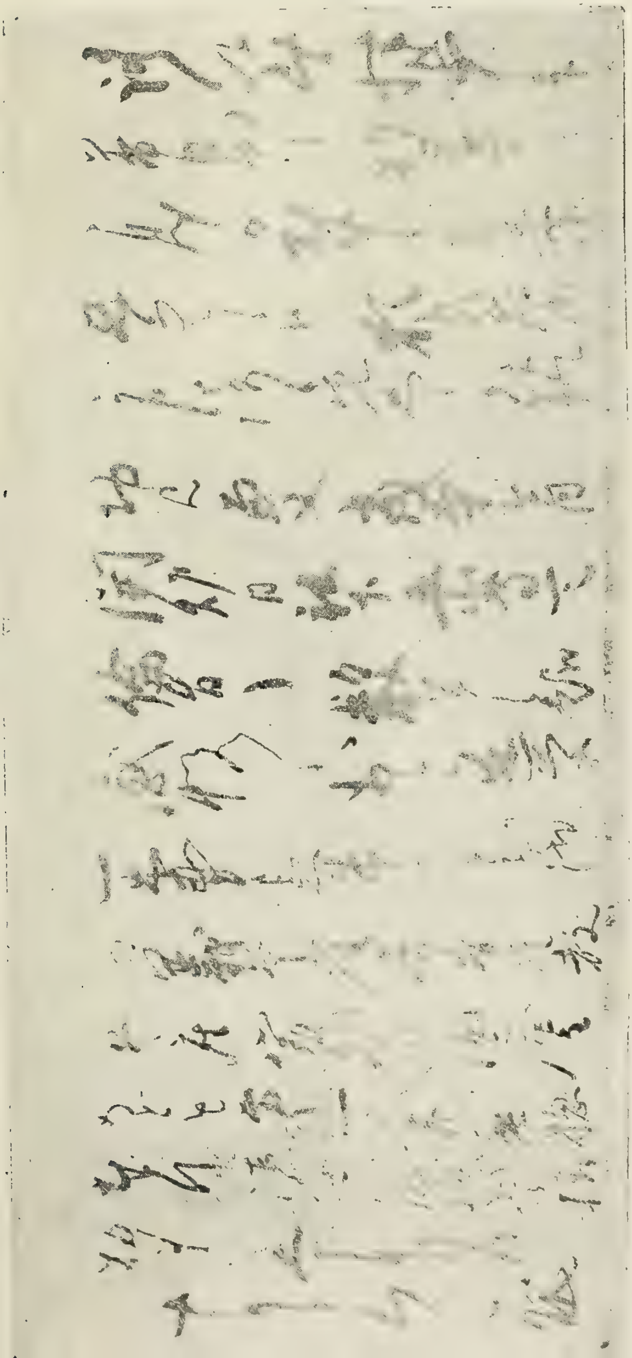
が、既にして我が邦に渡らんと志し、文永年間海を航して來つた。東福寺の辨圓、建長寺の道隆の如き、大に歡迎して彼れが爲めに敞軒を闢いて居らしめた。然るに故ありて數年の後ち本國に歸り、暫らくまた彼の土の各叢林を徧歴してゐた。たまたま、正安元年再び我れより招迎するものあり、卽ち鎌倉に來つた。彼の一寧一山も亦、彼れと舟を同じくしたのである。是に於いて北條貞時、弟子の禮を執つて圓覺寺に居らしめ、更に建長寺に入らしめた。德治元年十一月二十八日、此の土に歿した。大通禪師と謚せられたのである。彼れ書と畵とを共によくし、京都大德寺には虛堂を描いたのがあるといふ。書風は禪家の風致を帶びて、頗る見るに足る出來とされる。

一寧（一山）

無學祖元、西磵子曇の兩禪師と共に語るべきは、一山一寧禪師である。此人も元の生れで、子曇の再來した時に、共に日本へやつて來た。臺州胡氏の子だとあるから、共にゆかりの深かつた間だらう。併し彼の渡來については、次の如き傳說がある。元主忽必烈は、弘安四年の神風のことがあつて以後も、日本征服の野心が尙ほ止まなかつたので、一つの詭計を案出した。それは我國で丁度、盛に禪宗の弘まつた頃であつたから、元主は密かに一山に諭して、間諜として來らしめたのである。一山は德の高い人だから、これを甚だ快しとしなかつたけれど、もと、宋の人とて、元に快からざる點もあつたので、此れを機會として日本へ渡つた。そこで時の執權北條貞時は、この

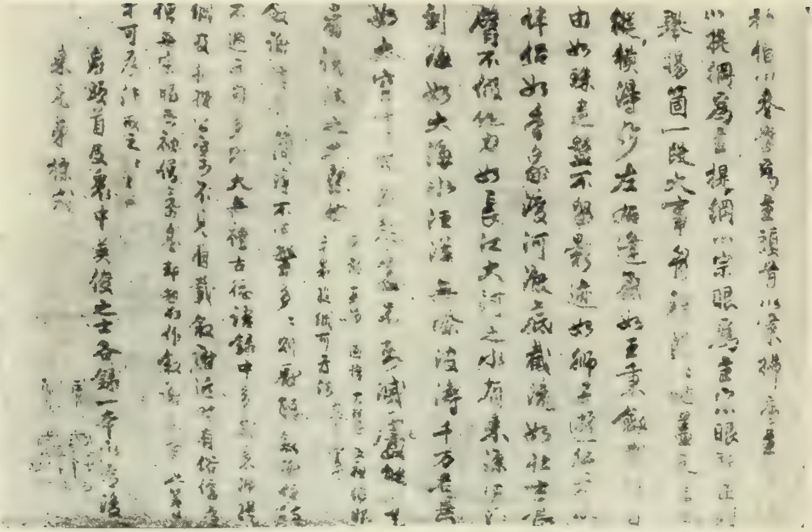
内情を知るや大に怒り、捕へて伊豆に流したけれども、或る人が一山の心事の高潔と、禪機の悟達とを説いたので、貞時は間もなく迎へ巨福山を董せしめた。それから圓覺、淨智二寺に移つた。後宇多天皇がその德望を聞き、召して京都に來らしめ、それから南禪寺に在つた。禪師は楷草共にこれをよくし、又その描いた畫も往々にして見るが、併し筆も畫も僞物が非常に多いと云はれる。その印は「弌山」又「宗相」等がある。文保元年十月二十五日、年七十一で歿した。

大燈（妙超）　妙超禪師、字は宗峰、俗姓は紀氏である。播州揖西の人にして、京都紫野大德寺の開山である。十一歳にして書寫山の戒信律師に師事し、落髮受具し、内外の典籍を涉獵したが、後去りて天下の諸禪師に歷參し、相模萬壽寺の高峯に謁して機語相契ふものがあつた。後大應國師に京都の韜



宋 無準師範 書状

大徳寺藏

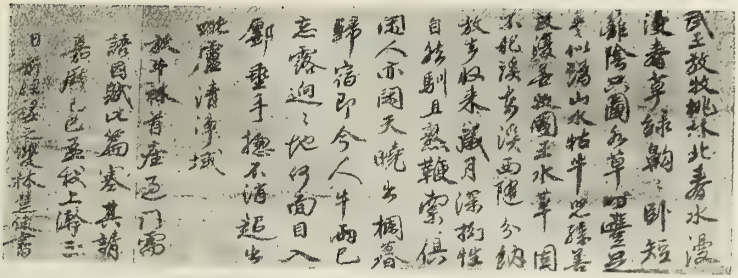


清拙清澄筆蹟　　酒井伯爵家藏

光菴に參じ、また隨つて相模の萬壽、建長に赴いた。ついで國師の衣法を承けて京都に歸り、洛東に隱居して精修長養すること約二十年、嘉曆元年に紫野に小菴を構へた。遂に嵩として大禪刹となり、龍寶山大德寺と稱した。花園上皇勅して宮に入らしめ、後醍醐天皇また召して清涼殿に於いて說法せしめられた。斯くて席班を南禪寺に並べ、且つ宸筆を染めて「本朝無双禪苑」といはれた。ついで筑前に赴き、崇福寺に住したが、一年にして大德に歸つた。延元二年十二月二十二日、年五十六で歿した。興禪大燈國師の號を賜はつたのである。國師の墨蹟も亦今に尊重せられる。

清拙と明極

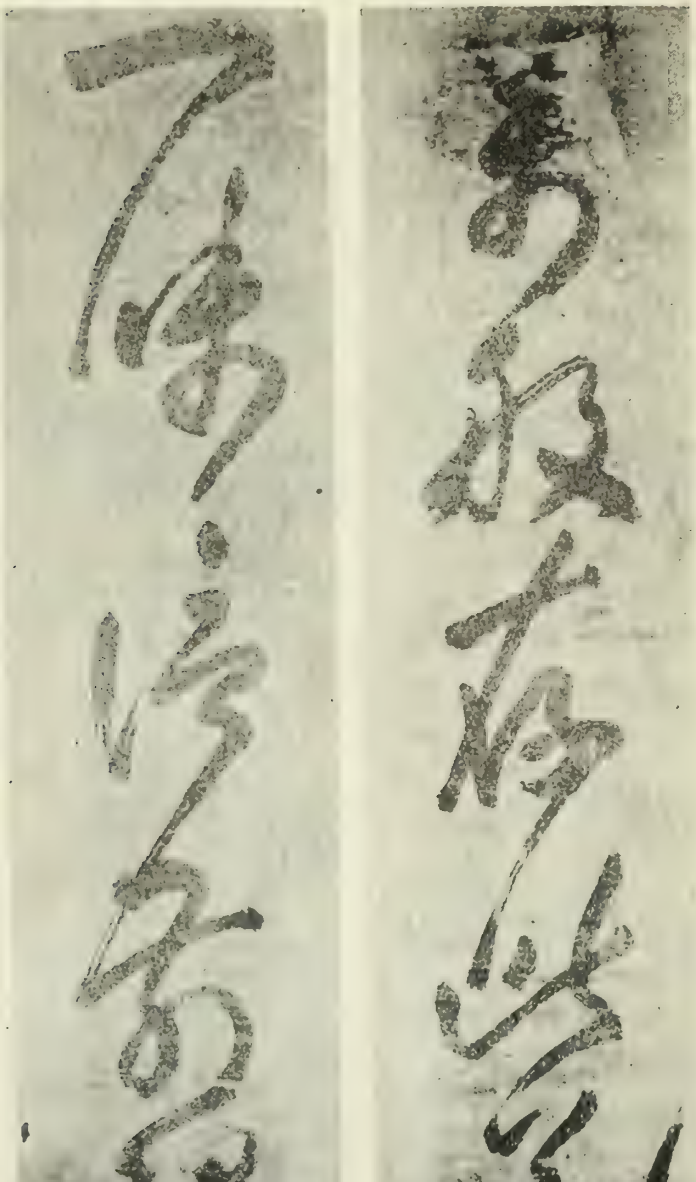
清拙禪師名は正澄。京都南禪寺の住である。愚極慧の法嗣にして元國福州の人、年十五にして州の報恩寺に入り、鼓山の平楚聳



明極楚俊筆蹟　　福井成功氏藏

に依り、また浙に入り、淨極に謁し、嘉暦三年、永興等と共に海に航して博多に來り、北條高時に迎へられて建長寺に入り、更に小笠原氏の爲めに信州開善寺の開山第一世となつた。元弘三年、後醍醐天皇詔して京都の建仁寺を董さしめ、更に南禪寺に陞せられた。曆德二年正月十七日六十六で歿した。大鑑禪師と諡した。明極禪師もまた南禪寺の僧である名は楚俊、字は明極、元の明州慶元府の人、十二歳にして竹窻喜禪師につきて剃髪し、虎巖の法を嗣いで瑞巖、普慈の二寺に遷つたが、我が元德二年清に應じて來朝した。時に歳三十九。後醍醐天皇法要を問ひ、特に佛日焰慧禪師の號を賜うた。のち攝津に廣嚴寺を開き、又北條高時の請に依つて建長寺に入り、更に南禪、建仁の兩寺に歴住し、延元元年九月二十七日、年七十五で廣巖寺に退き歿した。詩及び書畫に巧みにして特に墨畫に妙を得たといふ。

無窓（疎石）　疎石禪師號は夢窓。俗姓宇多源氏にして、建治元年伊勢に生れ、のち父に從つて甲斐に移り、空阿法師に師事し、また

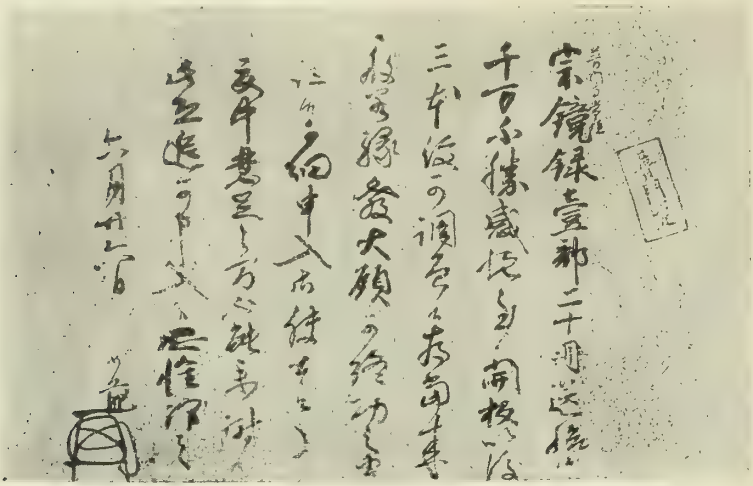


夢窓國師筆蹟

圓覺寺藏

南都に明眞を訪ひ、更に戒壇陀の慈觀律師に戒を受け、京都に入つて建仁寺無隱に師事し、翌年鎌倉に行き東勝、建長、圓覺を歷訊し、宋の一山の來るに及んでついて參究し、また下野那須の雲巖寺に至り、再び圓覺に來りて一山の下に止まつた。ついで高峯禪師を訪うて師事し遂にその法嗣となり、それより諸國を歷遊し、美濃に古谿菴を營んで居し、また京都に移り、土佐に轉じて汲江菴を營み、鎌倉に飛んで泊船菴を、上總に來つて退耕庵を營んで居た。のち勅旨を拜して南禪寺に住し、更に鎌倉に下つて南芳菴を營み、瑞泉寺を建て、再び南禪寺に住し、更に、西芳眞如に移りて、曆應三年尊氏の天龍寺を建てるにあたり、その開山となつた。勅に依り特に金襴紫衣を賜はつたが、その雲居菴に退き、觀應二年九月三十一日、年七十七で歿した。のち諡して夢窓國師の號を賜つた。

石　妙（春　屋）　妙葩禪師、字は春屋、自ら不輕子と號した。夢窓國師の族姓にして、甲斐に生れ、京都相國寺の開山となつた人である。七歲にして美濃虎溪山に夢窓に投じ、更に甲州に歸り、京に出で天龍に學窓に參じ、印可せられて等持院に住し、天龍、臨川二寺の事を領したが、更に細川勝之の創めたる光勝院に入り、また大光寺を經て天龍に轉じた。更に丹後の雲門に移り、南禪に住し、唐曆二年僧錄司となつた。蓋し此の職の始である。至德元年、足利義滿の相國寺を創するや、妙葩即ち夢窓を請じて開山始祖となし、自からこゝに居た。備後の天寧寺、伊豫の安國寺、羽後の崇禪寺の



春屋妙葩筆　書状　　東福寺藏

如き、皆妙葩の創するところである。嘉慶二年八月十二日、年七十八で、鹿王院に歿した。のち、智覺普明國師の謚を賜はつた。彼れと、後の大德の春屋宗園とは、素より別人であるから、混じてはならぬ。妙葩また書をよくして、一家の格を備へてゐる、

大德寺の高僧

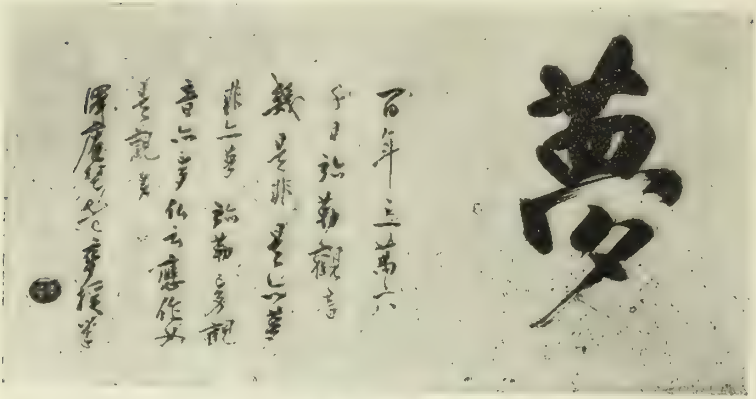
一休宗純

一休禪師は紫野大德寺四十七世の住僧にして、實にその中興の開祖である。名は宗純、初の名は周覺、一休はその字にして、狂雲子・夢閨・瞎驢・國景等の號がある。後小松天皇の蘖子である。幼より出家して大德寺華叟宗曇の弟子となり、佛道を修業して忽ち知識高德となつた。遂に華叟に嗣いで大德寺に往したのである。性磊落にして驕慢、しか[illegible]人これを畏敬すること佛に對する如くであつた。彼

れの禪的逸話の多きは、人の知るところである。また書畫をよくし、畫に於いては花鳥山水人物の如き、粗にして淸趣あるものが多い。殊に梅樹、岩及び蘭を巧みにした。書は氣骨あつて飄逸、しかも何等の奇巧を廻らさゞるところ、實に彼れの天眞爛漫を見るものにして、絶好の作と言はねばならぬ。また狂歌をよくし、一句直ちに禪機に徹する底の妙がある。文明十三年十一月二十一日、年八十八で歿した。

大林・天室・笑嶺　一休の後、約百年にして大林・天室・笑嶺の四高僧が、殆んど時を同じくして現はれた。大林、名は宗套、大德寺の九十世にして、佛印圓證禪師と諡された人、永祿十一年正月、年八十九で歿した。天室、名は宗竺、同じく九十九世の住である。永祿二年正月、六十三で歿した。東光證禪師とされた。笑嶺、名は宗訢、同じく百七世の住であつた。又喝雲叟と號した。天正十一年に大德で歿した。年七十九。祖心本光禪師と諡した。

古溪・春屋・玉室　慶長の大德には古溪と春屋とがあつて、當代禪林の二星と仰がれた、古溪、名は宗陳・蒲庵と號した。越前朝倉氏の子にして、大德百十七世の僧である。初め驢雪禪師に師事して出家し、のち出遊して足利學校に學び、ついで大德寺江顯禪師に謁した。門下春屋と同寮にありて參究怠りなく、宗陳書を讀めば春屋座禪し、春屋座禪すれば宗陳机に向ひ、毎夜三更、索を以て机を

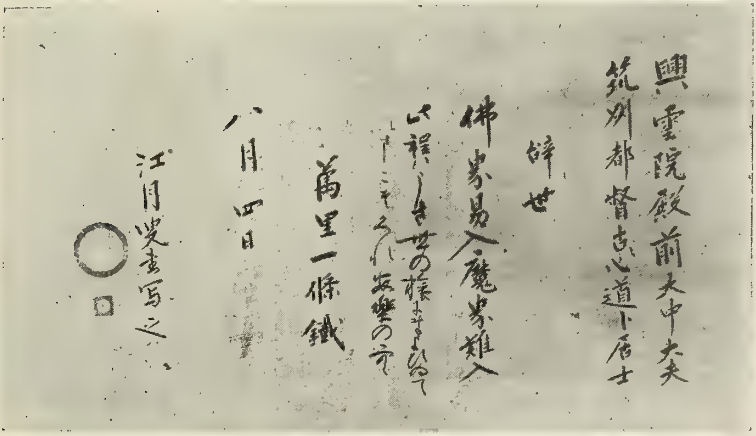


澤庵

壁上に掛け、兩人少眠し、鷄鳴には必ず起きて作務諷經するを例とした。遂に大德の住僧となり、晩年には市原の常盤菴に隱れた。慶長二年正月十七日、年六十六で歿した。死に先ちて大慈廣照禪師の號を賜つた。春屋、名は宗園、一然子、また自然子と號した。笑嶺宗訢の法嗣であれど、寺の代を追はなかつた。彼れ書と畫とを共によくし、殊に書に於いては一休以來と稱せられる。慶長十六年二月、年八十三で歿した。朗源天眞禪師の號を賜ひ、のち大寶田鑑國師の號を賜はつた。その風格は古溪に敢て劣らなかつた。玉室、名は宗珂・瞳眠子と號した。俗姓は岡部氏、春屋の法嗣にして大德寺百十七世の住である。寛永十八年五月、七十で歿した。直指心源禪師と諡した。

澤庵・江月・天祐・清巖

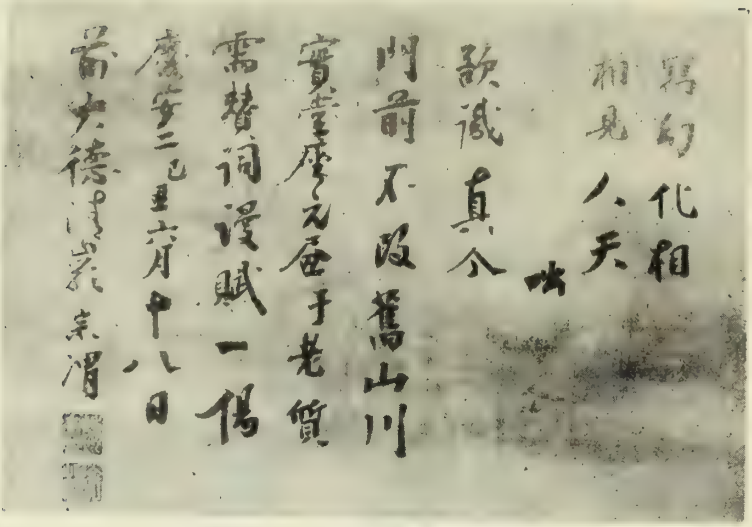
澤庵、名は宗彭、俗姓は三浦氏、天正元年但州に生れた。十歳にて出家し、法諱を秀喜といふ。のち宗彭に改めた。宗境に侍して大德寺にあり、その歿後推されて



江月

第一座に置り、禪席を嗣いだ。豐臣秀頼召したれど辭して到らず。天皇澤庵の風采を聞き、召さんとされたれどまた辭して參らぬ。越えて數年、上皇の召あるや仙宮に入りて衣談し、明年また命によりて江戸に抵り、品川に萬松山東海寺を建てゝ、彼れを第一世とした。正保二年、年七十三で歿した。彼れ書書を共によくし、かねて俳諧をも好んだ。その書蹟といふもの往々にして傳てゐる。

江月、名は宗玩・糟粕子・欠伸子・破笠子・瞎先子等の號がある。大德百五十六世の住にして、寬永廿年十一月、年七十で歿した。大梁興宗禪師の號を賜うた。彼れ書をよくし、高逸にして氣品ある筆致にすぐれてゐた。春屋・玉室に伍して敢て譲らない。天祐、名は紹果・青霞山人・夢伴子・寶夢叟等の號がある。入宋して異邦にあること十三年、歸朝して大德百六十九世の住となつた。



淸巖

寛永六年九月、八十一で歿した。佛海祖灯禪師といふ。淸巖、名は宗渭、俗姓は奥村氏・自笑氏・また孤陋子と號した。江州大石の人である。大德百七十世にして天祐の法嗣であるが、また台命に依りて品川東海寺に來りて住した。淸淨本然禪師の號を賜はつた。書畫をかねてよくし、殊に書は張卽之を虛堂禪師に學び、雄拔痛快なること却つこ師に過ぎてゐた。畫は佛祖及び雜圖があつて、これも屢々散見する。寛文二年十一月二十一日、年七十四で歿した。

一　安室・江雪・玉舟・翠岩

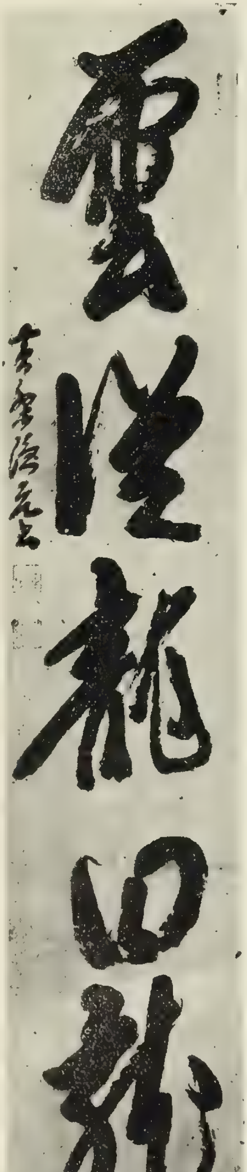
安室は大德百七十六世で、名は宗閑・伴狂子と號した。正保四年四月、年五十八で歿した。江雪、名は宗立、百八十一世にして、正保四年、五十八で歿した。玉舟、名は宗璠、山城の人にして春睡・善哉の號がある。書畫をよくした。

寛文八年十月、年六十九で歿した、大徹妙應禪師と謚した。翠岩、名は宗眠、百九十五世であつて、寛文四年、五十七で歿した。大心、名は宗統、のち義統と更めた。巨妙子・蓮華童子・東堂等の號がある。二百七十三世の住持である。最近には宙寶といふ人があつて、書をよくした。これは天保九年に七十九で歿してゐる。

黃檗の諸僧

隱元（隆琦）

同じく禪宗と云つても、黃檗宗は今に尙ほ他の敎派と面目を異にし、宇治の

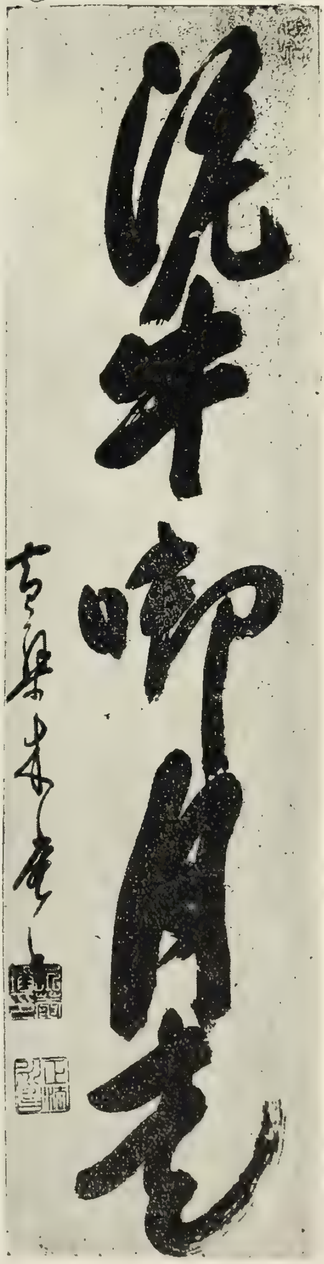


一廓に別天地を構へてゐる。而して不思議にも、黃檗歷代の諸僧には、能書の人が多かつた。殊に開山の隱元それにつぐ木庵・卽非は最もその妙と稱せられ、今に隱木卽を以て呼ばれるのである。隱元禪師は我が黃檗山萬福寺の開山にして、姓は林氏、名は隆琦、隱元はその字である。父は德龍、母は

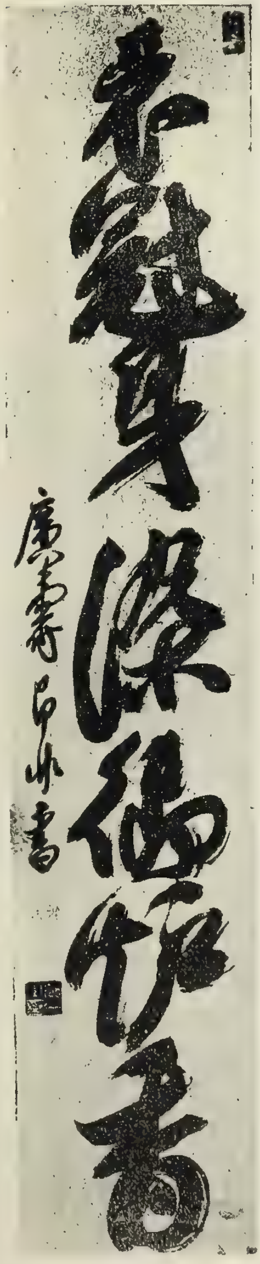
龔氏・隱元はその第三子にして、明の福建省福州福淸縣の人である。神宗の萬曆二十年十一月四日に生れた。承慶元年、將軍家綱の足利氏の故事に參じ禪刹一宇を剏建せんと欲し、道德優長の僧を支那に索め、長崎興福寺の住持逸然、命を受けてこれを支那徑山寺費隱の法嗣隱元に通じて、その渡來を請うた。隱元乃ち應諾し、三年七月歸化して山城宇治に萬福寺を創した。これ本邦黃檗の始めである。是に至つて後水尾上皇深くこれを信ぜられ、將軍家綱またこれを崇び、列侯群臣多く歸伏した。延寶元年四月三日、年八十で歿した。大光普照國師の號を賜はつた。その書風は師の費隱に似て紫野派に對して、優に黃檗派をなすものである。長崎興福寺、宇治萬福寺、音羽護國寺等にその書を藏してゐる。

木庵（性瑫）　隱元門下の秀才中、最も著はれるのは木庵・即非・獨立・獨湛・大鵬等である。中にも木・即は檗下の二甘露門と稱せられる。木庵、名は改琓、姓は吳、諱は性瑫・木庵はその字である。支那泉州晉江の人にして、十九の時出家し、のち隱元に從つた。その東渡ののち、承應四年、召に依りて來り、長崎福濟寺に居り、更に宇治に來つた。ついで黃檗第二世となり、將軍家綱より白金及び材木を賜はつて大雄寶殿を建てた。更に江戸に瑞聖寺を開基し、その第一祖となつた。此の寺の二世は鐵牛である。晩年紫雲院に退き、貞享元年正月二十日、年七十四で歿した。慧明國師の號を

賜つた。佛書を好み觀音を書きまた蘭竹ををよくした。書また甚だすぐれて、禪僧の面目躍如たるものがある。



即非（如一）



即非、名は一、即非はその號である。支那福淸縣の人にして、父は林氏、十八薙髮し、三十六歳にして隱和尚に從ひ、明曆三年我れに來つて長崎の崇福寺に居り、寛文三年黄

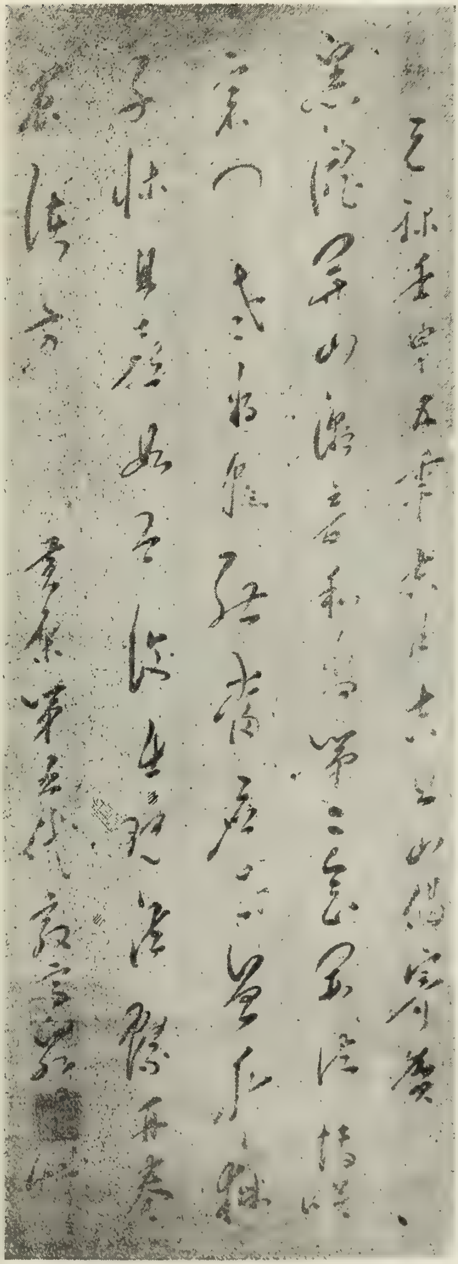
檗に轉じた。翌年秋、辭して支那に歸らんとし、豐前小倉を過ぎて藩主小笠原侯の爲めに特に福聚寺を開き、その第一世となつた。八年、長崎に轉じて崇福寺に退隱し、十一年五月二十日、年五十六で歿した。彼れもまた書に長じ、草々の裡、よく想化の妙を盡してゐる。また書の見るべきは言ふを待たない。

獨立（戴曼公） 隱木卽についで書に最も多くあるは獨立である。彼れ俗にあつては戴曼公といひ、僧となつては獨立といふ、その先は世々支那山陰の會稽に居り、晉の安道の後である。幼名は觀胤、字は子辰、また中頃には、名を鼎立、字を則之と改め、また名を笠、字を耘野とした。晩年僧となるに及びて、天外戴笠人と號した。また就菴・天外老人・獨立一閒人・偈芳等の諸號がある。また性易といふ。曼公はその一の號にして、世に戴曼公といふ。杭州の人にして、博學、殊に詩をよくした。長篇巨作、筆を下せば立どころに成つた。かねて篆隸に巧みである。書法、王履吉より出で丶筆法眞に迫るといはれる。又醫に通じ、尤も痘科に長じた。承應二年明の亡ぶや、亂を避け薙髮して隱元に隨ひ、長崎に來り、ついで萬福寺に移つて隱元の書記となつた。居ること凡そ七年、辭して長崎に歸り、文墨を以て自から娛しんだ。傍ら醫事を行ひ醫神と稱せられた。寛文十二年八月、隱元を宇治に省して途に病んで歿した。年七十七。彼の書法は門人北島雪山・高玄岱・池田正眞等に傳へ

られ、雪山は廣澤に傳へ、玄岱は男頤齋に傳へ、頤齋は澤田東江に傳へた。のち廣澤と東江と、書論に差異があれども、その執管五法、起筆三腕、撥鐙等の説は皆曼公から出でるところである。墨戯に墨竹をよくした。

獨湛と高泉

獨湛、名は性室、即非をついで黄檗四世となつた。支那福建莆田の人、姓は



高泉

陳氏、十六歳にして出家し、二十七歳隱元に従つて渡東し、天和二年に山主となり、のち獅子林に退

いて居た。寶永三年正月二十五日、年七十九で歿した。高泉、俗姓は林氏、名は性潡、字は高泉、雪外と號し、一に曇華道人と云ふ。福洲福淸縣の人である。十三出家して福建の黃檗山に登り、隱元に伴はれて宇治に來り、十二年加賀の松雲公に召されて献珠寺にあり、隱元の寂後、一度黃檗に歸つたが、再び加賀に去つた。また山城に佛國寺を開きて住し更に第五世の山主として黃檗に入つた。元祿八年十月十六日、六十三で歿した。實に黃檗中興の祖である。蘭及び道釋人物をよくするの外、書風また稍檗派を脫して更に高逸の趣を加へ、頗る見るべきである。

其他の檗僧

その他、黃檗第六世は性按、字は千獃、一に千呆といひ、曇瑞と號した。明の福州府長樂縣の人、俗姓を陳氏といふ。十七出家し、卽非に師事してその法嗣となり、長崎崇福寺に居り、また黃檗に住した。寶永二年二月朔日、年七十で歿した。その法嗣靈元、名は海昶、俗姓許氏、元祿元年長崎に來り、千呆の法嗣とし黃檗の山主となつた。享保二年五月十八日、年六十七で歿した。その外、長崎に道木ありて、靈源の門下となり、竺庵、名は淨印、陳氏にして、黃檗十三世となりしもの、大鵬、名は正鯤、號は笑翁、支那泉洲菅江の人、第十八世である。竺庵は寶曆六年七月六日、年六十一で寂し、大鵬は安永三年十月十三日、年八十四で寂した。鐵牛、名は道機、自牧子と號し、石州の人である。隱元會での一才にして、元祿の高僧である元祿十三年、七十二で歿した。

書道及書蹟　終

書道實驗談

犬養木堂

上編　書道の概略

支那最初の文字

支那文字の起源　書の今日の流派を大別すれば二つになる。卽ち帖學と碑學とこれである。斯く碑學、帖學に大別した元を云ふと、大要の歷史を語る必要がある。先づ、これは餘談の事ではあるが、後で御話をする必要上、一言申して置くのであるが――支那の字は何時出來たかと云ふと、古い話では黃帝の時に拵へたと云ふが、黃帝より前、伏羲の時に『書契を造つて以て結繩の政に代ふ』とある。その時代からあつたもので、蒼頡が文字を拵へたのではない。蒼頡は昔あつたものに依つて大成したのであると云ふのが、學者の論である。

篆書の多様 夫れで、篆書でも書家の方で幾つにも分つて居る。既にさう分れた内には、鳥のやうなもの、蟲のやうなもの、種々に分つて居るが、周の末から漸々篆書が四角張つて來て、漢に入りて四角張つた隷書になつたが、小篆は無論、秦で出來たものである。西漢の時代の隷書の石に遺つて居るものは、五鳳の刻十一字、泰山の上に遺つて居るのが秦篆二十九字、(今は僅に十字)これは李斯の篆書である。西漢時分の隷書を見ると、圓がゝつて居る。まだ後世の隷書見たやうに四角張つて居らぬ。夫れから段々後漢になつて、四角の字體となつた。是は、後で運筆の話に入るの必要上言ふのである。先づさういふ工合である。

史籀の石鼓 秦篆より古いものは、北京の文廟に保存せらるゝ石鼓である。是は周宣王の時の史籀の書と稱する者で、歴朝の國寶となつて居る。併し國寶であるから、庫中に秘藏せられてあると思ふと案外で、文廟の門廡に置かれて、拓本を觀覽人に賣つて居るから、如何にも安つぽく見え是が有名の石鼓であるかと驚いた事がある。

唐代の文字と雅俗

隋以前の文字の亂脈 夫れから、漢の末、三國時分には、愈々楷書の四角張つたものが行はれて、

是は隨分上手なものが出て居る。夫れから後、唐代に至る迄の間は、書家も澤山あつたが、未だ統一されて居ない、各朝廷が割據して居るやうに、字もさういふもので、甚だ不規則なものである。一つの碑の中で、楷書もあれば、隷書もあり、篆書も入つて居る。實に亂脈極まつたもので、唐に至つて統一する迄の間は、そんなものである。一碑中に諸體の字を雜用したものは、隋の開皇十三年に建てられた曹子建碑の如き、其の最も著明なものである、然しながら、隋以前の書が悉くさうであつたといふのではない。たゞ、魏晉以後唐以前は、南北に論なく、僞字異字が多くして、唐に至つて字畫を一定したのである。

唐に至つて字體の統一

斯樣な次第で隋以前は不規則で亂脈な有樣であつたのを、唐に至つて始めて字が統一されて、一種の字が出來たのである。唐に至つて立派な字が何うして出來たかといふと、科擧、卽ち試驗のお蔭である。試驗の正科には、字を入れて居ないのであるが、併しながら字が一の法則に入つた、その法則――鑄型に入つたものでないと試驗の點が少ない。それで、皆が字を學んだのである。唐に至つて初めて、今日の楷書の統一されたものが出來た。是は政治上のお蔭で統一されたのである、政府で一定した書が出來たのである。

肉太の館閣體

從つてまた唐から俗な書が出來た。唐の初は統一されても、褚遂良、歐陽詢

虞世南の如き、氣品の高い書で、後世のぼた〳〵した肉太の字ではなかつた。所が玄宗が餘程こつてりした字が好きで、肉太の字が行はれた。そこで徐浩の如き書家が出て、非常に太い字を書いた。それで世人が玄宗に媚びるために、一般の字がずつと肉太になつた。是が俗體の字で、此俗體の字を稱して館閣體と云ふのである。卽ち御用文字である。是は今日まで續いて、支那人普通の書になつてゐる。それで館閣體に一定させたのは、徐浩も有力な一人であるが更に有名なのは顏魯公である。(因に肉太の字は甚だ卑俗なもので、歐陽永叔は『厚皮饅頭』と稱して卑しみ、蘇東坡も亦饅頭樣の書と呼んで非常に卑しんだのである。支那の看板の奇麗なものの如きが是れである。)

顏魯公の楷書は俗體

日本では、顏魯公の多寶塔は大層賞められたが、書家の談によると、顏魯公の多寶塔の楷書は俗字だと云つて居る。顏魯公の行書は、古來珍重せられ、何人にも異論がないが、この楷書は卑俗である。恰かも王羲之の楷行は立派であるが、草書は卑俗であると云ふことは、支那の大家の意見であるのと同じことである。尤も、顏魯公の楷書が卑俗だと言ふのは、多寶塔、干祿字書等を指すので、同じ楷書でも、東方策畫贊などは、千古の傑作である。それで兎に角、顏魯公に至つてちやんと極まつて、米庵などの書きさうな四角張つたものが始めて出來た。是が因襲されて、段々一の俗體の——素人が見ると綺麗な楷書が流行り出した。ところが宋代になつて一變した。

書の南北及び雅俗　玆に書道の南北について一言して置かう。淸の阮元は、書派の南北を論じて歐陽詢、褚遂良を以て北派に屬するものとする。然れども、明の解縉は、虞歐諸等は皆智永より法を傳へたと稱してゐる。而して智永は南派である。畢竟するに、南と云ひ北と云ふも各自己れが見を以て傅會を爲すもので、其の說の當否は學者の神以てこれ明かにするの外はないのである。但し書體雅俗の辨なるものは、其の派の南北に由つて分れるのでもなければ、其の體の肥瘦正顏のみを以て判ずべきものでもない。要するに古を食ひて能く化し、自然の天機を發揮したると否とに由つて存するのである、故に工にして整つたものだからとて、必ずしも之を俗とのみ言ふことが出來ない。苟くも、姿態の媚なるを主とし、容風の悅ばしきを旨とする外、自然渾成の妙趣のないものは、取るに足らないのみである。（此一項長尾雨山氏補評）

宋の書家と書風

宋代の遡古的氣風　宋にはなか〳〵豪傑が出て、唐代にやつた行り方を一變した。啻に唐代ばかりでなく、六朝に遡りもう一つ遡つて漢以上に遡らうと云ふ氣風を起した。それであるから蘇東坡、蔡君謨、黃山谷、米元章、みな孰れも特徵を有つてゐるのである。孰れも唐人の眞似のみをして居ら

ぬ、自家を貫穿して別に機軸を出して居る。たゞ、上述四大家の中で、多少俗體を因襲して居るものは蔡君謨一人である。その他、蘇東坡も行書は覇氣があつて卑俗であるが、楷書となると誠に立派なものである。

蘇東坡と黄山谷　南京から少し離れた焦山と云ふ處に、今も碑がある。是が梁の陶弘景の書いた有名な瘞鶴銘(楷書)で、なか〳〵面白いものである。東坡や山谷の楷書は是から出て居る。玆に遡つて、まだ足りないで、ずつと古い北の方の碑に遡つた。古い碑を咀嚼して、之を近體に消化した。蘇東坡、黄山谷などがそれである。夫れで黄山谷の字を見ると、蘇東坡より書は下手と見えるが一種の氣韻がある字を書いた。近體の字を書くに篆書の筆の使ひ方を用ゐたのである。

宋人書風の二様　玆に注意すべき事は、各朝の書風は、各朝の學風に從つて變化して居るのである。唐代の學問は何んな事をやつたかと云ふと、漢の人が註釋を加へたのを、唐が更に精密に註釋を加へた。註釋の時代であつた。字も昔のものを集めて統一したに過ぎない。夫れだから學問から云つても、書風から云つても、前代の眞似をしたのである。宋に至つては然うでなく、一つの新しき考を出した。經學では漢以來の註釋に滿足せず、直ちに本源に遡りて、古人の道は何處に在るかと研究し、單刀直入の道學が出來た。書法も亦同様で、唐人で滿足しない、更に古代に遡つて、古代の書を

見てそれを近體に書き直した。宋はそれである。だから餘程面白い字が出來て居る。試驗はそれではいけない。試驗はどうしても。歐陽詢なり、褚遂良なり、唐人の四角張つたものを書いて行かぬと點數に關係するから、矢張りやつて行くが、試驗に合格し、役人となつてから、初めて面白い字を書いて行く、飛び離れた字を試驗時代に書いたら、忽ち落第するから、それは出來ない。

瘞鶴銘の筆者　茲に附言して置くが、右述べた瘞鶴銘の筆者は不明である。古來色々の說がある、陶弘景だといひ、顧況だといひ、王羲之だといひ、或は王瓚だとか、皮日體だとか、種々の說があるが、專門大家の考證では、陶弘景だと云ふが多數である、次に黄山谷の書が、瘞鶴銘から出て居ることは尤も明瞭であるが、また蘇東坡の羅池廟碑を見ると、彼も瘞鶴銘を學んだ事が歷々と分かるのである。

元の書と趙子昂　それで、宋以後は元である。（長尾雨山氏補足――元人の書も亦一種の妙味がないではない。例へば趙子昂の如き、その技倆は殆ど前代を凌駕すると稱せられてゐるのである。但しその工整に過ぎて媚態の多きを以てこれを俗書とすべきであらうか。孰れにせよ、趙子昂の如きは明清に亘りてその影響を受けたものが多いから、その書學界に於ける勢力は看過することが出來ない。）次に明に至ると、此の明人がまた字は、隨分上手なのが出たが、著しい變化はない。唐宋の書を

凡べて眞似する時代で、明一代はそれで過ぎたのである。それだから明人に偉い書家は出て居らぬ。巧みなる書家のみである。

清の書道と篆字の研究

清代の考證的傾向　夫れから、清朝では外に取柄はないが、學問でも書法でも、古代に遡源して考證の精確なるは、前代には絶えて無いことである。斯様に考古的であるから、清人は、明人の書は無論輕蔑し、宋でも滿足しない。唐でも滿足しない。極く古いところを調べて字を書き出したといふことは、始めて清朝に出來た。是れも他の學問との釣合でさうなつた。といふのは、清朝は政略の上から政府が學者を集めた。學者を集めて矢鱈に物を調べさせた。例へば古今圖書集成などは、四十年も掛つて全國の學者を集めて拵へさせた。學者を集めて物を調べさせたから、經書の中の間違ひなどを發見した。

道學根本の打破　清朝に於て其の方の發見はどんなことをやつたかと云ふと、一例を擧ぐれば例の書經に、『人心惟危。道心惟微。維精維一。允執厥中。』とあるが、是れが一番儒學のやかましい所である。これを調べ出した。是れは凡て今文尚書になくて、孔子の故宅から堀出したと云へる古

文尙書にあるので、此十六字は後からくつ附けたので僞作だと唱へ、之を以て道學の根本を叩き潰した。是れは前代にもその說はあつたが、淸朝に至つて初めて叩き潰したのである。

篆隸の復古的研究　さういふ工合に、學問にしろ、古いもの古いものと、考證的になつて行つた。從つて字もさうなつた。乾隆以來矢鱈に調べた。其の調べた結果、淸朝に至つて篆隸が始めて秦漢の面目を見る樣になつた。從前には篆書を如何にして書いたかといふと、日本でも眞似たが、筆の尖を燒いて禿筆にして書いたものである。明人の書いた篆書は、唐草の模樣の如く、圓く頭もなく尾もなく、現今車夫の法被に圓い篆文などがある。丁度あんな形の篆書で、我邦でも篆と云へば、車夫の背中にある丸い紋のやうなものと思つたのである。日本の是迄の篆書もそれでやつて居つた。

本朝所傳の嶧山碑帖　我邦では、嶧山碑を秦の李斯が書いたものだと云つて、これを篆書の本尊としたのであるが、幾度も覆刻を經て、精神の消滅した圓形の紋樣の字を書いて居つたのである。嶧山碑は本統の碑が倒れて、後から出來たもので、本統のものはあんな車夫の背中の丸い紋のやうなものではない。例の泰山の秦篆を見ると、車夫の背中に在る丸い紋見たやうなものではない。ちやんと筆路が分かつて、精神がある。

淸朝と書法大成の功　篆書は何う云ふ筆で書いたかと云ふと、短い筆で書いたものでないらしい。

何うしても然うとは思はれない、長い筆で書いたものである。長毫といつて、日下部翁が使ふやうな長いものである。これをやり出したのは乾隆頃が初めである。『皇清經解』を編纂した阮元が端緒を開いたが、その時分は大抵の古碑を探して、嘉慶年間になつて彼の有名な鄧完白が出て、復古の書法が大成したのである。要するに、書道の明かになつたのは、清朝人のお蔭である。他の事は清朝人はあまり効能がないが、總て古い所へ遡つたのは、清朝人のお蔭で、そこで大層帖學碑學がやかましくなつた次第である。

法帖か古碑か

有名な法帖の種類

最初に語つたさて、如く、書學は法帖の學問、古碑の學問、斯う二つに分れたのである。法帖の學問と云ふものは、何を本元としてやるかといふと、御承知の通り、宋の太宗の淳化年中に出來た『淳化法帖』である。それから、その子も出來れば、その孫も出來て大觀年中に出來たのは『大清樓帖』、淳熙年中に出來たのが『淳熙續閣帖』、その他種々雜多なものが出來た。澤山のものであるが、一番の本家本元は何であるかといふと、淳化年中に拵へた『淳化閣帖』である。これに依つて字を習つて行くといふのが、所謂帖學の書である。

所が、一方には『書はそんなものでない。法帖など段々翻刻に翻刻を經て居る御化見たやうなもので、そんなものは可かぬ』と云つて、直ぐ古い碑に遡る。その碑に就て學んだのが碑學といふことになる。卽ち帖學と碑學との二つに別れて居るのであるが、是も御承知の通り、やはり試驗前に碑學など習つて出鱈目にやつて行くと、矢鱈に平つたい字や歪んだ字などを書いて、試驗の點が惡くなるから、是れは出來ない。そこで試驗を受けて、擧人に及第し、進士に及第しても、どうも矢張り館閣の俗體を書いた癖は容易に脫け切れぬ。それできちんと鑄型に嵌つてゐるのである

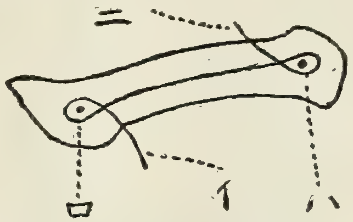
古碑研究の疾痼

支那人の習字法

『かこじ』の稽古法

次に支那人の習字法といふものを語らう。それは何かといふに、支那人は字を敎へる工夫をした。それは何うするかと云ふと、例へば『一』の字を書くには『一』の雙鈎字を拵へてある。すると、これに點を施して、玆に圓を書いてある。是は何うやるかと云ふと雙鈎字に取つて、雙鈎があるから、子供がそれを塗る時、此の塗つて行く筆を圖中『イ』の方から持つて行つて『ロ』のところに力を入れて、更に『ハ』の所で押へて、『ニ』の處の方へ遁げさせる。更に斯樣に一々線が描いてあつて、力を入れる處、力を拔く處が示してある。是れは筆蹟で、『此處を押へて斯らやるの

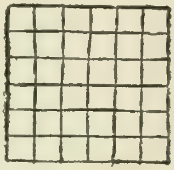
である』と、斯ういへば分かる。夫れで點はこつちから持つて來て、此處でもつて斯う拔くので、斯う云ふ線が出來てあるから、その通りに拔く、夫れから刎る處がある。是れも圓が付いて居つて、此處に圓が一つあつて、もう一つ此處に圓がある。それを此方へ打ち込んで、此處で力を入れ、これを小頓挫をやつて上の『ニ』の方へ斯うやると線が施してある。それだから、子供が字を稽古するには、その中へ繪取ればよろしいのである。



一歩進んで九宮

此の通り執筆法を先にやつて、それから此處は、四角を崩したものが雙鈎字になつてゐる。其雙鈎字を塗りさへすればよろしい。その次には何うするかと云ふと、師匠の書いた大きな文字に油紙を被うて、その上を塗つて行く。前には雙鈎で一畫一畫と、筆の運び方を覺えて、此度は組立つたものを敎へる。それで段々上手になると、此度は例の九宮といふやり方で敎へるのである。是れは、碁盤のやうに目を切つたものであつて、是れが六つづゝ、六六三十六に格を切つて、さうして三十六に切つたものを六格づゝに書く。平たい字を書く時は、上下の格子を空地にする。上下の一格を空地にすると短い字が出來る。縦に長い字を書く時は、左右の格子を一格づゝ空地にして書く。さうすると長い字が出來るのである。又上の點は何番目の格子に打つ、後の點は何番目の格子に

打つ、此處は斯う刎ねると云ふ風にして、三十六に割つた中で、楷書を組立てるのである。又點は何處へ打つ、後は何處に入れて何うすると、機械的に出來るやうになつて居る。大略、此の方法で俗體の楷書を敎へる。夫れだから、日本のよりも習ひ易いのである。早くちやんと飯食ひ種子が出來るやうになつてゐる。なか／＼敎へ方も上手である。だから、館閣體の字は支那は上手だ。これは支那人の飯食ひ種子だから、何より第一に習ふのである。



正格から破格へ

役人になつて出鱈目

それで、進士を及第してお役人になると、最早や試驗の心配がないから、出鱈目の字を書いてもよい。そこで出鱈目時代となる。卽ち館閣體の習氣が厭になつて、此の法則を脫出しやうとするが、多年沁み込んだ拘束から何うしても出られない。それを出やう出やうとして、古碑に遡り、法帖の善いものに就いて習ふ。吾々日本人は、生れながらにして出鱈目を書くのであるが、彼等は役人になると始めて出鱈目になる。なかなか稽古して出鱈目になる。

文廷式の感心した話

嘗て文廷式といふ有名な學者が來遊したが、此の人は館閣體の法度を脫出したと云ふ自慢だ。さうして日本へ來て日本人と筆談して見ると、日本人は法度以外に出た面白い字を

書くので、ひどく敬服した。それは其の筈で、自分は法度外に出やうとして非常に工夫したが、日本人はそんな工夫をするに及ばぬ。日本人は初めから法度に拘つて居らぬ。支那人は法度を習つて飯の食ひ種子にして、子供の時から九宮で攻めて居るから、なか〳〵法度を出られない。さういふ工合で法度を出た者は大概碑學に走るのが多いのである。

支那人習字の順序　因に、支那人の習字の順序は、趙子昂又は董其昌を學んで根柢を造り、それから唐人に遡るのである。雅俗の論は姑く置き、趙子昂は二王（王羲之とその子献）を繼いだ正しい書であるから、先づ之を習ふのがよろしい。自分は人から何を習つたらよいかと尋ねらるゝ時は、必ず趙子昂の楷書を習へと答へる。（長尾雨山氏補、趙子昂の書は楷行多く世に行はれ、草書は出ない。近頃は陶閣帖（斐伯謙の家刻）に收める所の草書千字文を觀るに、その精妙なること、楷行の上に出でるが如くに見える。）

日本に碌な法帖なし

本物の法帖と惡法帖　碑學と帖學とを比較すると、孰れも一長一短であるが、その歸着點は同一である。『淳化法帖』の本統のものに依つて稽古した者には、随分名人が出來たが、その飜刻に飜刻を重

ねた粗惡の法帖では、文字の眞面目は分らぬ。支那では法帖が日本の教科書のやうに賣れるから、本物と大變異つたものが出來て居る。殊に日本には昔から何の法帖でも支那人の珍重して居るやうなものは來て居らぬ。尤とも、近來は來るやうになつたが、是れ迄は皆な粗惡な、間違つたものに就いて稽古したのである。それで三十年も四十年も日本の書家は刻苦して、とう／＼間違つた法帖を習つて來たのであつた。

一帖十萬餘兩の價

日本に本統の法帖が來ないと云ふ理由は、法帖の正しいものは隨分値段が高い。近年、支那の某藏書家が持つて來た『淳化法帖』の子に當る『大觀帖』の缺本が十萬兩餘程の金がないと買はれないと。いふことであつた。それ故以前の長崎から輸入して居た時代には良いのは來ない。出鱈目の法帖を持つて來て賣り附けられて居たのである。それを眞似てやつたのが、日本人の是れ迄の字である。支那との交際が頻繁にならぬ中はさういふので、法帖の正しい立派なものを得やうとは困難であつた。

間違つた碑文研究

間違つたものを稽古するから、帖學は役に立たぬと斯う非難する。さうすると、帖學者から云ふと碑學でも當てにならぬ。人の名を出すと惡いかも知れぬが、今の所謂六朝を書くと云ふ人は、何う云ふものを書くか、ごり／＼蟲の喰つたやうな字を書く。成る程、碑を見ると蟲

の喰つたやうな所がある。併し初めから然うでない、初め彫つた時はそんな馬鹿なもので無かつたが何千年風雨に曝されて、石に彫つた書が蟲の喰つたもの丶やうになつた。その風雨に曝された、蟲の喰つたやうな所を眞似るのである。第一、碑は鑿で彫つたのであるから、毛で書いたやうな譯に行かぬ。其の不完全な石工が鑿で彫つたものを眞似する。風雨に曝されて缺けた所、石工の鑿の不完全な所まで眞似をする。是れも厄介なものである。碑學にも斯う云ふ非難は出來る。所が何うかして碑の正しいのを堀出せば、地中に長く埋まつて居ても、ちやんと其の面目を見られる。碑の方が昔の書體を見るには、比較的確かである。斯ういふ風に、帖學と碑學とが爭つてゐる。

奇怪な書風

清人は楷行が得意

朝廷の御役人で、字を書く商賣でない人は出鱈目の字を書く。出鱈目の字でも非常に古いものを書く。篆隷は清朝に至つて進んで來た。從つて長毫を遣ふから、ひよろ〳〵になる。そのひよろ〳〵手を遣ふところより、行草は清朝にもあるが、清朝になつて行草の觀るべきものはない。碑學派には行草の上手な人が少ないその代りに近體を書く人には、行書の上手な人がある。そこで隨分清朝になつてをかしい字を書いたのは、道光頃の翰林に居つた何紹基といふ、湖南の人で

ある。此の人の書く字は、長毫のひよろ〳〵した筆で、楷書でも行書でも草書でも書く。斯んな風で清朝に至つて妙な字を書き出した。尤とも、書道から言へば、進んだことは進んで居るに違ひない。（長尾氏補、清朝人は楷行を善くするものは多いけれども、草書をよくするものは甚だ少い。相應の書家にして、草書を書くことの出來ないのみならず、これを讀むことさへも出來ないものが少なくない。）

筆法は何うでもよい　それで、吾々の出鱈目派の字を書く方から云ふと、執筆法であらうが、九宮法であらうが、そんなことは頓着しない。何でも筆は握つても宜しければ、摑んでもよい。都合のよいやうにするがよい。古來の執筆法で見ると、凡そ人間の手で握れるだけの法がある。さうすると詰り、法は有つて無いやうなものである。人間の手で握れるだけのものは、皆法になつて居る。中には奇怪な手品遣ひ見たやうな行り方もあつて、素人には出來ない。子供の時からやれば格別であるが、尋常の者には出來ない藝なのである。書家と銘打つたものは、さういふ手品遣ひ見たやうな遣り方を、これが王羲之の手法だと主張して居る。手が折れなければ出來ない藝までやるのもある。只、子供の時から遣れば出來る。さういふやうに種々雜多の行り方がある

楊守敬と圓腕法　長尾氏補說に曰く　茲に云ふ奇怪の手品遣ひとは、蓋し圓腕法を主とするも

のを指して云ふのであらう。此の法は、支那にて少數の一派に行はれるものであれど、多數に普通行はれる方法では固よりないのである。しかも斯かる圓腕流は、嘗て楊守敬等の言に惑はされてこれを盲信するものである。楊守敬は、晩年、已に悔ひて大字の外は、圓腕法を用ひてゐないが、兎に角斯る『手品遣ひ』は、是れ亦た學問識力の足らないから來るのである。

法帖に就ての注意

坊間の法帖は當てにならず

尙ほ法帖について一言せんに、坊間に在る法帖ほど當てにならぬものはない。嘗て、『宋四大家法帖』を見たとき、米芾の書に相違なきものに、『元豐何年、黄庭堅書』と欵識がある。それから、別の『四大家法帖』を見ると、それには『米芾書』とある。これは米芾の二字が剝落して居つたから、飜刻書林が黄庭堅の三字を塡め込んだのである、大抵、斯様に亂暴なるものである。又『絳帖』に王獻之の書として、『桓山之銘獻之』の六大字がある。是れには、出版人たる潘師且の題跋があつて、洛陽の地中から斷碑を堀出したが、獻之の名までが存して居るのは、神明の加護であらうと功能書が添うてあるが、安んぞ知らん、是れは唐玄宗の字で、金碑がある。その中より六字を拔き取つたもので、一見して晋代の字でない事は分かるのである。是れは一二の例を擧げる

ので、普通の法帖と云ふものは、先づこんな當てにならぬものである。

近來出來た寫眞版　帖學の本尊たる『淳化閣帖』でも、精確でないことは、米元章を始め、諸大家の説にても分る。王羲之の草書の中には、後世の摸造が澤山あつて、摹造者の名まで指してある。坊間普通の法帖では、古人の筆法は精細には分るものでない。是れは飜刻に飜刻を重ねて、いつか本來の面目を失つてゐるのである。然るに、現今は寫眞版が出來て、上海でも日本でも天下に一あつて二なき名帖を寫眞に撮つて、何千圓の原本と全く同一のものが數圓を投じて得られる樣になつたから書道の上には、甚だ便利である。米庵や菱湖が、現代に生きて居つたら、あれ程の苦心をせずとも、偉いものになつたであらうに。

書學の三要訣

懸腕直筆か鳩の眼か　それで執筆法などは當てになつたものでない。日本でも書博士家の書に唐人直傳で、あの時代のハイカラが習つて來たものである。しかし習つて來たがあれにもまた澤山流派がある。例へば粟田流、近衛流、加茂流と云ふやうに澤山あるが、懸腕直筆のもあれば、全く反對のものもある　手の先を自由に運轉する所謂擂子木流もある。空海流の一派の如きはそれである。これ等

は擂子木式に運筆させなければ書けぬことがある。日本でも小野道風の書いたものや、空海等の書いた鳩八幡などの鳩の眼球を拵へる。即ちくる〳〵つと落尾を捲く、これは日本の發明ではない。六朝あたりに澤山あつたものだ。つまり、高い上に書く場合には、楷書でも篆書でも面白くない。そこで高い所では飛白で書くといふこともある。是れは六朝時代から發明されてゐるので、題額の花文字である。鳩の眼球などは、懸腕直筆では出來ない。矢張り手の中で筆を捻ると、眼球が雙方に出來るのである。

足で書かねばよい　それだから、歸着する所は、手に入りさへすれば執筆は何んな事をやつても宜い。足で持ちさへしなければ、手ならば勝手次第で行つて宜い。といふことになる。斯ういふことである。歸着する所は、縱に引いても横に引いても、行ける事なら何んなことでもよいのである。只字が巧く書けさへすれば、それで目的は達せられる。そして巧く書けるには、自分の都合次第であるそれで都合次第といふことについて、福澤先生が面白いことを言はれた。先生は、書家の字を書くのを見て、ペンキ屋が刷毛を遣ふやうだと言はれたことがある。つまり、刷毛をペンキ屋が巧く遣ふのと同様である。ペンキ屋が刷毛を巧く遣ふのは特に法がある譯でも何でもない。枕腕とか懸腕直筆とか云ふが、これは後世に出來たものであつて、最初は皆それ〴〵に出鱈目をやつたに相違ない。

天分と多見と多學

併しながら多鱈目の中にも法はある。横に引くと云つても、手の先だけでは横に引けるものではない。餘儀なく腕に力を入れねばならぬから、詰り法は天然に具はつたものではなくて、皆な巧者がやつて、巧者に宜いやうにしたもので、人に依つてそれ〳〵異るのである。夫れで出鱈目派の最も便利なことは、詰り臨書しても、幾ら習つて見た所が、上手になるより下手に成り易いことである。古來の書家は、何ういふことをやつたかと云ふに書を學ぶに三箇條あるとする。卽ち第一は天分、卽ち天賦の器用、第二は多く見ること、見ることが少ないと可けない。故に古來の書を多く見るのである。第三は多く臨書すること。手習ひをすることである。

先づ多く見るべし

それで、多く見ると云ふことは餘程必要である。私共は無論、下手だが多く見て居る。私は手習ひは一切しない。殆ど仕ないのであるが、只見る丈けである。それで見て、誰の字でも構はぬ。都合のよいのを眞似ても眞似なくても出鱈目、古人三分に自分七分位でやる。それで見るといふことの大切であることは、物徂徠で分る。徂徠が然うである。さう多く習ふ必要はない。尤も見たばかりではいかぬ。一種の、書に上手になるか、下手になるかといふ口傳がある。それは何であるかと云ふと、——禪家の悟りのやうに聞えるが——一種の悟入がなければならぬ。一切古人を眼中に置かない、己が出鱈目、心の欲する所に從つて徹底することに成らなければならぬ。

物徂徠の徹底 斯う云ふとむづかしいが、徹底といふことは何でもない。徹底といふのは、徂徠に見て分かる。徂徠はそんなに稽古したものではない。それで、世間では、徂徠は上手だと云ふが、さう上手ではない。吾々の理想に照すと、さう偉い者でもない。されど、徹頭徹尾、自分の字になつてゐる。なぜ、自分の字になつて居るか。始終習つて、苦心して徹底したかと云ふと、然うではない。徂徠は大天狗、日本に學者は己一人、古來經學の上では己一人、支那でも、發明はあらうが、發明した己もと云ふ大氣焔の大天狗だ。己の一言一句は天下の法則である。すでに斯ういふ氣になるから、字も大膽に出來るのである。又、何十年も苦心して臨書して、最後に徹底して無邪氣の雅拙なる字を書く者がある。是れは、支那人には澤山ある話しだけれども、日本人は先づ餘り無いのである。

手でなく面で書け

出鱈目中の上手 日本人では、梧竹が晩年やたらの字を書いた。晩年出鱈目に塗つた字は、上手ではないが、梧竹は斯う考へた。「己が古今の一人だ」と。どんな字を書かうが、己が墨を塗れば。それが字である。一番上手である。それで、平生書いて居るは出鱈目で、平氣なものである。鍋島侯

爵邸に在る屛風杯は、美事なものであつて、其の美事な、非常なものを書く腕を以つて、平生は出鱈目を書く。それであるから、出鱈目の中に自から妙味がある。楊守敬の晩年がそれである。四十から五十までは、非常に美事な字を書いた。彼は、出鱈目である。それから、乾隆第十一子成親王。是れは非常に上手だ。書は米芾を摸すれば米芾、董其昌を摸すれば董其昌、王羲之を摸すれば王羲之の通り書く。然るに此の人の晩年書いたのは、殆ど子供の書いたやうなものに歸着し、徹底したのである。

面の皮の厚さ次第

夫れで、字は何うして書く、字は手の藝ではないか。面の藝である。實際、面の皮が厚くなれば、下手でも書ける。字を手の藝と思ふ間は駄目である。面の皮が厚くなつて來れば、もう占めたものだ。なあに、人は見て笑はうが、そんなことには頓着しない。さうなると、どんな拙筆でも巧くなる。その證據には、禪宗の坊主の字を見ると然うである。坊主はなか／＼忙しい。手習などする時間は有たない。所が禪坊主の書いたものは、何處か氣韻がある。手習はしないが、高僧になると、元より眼中に何物もない、だからどんな拙筆でも、一種の氣韻がある。

田舍老婆の妙筆

御大禮の時、長壽者に御盃を賜はつた祝であるといふので、八十九十の田舍婆が「壽」字を書いたものが新聞に出て居たが、何うしても眞似の出來ぬ一種の氣韻のあるのがある。

それは何うかと云ふと、上手に書かう、下手に書かうといふ氣がない。所謂徹底して居る。徹底すると、無我な田舍の老婆の何も知らぬ者でも出來る。徂徠などはお天狗面なので書ける。自分が上手に書かう、下手に書かうと云ふ氣のある間は、自分の字は出來ぬ。字は見るが宜い。習ふも宜いが、一應習つて、それから多く見て、その末は自分の頭と云ふことになる。要するに、出鱈目は書の極意であると思ふ。古來の書家が然うである。

正法を學んでから

斯う云ふ譯であるから、習字先生から法則を聽いたゝで、その法則を習つて、それから更に關を破るのである。然らば、大凡の人は一年生と言つては失禮だが、關に入つても深くないのであるから、法度を出易いのである。要するに、手習は九宮筆法で先づ中に入つて、それから飛び出して、それからが、出鱈目時代になつて、最後に徹底するのである。終局は手の藝を離れて面の藝に歸することを、私は希望する。

品性と心靈と

畢竟するに、書の巧拙は技術に屬し、品格の高卑は天分に屬するのである。運筆が如何に巧みでも、技巧が如何に妙でも、品性の卑しき人には、品格の崇高なる文字は出來ぬ。これに反して、如何に品性が高尚でも、技術を學ばねば品性を寫し出すことは出來ぬものである。

次に書道の極致は心靈の問題である。一點悟入の處がなくしては、只、筆墨の技術に終り何の妙味

も無い。道學の大家や高僧知識の書に、一種の氣韻があるのはこゝである。弘法大師の飛白や、漢字に梵字の筆法を交へたるなどは、技巧に屬するが、更に技術の範圍を出でたる氣韻は、その本領の表現で、常人には出來ぬことである。傳教大師の書は、平々坦々の間に、崇高偉大の氣象があつて、眞に其の人を睹るが如き感がある。書道の極處は此處である。

直筆と側筆に就て

玆に直筆と側筆との別についてお話をしよう。懸腕直筆は、古今不易の法則ではない。唐宋人には、側筆を以て姿勢を作つた書家は澤山ある。東坡の如きはその一人である。元來、中鋒直筆は、篆法から出たもので、篆はこれでなければ書けぬのである。故に、書の歷史より論ずれば、直筆中鋒が正統であるが、既に幾多の變化を經て、後世の字樣となつた以上は、必ずしも歷史論で拘束するにも及ばぬ。人々の勝手次第に任すがよいと思ふ。但し現今の所謂六朝派と號して、逆筆を使ふ連中のは、不自然の甚しいもので、是は字の中には入らぬ。字として評する價もない。到る處に到れば、帖派も碑派もない。俗でも何でもかまはぬ。趙子昂ほどの能書は元以後にはない。明人平凡と云つても、董其昌、文徵明は清朝にはない。祝枝山の草書もまた、清朝にはないのである。

清代の能書家

帖學でも、王澍、張照、翁方綱、近年歿した翁同龢などは、古人に遜らぬ。碑學の方では、清朝獨壇だけあつて、鄧完白、伊墨卿、何子貞、それから楊沂孫、楊峴山、楊守敬、

現代では吳俊卿と一時京都に隱遁した羅叔言の篆法は、共に現代の珍寶であらう。吳は奇を以て勝り羅は正を以て勝るものである。現に宣統帝の御指南役たる陸潤庠の近體も、美事なものである。我邦に來た人では康有爲ほど古雅なる能書家は餘りない。

日本人の及ばぬ譯

日本人の書は、とても支那人の樣に甘く出來ぬ譯がある。それは支那人は、幼時より規則立ちたる稽古で、十分に楷書が書ける樣になつた上で、それから古帖、古碑に移るのであるから、運筆が自由自在である。同治光緒間の人で、張廉卿といふ學者の能書家があるが、これは六朝風の泰斗にして、宮島大八君の師である。そのまだ六朝風にならぬ前の書は、近體の尤も達者なものである。本來の力があつて、奇癖に化したのであるから、面白いものが出來るのである。譬へば、文章である。支那人は科擧のために四六を學ぶから、文字の材料が豐富で、とても日本人の及ぶ所ではない。その富麗なる四六を作り、慣れたる手を以て、一轉して古文を作るから、所謂「絢爛之極、歸於平淡」で、平易の中に妙味があるが、日本人は始めから古文を作るのであるから、平淡の極、乾燥無味に陷り易いのである。

六朝崇拜は田舍漢

丁度、てり燒も口取りも出さぬ中から、あつさり酢の物といふ筆法では、御馳走にはならぬ。書法もその通りで、今の六朝派と號する連中には、運筆すら六には出來ぬ腕を以て

矢鱈に六朝の形だけを眞似るのであるから、奇怪千萬の字で、小兒の惡戯に同じく、字として視ることは出來ぬ。それでも、盲目千人の世の中、これが面白いとて感心する田舍者もあるから、矢張り行はれてゐるのである。

素人は黑人にかなはぬ　茲に注意す可き事がある。素人の字は如何に能書でも、黑人には敵はぬ。小供の時から稽古した連中と比べものにならぬ。梧竹は八十三で歿したが、童時から其の年まで、一日として筆を執らぬ日はなかつたと云ふ。鳴鶴は今八十に近いがこれも初年から學んだのである。譬へば、將棋で素人の初段以上には澤山あるが、いざとなると、黑人とは格段の差があるもので、書も同樣である。俗でも何でも、黑人は黑人、如何に上手でも素人は素人、その間に距離がある。但し、書家の看板を掲げて居る連中にも、拙劣極まるのもあるから、黑人と號する連中もあてにはならぬ。殊に地方でよく見る、支那人朝鮮人の書には、尤も拙きものがある。唐の金釘流。ひじきの行列とでも云ふのは、これ等のことであらう。

日本近世の能書家　我邦の古代は姑く措き、近世では龜田鵬齋、僧良寛、僧寂嚴の草書、佐々木志津馬の楷書大家は、支那人に見せても恥かしくない。會て地方の藏幅家で、伊藤東涯の楷書を見て感服したことがある。學者は拙筆にも極まつたものであるが、寛政の三助は能書である。就中、栗山

は稚拙の處に味がある。これもその本領の表現である。

賴山陽父子に就て 山陽父子の書を評するものは、大抵春水を推して山陽の上に置くのが通例であるが、自分は然らずと思ふ。春水の書は、趙陶齋に顏魯公、趙松雪を加味した混合物で、まだ自家の書ではない。山陽は、諸家を咀嚼して、兎に角自分一家の書を成して居るから、山陽は一段上である。但し、其の劍拔努張、絶えて蘊藉の氣の乏しいのは、缺點である。自分はこんな字が嫌ひである。

明治功臣中の書家 明治の功臣では、暘谷伯の草書が巨擘である。春畝公は性靈に任せて縱橫揮灑したまでで、師承は無いが、晩年には往々觀るべきものがある。蒼海伯の書は、その詩と同じく、俗流を超脫してゐるが、要するに學殖の表現で、凡人の企て及ぶべきではない。その餘の役人連中の字は、爵位の肩書を除いては通用しないのである。

下編 文房具談

筆に就て

古代の天平筆 筆は古來種々の變遷がある。日本では弘法大師時代の筆、卽ち古寫經風の字を書く筆は、今の筆とは逆つて居る。何ういふのを使つたかといふと、短く平たく、棗の形になつて居る。所謂天平筆である。これは一つ〳〵毛根を金線で括つてあるから毛の數は少いけれども、本(もと)の所が太く開いて、急に先で集まつて、細くなつて居るから、丁度棗の形である。これでなければ、古寫經風の字は書けない。大師時代の細字は是であるが、大きな字はこれよりも長いものを使つたであらう。それは實物が存して居らぬから分らぬ。唐時代の筆は短毫である。短毫でなくては、唐代の楷書は書けぬ。今でも、今體の楷書を書くには長毫はいけない。

長鋒筆の出來た譯 長鋒(ちやうほう)と稱する長筆は、乾隆以後、篆隷の研究、古碑の研究の末に、古は長い筆で書いたのであらうといふので毛が皆長くなつた。その以前は皆短い。そして概して毛の強いものを用ゐた。全部剛毛を用ひたものもあり、又剛い毛の紫毫と、柔かい羊毫とを交ぜ合はして使つたも

のもある。剛い紫毫を中心にして、羊毛を外から卷いたのもある。又柔い羊毛を中心にして、剛い紫毫を外から卷いたのをも使つた。純粹の羊毛の極めて長いものを使ふ樣になつたは、清朝の發明である。有名な墨寶として知られてる、朱子の易繋は、最も剛い毛を用ゐた證據になるものである。

唐より宋は剛筆　唐末の時代には概して剛い毛である。狂草にかすれた所のあるは、剛毫である。柔い毛に剛い毛を合はせたものを使つたらうと思はれるのも稀にはある。今日茶人連中の珍賞する黄檗僧の大家は、山馬の毛である。隱元の字畫にかすれて强く見えるのは、勁健なる剛毫の證據である。山馬の毛は毛端が三叉になつてゐるのもある。そこで山馬は如何なる動物か分らぬが、何でも蒙古か滿洲か、彼の邊の產物である。或る說には、さうではない、山馬の毛は豚や野猪の立ち毛である。立毛の中に三叉になつて居る毛があるといふが、是は支那から輸入して來るものである。然るに清朝になつてからは、これを用ゐぬから、支那には今は全くない（長尾雨山氏の說に依れば、山馬筆は支那にて鬃筆と稱し北京にては今尙ほ筆館に販賣して居るといふ。そして鬃毫を二三に割きて造つたのを分鬃筆といふのである。全毫の鬃筆に比すれば較々軟かくして用ゐ易い。筆舖の言ふ所では、鬃は蒙古邊の豚（支那にては豬といふ）の毛であると。但し江南地方では、筆舖にては絕えて鬃筆を賣るものがない。これ、南人にはこれを用ひるものがないからであるとのこと。）

【剛毛を用ひた人々】尚ほこの剛い毛を使つたものは、黄檗僧のみではない。明代までは行はれたのである、文徵明の字が窮窟なのは、剛毫の故である。宋代も同樣で、山馬を使つたらしく思はれる。山馬の毛を使つた字は、狂草では能く分かる。賢菴などのは、二つにも四つにも割れて、面白く出來る。これは山馬、又は山馬に類した剛い毛を使つた證據である。

適當な用筆

【初心者は柔毛のこと】我邦では、古來多く剛い毛を使つたものである。剛毛は腕が働かないでも、幾分か筆が書いて呉れる。言へば弓術の樣なもので、初心の時に強弓を用ゐれば、それが惡くても、箭は眞直に飛ぶが、弱弓ではそれが出來ぬ。そこで私は、初學の習字には柔毛で成るたけ習はせるやうにといふ説を持つて居る。剛い毛で習ふと、筆が書いて仕舞ふ。まだ腕が定まらぬ中は、人間が剛い毛の筆に使はれて、筆のみが書く。柔毛筆で書かせると、腕で書かなければ字が出來ぬから、勢ひ必ず人が筆に命令する樣になるが、剛毛筆では、初心の者はあべこべに筆が遂ひ使ふ樣になる。それ故初心の者は剛い毛を使ふといふことは考へ物ともなる。

老年者は剛毛筆　是と反對で、羊毫長鋒は全く腕力で運用するのであるから、書家が强壯の時に長鋒を用ひた人も、老人となると力を入れるのが面倒になるから、段々短い剛い筆を用ひる様になる、中林梧竹翁は、長毫の主張者であつたが、晩年には短い筆を使つた。余の話に、先年支那で長鋒筆を造らせた時、筆屋が云ふには、貴方は若いから長鋒が宜しうございますが、段々年を取られると、誰れでも短毫を注文せられる様になると云つたが、其の時馬鹿なことを云ふと思つて居たが、段々年をとると、柔かい長い筆は、骨が折れて仕樣がないから、近頃は短毫にしたと云つて居つた。

好み好みで用ひよ　楊守敬も長毫を用ひた人であるが、晩年短毫に變つた。何うしても短い强い毛を使ふと書きよい。短い毛は書きよいに違ひないけれども、未熟の者が短い剛い毛を使ふと、腕で字を書くことにならないから、成るたけ始めに腕でやるやうに慣らさなければならぬ。併しながら、今體(こんたい)の字を習ふには長毫は無理である。今體は元來短い强い毛で書いた字である。それを柔い長い毛で書くといふは、少々無理である。つまり、筆は自分の好み好みに應じて、命じて、造らせるのが書きよいであらう。

日本の筆、支那の筆

鼠の鬚の筆　何處の筆が宜いといふことは斷定は出來かねるから、茲には言はない。いつぞや、三井壽太郎君から鼠鬚筆を贈られ、早速これを試みたが、至極面白い。一種の趣があるものである。王羲之の「蘭亭序」は、鼠鬚筆で書いたとあるが、如何のものであるか。鼠族も多いから、何種の鼠か分明でない。古來、これを研究した者があつたが分らなかつた。眞逆に普通の鼠の鬚ではあるまいと思ひ居つたが、三井君の贈られた鼠鬚筆を試みて、始めて普通の鼠鬚で、良筆の造られる事を知つた。鼠鬚は根は太く剛いけれども、毫端は甚だ剛からず、細くなつて居るから、細楷には至極よい。畫の細線には尤も妙であらう。そこで晉代に鼠鬚筆を使つたといふことが分つた。但し「蘭亭序」に用ひた鼠鬚筆は、日本普通の鼠鬚よりも、一段柔かなものであつたらうと思はれるのである。

日支の筆の相違　日本の筆と支那の筆とを比較して見ると、支那の筆は何處となく圓熟の趣があるが日本の筆は鋭く角の立つ心持がする。これは何處の調子であらうか。製造者に尋ねても、その相異の點は分からぬ。よく聞く話に支那人は悠長である、何處となくおつとりとしてゐる。日本人は性質が急調だから、日本の字は鋭くジャガ〳〵して居る。朝鮮人は日支の中間にあり、書風も亦た中間に居る。是れは國民性から生ずる相違であると言つて居るが、私は左樣は思はぬ。日支兩國人の書風の相違は、國民性ではない。筆の相違である。日本では角の立つ筆を好む、甚だしいのは眞書と稱す

る、支那にない一種の筆があつて、これで書けば自然と字に角が立つて、支那人の樣なゆつたりとした小楷は出來ぬ。その上に早く書くから、猶ほ更ら角が立つやうになるのである。筆の拵へ方は、職人でないから分からぬ。嘗て此の事を筆屋に尋ねて見たが、何處の工合か分からぬ。兎に角、支那の筆はじやが〱しない、悠つたりした字が書ける。尤も惡い筆は別である。

日本のみに在る筆

日本獨有で、支那にはない筆がある。唐來の古法が傳はつて居るのであらうと思はるゝ、特種の物がある。御家流の用ゆる、心のある筆もその一つである。これは、今日の支那にはない。文徵明の書は、心のある筆であつたらうといふ說である。徵明の書の窮窟な處を見ると、何うしても然うだらうと思はれる。定めて心のある筆であらう。維新後は都べて唐樣になつて、心のある筆は棄てたが、今でも義太夫本の版下は此の筆でなくては出來ぬのである。

筆墨の價は支邦が安い

筆墨の價は、日本の方が割合に高い。左樣に云ふと輸入獎勵になるから甚だ困るが、支那では筆墨の製造が大仕掛である。又筆の原料となる毛が潤澤である。日本でも良い筆は多く支那から來る。支那では良い筆は澤山あつて、日本よりも安く得らるゝ。これが一つの原因。筆は日本では彼方にも此方にも、小さい製造家が澤山あり、近頃は大分大仕掛になつたけれども、支那ほど大きくやつて居らぬ。支那では、徽墨湖筆と云つて、徽州の墨と湖州の筆とが名產である。勿

論他の都會いづれも作るけれども、徽州湖州が大産地である。材料が安い上に、大仕掛に製造する。又賃銀の安い國であるから、日本より安く出來るのである。又日本より良い筆の需要が多いのである。日本で此の位の良い筆を作らうとすれば、餘程高くなる。だから今のところ筆墨は、恐らく關稅が無かつたならば、支那と競爭は出來ない。

紙のいろ〳〵

【書家に繪絹は禁物】それから紙についてゞある。紙の書畫用のものだけに就いてお話しをする。我邦では、書畫幅は絹でなくてはならぬ樣になつて居る。書畫幅でも紙本は安い、絹本は高い。そこで揮毫を求むるものは、大抵繪絹を持つて來るが、是れは書家の禁物である。繪絹ほど迷惑のものはない。繪絹は礬水を引けば油が取れるから、墨を受けるが、さうするとがさ〳〵して書きにくい。礬水が薄いと、油が殘つて居るから墨をはじく。その上に絹の目が網のやうになつて居るから、墨がぼつ〳〵と毛氈に泌み出して來たり、さうすると、二度目に書く絹や紙に墨が附くから、毛氈の間に別に紙を敷かねばならぬ。二重手間がかゝつて困る。あの位、嫌なものはないのである。

【畫箋紙唐紙は使はぬ】絹でなければどつといふ物を持つて來るかと云ふと。所謂畫箋紙、それから唐

紙と云つて、茶色の馬糞紙、是れが普通の揮毫用になつてゐるが、支那人はそんなものを用ゐない。先年、汪大燮、康有爲兩氏等と、伊豆の温泉へ行つた時、土地の人に字を求められて、三人共に揮毫したことがある。紙は厚い畫箋紙であつた。私は兩氏に問うた。「此の畫箋紙は貴國から輸入するのであるが、貴國では遣はないか何うか」と聞いたら、汪氏は斯んな紙は支那では使つたことはないと答へたが、康氏は「いや〳〵、此の種の紙は今は無いが、明代には用ひた樣である」といつたが、兎に角、現代の支那では書畫用にせぬのである。これは明代の長崎貿易の紙で、それが今日まで行はれて居るので、今日は斯樣の紙でなくとも好い紙が澤山ある。

「玉版、羮硾、宣城」　先づ玉版紙、これは種類があるが、奇麗なものである。次に煮硾紙、これも厚薄大小色々あるが、私は平常これを用ひて居る。それから宣城紙、これは滑かでなくて却つてよい處がある。玉版紙は眞綿が入つて居るものであらうと思ふが、厚い滑かな、我が邦の鳥の子を柔らかく白くした樣のもので、奇麗であるが、少し俗氣である。文人墨客はあまり書かゝない。親王大官が字を書いて呉れる時は、大概これに書くのであるが、文人墨客は好かない樣である。界線を引いて篆隷など書くには、此の紙はよい樣である。文人墨客の使ふ紙は、日本の畫箋紙を少し硬くしたやうな、煮硾紙といふものが多い。楊守敬、呉昌碩などが是れを使つてゐるのである。

【長尾雨山氏の說】（長尾雨山氏曰く、支那の書家は多く好んで宣城紙を用ひる。汪六吉の製するものを尤もよしとし、六吉紙と云つてゐる。煮硾紙は、熟紙にて漫漶少なきを以て畫に適し、又小楷に可である。從來唐紙と稱するものに、奏本紙、貢川紙、竹紙、毛邊などがある。所謂馬糞紙とはおのづから別である。日本で舊來書畫に用ひたものは、奏本紙である。彼の地とて此の類の紙は、書畫幅等には用ひないけれども、普通の帳簿その他文牘などに多く用ひる、又我邦にては、白紙（支那にて連史紙といふ）を書畫に用ひるけれども、支那にては、書籍か張物に用ひるのみである。書畫に用ひるのを見たことがない。）

絹、絖、古紙

【絹、絖、呉縑及び古紙】支那では繪絹や絖にはあまり書かないのである。絹や絖に書いたのは明の末頃で、その頃の流行である。（因に、絖は支那にては光綾或は素綾といふので、日本人が「絖」といつて通ぜず、買ふに困ることがあるといふ。）日本人に書いて贈るには、絹絖を用ひるやうであるが、是れは日本の事情を知つて居る日本通で、日本人が絹本や絖本を珍重することを知つて居るからであつて、彼方の習慣ではない。繪絹は畫には宜しいが、書には困る。支那製の呉縑といふものがある。絖

蚪といふのはお玉杓子のことで、蛙の子と云ふ字である。此の時代の文字が、お玉杓子の形であるのは、漆であるからである。それから古への紙の原料は、楮でなく麻の纖維(せんゐ)であつた。それから楮になつた。唐宋の紙は堅いもので、日本の紙と同じものであつたが、段々と變化して、遂にぼく／＼した紙になつた。紙質の變遷に從つて墨の製造も變化し、筆も亦その影響を受けたのである。

縑帛と麻布

（長尾雨山氏の說に據れば、後漢の和帝の元興年中に、蔡倫が樹皮や麻頭や敝布や魚網などを擣抄して、略〻今の紙の如きものを造り始めたといふ。その以前は、竹箇木策、又は縑帛（幡紙）を用ゐたこととは、諸書に著明なことである。けれども、それが、何時頃より始まつたかは疑問である。然れども、三代の時と雖も、已に筆のあることは「禮記」の「曲禮」にも、史載筆とあれば、明白なることである。周代は木筆漆書であるといふも、竹箇木策に書する時のみであつて縑帛にも漆書するといふ謂れはなし。又縑帛の外には、普通麻布にても用ひたのではないかとも推想される。三代の書が、漆書即ち蝌蚪の字のみに非ざることは、鐘鼎文字に見ても知られる。簡策に漆書したのは、貴重の書籍、或は國家の記錄等の如き、保存を主したものに過ぎないのであらう。然らずんば、何を好みて輕便の縑帛を捨て、不便の箇策を用ひようか。）

印章について

支那人の印章

序にお話するのは、印章のことである。我が邦では、印章は一種の習慣がある。支那にはない。日本人獨有の妙な風俗がある。印章の歴史を言ふと、印は我邦の實印と同じことである。官吏が公用に用ひたもので、古へは天子より諸侯に至るまで、印材、寸法、印鈕、皆制度で定まつて居つたのである。今も好事家の愛玩する漢銅印でも、大きさは樣々あるが、皆小さなものである。印文は姓名である。或は官名である。小さいものである。これが段々變化して來て、宋時代になると、字や號の印がある。居士、山人、又は何々齋、何々庵などの印があるが、これでも後世の如き大印ではない。大きくなつたのは、明の中世以後である。明人には二寸角もある大印を二顆用ゐるのがあるが、是れは俗惡の流風で、實にいやなものである。清朝は古風に還り、印章が小さくなつた。學者などになると、四分角か、四分角もない三分五厘位の印を、唯一顆捺すのが多い。如何にも上品である。我が邦のやうにべた／＼大きな印を幾顆も捺す者はない。

關防印とは何ぞ

關防といふ、肩に捺す印があるが、是れは明人は稀に用ひた。清人も稀にはある。唐宋には無論ない。ところが、どうしたのであるか、日本には昔から、學者先生でも、文人墨

客でも矢鱈に印を捺す。肩には關防を捺す、名の下には必ず二顆、或は三顆、用ゆるものもある。何んでも澤山捺さなければならぬことにして居る。これは、黄檗僧の眞似をしたものか、或は黄檗坊主は、日本の俗に從ふつもりで、矢鱈に大印をべた〳〵捺したのであるが、兎に角これが手本になつて、山陽、小竹、海屋など必ず關防印を捺して居る。元來、關防と云ふのは讀んで字の如く、稅關の關の字と、防禦の防の字である。幅の肩にこれを捺して境界となし、是から中が領分であると云ふ意味で捺したものを、間違つて矢鱈に捺す樣になつた。

捺印は多からざれ 併し、關防は私も捺す。何うも捺さないと折角送つても、關防が落ちて居りますと云つて、田舍から返送して來る事が面倒であるから、俗に隨つて成るたけ多く印を捺してやるがこれは間違つた事である。それからもう一つをかしいのは、印を指さして落欵と云うて居るが、落欵といふのは印ではない。落欵は欵識である。印は印である。落欵は某書すといふのが落欵で、落欵といへば、「犬養毅」、「又何年何月某書」と書いてあるのが落欵である。近來、日本通の支那人は、關防を捺すやうになつた。尤も、日本人に書を贈る時丈けさうするのである。前年肅親王が贈られた幅には、小印一顆のみであつたが、此頃は日本風を覺えられと見え、昨年贈らた書幅には、名字の下に二顆と、肩に關防一顆と、其下に干支の印一顆、都合四顆捺してある。日本通は斯樣になつた。

善い硯と惡い硯

何故支那硯はよいか

硯といふことについて、普通人の考、即ち善い惡いの見所が非常に間違つて居る。何れも硯が善いので磨ると、堅くて墨が出ないと云つて、堅くて墨の出ないのを善い硯の樣に云つて居る。然し、堅くて墨の出ないのは、質が緻密な丈けで、硯は惡い。ところが日本の硯の多くは、堅くてつる〳〵辷るのを善い硯だといつて居る。水を掛けて磨れば、漸く下りるから、之れが善いと云つて居るが、是れは餘程考へが違ふ。そこで支那人の硯は、現に日本に來て居るやくざな硯でも、元來、墨を磨る爲めに掘出して居るのだから、日本のよりは工合もよく價も半價以下に安い。而して日本のよりも間に合ふ。併し是は普通の硯の話で、更にこれは普通の硯とは異る善い硯だといふことになると、餘程むづかしくなつて來る。

支那で八釜しい硯

歴史を云ふと、隨分支那人は出鱈目なことを書物に書くから、書物も眞面目には當にならぬと云ふ事を考へなければならぬ。支那人の書物には嘘を隨分書いてある。そこで名のある、支那の硯の出所は、大概三十箇所以上も書物に載つて居る。硯の八釜しくなり出したのは、宋時代からであるが、その宋時代に先づ何處を八釜しく言ひ出したかと云ふと、普通云ふ所の端溪と欽州

の二箇所であるが、もう一つ唐州と云ふのがあつた。今は唐州と云ふ名は殘つて居らぬが、恰度北京から保定に行く中央に當る所に在つた。

端溪流行の起源　さて、此の三箇所で何處が善いかと云ふ問題である。宋になつて端溪が大變流行し出したが、それでも彼の歐陽修なども議論では、歙州が一番善いと云つて居る。文房具で一番よいのは、李廷珪の墨と、澄心堂の紙と、歙州の硯だと書いて居る。又米芾は、別な議論で山東の青州と云ふのがある、がこれを一番善いと云つて居る。其處で、唐州から出る石と、靑州から出る石と、安徽(あんき)の歙州から出る石と、廣東の肇慶(ちせうけい)附近の端州から出る石と、これ丈けが先づ問題の石で、その他にもやはり八釜しいのがあるが、先づ是れ丈けが問題の石としてある。此の問題の石の内で、我邦では何時も端溪が持出されるから、その端溪を主としてお話する。

端溪の鑑定法

端溪の實物　端溪はどういふ色の物であるかと云ふと、普通、紫色と答へる。所が單に紫色をした石は、湖南の辰州、又は福建などから澤山出るので、獨り端溪のみには限らぬ。支那人の硯屋に行つて、紫色の硯を端溪だと云つて買つたからとて、その紫色は端溪だと云ふ證據でも何でもな

い。も一つは、端溪には眼がある。眼球の様な斑紋がある。然し、これとても他所から出るものにもあるので、日本の陸中にも亦、眼球のある奇麗な紫色の石が出る。端溪は此の頃、新聞に出て居る處の梁啓超等が會議したといふ三水から西江を遡ると、肇慶府と云ふ所がある。此の附近に端溪がある。所がその肇慶府の端州端州の中の高要縣といふ縣の山から端溪石は出るのである。

端溪の眞物は稀少　その中の良材の出る坑は、勅封になつて居て、乾隆に三度掘つたとか、道光年間に何度掘つたとか云つて、澤山は掘らせない。然らば硯屋はどうするかと云ふと、福建の石や湖南の石の眼の有る石を持つて來て、是が大西洞水巖の八釜しい石であると云つて買はせる。硯に精しくない者は、――端溪の山の下で買つて來ても、そこで賣つて居るのは、福建などが七分以上であるから、――然ういふ石を買つて來る。

宋代の古端溪　端溪を最初に開いたのは何時かと云ふと、唐の時分である。その時分、既に貢硯の内に入つて居た。然し唐の時代には、まだ何處の石も似寄つたものであつたが、獨り端溪が八釜しくなつたのは、何ういふ譯かと云ふと、書畫の方で八釜しい。例の徽宗皇帝が、天子にならぬ前、端王に封ぜられ、肇慶に都して居つた。端州が自分の管轄下になつたから、その石を切り出した彼の人は繪を奬勵した人だけに、美術思想がつて、色々硯の様式を定めた。硯に、日月とか花鳥とか、種

種の彫刻をした。これを宣和(せんわ)の様式と云つて、五十種からある。ちやんとその様式を定め、善い石を掘出して臣下に賜はつた。此の臣下に賜はつたもので、稀に今殘つて居るのが宋硯中尤も八釜しい價のするのになつてゐるのである。

大西洞の良端溪

此の時に始めて端溪が名高くなつた。而して、それが段々傳はり、明人に端溪が重んぜらる樣になつて居るが、宋の時分にも斯く善い石が出たけれども、その多くは長い年月を經て失なつて居るが、清朝に至つて、又非常に善い石を出した。それは清朝に多く趣味の天子があつた。卽ち乾隆皇帝があつたからである。乾隆帝は豪傑であつて、色々の事をした。繪も奬勵し、文學も奬勵し、何でも奬勵するといふ先生で、乾隆樣式を定めた。この乾隆樣式を、宣和樣式に比べると、彫刻が精巧で、中々奇麗なものが出來た。大西洞の水巖と云つて、水の一番底を搔き出して、切出すのが一番八釜しいのであるが、此處を一番始めに開いたのは、明の萬歷(はんれき)の中頃であつたが、更に此の大西洞を乾隆を開いたのである。此の時は泰平無事の時であるから、その方の專門家も澤山に出て調べしたので、この隆乾の時から、また非常に善いものが出て來た。此の石は新しくても善いのである。歷史を云ふと先づさういふものになつてゐるのである。

硯の半可通

硯の癖と來歷

所がこゝに、硯の癖といふものが日本に澤山ある。支那にもある。それが二派に分れて居て、その一つは古物癖である。是れは唐時代の硯であるとか、是れは宋時代の硯であるとか、是れは米元章が持つた硯で、誰に傳はつたものであるとか、恰度千利休から誰に傳はつたと云ふ、茶人の道具の樣に、來歷附きの古色のあるものを非常に八釜しく云ふ。さう云ふ先生は、硯の性質が惡くても善くても、唯古ければ善いと云ふので、日本の硯癖は此の方が多數である。だから隨分滑稽な話がある。人を指すのは氣の毒だから云はぬが、京都の御大典の時に、硯自慢の先生達が、硯會をやると云ふので、なか／＼澤山集めて居る硯癖の先生達が、出品した。さうすると、皆古色が附いて居る。なるほど、これは古い事は確かであらうが、硯は何れも善くない。その上間違つて居るのがあつた。

滑稽な蕉葉白硯

其處で一番八釜しいのは、端溪の「蕉葉白」と稱して居るのがあつた。それで、蕉葉白、卽ち「白」といふのであるから、素人考へでは、紫色の間に白き點々が出て居るのを蕉葉白だと思つて居ると見え、紫色の石に、ぽつ／＼丸い團子の樣な斑がある。所が、是れは良くない石

である。是(これ)に「蕉葉白」と銘打つたのを、高價を出して買つたものだが、奚(いづく)んぞ知らん、「蕉葉白」とは何う云ふものであるかと云ふと、紫の薄い色の間に、青味と白味とが勝つたもので、決して單に白いものではないのである。「蕉葉白」の「白」なるものは、青の方に近いもので、そんな矢鱈に白いものでない。これを間違へて大金を出して、偉い自慢をして居る。斯う云ふ硯癖の先生ですら、其の位の程度でこんなものを「蕉葉白」とは偉いと、丁度一緒と行つた鑑定家等が大笑ひをしたことがあつたのである。

端溪切出しの騒ぎ　日本の硯癖家の多數は、此の位の程度であるが、支那の硯癖と云ふと、硯の質が八釜しい。古くつても性質が惡くては駄目である。新しくても性質がよくさへあれば、善いといふので、非常に高い。何うして高いかと云ふと、斯う云ふ譯である。端溪と云つても山は澤山あつて善惡種々の石が出る。善い石の出る八釜しい坑は、朝廷でこれを封じて仕舞ひ、勅命を奉じて官員が出張しなければ開かない。乾隆四十年以後まだ三度許りしか開いて居ない。役人が出張して、秋の水の少い乾燥時期を擇んで、狸堀に掘つた坑だから、大概二百人位の人夫が行つて、水を掻出すので大騒ぎをする。その内には坑が崩れて死ぬ者も出來る。深い狸掘の水を、人夫を使つて掻き出すのだから、なか〳〵容易なことでない。斯うして順繰り順繰り、水底以下にあるのを切り出す。何分是れには、

役人が高い給料で出かけて行つて、何箇月間も滯在し、大騷ぎをして水を掻き出し、硯を切り出すといふのであるから、新規と云つても性質さへ善ければ非常に高價について居る。支那役人のことであるから、惡い事もしやうが、朝廷の記錄には、ちやんと何時何百枚切出したかと云ふ事が記されてある。萬曆何年には、何面の硯を採つたとか、雍正年間には、何面採つたとか云ふ事は、それで判るのである。

硯と磨り工合

硯の善惡見分方　そこで、硯の善惡とは何ういふ事かといふと、日本で普通善い硯と云ふ堅いのなら幾らでもある。堅い石で水を容れても、何時までも吸はなくて善いだけなら、何處にでもある。何も八釜しい事はない。そこで、堅い石は幾ら磨つてもつる〳〵して磨れない。又少し軟かく粗なるもので磨ると、ごろ〳〵いふものなら、是れも亦た澤山ある。それで、粗なやつは荒く出る、堅いやつは緻密に出ると云ふが、唯だ堅いだけでは墨が磨れないから困る。ところが、端溪の善い石は何うなつてゐるかと云ふと、水はさう吸はぬから、質は緻密には相違ない。その質の詳しい事は、顯微鏡調べをやりかけて見たけれど、何分調べるには、その善い硯を硝酸か何かで燒いて、眼鏡を掛けねば

ならぬ。しかしそんなに八釜しい硯に硝酸をかけて仕舞つてはいかんから、顯微鏡試驗は出來なかつた。

硯の鋒と磨り工合

然らば何うして見るかと云ふと、墨を磨つて見て、工合がよく易々と墨の出るのは、その硯の中に「鋒」と云ふものがあるからである。「鋒」とは何ういふ物かと云ふと、餘り堅くない石の間に、肉眼では見られない樣な堅い性質のものが交じつて組み立てられてある。これを「鋒」といふが、肉眼では見られない。この「鋒」で墨が磨れる。併し、その「鋒」だけでは墨が粗く下りる譯であるが、その間に「鋒」でない、軟かい滑かな物があつて、これが細かく下ろして行く。此の細かく下ろして行くやつと、粗く磨り下すやつとが、抱合した善い硯が大西洞水巖、又はその他の八釜しい石である。

良い硯で磨つた感じ

斯う云ふ組立になつて居るから、硯を採り出すにも、唯だその山から切出したら悉く善いものだと云ふ事は出來ない。切出す時には、その「鋒」といふ物が、層の何方かへ向いて居るから、この「鋒」を有效にするには、竪に切るとか、横に切るとかが云ふ事を考へねばならぬ。これは硯を切り出して拵へる者の熟練を要する所で、斯うして始めて善いものが出て來るのである。さてその善い硯といふのは、何うなつて居るかと云ふと、水を容れて二三日は抛つて置いても吸はない。

然ればとて、赤間石の様に磨ればつる〳〵辷るかと云ふと、つる〳〵はしない。殆ど吸ひ附く様になつて行く。斯ういふ物で墨を磨るには、何ういふことが善いかと云ふと、やくざな墨では砂があつて音がするが、善い墨で磨つて見て音のない物でなければならぬ。

停雲浮艶の善硯　そこで音のない位の滑かなものであつて磨る味は殆ど手心だから、口で云つても一寸傳へ難いが、斯う云ふ形容詞を使つて居る。善い硯には「停雲浮艶」卽ち磨つて行くと、すうつと雲が停つて居る様に、艶のあるものがぽうつと細く浮いて來る。磨る味は、手にがさ〳〵應たへないで、うつかりすると、墨を吸ひ取られさうになる。それで、つる〳〵上るかと云ふと、辷らないで巧く出る。これが、硯の善いもので、是でなければいかん。是れなら磨るに力も要らないし誰が磨つても磨れる。又發墨の趣を形容して「熱釜塗蠟」と云つてあるが、熯つた鍋の上を、蠟塊で摩擦するやうに、少しも音響がなく、とろ〳〵と流れ出るのが、名硯の妙處である。

硯の紛れ物

まがひ物の端溪　前に一つ、瞞されない様に話して置くのは、普通の石段石でも紫色のがある又眼の様なのがある石もあつて、何處からでも出るのである。日清戰爭で威海衛を打ち破つた際、建

築用材に端溪と少しも違はない、暗紫色を帶びて、黄色や青の眼のある石があつたのを取つて來て、是れは端溪の石のやうだと、友人と一緒になつて、これで、硯を造つたことがある。夫れが初めにやつて見ると、すうつと吸ひ付くので、甚だうまいと思つた。夫れから二三ヶ月すると、今度はさうはいかない。是れは何うかと言ふと、石が軟かで、例の「鋒」なるものがなくつて、組立てられたものであるから、少し磨ると滑かになるのである。滑かにはなるが、これで知らぬ客を瞞さうと思へば、何でもない。先づその硯を剃刀砥の合砥で磨つて置いて出すと、硯を知らぬ者には、磨り工合が一寸端溪と違はない。素人はいきなり墨を磨つて見て、是れは發墨が善いと思ふから、惡者の道具屋が、合砥で以て二三度磨つて置けば、一寸した鑑定家を瞞すのは何でもない。

硯の鴝鵒眼とは何ぞ

所が又、道具屋なる者も硯を知らぬ。或る八釜しい硯道具屋を、私は何んなものを持つて居るかと思つて素見(ひやか)して見たけれども、硯の事は殆ど知らない。知らない上に、黒端溪だの、青端溪だのなど丶云つて、數百金に價すると云ふのがあるが、是れが又當てにならぬ。石の眼、即ち斑紋に、鴝鵒(うよく)眼と云ふのがある。眼球があつて、詰りずつと輪に筋があつて、眞中に精がある。是れが水底から出る石の中で尤も賞玩される。その眼が、黒色の石にあるものは八釜しい黒端溪である。是れがあれば非常なものであるが、所が湖南から恰度、それと同じやうな眼があり、而して黒い

奇麗な石が出て、一見黑端溪と同じ樣であるが、違ふ所は堅過ぎるので、摺るとつる〳〵辷る。實際使つて知つて居るものは、是れは端溪ではない。湖南から出るものだと判るが、然う云ふことを知らぬ人は瞞されるのである。

來歷附の硯は僞物

今一つは、金持の家に行くと、よく文房具で飾り付けられたものを見るが、その金持先生の飾付けた文房具の中で一番惡いものは、何處でも硯である。是れが一番始末に行かぬので、何うして然うであるかと云ふと支那には古銅器、書畫に限らず、硯にも贋が非常にある。先づ良硯と云ふと、米芾、蘇東坡、蔡君謨黄山谷と云ふ銘のあるものである。又明時代になると、明の有名な人の銘が皆ある。何でも、矢鱈に銘を雕つた物があるが、清朝に至つても亦お定まりの贋物が澤山ある。何う云ふものがあるかと云ふと、清朝に至つては然う云ふ物の貴ばれる一種の、昔にはなかつた學問が出たからで、昔は道樂半分にやつたのであるが、清朝に始めて金石學と云ふものが出た。是は日本の金石學とは違ふ。何ふ云ふ事をやるかと云ふと、昔の碑を調べ、古法帖の系統を調べ、古銅器の篆文等を調べる。此の學問を金石學と云つて居るので、この學者が、乾隆頃から澤山出た。乾隆前にも在るが、就中、乾隆頃から多く出たのである。

高南村所持の硯

その盛んに出て來た有名な人の銘のある硯といふのが澤山ある。中にも面白

いのは、書畫を扱つて居る者の知つて居る高鳳翰。これは餘程妙な人でぺい〳〵役人で、彼の歙州石の硯の出る歙縣で、歙縣亟と云つて、縣令の次をやつてゐる、書記官の樣な役をして居つた。此の人が矢鱈に硯を作るのが好きで、千面以上蓄へて、一生涯に何の位作つたか判らぬと云ふのである、そこで、乾隆以後の物で、日本に來て居るのには、張叔未の銘があるとか、高南村（鳳翰）の銘があるとか、必ず有名な人の銘がある。所が金持先生達は、それ等の有名な人の文字を知らぬ。その硯の善惡も知らぬ。ただ、是が高南村、是が張叔未であると云つて、少し似寄つたものを以て胡魔化されて、そんな硯に數百金を投じて、これを麗々と飾り付けるのである。私の眼に是はと思つたものは一つもない、大概贋物である。支那人の所謂經歷附とは、こんなもので當にはならぬ。

歙州硯について

支那人はまた書物にも出鱈目を書く。昔から歙州石は、歙縣の龍尾山から出るなどゝ書いてあるが、歙州石は、龍尾山と云ふやふな雅名の山から出るのではない。其の隣の平凡な山から出る。所が、平凡な山名では風流でないから、硯などの出ない龍尾山から出るなどゝ、出鱈目を書く、支那人は文章を書いたり、詩に作つたりするのに都合のよい樣にやるのだから、當にならぬ。

硯石の附屬物

子石硯は嘘の皮　又、端溪で一番善いのは子石だと云ふが、是れは嘘の皮である。子石、一名卵石と云ふ。是は何うなつて居るかと云ふと、水底深く入つて行くと、球の樣な石が出る。これを叩き割ると、團子の樣な石が更に出る。是れが子石卽ち卵石で、一番善いと云ふが、併しそんな馬鹿なものはない。吳蘭修といふ、恰度乾隆の末の人が、勅令を奉じて例の端溪を開きに行つたことがある。此の人も、右の說を信じ、何箇月も逗留して、矢鱈に調べて見た所が、遂に古來然ういふ物がないといふ事を發見した。

子石（卵石）の正體　然らば眞の卵石とは如何なるものを云ふかといへば、端溪にあるにはあるけれども、決して團子の樣なものではない。何う云ふものになつて居るかと云ふと、他の石と同じ樣に層を成して居つて、上層も下層もいかんが、中層の一番よい層に行くと、層と層との間に、黃色、或は白色、卽ち色の變つた石が、その間に挾まつて居る。此の挾まつて居るのを「臕」と云ふ。是れは皮と云ふ字で、その皮のある層が良材である。普通平になつて居るものであるが、中には船底形になつたのもあり、又垂るんで凹んで居るもの、又は丸く瘤の樣に曲つたのもある。この瘤の樣に曲つた

のを上から切り取ると、丸くその周圍が、黄色や白色の膘がある。何故、此の黄色や白色の外皮を殘すかと云ふと、大西洞水巖の善い硯だと云ふ事を明かにするには是を殘さねば證據にならぬからである。斯く瘤の樣に丸い膘の附いた所を切取つたのが、卵石、一名子石である。又船底のものを硯にするには、下を平にして手前を切り、背を切るから黄色の石が、兩緣に附いて殘る。是も子石——卵石と云つて、善い石で、是には必ず黄色又は白色の膘が殘してあるのである。

火捺と翡翠紋と青花

此の端溪の大西洞水巖に限つて、暗紫色を呈し、透して見ると、中に雲霞の樣に見えるものがある。此の雲霞の樣に見えるのを「火捺」と云ふ。その火捺を形容した言葉がある。此の形容詞に依ると、如何なる形と云ふことが先づ腹へ入る。即ち「雲蒸霞蔚」雲蒸し、霞蔚すといふのであつて、雲や霞が、ぼうつとして居る樣なのである。併し、此の火捺其物が善いのではない。善い石の緣には、必ずこの火捺が添つてゐるのである。も一つ添つて居るものがある。それは青い斑があるので、其の青い斑の大きなものに、何う云ふ名が付けるかと云ふと、これを「翡翠紋」と云ふ。此の翡翠絞の極く小さいのを「青花」といふ。又た、青花よりも一層ぼうつとして居るのが、餘程八釜しい。恰かも青い綺麗な細いものが、ちよび〳〵と水中に浮んで居る樣に見える。

鸜毛氄と猪肝

このぼうつとなつたのは容易に得られないもので、是れを「鸜毛氄」と云ふこ

れが一番八釜しいものである。性質は何れも同じ物であるけれども、唯だ大きいから翡翠紋、小さいから青花、又一段小さいちよび／＼として居るから鵞毛毹と云ふのである。それで、これが宋時代に作つたものなら大變善いが、宋時代にはそれほど深く掘つて居らぬ。只今では八釜しい大西洞水巖にまでは掘當てゝ居らぬから、宋時代にはこれがないのである。宋時代に貴んだのは、多くは眞赤な色の「猪肝」と云つて、猪か豚の肝を切つた樣な色の善いものである。米芾、黄山谷の時代には、これを賞美したが、是は少し堅い。

適當な用硯

陶硯と磁硯と

斯う云ふ次第であるが、第一、日本では硯を見る眼が甚だ乏しいのである。然しながら、古い物を好む者があるが、極く古い物は右に云ふ樣な精良なものではない。六朝時代は多く陶硯であつた。普通は此の陶硯で、惡い墨をごり／＼磨つたものである。唐時代にも陶器の硯がある。夫で何うなり斯うなりやつて居つたのである。日本でも古い王朝時分には、陶硯、磁硯で、古い蓋を發くと、是等のものが出ることがある。そこで、硯の善いのをそろ／＼八釜しく云ひ出したのは唐時代である。一番八釜しく云ひ出したのは宋、就中、精密にやり出したのは清の乾隆以後である。

斯う云ふ順序であるが、

實用には支那硯 扨て、硯を日用に使ふのには、何もそんなに八釜しい物は要らない。彼の羅紋などは一番安いもので、日本の雨端でも、紫檀の蓋を付けると安くはない。所が、羅紋から切り出したものは、紫檀の蓋を付けて上海から來るのは、素人が使はぬ様な大きな物で、大概五圓位である。羅紋は惡いと云つても、墨を磨る爲に作つたのであるから、日本製の惡いものよりは立派に墨が出る。福建からも、澤山出るが、是亦實用には少しも差支ないものである。今まで云つた事は、殆ど骨董論で、骨董論をすれば斯ふいふ八釜しいものになるが、實用には支那のものが安くて善いのである。

支那の墨と日本の墨

墨も支那に限る 墨と云ふものについても、亦往々間違つた事を聞く。素人が墨を磨ると、第一に香を嗅ぐ。而して麝香の香や龍腦の香がすると、是れは善いと言つて居るが、何も香は墨の質に關係はないのである。も一つよく聞くのは、支那の墨は磨つて見ると、どろ〱して、その割合に黒くないから困ると云ふ。これは支那の惡い墨である。善くすれば價格が高くなつて賣れないからで

ある。墨は一斤を四つに割つたのが四挺掛の墨、これを又四つに割つたのを八挺掛と云ふ樣に、恁く斤を以て相場を建てるが、支那の一番惡い墨になると、何う云ふことをやるかと云ふに、煤も油煙も惡い。その上に、斤相場だから、重味を附ける爲めに、魚で製した膠をうんと入れる。だから重味は澤山ある。それを少し磨るとどろ〳〵が出る。是はその膠が出るので黑くならぬのもその爲である。是れを見て支那の墨は惡い、どろ〳〵すると云ふのは是れは丁度、生きた魚を食つたことのない山國の爺さんが、魚は腐臭の氣のあるものと思つて居るのと同じ樣に、支那の善い墨を使つた事がないからである。善い墨を使へば、どろ〳〵するものではない。

松煙墨と油煙油

そこで、墨を知らぬのは、ひとり素人のみではない。此の間も、或る畫工が來たから、「君、その眞黑の線を引く時は油煙よりも松煙の方が深黑でよい」と云ふと、畫工先生、「松煙も使つて居るが、松煙を磨ると、何うも硯を毀したり、中には灰などが這入つて居ていけません」と云つた。けれどもそれは、松煙なるものを知らぬので松煙の惡いのを使つて居るのである。惡いのには、成る程灰がある。松煙は松の煙から製造するのであるが、その製法は丁度、洋傘のやうなものを、何層にも懸けて置いて、その下で松を燻べる。さうすると、一番の下には一番惡いのが出來る。これは灰を混ぜる。その上の部は少しよくなる。一番上層は眞黑の煤ばかりで、灰の少しも入らぬ物が出

來る。是れは決して、ごり〳〵云はぬ。斯様に松煙にも色々あるのを繪畫の黑人ですら知らぬ。最下層の松煙で繪を畫かれては洵に堪つたものではないのである。

松煙墨の長所短所

松煙は、原料が松の木であるから、價は高くとも知れたものである。松煙の色はずつと沈んだ、色の濃いものであつて、唐時代の字などは松煙で書いたもので、油煙ではない。油煙の方は、殆ど判らぬ位に、茶褐色を帶びて居るが、松煙は純黑で、そして安い。たゞ、松煙に一つ劣るところは、油煙の方は煤の分子が何う云ふ工合に組立てられてあるのか知らぬが、一種の光澤を持つて居る。松煙には此の光澤が乏しい。だから、宋の時代には盛に油煙を使ひ出した。何時でも道樂者の出る時は國が亡びる。徽宗皇帝のずつと前、唐と宋との間になる南唐の李後主と云つて、己が國が亡びて生捕にされた先生、是がなか〳〵道樂者で、墨の非常によい物を作つた。最上等の物は金と恰度同じ價だといふ位な物を作つた。恰度、日本の足利義政のやうな者である。末世の君主であるが、風雅の事に取つては功勞もある。

李後主の作つた墨

讀者の中には、靑磁道樂をなさる方もあらうが、靑磁を一番發達させたのも此の李後主で、矢鱈に燒かせてはあゝでもない、恁うでもないと云ひ、靑い色を持つて來ては此の通りに燒けと云ふ。そして、その靑いのを燒くと、是は濃過ぎるとか、淡過ぎるとか、故障ばかり言つ

て居る。果は雨上りの晴天を指して、此の通りに燒けと云つた。是れが青磁の發達した源で、「雨過天青」と云ふ樣な立派な青磁が出來るやうにしたのも、此の墨を作つた先生である。

簡易鑑墨法

油煙墨は何故光る

此の時分から墨が發達して來た、この油煙の善いのは、なか／＼使ひきれない程高價なものである。油煙には一種の光があるが、一寸素人には分らぬ。素人には、膠の多い墨で書くと、きらりと光るからこれは善いと云ふ。黒人の光を尊ぶのは是れではない。墨の光るといふのは、膠のてか／＼した墨でない、元來が油煙の光であるから底光がする。是れがよいのである。口で言つても一寸判り難いが、底光のするものでなければいけぬ。

墨鑑定の簡易法

そこで、素人が墨の善惡を判別する簡易なよい方法は何うするかと云ふと、先づ何本かの墨を、各々同じ程度のさ黒に磨つて、黒い塗板――細君が使ふ花生の臺にする黒板がよい――その黒板に、磨つた墨で棒を引き、それに何號何號と、一々印を附けて置き、その乾くを待つて澄んだ、奇麗な水を盥に容れ、室で内は不可ん から、外の天日の當る所でその盥の水中に棒を引いた黒板を、錘を附けて靜に降ろす。そして、板が沈んで、波が靜まり動かぬ樣になつたらば、その時

窺いて見る。黒板の色と餘り差のない色の物が、その中で一番善いのである。惡い墨は灰色に見える、是で墨の善い惡いを見分けるのであるが、併し、是は簡單で、大體を見るに過ぎない。墨の光澤は是れでは見られない。一見して、是れは膠の光であるが、元來の油煙の光であるかと云ふ事を知るのは熟練であつて、口で云つても判らぬが、先づ大體は前の樣にして調べると、判るのである。

適當な用墨

普通の使ひ頃の墨

そこで、墨といふものは、何の位の物を使つたらよいかと云ふと、先づ一般の使ひ向きとしては、大概一斤十二三圓以上の物ならば、立派な物である。書家はよい墨は使はない。書家は一枚幾らで賣るのであるから、善い墨は使ひ切れない。私は近頃は餘り使はないが、一時は亂暴に書くのに善い墨を使つた。それは一斤三十六圓する。これが、日本へ來ると殆ど倍になつてゐる。その三十六圓は甚だ高い樣ではあるが、實は高くない。使ふ方から云ふと高いものではない。詰り、一斤三十六圓の墨を四分の一に割つた四挺掛は、その大きさが恰度燐寸の函を縱に二箇繋いだ位のもので、手紙丈け書く人なら、その人一代はある。是れが九圓に當るから、九圓で一代善い墨が使へるのだから、高いものでない。併し、日本へ來るには、關稅もかゝり、墨屋の儲けもあるから、殆ど倍

になつて居る。

支那墨の三階級

もう一つ墨を見るには、大きな暖簾の店で買へば、案外嘘を云はぬから、唯墨の階級を知つて居ればよい。墨の階級には、「選煙」、「貢煙」、「超貢煙」と云ふのがある。超貢煙とは、貢煙よりも、も一つ善いで墨ある。超貢煙でなくとも、貢煙でも選煙でも、立派なもので、書家は恁んなものを使つて居つては引き合はぬから、ずつと是よりも悪い墨を使つて居る。此位の墨ならば、どろ〳〵する様な事はない。

和製墨の長短

さう云ふと、和製の墨は悪いかと云ふに、悪くはない。和製でも、舊式の物はその製し方が違ふ。それは何う云ふ事になつて居るかといふと、古い所の隋唐の墨の製造法が日本に傳はつて居る。此の墨の製造法と云ふのは、膠の堅い強いのを使ふ。支那でも、初めは強い膠を使つて居つた所が、明の末頃漸々軟かい膠を使ひ出し、清朝に至つては、就中軟かい膠を使ふ様になつた。是は何う云ふ譯かと云ふと、墨と紙とは相俟つて行かなければならぬものである。然らば、隋唐の時代から、宋にかけて、然ういふ堅い膠を入れた墨を作つたのは、何う云ふ譯かと云ふに、古寫經を扱ふ方は御承知の如く、唐時代には「黄麻紙」「白麻紙」を使つた。是は質が堅い。日本の美濃紙を堅くした様な、鳥の子紙の薄い様な質で、此の堅い紙に書くには、矢張り膠の強いので製した墨でな

ければ適當しない。だから、隋唐より宋に至る間は、紙の硬いのを用ゐたから、墨も膠の強いのを以て作つた。然るに、明の中世以降からは、例の畫箋紙類の、ぽく／＼した紙が出來たので、硬い強い膠で作つたのでは巧く行かなくなつたのである。

紙と墨との適合

けれども、日本では鳥の子紙や色紙短冊に字を書くのには、支那流の墨では不可ぬ。何うしても古い日本流の硬い膠を以て作つた墨でなければ、色紙短冊には巧く書けぬのである。これは要するに書く紙の質に依つて違ふので、日本の墨が必ずしも惡いのではない。日本の硬い紙に書く爲めの墨、支那の軟かい紙に書く爲めの墨、各々それに適當したものでなければならぬ。尤も、日本製の墨で、近來は支那流に造るのがあつて、良いのもある。

光る墨と光らぬ墨

所が、日本には一つの弊がある。日本の墨を使ふ人は眞の善惡を知らずして唯だ光るのを善いと思つて居るから、お客相手の墨屋はお客の氣に入るものを作ればよいと云ふ所から、墨の中へ紅を入れるのがある、此の紅を入れた墨は書いた時は光つてよいが、年數を經るに從つて、紅だから靑味がかつて來る。日本で書いたもの丶古くなると、靑味を帶びて來るのがあるのは、此の紅の爲めで、これは惡い、お客樣が好くからと云ふので、紅を入れる樣になつたのであるが、是は禁物である。

香墨の滑稽談　今一つは香である。是れもお客が善い香さへすれば、善い墨だと思ふのである。紀州で墨の製造を道樂にやつて居る鈴木梅仙と云ふ老人が云ふのには、「何うも妙なもので、或る書家が、麝香入りの墨を誂へて來たから、言ふ通り麝香を大分入れてやると、後口やつて來て、大に麝香入の墨は善い、あれで書いてやると、需めた人が、家の座敷にその書を懸けた所、座敷中が麝香で馥郁として洵に善い、あれでは潤筆料が未だ少なかつたらうと云ふので、追增に潤筆料を吳れたと云つた」と。お客は皆恁うだから、香入りの墨を作るやうになる。龍腦位ならまだよいが、麝香は濕氣を引いて墨の保存にはよくない。

支那から來る墨

胡開文墨と曹素功墨　私が書を捻ると云ふので、支那へ行つて來た人は、能く墨を買つて來て吳れる。大概、胡開文の墨で、曹素功の墨は吳れない。何う云ふ譯であるかと云ふと、兩方とも徽州で大仕掛に墨を製造して居るが、何れが善いかと云ふと、胡開文の方が曹素功に劣る。胡開文の四挺掛の墨と曹素功の四挺掛とを比べると、その分量は胡開文の方が大きく、其の點は善い樣であるが、しかし曹素功のは小さいけれど、夫れ丈け煉(ねり)が十分である。墨には煉が非常に必要で、よく十萬杵など丶

云つて、矢鱈に煉るものであるが、その煉の善惡は何うして判るかと云ふと、墨を磨つて後、その乾いた面を見るとその面に氣孔がなく、恰かも漆を塗つた樣になつたのが、煉がよいので、痘瘡の樣な孔があるのは、煉が惡く、墨として惡いものである。然るに、皆が何うしてこれを買ふのだらうと云ふと、胡開文の店は間口も廣く、なか／＼立派であるが、曹素功の方は間口三間位で、しかも油じんで煙ぶつて、如何にも貧乏たらしい古い店であるから、成るほど是れでは田舍の赤毛布連は、胡開文の店の方へ行つて、曹素功の店へは行かぬ筈だと、私が行つた時に思つた。

支那墨と日本墨

曹素功と胡開文との一長一短は此の通りであるが、墨の香といふことについては、今日麝香が高くとも、素人向きに香を入れ、ぷん／＼するのを作るが、決して墨の善惡は香に依らぬ。植物性の香料は却つて惡いといふことになるのである。是れは、墨の大略であるが、日本でも墨の善いのが出來ぬではない。出來るけれども、日本では高くつく。何うして高く付くかと云ふと、製造の小仕掛けであるからである。所が、支那では、徽州の歙縣で、殆ど全國の墨の大部分を引受けて、大仕掛けでやるから、油煙を取るのも日本よりは遙に安くつく。何んな事を日本で工夫しても、同じ性質のものを支那程に安く製造することは出來ない。然し、高いのを構はぬならば、その質は支那より善いのが出來るのである。

筆も支那が本場

筆も亦硯と同じ樣な譯で、筆の澤山出る本場は何處かと云ふと、浙江の湖州である。前に言つた如く、由來「湖筆徽墨」と言つて、呼び物 なつてゐる。一つ所で澤山製造するから、大變安く付くのであるが、日本の筆屋では、毛の善いのを作らうとすれば、何うしても湖州ほど安くは出來ぬ。或る縣に、天下一と稱して居る天狗の筆屋がある。私がそこへ行つた時に、筆を呉れた。それを見ると善いことは善いが、まだいかんと私が云つた。其の時は、彼は不服の樣であつたが、その後奮發して支那へ稽古に行かうと思ふから、紹介して呉れと云つて來た。そこで私が紹介してやると、向ふへ行つて三箇所程稽古して書狀を送り來つて「私は是れまでの天狗はやめる。支那では善い毛の非常に潤澤なのに驚いた。筆の製造者の巧なのに驚いた。非常に大仕掛けで、安く出來るのに驚いた」と。日本では天下一だと言つて居た天狗が、三箇月向ふへ行つて見ると、私に斯う云つて來た。實際、筆の善いのを作るには、高くつく筈である。例の長毫などに用ふる毛は、非常に澤山の羊の毛の中から選出するのであるが、容易に善い毛と云ふのは選出し得られないので、善いものとなると甚だ高くつく。斯う云ふ次第であるから、日本では尚更高くつくのである。尤も是は普通の筆を云ふので、代價に拘はらねば、日本でも熟練の職人があるから、精品が出來る。要するに、墨でも筆でも、そんなに善いものは要らないが、先づ通俗的なお話としては、大要斯う云ふものである。

書道實驗談 終

大正十年八月廿二日印刷
大正十年八月廿五日發行

【書畫骨董叢書】第五巻

著者　犬養木堂
著者　黒木欽堂

東京市神田區錦町一丁目十六番地
發行者　宮下軍平

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者　小川菊松

東京市京橋區新榮町五丁目七番地
印刷者　村田豊吉

東京市京橋區新榮町五丁目七番地
印刷所　大倉印刷所

不許複製

發行所
東京市神田區錦町一丁目十六番地
書畫骨董叢書刊行會
振替東京第四九八二四番
電話神田｛二四七八番 二六一〇番｝

書畫骨董叢書刊行會